

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)

一般国道220号線鹿屋バイパス  
建設に伴う発掘調査報告書(1)

王 子 遺 跡

(付)西経川遺跡・薬師堂遺跡

1985年

鹿児島県教育委員会

王子酒店全貌



## 序 文

この報告書は、一般国道220号線鹿屋バイパスの建設に先だって、県教育委員会が実施した王子遺跡の発掘調査の記録です。

王子遺跡は、大島半島中央部、鹿屋市郊外のシラス台地上にある弥生時代の遺跡で、棟持柱付掘立柱建物跡など多数の遺構のほか、鉄製のヤリガンナや鉄滓、樹皮布叩石、瀬戸内海地方にみられる矢羽根透しの文様のある土器など、数々の重要な資料が発見され、県内のみでなく広く全国的な関心を呼び、その保存策についていろいろと論議されたところです。

県教育委員会では、王子遺跡の重要性にかんがみて、遺構の移設、型取り、土層の転写などを含む、可能な限りの遺構、遺物保存の方策を講じ、あわせて詳細、精密な発掘調査記録の作成に努めました。

本書は、昭和56年度からの4年間に及ぶ、県教育委員会のこうした努力の結晶であります。

本書が、鹿児島県における埋蔵文化財保護行政の一つの記念碑として、今後の文化財保護のために活用されることを願ってやみません。

終わりに、この発掘調査に終始御協力をいただいた建設省九州地方建設局大隅工事事務所並びに鹿屋市及び地元の皆さんに心から感謝いたします。

昭和60年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 山田克穂

## 例　　言

1. この報告書は、一般国道220号線鹿屋バイパス建設によって消滅する遺跡について行なった事前調査のうち、昭和56年度～昭和59年度に発掘調査した王子遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、建設省九州地方建設局大隅工事事務所からの受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、昭和55年度に確認調査、昭和56年度に全面発掘調査と市道小原線以東の確認調査、昭和57年度に全面発掘調査、昭和58年度に全面発掘調査及び下層の確認調査、遺構の転写・型取り及び移設作業を実施した。
4. 発掘調査について、鹿屋市教育委員会や大隅工事事務所の協力・援助を得た。
5. 発掘調査の指導については、文化庁主任文化財調査官河原純之、同文化財調査官岡本東三、同文化財調査官黒崎直、同文化財調査官西弘海、同文化財調査官桑原滋郎、国立奈良文化財研究所遺構調査室長宮本長二郎、同遺物処理研究室長沢田正昭、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳（考古学）、梅光女子学院大学教授国分直一（民俗・考古学）、九州産業大学教授森貞次郎（考古学）、九州大学教授横山浩一（考古学）、北九州市立博物館館長小田富士雄（考古学）、九州芸術工科大学教授辻村仁（建築史）、鹿児島大学教授大庭昇（地質学）、宮崎大学助教授藤原宏志（花粉分析）、京教産業大学助教授山田治（放射性炭素年代測定）、新日鉄八幡中央研究所研究員大澤正己（鉄製品分析・同定）。発掘調査報告書については、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳、九州大学教授横山浩一、北九州市立博物館館長小田富士雄の諸先生方に御指導をお願いし、有益な教示と助言を受けた。また、大澤正己、宮本長二郎、藤原宏志、山田治の諸先生方より玉稿をいただいた。
6. 遺物の整理は、1～12号住居跡内出土遺物の実測は立神次郎と山口俊博（現、鹿屋市教育委員会）、13号～27号住居跡内出土遺物の実測は峯崎幸清（現、国分市教育委員会）、その他の遺物は立神と山口が実測した。トレース・写真撮影編集については、立神が中心になり峯崎とを行い、遺物の整理・復元作業等は収蔵庫の整理作業員が行なった。
7. この報告書の作成は、上記の方々の助言と協力を得て鹿児島県教育委員会が実施し、執筆は文化課職員立神が担当した。
8. 出土品は、一部鹿屋市王子遺跡資料館に展示し、大半は文化課収蔵庫に保管している。また、移設した遺構は王子遺跡資料館に、転写・型取りした遺構は鹿屋市教育委員会に一部、大半は収蔵庫に保管している。
9. 航空写真は鹿児島県教育委員会のものを使用し、本書で用いた挿図中の遺物番号は、図版中の番号と一致する。また、本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
10. 胎土中の鉱物については、石英：Q、長石：P<sub>L</sub>、金雲母：M、角閃石：Hを使用した。
11. 末尾には、西萩川・薬師堂遺跡の概要を収載し、西萩川遺跡の一次は長野、二次は立神が担当し、西萩川遺跡の第4図は長野が作成した。薬師堂遺跡は立神が担当した。

# 目 次

序 文	
例 言	
第1章 序 説	9
第1節 調査に至るまでの経過	9
第2節 確認調査の経過	9
第3節 調査の組織	9
第4節 日誌抄	10
第2章 発掘調査の経過	12
第1節 発掘調査に至るまでの経過	12
第2節 調査の組織	12
第3節 調査の経過・日誌抄	13
第3章 遺跡の位置及び環境	24
第4章 調査の概要	28
第1節 層 序	29
第5章 弥生時代の遺構	34
第1節 壁穴式住居跡	34
第2節 住居跡内の出土土器について	166
第3節 据立柱建物跡	172
第4節 土 坂	192
第5節 溝状遺構	202
第6章 弥生時代の遺物	204
第1節 土 器	204
第2節 遺物出土状況及び出土遺物について	252
第3節 石 器	257
第4節 土製品	262
第5節 鉄製品及び鍛冶溝	264
第7章 その他の遺構・遺物	265
第1節 繩文時代の遺構・遺物	265
第8章 まとめ	266
第9章 王子遺跡の遺構保存事業	277
付 編	
王子遺跡出土弥生中期後半の鉄溝と塗の調査	319
九州地方の弥生時代住居	335
王子遺跡の液体シンチレーション $^{14}\text{C}$ 年代測定	351
王子遺跡および西萩川遺跡におけるプラントオバール分析	355
西萩川遺跡の調査概要	358
葉師堂遺跡の調査概要	362

## 掲 図 目 次

Fig. 1 王子遺跡と位置及び周辺遺跡	25	Fig. 26 9号住居跡実測図	60
Fig. 2 王子遺跡地形図	27	Fig. 27 9号住居跡内出土遺物平面・ 垂直分布状態	61
Fig. 3 王子遺跡グリッド図	28	Fig. 28 9号住居跡内出土土器実測図	62
Fig. 4 王子遺跡標準土層柱状図	30	Fig. 29 9号住居跡内出土石器実測図(1)	66
Fig. 5 王子遺跡土層図	32	Fig. 30 9号住居跡内出土石器実測図(2)	67
Fig. 6 王子遺跡構成配置図	33	Fig. 31 10号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態	69
Fig. 7 1号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態	34	Fig. 32 10号住居跡内出土土器実測図	70
Fig. 8 2号住居跡実測図	35	Fig. 33 10号住居跡内出土鉄器実測図	74
Fig. 9 3号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態	36	Fig. 34 11号住居跡実測図	75
Fig. 10 3号住居跡内遺物出土状態	37	Fig. 35 11号住居跡内出土遺物平面・ 垂直分布状態	76
Fig. 11 第1・2・3号住居跡内出土遺物 実測図(1)	38	Fig. 36 11号住居跡内出土土器実測図	77
Fig. 12 3号住居跡内出土遺物実測図(2)	39	Fig. 37 11号住居跡内出土石器実測図	80
Fig. 13 4号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態	41	Fig. 38 11号住居跡内出土軽石製品実測図	80
Fig. 14 4号住居跡内遺物出土状態	42	Fig. 39 12号住居跡実測図	81
Fig. 15 4号住居跡内出土遺物実測図	43	Fig. 40 12号住居跡内出土遺物平面・ 垂直分布状態	82
Fig. 16 5号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態	46	Fig. 41 12号住居跡内出土土器実測図	83
Fig. 17 6号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態	47	Fig. 42 12号住居跡内出土石器実測図	85
Fig. 18 7号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態	48	Fig. 43 13号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態	86
Fig. 19 5・6・7号住居跡内出土遺物 平面・垂直分布状態	49	Fig. 44 13号住居跡内出土土器実測図	87
Fig. 20 5号住居跡内出土石器実測図	53	Fig. 45 13号住居跡内出土石器実測図	89
Fig. 21 8号住居跡実測図	54	Fig. 46 14号住居跡実測図	90
Fig. 22 8号住居跡出土遺物平面・垂直 分布状態	55	Fig. 47 14号住居跡内出土遺物平面・ (壺形土器)	92
Fig. 23 8号住居跡内出土遺物実測図	56	Fig. 49 14号住居跡内土器実測図(1)	93
Fig. 24 8号住居跡内出土石器実測図(1)	58	Fig. 50 14号住居跡内出土土器実測図(2)	94
Fig. 25 8号住居跡内出土石器実測図(2)	59	Fig. 51 14号住居跡内出土土器実測図(3)	95
		Fig. 52 14号住居跡内出土石器実測図	99

Fig.53 15号住居跡実測図及び出土遺物	Fig.80 22号住居跡内出土土器実測図	.....141
平面・垂直分布状態		.....101
Fig.54 15号住居跡内出土土器実測図①	Fig.81 22号住居跡内出土石器実測図	.....143
.....102		
Fig.55 15号住居跡内出土土器実測図②	Fig.82 23号住居跡実測図	.....144
.....103		
Fig.56 15号住居跡内出土石器実測図	Fig.83 23号住居跡内出土土器実測図	.....144
.....106		
Fig.57 16号住居跡実測図	Fig.84 24号住居跡実測図	.....146
.....108		
Fig.58 16号住居跡内出土遺物平面・	Fig.85 24号住居跡内出土土器実測図	.....147
垂直分布状態		.....109
Fig.59 16号住居跡内出土土器実測図	Fig.86 25号住居跡実測図	.....149
.....110		
Fig.60 16号住居跡内出土石器実測図	Fig.87 25号住居跡内出土土器実測図	.....151
.....114		
Fig.61 17号住居跡実測図及び出土遺物	Fig.88 25号住居跡内出土石器実測図	.....152
平面・垂直分布状態		.....116
Fig.62 17号住居跡内出土土器実測図	Fig.89 26号住居跡実測図	.....153
.....117		
Fig.63 18号住居跡実測図	Fig.90 26号住居跡内出土遺物平面・	.....155
.....119	垂直分布状態	.....153
Fig.64 18号住居跡内出土遺物平面・	Fig.91 26号住居跡内出土土器実測図	.....156
垂直分布状態		.....120
Fig.65 18号住居跡内出土土器実測図	Fig.92 26号住居跡内出土石器実測図①	.....158
.....121		
Fig.66 18号住居跡内出土石器実測図	Fig.93 26号住居跡内出土土器実測図②	.....159
.....124		
Fig.67 19号住居跡実測図	Fig.94 26号住居跡内出土石器実測図③	.....160
.....125		
Fig.68 19号住居跡内出土遺物平面・	Fig.95 27号住居跡実測図	.....160
垂直分布状態		.....126
Fig.69 19号住居跡内出土土器実測図	Fig.96 27号住居跡内出土遺物平面・	.....161
.....127	垂直分布状態	.....161
Fig.70 19号住居跡内出土石器実測図①	Fig.97 27号住居跡内出土土器実測図	.....162
.....128		
Fig.71 19号住居跡内出土石器実測図②	Fig.98 27号住居跡内出土石器実測図①	.....165
.....129		
Fig.72 20号住居跡実測図及び出土遺物	Fig.99 27号住居跡内出土石器実測図②	.....166
平面・垂直分布状態		.....131
Fig.73 20号住居跡内出土土器実測図	Fig.100 27号住居跡内出土石器実測図③	.....167
.....132		
Fig.74 20号住居跡内出土石器実測図	Fig.101 1号掘立柱建物跡(棟持柱付)実測図	.....172
.....134		
Fig.75 21号住居跡実測図及び出土遺物	Fig.102 2号掘立柱建物跡(棟持柱付)実測図	.....174
平面・垂直分布状態		.....136
Fig.76 21号住居跡内出土土器実測図	Fig.103 3号掘立柱建物跡(棟持柱付)実測図	.....175
.....137		
Fig.77 21号住居跡内出土石器実測図①	Fig.104 4号掘立柱建物跡(棟持柱付)実測図	.....176
.....139		
Fig.78 21号住居跡内出土石器実測図②	Fig.105 5号掘立柱建物跡(棟持柱付)実測図	.....177
.....139		
Fig.79 22号住居跡実測図及び出土遺物	Fig.106 6号掘立柱建物跡(棟持柱付)実測図	.....179
平面・垂直分布状態		.....136
Fig.80 22号住居跡内出土土器実測図	Fig.107 7号掘立柱建物跡実測図	.....180
Fig.81 22号住居跡内出土石器実測図	Fig.108 8号掘立柱建物跡実測図	.....181
Fig.82 23号住居跡実測図	Fig.109 9号掘立柱建物跡実測図	.....182
Fig.83 23号住居跡内出土土器実測図	Fig.110 10号掘立柱建物跡実測図	.....183
Fig.84 24号住居跡実測図	Fig.111 11号掘立柱建物跡実測図	.....184
平面・垂直分布状態	Fig.112 12号掘立柱建物跡実測図	.....185
.....140		

Fig. II3	13号掘立柱建物跡実測図	187	Fig. I44	王子遺跡出土土器実測図07	230
Fig. II4	14号掘立柱建物跡実測図	189	Fig. I45	王子遺跡出土土器実測図08	233
Fig. II5	14号掘立柱建物跡(土塙内)出土 土器実測図	190	Fig. I46	王子遺跡出土土器実測図09	235
Fig. II6	14号掘立柱建物跡(土塙内)遺物 出土状態	191	Fig. I47	王子遺跡出土土器実測図10	236
Fig. II7	14号掘立柱建物跡(土塙内)出土 石器実測図	191	Fig. I48	王子遺跡出土土器実測図11	238
Fig. II8	1号土塙実測図	192	Fig. I49	王子遺跡出土土器実測図12	240
Fig. II9	2号土塙内出土土器実測図	192	Fig. I50	王子遺跡出土土器実測図13	242
Fig. I20	1・2号土塙内石器実測図	194	Fig. I51	王子遺跡出土土器実測図14	245
Fig. I21	2号土塙実測図及び土塙内遺物 出土状態	195	Fig. I52	王子遺跡出土土器実測図15	246
Fig. I22	2号土塙内出土土器実測図(1)	196	Fig. I53	王子遺跡出土土器実測図16	247
Fig. I23	2号土塙内出土土器実測図(2)	197	Fig. I54	王子遺跡出土土器実測図17	248
Fig. I24	3号土塙実測図	198	Fig. I55	王子遺跡出土土器実測図18	250
Fig. I25	3号土塙内出土土器実測図	198	Fig. I56	王子遺跡遺物出土状態1)	254
Fig. I26	4号土塙実測図	201	Fig. I57	王子遺跡出土状態2)	255
Fig. I27	中央区及び西区溝状遺構実測図	203	Fig. I58	王子遺跡出土状態3)	256
Fig. I28	王子遺跡出土土器実測図(1)	205	Fig. I59	王子遺跡出土石器実測図(1)	258
Fig. I29	王子遺跡出土土器実測図(2)	206	Fig. I60	王子遺跡出土石器実測図(2)	259
Fig. I30	王子遺跡出土土器実測図(3)	207	Fig. I61	王子遺跡出土石器実測図(3)	260
Fig. I31	王子遺跡出土土器実測図(4)	208		表 目 次	
Fig. I32	王子遺跡出土土器実測図(5)	210	Tab. 1	王子遺跡周辺遺跡一覧表	26
Fig. I33	王子遺跡出土土器実測図(6)	212	Tab. 2	1・2・3号住居跡内出土土器 一覧表	37
Fig. I34	王子遺跡出土土器実測図(7)	214			
Fig. I35	王子遺跡出土土器実測図(8)	215	Tab. 3	4号住居跡内出土土器一覧表	44
Fig. I36	王子遺跡出土土器実測図(9)	216	Tab. 4	5・6・7号住居跡内出土土器 一覧表	50
Fig. I37	王子遺跡出土土器実測図(10)	219			
Fig. I38	王子遺跡出土土器実測図(11)	221	Tab. 5	8号住居跡内出土土器一覧表	55
Fig. I39	王子遺跡出土土器実測図(12)	222	Tab. 6	9号住居跡内出土土器一覧表	59
Fig. I40	王子遺跡出土土器実測図(13)	223	Tab. 7	9号住居跡内石縫一覧表	67
Fig. I41	王子遺跡出土土器実測図(14)	225	Tab. 8	10号住居跡内出土土器一覧表	68
Fig. I42	王子遺跡出土土器実測図(15)	227	Tab. 9	11号住居跡内出土土器一覧表	78
Fig. I43	王子遺跡出土土器実測図(16)	229	Tab. 10	12号住居跡内出土土器一覧表	83

Tab.11	13号住居跡内出土土器一覧表	87	Tab.45	大型壺形土器実測図一覧表	220
Tab.12	14号住居跡内出土土器一覧表	95	Tab.46	壺形土器実測図一覧表	224
Tab.13	15号住居跡内出土土器一覧表	100	Tab.47	鉢形土器実測図一覧表	222
Tab.14	16号住居跡内出土土器一覧表	107	Tab.48	壺形土器(底部)一覧表	237
Tab.15	17号住居跡内出土土器一覧表	115	Tab.49	鉢形土器(底部)一覧表	243
Tab.16	18号住居跡内出土土器一覧表	118	Tab.50	大型壺形土器(底部)一覧表	243
Tab.17	19号住居跡内出土土器一覧表	126	Tab.51	壺形土器(底部)一覧表	244
Tab.18	20号住居跡内出土土器一覧表	130	Tab.52	蓋形土器及び他の土器一覧表	249
Tab.19	21号住居跡内出土土器一覧表	135	Tab.53	移入土器一覧表	249
Tab.20	22号住居跡内出土土器一覧表	141	Tab.54	王子遺跡出土石器一覧表	261
Tab.21	23号住居跡内出土土器一覧表	145	Tab.55	土製品(土製勾玉)一覧表	264
Tab.22	24号住居跡内出土土器一覧表	147	Tab.56	住居跡一覧表	267
Tab.23	25号住居跡内出土土器一覧表	150	Tab.57	掘立柱建物跡一覧表	271
Tab.24	26号住居跡内出土土器一覧表	151			
Tab.25	27号住居跡内出土土器一覧表	161			
Tab.26	1号掘立柱建物跡の一覧表	173			
Tab.27	2号掘立柱建物跡の一覧表	173			
Tab.28	3号掘立柱建物跡の一覧表	175			
Tab.29	4号掘立柱建物跡の一覧表	176			
Tab.30	5号掘立柱建物跡の一覧表	178			
Tab.31	6号掘立柱建物跡の一覧表	178			
Tab.32	7号掘立柱建物跡の一覧表	180			
Tab.33	8号掘立柱建物跡の一覧表	182			
Tab.34	9号掘立柱建物跡の一覧表	183			
Tab.35	10号掘立柱建物跡の一覧表	184			
Tab.36	11号掘立柱建物跡の一覧表	186			
Tab.37	12号掘立柱建物跡の一覧表	186			
Tab.38	13号掘立柱建物跡の一覧表	188			
Tab.39	14号掘立柱建物跡の一覧表	188			
Tab.40	14号掘立柱建物跡(土地内)出土土器 一覧表	189			
Tab.41	1号土塙内出土土器一覧表	193			
Tab.42	2号土塙内出土遺物一覧表	194			
Tab.43	3号土塙内出土遺物一覧表	199			
Tab.44	壺形土器実測図一覧表	204			

## 図版目次

P L . 1	王子遺跡発掘調査(1) .....	281	P L . 34	住居跡内出土土器 ( 6 ) 及び包含層出土土器 .....	314
P L . 2	王子遺跡発掘調査(2) .....	282	P L . 35	王子遺跡内出土土器 ( 7 ) 及び住居跡内出土と包含層出	
P L . 3	王子遺跡土層断面図 .....	283	P L . 36	土の石器 ( 1 ) .....	315
P L . 4	王子遺跡遺物出土状況 .....	284	P L . 37	住居跡内出土と包含層出 土の石器 ( 2 ) .....	316
P L . 5	3号住居跡検出状況 .....	285		石器及び土製品出土状況	
P L . 6	4号・5号住居跡検出状況 .....	286		と土製勾玉, 斧, 刀子,	
P L . 7	7号住居跡柱穴及び土地検出状況 .....	287		鉄津, 集石遺構検出状況 .....	317
P L . 8	6号・8号住居跡検出状況 .....	288			
P L . 9	8号・9号住居跡検出状況 .....	289			
P L . 10	9号・10号住居跡検出状況 .....	290			
P L . 11	11号住居跡検出状況 .....	291			
P L . 12	13号住居跡検出状況 .....	292			
P L . 13	12号・14号住居跡検出状況 .....	293			
P L . 14	15号住居跡検出状況 .....	294			
P L . 15	16・17号住居跡検出状況 .....	295			
P L . 16	18号・19号住居跡検出状況 .....	296			
P L . 17	20号・22号住居跡検出状況 .....	297			
P L . 18	23号・24号住居跡検出状況 .....	298			
P L . 19	25号住居跡検出状況 .....	299			
P L . 20	26号住居跡検出状況 .....	300			
P L . 21	27号住居跡検出状況 .....	301			
P L . 22	掘立柱建物跡(櫛持柱付)検出状況1) .....	302			
P L . 23	掘立柱建物跡(櫛持柱付)検出状況2) .....	303			
P L . 24	掘立柱建物跡(櫛持柱付)検出状況3) .....	304			
P L . 25	掘立柱建物跡(櫛持柱付)検出状況4) .....	305			
P L . 26	掘立柱建物跡(櫛持柱付)検出状況5) .....	306			
P L . 27	掘立柱建物跡(6)及び土地検出状況 .....	307			
P L . 28	溝状遺構検出状況 .....	308			
P L . 29	住居跡内出土土器 ( 1 ) .....	309			
P L . 30	住居跡内出土土器 ( 2 ) .....	310			
P L . 31	住居跡内出土土器 ( 3 ) .....	311			
P L . 32	住居跡内出土土器 ( 4 ) .....	312			
P L . 33	住居跡内出土土器 ( 5 ) .....	313			

## 第1章 序 説

### 第1節 調査に至るまでの経過

国道220号線鹿屋バイパスは、建設省が地域の要望によって、将来の鹿屋市街地の交通渋滞緩和を図る目的で、高山町富山笠野原（国道220号線接続）から鹿屋市郷之原町（鹿屋環状線）に至る延長約8.7kmについて建設を計画した。鹿屋バイパスは、昭和44年から47年にかけて鹿屋市から再三にわたり建設省へバイパス建設の陳情がなされ、昭和48・49年度に鹿屋バイパス計画線、昭和50・51年度に実測線の調査を実施、昭和52年3月17日には建設省よりルート承認がなされている。その後、昭和53年4月26日鹿屋市都市計画地方審議会、6月9日県都市計画地方審議会が答申し、6月27日には都市計画の許可が建設大臣よりなされ、7月25日都市計画の決定が鹿児島県知事からなされた。これらの諸手続を経て昭和54年度から用地買収が実施され、昭和55年から工事が建設省の直轄の事業で着手された。

王子遺跡は、昭和54年11月6日鹿児島県教育委員会文化課による大隅地区埋蔵文化財分布調査により発見された弥生時代の遺跡である。本遺跡は国道220号線鹿屋バイパス路線が決定し、事業着手後に発見された。

その後、鹿児島県教育委員会は、建設省九州地方建設局大隅工事事務所と遺跡の処置について協議した結果、国道220号線鹿屋バイパス建設事業の推進と文化財保護のために、とりあえず確認調査を実施する運びとなった。

### 第2節 確認調査の経過

分布調査の結果、王子遺跡については確認調査が必要となり、鹿児島県教育委員会文化課と大隅工事事務所との間で話し合いが続けられた結果、大隅工事事務所長と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれた。この契約にもとづいて、昭和56年1月19日から確認調査が開始され、堅穴式住居跡・溝状遺構など弥生時代を中心とする遺構の検出が予想されるのみでなく、遺物包含層がほぼ全域にわたることが判明し、南九州の弥生時代を知る上で貴重な手がかりを与える遺跡として注目された。さらに市道小原線以東バイパス路線内への拡張も予想され、その確認調査が必要とされる結果が出され、調査は2月28日で終了した。以下確認調査の経過は、日誌抄をもって第4節に記述する。

### 第3節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教 育 長	井之口恒雄
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	山下 典夫
タ	タ	課 長 補 佐	新 時弘
調査企画者	タ	専 門 員	本藏 久三
調査担当者	タ	主 事	立神 次郎

調査担当者	鹿児島県教育府文化課	主 事	中村 耕治
事務担当者	タ	管 理 係 長	川畠 栄造
タ	タ	主 査	安藤 幸次
タ	タ	主 事	天辰 京子

尚、発掘中、河口貞徳氏（県文化財保護審議会委員）の御指導・御教示を得た事を記し、感謝の意を表したい。

#### 第4節 日誌抄

発掘調査は、昭和56年1月19日から昭和56年2月28日まで実施した。その間の調査経過は発掘調査日誌を整理して週ごとに記載する。

調査の経過			
昭 56 1 19 日 (月)	19日、確認調査開始。作業員に対して調査の主旨と作業上留意すべき事について注意と説明。発掘用具搬入。調査区域内の雑草木の伐切作業。10m×10mのグリッド設定作業。プレハブ設置。調査は原則として20m間隔に2m幅のトレンチ調査で実施する。C-9~14区、B-12区、B、C-8~10区トレンチの表土層及びⅡ層の掘り下げ作業。Ⅱ層より弥生式土器破片の土器が出土する。C-12区Ⅱ層より溝状遺構検出。C-9区竪穴式住居跡検出。	主 事	中村 耕治
19 日 (金)	19日、肝属教育事務所・鹿屋市教育委員会へあいさつ。20日、本藏専門員指導のため来訪。	管 理 係 長	川畠 栄造
26 日 (月) 1 30 日 (金)	C-3~8区、B・C-4区、B・C・D・E-2区、D・E-4・6・8~10区、E-11~14区、C-14~15区トレンチの表土層及びⅡ層の掘り下げ作業。C-7・8区二か所に竪穴式住居らしい遺構の検出。C-4区大型変形土器破片が集中して出土。B・C区-2区、C-3区養鶏場跡地を含め遺物包含層が擾乱及び耕作土化し、大半が消失している。耕作土及び擾乱層より土器破片を検出した。D・E-2区溝状遺構をE区側に検出した。E-9・10区竪穴式住居跡を検出した。C-14・15区土器破片が多く出土。遺構検出がないためⅢ層上面まで掘り下げ実施。D・E-6区土器破片を多く検出した。	主 査	安藤 幸次
2 ・ 2 日 (月) 1 6 日 (金)	B~E-2区、C-3~21区、B-9・10・13・14区、C-15~18区、D-9~14区、B・C-16区、B・C-18~20区トレンチ表土層及びⅡ層の掘り下げ作業。D-12区溝状遺構検出。C-17・18区竪穴式住居跡が二か所に検出される。土器破片を多く検出した。B・C-20区Ⅱ層最下付近より大型変形土器及び棒状炭化物を多く検出した。遺構の可能性が強い。B・C・D-18区土器破片の出土が多い。D-18区においては、C-18区住居跡の延長を確認し、掘り下げ作業。土器破片を埋土中より多く検出した。B-13区溝状遺構検出。B-14区土製勾玉及び打製石器が出土した。今まで調査区各トレンチ遺物取り上げ作業。	主 事	天辰 京子

調査の経過	
9 日 (月)	C・D-17・18区、C-18区竪穴式住居跡。性格をつかむため、一部周辺を拡張して掘り下げ作業を実施した。床面を検出した。地表面から約2m程度の深さで、床面は赤褐色層まで達し、床面は黒色土、軽石及び茶褐色の混合土を認めるが、軽石は少量であった。壺形土器の破片や磨製石鏃などの出土がみられた。さらに拡張して掘り下げた結果、当時の生活面堆定地付近で住居跡の上面プランを確認した。C-17区竪穴式住居跡を拡張し掘り下げ作業。
12 日 (木)	土器破片及び土製勾玉の出土がみられ、埋土掘り下げ作業により大型壺形土器及び壺形土器口縁部、炭化物が多く認められた。D-12区溝状遺構検出作業。溝は幅広く浅く底面は非常に硬く締っている。D-E-11区、D-12区、B-1区、C-1~3区、C-E-10・11区、C-10・11区、E-12・13区のトレンチについて縄文時代及び旧石器時代の確認調査実施。遺構・遺物ともに検出されない。
	9日、文化課長、向山主任研究員、鹿屋市教育委員会、鹿屋高等学校郷土史研究会員来訪。
16 日 (月)	C-17区竪穴式住居埋土掘り下げ作業。ともに土器小破片の出土が多い。床面の一部が検出され、床面に近づくにつれ炭化物を多く認めた。遺物包含層と埋土とが同質のため住居跡中央部付近より壁側への掘方を進め、壁の検出を実施した。C-D-18区竪穴式住居跡よりテラス（のちベッド状遺構）や突出状の施設（障壁）の検出や磨製石鏃・土器破片及び炭化物を認めた。また複合が考えられるが、今回はそれ以上の追求は本調査にゆだねた。C-5~8区、B-16区、E-5~8区のトレンチⅡ層掘り下げ作業。C-D-E-12区溝状遺構の延長を確認するためにトレンチ調査による検出に努めた。C-7区、D-8区、E-9・10区竪穴式住居跡上面プラン平板実測作業。C-17~20区、B-18区、D-E-17区北壁及び西壁土層実測。C-10・11区、E-15・16区、E-11・12・14区、C-11・12区、E-5~8区縄文時代及び旧石器時代の文化層の確認調査実施。遺構・遺物ともに検出されなかった。
21 日 (土)	B-C-16区Ⅱ層掘り下げ作業。C-17区住居跡埋土掘り下げが進むにつれ、土器破片特に大型壺形土器破片が多く認められ、壺形土器及び壺形土器破片をみた。また、最下部には棒状炭化物が検出された。形状は方形プランを基調とするが、北側にわずかな張り出しを作っている。C-D-18区住居跡埋土掘り下げ作業。本遺構は周辺部へさらに拡がるものと想定されるため、今後の調査にゆだねることとした。平面及び平板実測作業。E-3~8区、D-E-2区、C-D-16区、B-C-16区、E-3~4区のトレンチについて縄文時代及び旧石器時代文化層の確認作業。各トレンチの土層未実測部分について実測実施。遺構検出したトレンチについて埋めどし作業。遺跡管理作業。器材搬出作業。本日で確認調査の日程を全て終了。
23 日 (月)	24・25日、河口貞徳県文化財保護審議会委員現地指導。本歳専門員来訪。
28 日 (土)	

## 第2章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至るまでの経過

確認調査の結果、鹿児島県教育委員会は、昭和56年4月7日建設省大隅工事事務所に対し、遺跡の事前調査について文化課と協議されたい旨の発掘調査事業報告書を提出した。その後、大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会文化課との間で王子遺跡の取扱いについて協議が続けられた。

一方、鹿児島県教育委員会は、県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会で示された委員の学術的見地から、本遺跡が南九州の弥生時代を知る上で貴重であると判断し、発掘調査に慎重を期すため県文化財保護審議会埋蔵文化財部会等の指導を受けた。

主な経過は、次のとおりである。昭和56年5月20日県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会において「保存する所見を付しておいたので、先手で行ってほしい」旨の指導がなされ、6月3日県文化財保護審議会では「王子遺跡の取扱いについて」の要望が行なわれた。7月27日及び7月31日には県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会委員による現地調査が実施され、9月3日には県文化財保護審議会会长・同副会長の現地視察が行なわれた。9月9日に県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会が開催され、王子遺跡について大隅工事事務所との協議の経過の説明及び現地調査の報告があり、その結果、「発掘調査を実施し、その結果により遺跡の取扱いを検討する」との指導を受ける。尚、発掘調査に至るまでに建設省大隅工事事務所と協議を重ねたことを付記する。

### 第2節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	井之口恒雄 (S 56~58年度)
	♦	♦	山田 克徳 (S 59年度)
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	狼渡 俊昭 (S 56~58年度)
	♦	♦	桑原 一廣 (S 59年度)
	♦	補 佐	新 時弘 (S 56年度)
	♦	♦	本田 武郎 (S 57・58年度)
	♦	♦	坂口 肇 (S 59年度)
	♦	主 幹	吉井 浩一 (S 56・57年度)
	♦	♦	中村 文夫 (S 58・59年度)
調査企画者	♦	主任文化財研究員	諏訪昭千代 (S 56~59・9月)
	♦	♦	向山 勝貞 (S 59・9月~)
調査担当者	♦	文化財研究員	出口 浩 (S 56年度)
	♦	主 事	立神 次郎 (S 56~59年度)
	♦	文化財調査員	峯崎 幸清 (S 57・58年度)

調査担当者	鹿児島県教育庁文化課	文化財調査員	山口 俊博 (S58年4~9月)
＊	＊	＊	日高 孝治 (S56年度)
事務担当者	＊	主幹兼管理係長	川畠 栄造 (S56・57年度)
＊	＊	管理係長	寺園 見 (S58・59年度)
＊	＊	主査	浜松 義 (S59・9月~)
＊	＊	主事	畠 征治 (S59・4~59・8・13)
＊	＊	＊	山下 玲子 (S56~58年度)
＊	＊	＊	田中 孝子 (S59年度)

尚、発掘調査の指導については、文化庁主任文化財調査官河原純之氏、同文化財調査官岡本東三氏、同文化財調査官黒崎直氏、同文化財調査官西弘海氏、同文化財調査官桑原滋郎氏、国立奈良文化財研究所遺構調査室長宮本長二郎氏、同遺物処理研究室長沢田正昭氏、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏（考古学）、梅光女子学院大学教授国分直一氏（民俗・考古学）、九州産業大学教授森貞次郎氏（考古学）、九州大学教授横山浩一氏（考古学）、北九州市立博物館主幹小田富士雄氏（考古学）、九州芸術工科大学教授沢村仁氏（建築史）、鹿児島大学教授大庭界氏（地質学）、宮崎大学助教授藤原宏志氏（花粉分析）、京教産業大学助教授山田治氏（放射性炭素年代測定）、新日本鉄・八幡中央研究所研究員大澤正己氏（鉄製品分析・同定）に御指導・御教示を得た事を記し、感謝の意を表したい。他に文化課主任文化財研究員諏訪昭千代、文化財研究員繁昌正幸、主事青崎和憲、主事弥栄久志、主事長野真一の発掘調査の応援をうけた。

\* 氏名は順不同にさせていただきました。

### 第3節 調査の経過・日誌抄

確認調査の結果、本遺跡は全面調査を実施することになり、調査は、昭和56年10月12日付けて、建設省九州地方建設局大隅工事事務所と鹿児島知事との間で委託契約が締結され、10月12日より現地調査が始まった。

当初、発掘調査は道路建設予定地の台地縁辺部から東側（市道小原線より以西）の全面発掘調査と市道小原線以東の確認調査を予定し、排土処理等を考慮して西側台地縁辺部（崖端部）寄りから東側へ、順次弥生時代文化層の遺構の検出に努め、さらに小原線以西の発掘調査と並行して以東の確認調査を実施した。この結果、調査範囲は西側崖端部から約290m東方へ入り込んだ部分までと、道路建設予定地幅約35m~55mの面積約11,000m<sup>2</sup>となった。調査の進展につれ、堅穴式住居跡、掘立柱建物跡（棟持柱付）等、土坑、溝状遺構などの遺構が総計47検出された。遺物も破片が多く、壺形土器、壺形土器、鉢形土器を主体に、石器、鐵器などが多く出土した。中でも、ベッド状張り出し遺構をもつ堅穴式住居跡、掘立柱建物跡（棟持柱付）などの遺構や瀬戸内系の凹線文をもつ壺形土器や矢羽根透しをもつ高环形土器、樹皮布印石、鏡や鍛冶津などの遺物を見る。このように、大規模な遺跡で学術的見地から古代南九州を知る上で貴重な遺跡であり、その取扱いが県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会などで協議が重

ねられた。以下、その概要を記す。

本遺跡の調査は、県文化財保護審議会史跡埋蔵文化財部会（以下、史跡・埋文部会とする。）の指導により慎重に進めて来た。昭和56年7月27日に史跡・埋文部会の現地調査。現地調査に基づき、7月31日に史跡・埋文部会が開催され、王子遺跡の取扱いが協議された。その結果、9月3日に県文化財保護審議会会长・副会長による現地視察。9月9日の史跡・埋文部会で、王子遺跡について大隅工事事務所との協議の経過説明を行ない、王子遺跡の取り扱いについて協議された結果、「発掘調査を実施し、その結果により検討する」との指導を受けた。一方、大隅工事事務所とは4~9月まで精力的に協議を重ねた。昭和58年2月2日に史跡・埋文部会を現地で開催。その後、2月28~3月11日の間、史跡・埋文部会委員の現地視察が行なわれ、3月31日までに管理作業を実施し、昭和57年度の調査を終了した。昭和58年4月18日より整理作業を文化課重富収蔵庫で開始した。同日に史跡・埋文部会が開催され、王子遺跡について審議がなされ、(1) 文化課がすでに指導助言を受けている方の指導内容を提示すること、さらに、(2) 県外から考古学の専門家を招き指導を受けることを検討することなどの結論が出た。その結論に基づき、4月24・25日に県内外から専門家の森貞次郎（考古学）、河口貞徳（考古学）、国分直一（考古・民俗学）、沢村仁（建築史）各氏の現地指導があり、5月23日に史跡・埋文部会で王子遺跡の取扱いについて審議された。同日に鹿児島県考古学会長河口貞徳から「王子遺跡の全面保存を求める要望書」署名簿第一次分（20,282名分）が提出された。6月7日に県文化財保護審議会が開催され「王子遺跡保存について」審議され、意見集約がなされた。具申意見——「王子遺跡は、学術上極めて重要な遺跡であり、現状保存が望ましいことはいうまでもない。しかし、今回の場合、諸般の問題を考慮すると現実的には現状保存することは、極めて困難であると考えられる。従って、その場合には、施行部分をできる限り縮少し、検出遺構などの精密な記録はもとより、周辺地域の調査の実施などの保存活用策を講ずるよう要望する。なお、トンネル又は橋梁方式による全面保存策は可能であり、遺跡を全面保存することが望ましいとの少數意見もあった。」6月17日に鹿屋市議会から教育委員長あて「国道220号線バイパスの早期完成に関する決議書」の提出、7月4日に文化財保存連絡協議会代表者甘柏健から知事あて「鹿児島県王子遺跡の保存に関する要望書」の提出、7月11日に鹿児島県考古学会長河口貞徳から「王子遺跡の全面保存を求める要望書」署名簿第二次分（10,796名分）の提出、8月8日に県議会文教衛生委員会委員の現地調査。8月11日の日本考古学協会委員長江上波夫から県知事あて「鹿屋市王子遺跡の保存について」の要望書の提出が相次いでなされた。その後、王子遺跡の取扱いについて、大隅工事事務所と路線開削工法の変更や未発掘調査部分（市道部分及び現検出遺構下部分）の発掘調査実施について協議した。また、検出遺構などの記録保存活用策については、大隅工事事務所及び鹿屋市と協議し、周辺地域の確認調査については鹿屋市及び文化庁と協議した。その結果、文化財保護審議会の答申を受けた県教育委員会文化課は、10月4日から検出された遺構などの精密な記録として、① 代表的な遺構の移設、② その他 の遺構の型取または転写、③ 遺構全体の模型及び映像記録、④ 遺構の整備及び遺構詳細実

測。⑤ 未調査部分の調査として、市道敷部分及び現検出遺構の下層部分の掘り下げ作業の実施。一部遺構について遺構截切り作業を行い、断面の観察及び記録などの事業を実施した。現検出遺構の下層部分の掘り下げ作業において、縄文時代早期相当の土器小破片及び集石遺構を検出した。なお、周辺地域の遺跡確認調査については、現在協議が継続中である。以下、発掘調査の経過については、毎月に略述し日誌抄とした。発掘期間中、一部整理作業を実施した期間及び調査終了後の整理作業をも含めた。

調査期間は、昭和56年12月12より、昭和59年3月31までの長期間の調査となった。

#### 日誌抄

(昭和56年度)

調査の経過	
昭 56 ・ 10 月	12日、王子遺跡発掘調査開始。発掘用具運搬。調査対象を市道小原線以西とする。雑草、雑木、竹材の伐採及び焼却。10×10mのグリッド設定。西側崖端部側から掘り下げ開始。試掘調査の結果、遺物包含層が把握されているため、その面までの排出に努める。F-3・4区、C-2区付近には、養鶏場跡地等の影響を受け、生活面想定部位の消滅や擾乱を受ける。 15日、文化課長來訪。
11 月	B・C-7～12区Ⅱ層に土器破片の出土が検出される。C-12区黒色火山灰土層中にやや茶褐色系の土が略円形に検出され、この面での最初の遺構(12号住居跡)検出の可能性がある。B～F-1～4区にかけては、遺物包含層の削平や擾乱を受けている。遺構はE・F-3・4区に溝状遺構を検出する。排土用仮設道の設定(道路建設予定地北側)をし、排土作業を実施する。 20日、小林建設排土作業開始。
12 月	B・C-5～7区Ⅱ層剥ぎを行い遺構検出を図る。C-7区に方形及び略円形上の遺構(13号掘立柱建物跡及び1号住居跡)の検出がⅢ層上面でなされる。C-17区・D-18区の住居跡(15号及び16号住居跡)の再発掘する(確認調査時発掘後埋めもどす)。D-11区遺構(10号住居跡)の検出に努める。市道小原線以東に幅2mのトレーンチを設定し確認調査を実施する。29区までの遺物包含中より土器出土を認め遺跡の範囲とする。西側崖端部より約290mに及ぶ。C-24区大型菱形土器、F-28区に菱形土器の一括出土を認める。縄文時代の文化層の確認作業も並行して実施する。 9日、大隅工事事務所副所長、柳田専門職、調査主任文化財研究員打ち合せ。
昭 57 ・ 1 月	C-6区土器出土に集中を認める。D・E-5・6区Ⅲ層面まで調査終了。遺構の検出は認められず。C-8区13号掘立柱建物跡の土塙掘り下げ、D-8区への拡がりを見る。C-12区12号住居跡(円形プラン)・D-11区10号住居跡(方形プラン)の検出作業。いずれも張り出し部を有する。市道小原線以東の縄文時代の文化層の確認調査実施。遺物・遺構とも認められない。 14日、成尾英仁氏(指宿高校)土層の指導。

調査の経過	
2月	B・C-1~8区、D・E-2~6区、F-3~6区Ⅲ層上面まで調査終了。C-8・9区5号住居跡検出作業。E・F-2~5区溝状遺構検出作業。Ⅲ層上面で検出され、V層アカホヤ層まで掘り込まれている。埋土中には小破片を少量認める。断面V字状を呈し、北側路線外へのびる。C-5区土壇(4号土壇)の痕跡を認める。Ⅱ層下部で検出し、埋土中に軽石の集石を認める。B・C-11~20区土器の散布が全面に認める。変形土器の口縁部・肩部・底部などの小破片が多い。C-12区12号住居跡埋土断面実測後除去作業。埋土下部にはアカホヤのブロックが多い。E-12区からB-13区にかけての溝状遺構は浅くて幅広い形状で、底面は非常に硬い面を検出した。 8日、鹿屋市長外議員一行30名視察。10日、県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会一行現地指導。調訪・向山岡主任文化財研究員来訪。鹿屋市社会教育課長・補佐来訪。12日、新東晃一氏(明治百年記念館調査室)来訪。17日、河原文化庁主任調査官現地指導。
3月	西侧調査区遺物出土状況平板実測及び畦除去作業。B-10区大型の土製勾玉の出土。D・E-7・8区土器集中出土状況平面実測(1/10)。C・D-8・9区5号住居跡床面を検出し、貼り付け調整を認める。畑灌パイプ埋設により北壁大半は影響を受け、さらに新しい溝を認めるが床面まで達せず。F-7区3号住居跡・E-13区13号住居跡検出作業後掘り下げ実施。3号住居跡の埋土中に大型変形土器を確認する。B・C-11・12区12号住居跡柱穴検出。磨製石器出土。C-20区14号据立柱建物跡検出。B-15区土器集中出土状況平板実測。E-15・16区方形に並ぶ柱穴群(2号据立柱建物跡)検出。Ⅲ層上面での検出で、梁間にそれぞれ棟持柱をもつ。本年度調査終了のため管理作業実施。 16日、新東晃一氏(明治百年記念館調査室)写真撮影のため来訪。23日、河口貞徳氏現地指導。29日、横山浩一氏(九州大学)現地指導。文化庁西技官現地指導。

(昭和57年度)

調査の経過	
4月	12日、本年度発掘調査開始。D・E-8区以前と同様土器集中出土を認める。A-7区土器集中出土を認めるが、その大半は南側路線外へのびる。C・D-7区土壇検出(1.6×1.2m)。B-6・7区柱穴群検出(1号据立柱建物跡)。3.0×3.3mで、梁間側にそれぞれ棟持柱をもつ。柱穴より土器小破片の出土。E-8区4号住居跡検出。一部壁を検出し、張り出しベッド状遺構をもつ住居跡である。市道小原線以東各トレントの遺物取り上げ作業後埋めもどし作業。 15日、調訪主任文化財研究員来訪。23日、上村俊雄氏(鹿児島大学)来訪。26日、河口貞徳氏、立園文化財研究員、池畠主事来訪。
5月	5月 西側調査区の溝状遺構実測作業。E-7区3号住居跡埋土断面実測。床面に窪みを認める。D-7区4号住居跡掘り下げ作業。方形を基調に三か所に張り出しベッド遺構をもつ。E-

調査の経過	
5月	10・11区2基の住居跡（8号住居跡及び9号住居跡）。9号住居跡は約7.0×7.4mを計測し、円形プランを呈す。特に、磨製石器（完形7、未完4）出土。E-13区13号住居跡埋土断面実測後除去する。移入土器と思われる長径壺の破片出土。ベッド状遺構及び障壁をもつ。東側調査区排土用道路づくり。 1日、九州地方建設局道路部長、工事事務所副所長、文化課長、鹿屋都市計画課長來訪。 18日、河口貞徳氏、上村俊雄氏來訪。
6月	E・F-9・10区7号住居跡、D-8区6号住居跡掘り下げ作業。ともに方形プランで柱穴2及び南側壁中央部付近に不定形の土壇をもつ。E-7区3号住居跡、D・E-7・8区4号住居跡柱穴及び土壇掘り下げ作業。3号住居跡は柱穴2で土壇は検出されず、住居跡中央部の床面に掘込を認める。4号住居跡は柱穴2で心心距離約230cmで南側壁中央付近に不定形の土壇をもつ。土壇内埋土上面には炭化物を多く認める。床面は部分的に貼り付け調整を認める。E-11・12区9号住居跡残存部掘り下げ作業。C・D-18・19区16号住居跡残存部は、当時の生活面が想定され、上面プランの輪郭は明瞭で、障壁をもつベッド状遺構を認める。E-19区23号住居跡検出作業をしたがその痕跡は現段階では不鮮明である。B・C-19・20区17号住居跡掘り下げ作業。14号掘立柱建物で土壇をもつ。大きい掘込で深い。土壇内には大型變形土器及び棒状炭化物を検出した。埋土は包含層と同質で識別は困難である。B-15区20号住居跡Ⅱ層最下部で検出。E-13区13号住居跡柱穴検出作業及び実測。柱穴2、ベッド状遺構と壁間に壁帶溝を廻らす。障壁付近には不定形で小さくて浅い土壇をもつ。B・C-21区18号住居跡生活面と想定される面で検出。新しい溝の影響があり、大半は南側路線外へのびる。B-14区21号住居跡検出。大半が路線外へのび、溝状遺構と近隣する。 9日、県教育庁秘務課林主幹、文化課川畑主幹來訪。10日、河口貞徳氏來訪。28日、渡辺正気氏（元九州歴史資料館学芸課長）來訪。30日、大崎町文化財審議会委員研修のため來訪。
7月	C-21・22区13号掘立柱建物柱穴掘り下げ作業及び断面実測。E・F-9・10区7号住居跡床面及び柱穴検出作業。床面は部分的に貼り付け調整がなされ、柱穴は柱痕跡を認める。E-13区13号住居跡平面及び断面実測。B-15区20号住居跡掘り下げ作業。土器及び棒状炭化物出土。F-14・15区14号住居跡平面及び断面実測。4か所に障壁を検出し障壁間はベッド状遺構となる。柱穴大小6、中央部に土壇を検出。約半分北側路線外へのびる。床面着の土器破片も多い。D-18・19区16号住居跡埋土残存部掘り下げ作業。埋土断面実測及び除去作業。B・C-19・20区17号住居跡掘り下げ作業。D-11区11号住居跡の上面プラン検出作業。B-13・14区22号住居跡掘り下げ作業。張り出しをもっと思われるが大半は路線外へのびる。E・F-11・12区9号住居跡残存部掘り下げ作業。豪雨のため各遺構の精査作業をくり返す。乾燥防止のため散水作業。 7日、肝属教育事務所秘務課長、早水社会教育主事來訪。15日、源訪主任文化財研究員、

調査の経過	
7月	山西文化財研究員来訪。20日、吉井主幹、諏訪主任来訪。鹿児島テレビ「さつま八面鏡」取材のため河口貞徳氏、上条氏、東ディレクター取材。28日、上村俊雄・出口浩両氏来訪。29日、鹿屋市内校長会遺跡研修のため来訪。オレンジ学園松下氏来訪。
8月	D・E-8区4号住居跡平面及び断面実測。壁帯溝を廻らす。土塀は110×110cmで不定形。C・D-7区13号掘立柱建物跡。柱穴は4本（平均60×60×110cm）で掘立柱建物の内に土塀（170×140cm）をもつ遺構である。平面及び断面実測。柱穴内より土器破片の出土を認めるが小破片である。C・D-8・9区5号住居跡平面及び断面実測。張り出しを西侧にもつ住居跡で。柱穴5、土塀（185×130cm）をもつ。D-8・9区6号住居跡平面及び断面実測。土塀は南側壁中央付近にあり土塀を切る格好である。柱痕跡を検出する。方形プランを呈す。
9月	E・F-9・10区7号住居跡平面及び断面実測。柱穴2土塀をもつ隅丸方形プランで脇張りの住居跡である。柱穴は柱痕跡が検出される。東側調査区の調査。C-24区から大型壺形土器の出土を認める。乾燥化防止のため散水作業をくり返す。 4日、藤尾慎一郎氏（九州大学院生）来訪。7日、文化課長来訪。9日、小田富士雄氏（北九州市歴史資料館）現地指導。諏訪主任研究員来訪。11日、日高孝治氏（宮崎県文化課）来訪。18日、新東見一氏（明治百年記念館調査室）来訪。19日、出口浩氏来訪。
10月	D・E-8区4号住居跡埋土土器取り上げ作業。壺形土器中心で床面着の出土は少ない。断面実測。C・D-8・9区5号住居跡平面及び断面実測。床面に貼り付け調整を部分的に認める。E・F-11・12区9号住居跡平面及び断面実測。柱穴6、中央部に土塀をもつ。住居跡周縁部にはベッド遺構が廻り、貼り付け調整である。D-11区10号住居跡平面及び断面実測。張り出しベッド遺構をもつ住居跡。C-12区12号住居跡平面及び断面実測。C-20区14号掘立柱建物跡の土塀掘り下げ作業。土塀の輪郭が判明する。大型壺形土器、多量の炭化物、石器。壺形土器の破片を検出する。東側調査区散布程度の土器出土で、植樹のため擾乱が多い。C-24区大型壺形土器口縁部破片を多く認める。F-23区2号土塀の検出作業。土塀の埋土掘り下げ作業。土器破片を多量に検出する。 7日、肝属教育事務所総務課長、早水社会教育主事来訪。21日、県人事課職員、文化課川畠主幹来訪。
11月	市道扱い農道敷の調査。砂利及び表土除去。Ⅱ層剥ぎ作業。烟灌用のパイプ及び水道埋設のため擾乱を認める。E-10・11区8号住居跡を検出する。埋土掘り下げ作業。方形プランを呈し、深さ60cmで床面及び土塀を検出する。C・D-11区11号住居跡埋土掘り下げ作業。一部烟灌パイプ埋設により西側壁面は消滅し、約40~50cmで床面を検出する。ベッド状遺構をもつ。E・F-10~19区耕土用道路除去作業。F-12区溝状遺構の延長を検出する。E・F-13区3号・4号掘立柱建物跡を検出する。E-13区土製勾玉（丁字頭をもつ）の出土。C-12区12号住居跡土塀残存部掘り下げ及び断面実測作業。C-17区15号住居跡平面実測。棒状炭化物を多く認める。D-18・19区16号住居跡大型の住居跡で、張り出しベッド状遺構、

調査の経過	
10月	障壁をもつ。 1日、本田道輝助手外鹿児島大学考古学研究会員来訪。18日、三島格氏（熊本県考古学会長）、西谷正氏（九州大学）、上村俊雄氏（鹿児島大学）来訪。
11月	西側調査区溝状遺構検出のため、西側崖断面部の雜木・竹・茅などの伐採。F-11区2号住居跡検出作業。大半は路線外へのびる。F-12区溝状遺構の延長を検出する。F-12・13区3号及び4号掘立柱建物跡の柱穴群を検出し、大半は路線外へのびる。梁間2間、桁行4間で、西側梁間に棟持柱と思われる柱穴を検出する。一部重複し、梁間1間、桁行2間の柱穴を検出する。E・F-14・15区14号住居跡を検出し、一部路線外へのびる。E・F-18区19号住居跡の検出作業、方形プランを想定する。E-18・19区23号住居跡の検出作業。E・F-19区11号掘立柱建物跡の検出。梁間・桁行とも1間の建物を想定する。B・C-21区24号住居跡の検出作業、方形プランを想定する。上面プランは新しい溝により影響を受ける。
12月	B-20区で検出済の18号住居跡がB-21区で、その延長を検出する。D-20・21区27号住居跡を検出し、隅丸方形プランを想定する。東側調査区D-25・26区瀬戸内系の土器破片が出土。F-24区25号住居跡を検出したが、大半は北側路線外へのびる。 10日、鹿屋中学校P.T.A.遺跡研修のため来訪。18日、野田千尋氏（鹿屋市教育委員）、小迫教育長、久保教育次長、山之口社会教育課補佐来訪。22日、藤原宏志氏（宮崎大学農学部）プラントオーパール同定のため、サンプル採集及び現地指導。25日、黒崎調査官（文化庁）、宮本長二郎氏（奈良文化財研究所）現地指導。29日、各市町文化協会及び文化財担当者（教育事務所早水指導主事）遺跡研修のため来訪。
	西側調査区雜木・竹・茅等伐採後、II層掘り下げ、包含層が地表面化している。E-10・11区8号住居跡、3.0×3.0mの方形プランを呈し、土坑内に變形土器を検出。C・D-10・11区11号住居跡、障壁及び張り出しベッド状遺構をもつ。床面は貼り付け調整を認め、土器数片は床着状態での出土。E・F-14・15区14号住居跡、円形プランを呈し、約半分は路線外へのびる。障壁が4ヶ所を確認する。B・C-20・21区18号住居跡、その大半は南側路線外へのびるが、円形プランを呈するものと思われる。E・F-18区19号住居跡、方形を基調とし、ベッド状遺構をもつ。E-18・19区23号住居跡、その形状は不定形で掘方は浅く、床面に土器破片を認める。B・C-20・21区24号住居跡、張り出しベッド状遺構をもつ。E・F-20区26号住居跡、南側及び東側の壁面は方形で、西側壁面は円形、北側壁面には張り出しをもち、低いベッド状遺構をもつ。土器・石器が多く出土。瀬戸内系の櫛描による網目文を施す土器を認める。D-21区27号住居跡、張り出しベッド状遺構をもつ。わりと低いベッド状遺構である。土器破片及び磨製石器。D-16・17区10号、E・F-19区11号掘立柱建物跡、10号1間×1間、6号現存で3間×3間を検出し、北側及び市道側へのびる。 1日、横山浩一氏（九州大学）現地指導。16日、河口貞徳氏、小田富士雄氏現地指導。石野氏（椎原考古学研究所）外、萩原氏来訪。20日、沢田正昭氏（奈良文化財研究所）現地指

調査の経過	
	導。24日、河野治雄氏（元文化課職員）来訪。
昭 58 . 1 月	5日、発掘調査開始。今までの各遺構の平板実測作業実施。C・D-10・11区11号住居跡、柱穴3、主柱穴心心距離180cm、土塙120×100cmの規模、壁添溝をもつ。実測作業。F-14・15区14号住居跡、柱穴4、外に2~3ヶ所に柱穴らしい痕跡を認める。土塙周辺には床着の土器破片及び炭化物を多く認める。B・C-20・21区18号住居跡、柱穴6、土塙は中央に検出され南側路線外へのびる。棒状炭化物の検出。E・F-18区19号住居跡、柱穴2で心心距離180cm、土塙100×90cmで浅く炭化物が多い。B-15区20号住居跡、柱穴4、土塙は小規模で浅い。棒状炭化物の検出。B-13・14区21号住居跡、北側に張り出しをもつベッド状遺構を認める。大半は南側路線外へのびる。F-11区2号住居跡、小規模のため張り出し部が想定され、北側路線外へのびる。E-18・19区23号住居跡、円形状の掘方を床面に認める。B-21・22区24号住居跡、柱穴2、ベッド状遺構をもつが、一部新しい溝の影響を受ける。土塙は認めず、棒状炭化物を床面に認める。E・F-20・21区26号住居跡、柱穴には柱痕跡を検出する。土塙は南側壁付近に認める。D・E-21区27号住居跡、柱穴2、土塙掘り下げ作業。床面に磨石及び棒状炭化物検出。東側調査区縄文時代文化層の確認調査、遺構、遺物とも認めない。
2 月	17日、林敬二郎志布志実業高校校長来訪。20日、文化庁河原主任文化財調査官来訪。25日、河口貞徳氏来訪。28日、県教育長、肝属教育事務所所长、総務課長、文化課長、調査主任研究員来訪。鹿屋バイパス建設推進委員一行来訪。
3 月	C・D-10・11区11号住居跡、土塙内に2つの柱穴状の掘込を認める。D-18・19区16号住居跡、柱穴状の掘込検出。F-11区2号住居跡、B-13・14区22号住居跡、E-18・19区23号住居跡、B-15区20号住居跡、E-18・19区23号住居跡、E-20区26号住居跡、断面及び平面実測。一部実測準備作業。遺方による実測実施。D-19区1号土塙、壺形土器、壺形土器、樹皮布叩石等が出土。溝状遺構残掘り下げ及び平面・断面実測。東側調査区縄文時代文化層確認調査を精力的に実施する。遺構、遺物とも確認されず。航空写真撮影及び各社テレビ局の取材のため、トップシート及び竹材の骨組。土のう路線外へ移動し精査作業実施（遺跡内全面）。 3日、NHK「話題の窓」のため河口貞徳氏、NHK取材陣11名来訪。4日、河口貞徳氏、南日本放送取材のため来訪。17日、吉井主幹、調査主任研究員来訪。12日、大庭昇氏（鹿児島大学）土層指導や土層サンプル採集のため来訪。21日、県教育次長、鹿屋高教諭来訪。24日、中村明藏氏（ラサール高校）外2名来訪。25日、佐多町文化財審議委員来訪。
	B・C-20・21区17号住居跡、B・C-20・21区18号住居跡、F-24区25号住居跡、E・F-20・21区26号住居跡、D・E-21区27号住居跡について遺方設定後、平面及び断面実測作業。東側調査区縄文時代文化層確認作業実施。遺物、遺構ともに確認せず、各掘立柱建物

調査の経過	
3月	跡実測造構について平面及び断面実測。造構内の管理作業実施。竹材の骨組補強作業。杭打ち作業後有刺鉄線設定作業。土のう作り後トップシート覆い作業。各造構への管理作業後出土遺物梱包作業。発掘器材荷作り作業。発掘器材及び器具、出土遺物搬出作業。30日、本日をもって発掘調査終了。関係各機関へ挨拶。
月	1日、鹿屋市視聴覚センター中級課員2名画習のため来訪。4日、県文化財保護審議会委員3名現地視察のため来訪。5日、国分直一先生(梅北女学院大学)、河口貞徳氏現地指導。11日、県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会(三木委員)現地視察。調査主任研究員来訪。18日、鹿屋市文化財審議会委員及び社会教育課長補佐山之口充氏来訪。小林孝子氏(鹿児島大学)来訪。19日、文化課長はか埋蔵文化財担当者現地検討会。

(昭和58年度整理作業)

調査の経過	
昭58年4月3日月	18日、王子遺跡整理作業開始。遺物搬入作業(プレハブ収藏室より)。図面整理作業。写真整理作業。遺物梱包荷はどき作業。遺物残部水洗作業。遺物水洗作業分注記作業。遺物復元作業(接着及び石膏復元)。各住居跡内遺物実測作業。掘立柱建物跡遺物実測作業。各住居跡の平面図、断面図整理作業及びトレース作業。各掘立柱建物跡及び他造構トレース作業。各住居跡内遺物出土状況平面及び垂直分布状況図作成、さらにトレース図作成。各造構内及び一般遺物について出土状況ドットに落す作業(平面分布)。遺跡地形図トレース、各住居跡内出土遺物実測図トレース作業。遺物拓本作業。遺物分類作業。住居跡内及び一般遺物トレース作業、レイアウト作業。石器実測作業及びその他遺物実測作業。石器及びその他の遺物トレース作業、レイアウト作業。遺物、造構について専門家の指導。遺物写真撮影。執筆作業。 6月1日、本田道輝氏(鹿児島大学)来訪。6月20日、秀白圭氏(韩国金北大)来訪。 8月6日、河口貞徳氏、松下兼知氏来訪。

(昭和58年度)

調査の経過	
昭58年10月	4月、発掘調査開始。本年の3月より遺跡調査は中断した状況のため草竹が繁茂しており草取り作業を含めた遺跡精査作業。各造構のトップシート除去及び精査作業。グリッド杭打ち直し。B・C-20・21区18号住居跡の発掘調査(埋めもどしたため)。E・F-20区26号

調査の経過	
10月	住居跡、D-21区27号住居跡、C-21・22区24号住居跡、D-19区22号住居跡、E-18・19区23号住居跡、D-18・19区16号住居跡、遣方設定作業後実測作業。縮尺1/10による実測。10cm間隔の横、縦断面作成(遺構詳細実測)。縄文時代及び旧石器時代文化層(下層確認調査)。4日、文化課長記者会見。南日本放送、NHK、鹿児島テレビ、南日本新聞社、鹿児島新報社、読売新聞社、毎日新聞社の取材。調査主任研究員来訪。11日、県議会議員約20名視察。
11月	E・F-18区19号住居跡、D-19区23号住居跡、D-18・19区16号住居跡、D-21区27号住居跡、C-17区15号住居跡、E-13区13号住居跡、E-10・11区8号住居跡、C・D-10・11区11号住居跡、E・F-9・10区7号住居跡、D-8・9区6号住居跡、E-7区3号住居跡、C・D-8・9区5号住居跡、E-11・12区9号住居跡、D-11区10号住居跡、遣方設定作業後実測作業。縮尺1/10による実測。10cm間隔の横、縦断面作成(遺構詳細実測)。
月	市道小原線内の道路予定地内の調査。道路建設のため遺物包含層まで影響を受けている。映像記録のための諸準備作業。縄文時代及び旧石器時代文化層(下層確認調査)。1日、県議会土木委員、議会事務局、鹿屋土木事務所長、本課部課長視察。10日、鹿屋市教育委員会山口氏来訪。25日、原口鹿大助教授来訪。
12月	市道敷の調査。映像記録のための諸作業。E・F-21区6号掘立柱建物跡、残部柱穴検出作業。混合掩壁工法により現地保存する遺構について埋めもどし作業(10遺構)及び盛土実施作業。記録保存する遺構について截切り作業。遺構移設、遺構型取り、遺構及び土層剥き取り作業実施。縄文時代及び旧石器時代文化層(下層確認調査)。年末のため遺跡の管理作業。2日、映像記録のため安藤氏、水峯氏来訪。3日、出口、下水流両氏(鹿児島市教育委員会)来訪。12日、近畿ウレタン工事林氏外2名来訪。16日、三木学長(鹿児島短大)外6名来訪。
昭59年1月	5日、発掘調査開始。縄文時代及び旧石器時代文化層(下層の確認調査)。C・D-19区、C-20区、C・D区の調査。C-20区黒褐色粘質土層中より縄文時代早期の土器小破片の出土。D・E-20区、黒褐色粘質より縄文時代早期の集石遺構を検出す。実測及び保存移設準備作業。堅穴式住居跡、掘立柱建物跡(棟持柱付)について移設のための諸作業実施。遺構型取り諸作業。遺構及び土層剥ぎ取り諸作業。4号住居跡及び1号掘立柱建物跡(棟持柱付)の遺構をそれぞれ2分割して移設運搬作業。
1月	5日、国際航空写真株式会社九州支社下宿氏、本社模型室大道寺氏現地視察。9日、遺構移設について打ち合せ。11日、文化課職員現地研修(中村主幹、吉永研究員、池畠、宮田主事)。12日、文化課職員現地研修(繁昌研究員、長野、牛ノ浜主事)。13日、肝属教育事務所職員来訪。14日、文化課職員現地研修(青崎、弥栄主事)。20日より沢田正昭氏移設及び型取り、剥ぎ取りについての現地指導。21日、鹿屋市建設部長、建設課金田氏、都市計画課郷原氏来訪。23日、鹿屋市建設部長外6名来訪。26日、小迫鹿屋市教育長、牧社会教育課長、山之口補佐来訪。30日、秋山氏(奈良文化財研究所)来訪。

調査の経過	
2月	縄文時代及び旧石器時代文化層（下層確認調査）。現地保存される部分について盛土作業。型取りした遺構のウレタン樹脂型発送準備。遺構内整理作業（清掃作業）。グリッド控え杭設定作業。発掘器材、器具、遺物搬出作業。各関係機関へ終了の挨拶。3日、発掘現地調査本日をもって全て終了。 2日、源訪主任研究員来訪。
月	4日、王子遺跡整理作業立神・峯崎加わる。遺物注記作業。ウレタン樹脂による型取り遺構プレハブ内への収納、写真ネガ整理作業。トレース作業。レイアウト作業。執筆作業。 8日、桑原調査官（文化庁）現地指導。20日、小田富士雄氏（北九州市歴史資料館）遺物・遺構について指導。22日、国分直一氏、小田富士雄氏遺物・遺構指導。
3月	遺物実測、トレース、拓本、レイアウト整理作業。図版及び執筆作業。 15日、河口直徳氏遺物指導。22日、横山浩一氏（九州大学）遺物・遺構。26日、沢田正昭氏（奈良文化財研究所）鹿屋市王子遺跡資料館後処理指導。

### 第3章 遺跡の位置及び環境

王子遺跡が所在する鹿屋市王子町王子及び下載川町小原は、鹿屋市街地の北東約2kmの北東に拡がる標高約72mの笠野原台地北西縁辺部に所在する。

遺跡の位置する鹿屋市は、鹿児島県本土のほぼ中央部にある鹿児島湾を挟んで、東部に南へのびている大隅半島のほぼ中央部に位置している。地形は市街地の北部に高隈山地がそびえ大麓柄岳(1237m)を主峯に横岳、御岳など1000m級の丘陵が連なり、地質は四万十層群と、それを貫く高隈花崗岩からなる急峻で深い森林に覆われ、東部から北部にかけては、鹿児島湾奥に形成された姶良カルデラより約22,000年前に噴出といわれる入戸火砕流堆積物(シラス)によって台地が形成されている。この笠野原台地は、肝属川と串良川に囲まれるほぼ二等辺三角形状の地形を呈し、東西幅約8km、南北の長さ約13km、面積約75km<sup>2</sup>に及ぶ広大な火砕流台地で、南に向って傾斜するが平均傾斜角は1度未満できわめて平坦であるといえよう。これらの台地は軟弱な非容積の火砕流堆積物のため下剝作用を受けやすく地形も急崖となっている。台地の西側は高隈山地の東斜面を水源とする肝属川や小河川が山地と笠野原台地の間を南流し、鹿屋市街地付近で直角に左流し肝属平野へと達する。これらの河川の浸食作用により河川流域には谷底平野が形成され、ここに水田が営まれ、また鹿屋の市街地が立地している。谷底平野の西側は、鹿屋原台地と呼ばれ、肝属川、大姶良川、高須川に囲まれた台地で、その台地中央部には海上自衛隊航空基地がある。この台地の基盤は笠野原台地と同様入戸火砕流堆積物で形成され、その層厚は3~15mと言われ、平均傾斜角は笠野原台地と同様の1度に達しないきわめて平坦な台地面を作り出している。

遺跡の立地している笠野原台地は、火砕流堆積物が厚く堆積し、さらにローム層、新期火山灰層などが覆いシラス台地と呼ばれ、宝永元年(1704)をはじめ天明4年(1784)には本格的な開発がなされ、花岡堀、鎌田堀、土持堀、伊東院堀、天柄堀などの多くの堀が作られ、これらの台地は地下水の水脈が深く水を得るために深井戸が掘られ、牛馬を使って飲料水を汲みあげていた。これらの深井戸は地表面下約82mまで掘り下げられており、最も低い寿明院(現寿地区)でも30mあったと言われている。近代的な開発は昭和期に入り、笠野原水道の敷設、笠野原耕地整備事業、高隈ダムの完成とともに笠野原畠地灌漑事業が行なわれて、現在台地は近代化され豊かな農地と変わっている。このように水の乏しい台地のため遺跡は湧水に近い末端に営まれたものと推定される。

遺跡は笠野原北西縁辺部に位置している。西側は肝属川による浸食がすみ約40m以上の懸崖となっている。また低地は高隈山地に源を発する肝属川の浸食によって形成された谷底平野となり、ここに水田が営まれ、近年は土地開発による宅地化が進んでいる。北側には市道小原旭原線が、南側には市道王子火葬場線がほぼ東西にそれぞれ走っている。さらに遺跡地内をほぼ南北に王子原小原線が走り小原旭原線や王子火葬場線とが交差している。

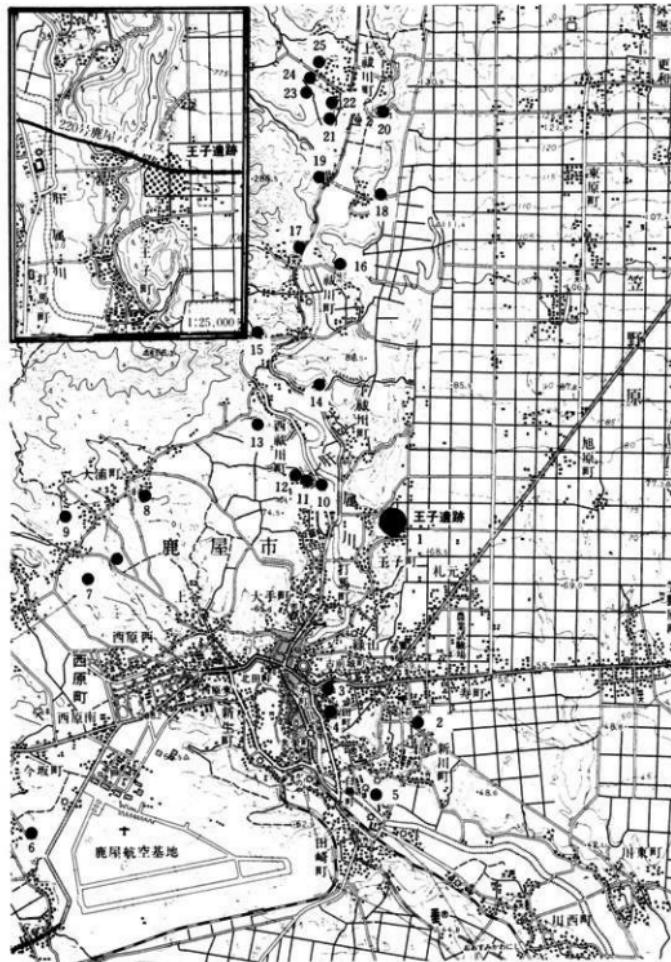


Fig. 1 王子遺跡と位置および周辺遺跡

1:50,000

Tab. 1 王子遺跡周辺遺跡一覧表

注3~7

No	遺跡名	所在地	地形	遺構・遺物	備考
1	王子	鹿屋市王子町王子	台地(畑)	古墳時代土器片	本文に記録
2	寿六丁目	＊ 寿六丁目	台地	古墳時代の土器片	
3	寿三丁目	＊ 寿三丁目	＊	＊	
4	曾田	＊ 曾田町曾田	＊	＊	
5	高付	＊ 白崎町高付	水田	弥生式土器・成川式土器	
6	野里小西	＊ 平野町野里小西	台地(宅地)	縄文式土器(早期)	
7	川の上	＊ 大浦町松橋川の上	山麓・畑地	古墳時代の遺物	
8	大浦	＊ ＊ 大浦	丘陵	縄文式土器(早期)・地下水横穴	
9	郷之原	＊ 郷之原町郷之原	山麓・畑地	縄文式土器・古墳時代の遺物	
10	西萩川	＊ 西萩川町西萩川	水田・微高地	縄文式土器(中期)・鐵製短甲・胃出土	本文に記録 社品の調査
11	西萩川地下式土坑	＊ ＊ ＊	微高地	地下式土坑・鐵製短甲・胃出土	
12	薬師堂	＊ ＊ 薬師堂	台地(縁辺部)	円壇状のマウンド3基・成川式土器	本文に記録
13	神野牧	＊ ＊ 神野牧	台地(畑地)	縄文式土器(後期・晩期)	
14	右仏頭	＊ 下萩川町下萩川	台地(縁辺部)	古墳時代の土器片	
15	中野	＊ 萩川町中野	微高地	弥生式土器(中期)	
16	堀之内遺跡群	＊ 中萩川町堀之内	台地(縁辺部)	弥生式土器(中期)	
17	山外森	＊ 上萩川町山外森	台地	歴史時代の遺物	
18	大崖	＊ ＊ 大崖	丘陵	縄文式土器(後期)	
19	芝原	＊ 萩川町芝原	台地	古墳時代の遺物	
20	上楠原C	＊ 上萩川町上楠原	台地(畑)	＊	56年発見
21	上楠原A	＊ ＊	＊	縄文式土器(中期)・鐵製短甲・胃出土(中期)	1984年調査
22	上楠原B	＊ ＊	＊	縄文式土器(早期)	＊
23	丸岡	＊ ＊	＊	縄文式土器(晩期)・成川式土器・住居跡構造遺構	＊
24	水ノ谷	＊ ＊	＊	縄文式土器(中期)・成川式土器・住居跡構造(中期)	＊
25	上萩川	＊ ＊ 上萩川	＊	縄文式土器(後期)	56年発見

## (参考文献)

- 鹿児島県土地分類基本調査「鹿屋・志布志」国土調査 1971
- 鹿児島県書店組合「鹿児島県風土記『風土と文化』」3. 1982
- 文化庁「全国遺跡地図・鹿児島県」1975
- 鹿児島県教育委員会「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(23) 1982
- 鹿児島県教育委員会「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(25) 1983
- 鹿屋市教育委員会「上萩川遺跡群」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1984
- 鹿屋市郷土誌 1967

Fig. 2 王子道路地形図



## 第4章 調査の概要

本遺跡は、当初、伐採作業や杭打ち作業から実施した。その後、排土処理等を考慮し、西側台地縁辺部の表土層の除去から弥生時代中期相当の遺物包含層の調査を実施し、中央区へと移行した。また、併せて東区の確認調査を実施した。その結果、西区台地縁部付近は、養鶴所や土地造成のため、すでに遺物包含層の削平及び擾乱がみられたが、C-3区、B-E-5区、F-7区から以東29区にかけて遺物の包含をみた。ただし、西区北西側路線幅際にはⅢ層上面で溝状遺構を検出した。これらの調査区内には、笠野原畠地灌漑用のパイプ埋設、花木植栽、道路敷、保存用のイモ穴、基盤整備事業の影響を大なり小なり受けている所がみられた。遺物は(Ⅲ層上面から約30~40cm上位)の一面に土器小破片が散布したような状態で出土し、集中した所も認めた。発掘調査の進展につれ、本遺跡の遺構は、西区崖端部から約60mのB-F-6区からC-F-25区の東西幅180mにかけて、堅穴住居跡(以下、住居跡とする)27基、掘立柱建物跡14棟(棟持柱付のもの6棟、掘立柱に土塀をもつ遺構2棟を含む)、土塙4基、溝状遺構2条など、総計47の遺構を検出した。これらの遺構の中にはⅢ層上面での検出も多い。遺構のうち住居跡は、ベッド状張り出し遺構をもつもの、障壁をもつものなどがある。掘立柱建物には、棟持柱をもつもの、土塙をもつものを検出した。遺物のうち土器は、壺形土器(煤の付着を認める破片が多い)、大型壺形土器、壺形土器、鉢形土器が主体で、他に蓋形土器、手捏ね土器、石器には磨製石鎌、砥石を主体に樹皮布叩石、叩石、凹石、研磨のみられる羅、石斧、石錐、打製石鎌、鐵製品には鉈、刀子、土製品には勾玉、その他に鍛冶滓、自然遺物には炭化物(棒状を含む)など多量の遺物が出土した。特記する遺物には、在地の山ノ口

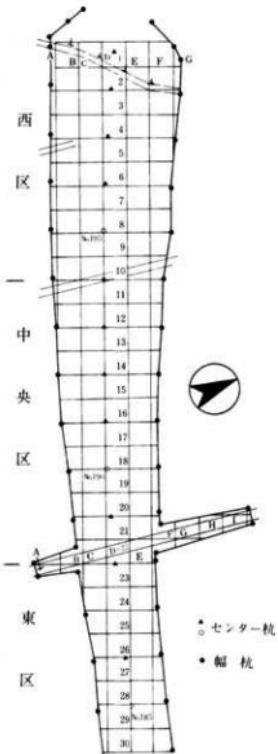


Fig. 3 王子遺跡グリッド図

式土器を中心に、北九州系の影響を受けたものや凹線文をもつ壺形土器、矢羽根透しをもつ高环など瀬戸内系の土器が供伴した。また、樹皮布叩石、鉈、鐵治津などの資料を得た。

本遺跡は、大規模で学術的見地から貴重な資料を提供した。このため遺跡の全面的保存に伴う路線変更が提起された。王子遺跡の保存について、県文化財保護審議会は会合を重ねるとともに意見集約を行った。その結果、保存科学処理、映像記録、市道及び現検出遺構の下層部分の確認作業、遺構の一部の現地保存管理作業、一部遺構について移設などの事業を実施した。特に、現検出遺構の下層の調査で、今まで弥生時代の単純遺跡とされていたが、縄文時代早期相当の遺物包含層の残存部を確認し、調査を実施した。

発掘調査は、昭和56年10月12日から昭和59年2月4日までの3年余の長期間を費して終了した。

### 第1節 層序

王子遺跡における地表面は、ほぼ平坦面で、笠野原台地北西縁辺部に位置し、西側は約40m以上の懸崖となり、東部は平坦面が続く地形である。

地層は、表層から基盤層の入戸火鉢流（ITO）までⅩ層の堆積を確認した。標準的層序は遺跡の中央付近でみられ、西区縁辺部や東区の一部は、土地整備事業などの土地造成、建造物、畑地灌漑パイプ埋設、花木の植栽などの影響を受けⅪ層遺物包含層までの保存状況は良好でなく、特に、東区は植栽のためⅢ層上位付近まで達している所が多い。畑地灌漑用のパイプ埋設による掘込は、Ⅳ層下部まで達している。発掘調査では、Ⅲ層以下の土層の保存状況は良好である。遺物包含層はⅡ層であり、Ⅱc層は遺物の出土を認めない。Ⅱc層上面が当地の生活面と思われる。検出遺構は黒土層から掘り下げ、下位の池田降下軽石を貫いて、アカホヤ層に達する。黒土層での遺構の検出は土層の精密な観察で、黒色土中で遺構の検出ができた。弥生時代遺構検出後の下層の確認調査では、Ⅵb層上位より縄文時代早期相当の文化層を検出した。ここで、遺跡全体の基本的層序を説明し、こまかなる差異については、各層などの条件により確実に分層するものは、a、b、cに区分し、その他の不明ものは独立して扱った。

また、当遺跡では、調査班の肉眼観察による土層区分だけでなく、Ⅱ層、Ⅲ層について分析もあわせて行ったが、記述は発掘調査班による土層区分を中心に行うこととする。

Ⅰ層 表土層であり、現在の耕作土で、表面は含水率が低くなれば明褐色を呈する。本来の厚さは約30cm前後で、場所により層厚にひらきがある。土質は砂壤土で腐植を含み、苦土や石灰など欠乏する。

Ⅱ層 本遺跡の弥生時代の遺物包含層である。本来は平均して40cm前後で、Ⅰ層より若干多くの腐植土を含み、暗黒色火山灰土で光沢を呈する。本遺跡では約40~80cmを測り、地点により3分層される。上部のⅡa層は黒色で軟質気味、下部のⅡc層は暗黒色を呈し硬質である。Ⅱb層は、特に、C・D-23~25区付近で判明し、他地区でも小範囲に認め、黒色土に多くの茶褐色を含み砂礫状を呈する。これらの層に弥生時代中期相当の遺物を包含する。Ⅱc層は遺物を認めない。Ⅱa、Ⅱb、Ⅱc層についてみれば、「Ⅱ」層

には黒雲母を認め、II<sub>a</sub>層はII<sub>b</sub>層に比べ、斜長石に乏しく、石英・クリストバル石に富む。II<sub>b</sub>層がII<sub>a</sub>層に比べ、石英・クリストバル石のピークが強く、斜長石のピークが弱い。反対に、II<sub>b</sub>層がII<sub>a</sub>層に比べ、斜長石のピーク強く、石英・クリストバル石のピークが弱いとのX線回析パターンの識別がなされる。また、開聞岳火山灘と判断され、開聞岳降下火山灰と称することが妥当である。との見解がなされている。また、このII層について、「黒色土を水洗して、鉱物をみると、a. シソ輝石 b. カンラン岩、c. 斜長石を含み、岩片がきわめて多いのが特徴」との分析がなされている。このII層は、黒ニガとか黒ボクと呼ばれ、II<sub>a</sub>層上面付近に当時の生活面が想定され、本遺跡の遺構

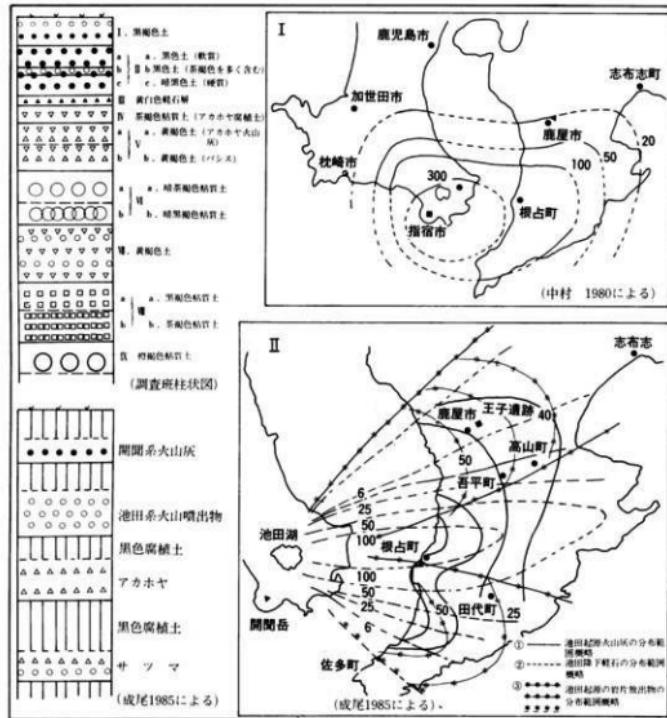


Fig. 4 王子遺跡土層柱状模式図及び火山噴出物範囲概略

の掘方をみる。調査区の西側台地縁辺部付近や東区は、II<sub>c</sub>層の大半まで擾乱や削平を受けている。

III層 黄白色軽石層で、ほぼ一直線状に台地を覆っている。層幅は薄く明確でないが軽石と角張った礫（径2～3cm）があり、軽石は池田降下軽石で、岩片は別の池田湖起原の岩片放出物で、Fig.4、II-(3)は最初期のもので、大隅半島の二方向に降下し、また、岩片の種類も毛下スユリアのものとは異なるとの見解である。池田降下軽石は、今から約4,500年前ごろのものである。黄白色軽石の軽石は、「普通角閃石を含む普通角閃石英安山岩質で、池田カルデラ源池田降下軽石または池田軽石流。池田火碎流中の軽石と完全に一致し、明らかに池田カルデラ源のものであると断定し、池田降下軽石または池田軽石流と称さることが妥当である。」との見解がなされている。

IV層 茶褐色粘質土でアカホヤの腐植土である。本来ならばIV層とV<sub>a</sub>、V<sub>b</sub>層を同一層として扱い、a、b、c層に分層するべきであったが、当時の調査班の肉眼観察層序で報告する。

V層 橙色および黄褐色を呈する火山灰で、当地方ではアカボッコとかアカボンゴと呼ばれ、約30～40cmの厚さで堆積している。このアカホヤは、「降下軽石、火碎流、火山灰の三層から形成され、火碎流は薄く（5～10cm）、この王子付近が火碎流の致達限界付近に相当し、アカホヤの二次堆積がみられないのは、上部に池田起源のものが厚く堆積した。」との意見もある。この層は二分層され、V<sub>a</sub>層が火山灰（Ah）で、V<sub>b</sub>層が降下軽石層であり無遺物層である。このアカホヤ層は鬼界カルデラを給源とする火山灰層に想定され、絶対年代はB.D 6050～6400年に推定されている。

VI層 二分層され、VI<sub>a</sub>層は暗茶褐色粘質土、VI<sub>b</sub>層は暗黒褐色粘質土である。本来ならば、V層とVI層に不詳の火山灰で茶褐色粘質土を認めるが、調査班ではVI層に含め、Fig.5では破線で分離したことと付記する。この層は繩文時代早・前期の遺物包含層である。

D・E-19・20区のVI<sub>a</sub>層上部付近に、早期相当の土器破片と集石遺構を検出した。

VII層 黄褐色で、約18～26cm前後の厚さで全面に認め、桜島降下軽石。火山灰は「サツマ」と呼ばれているもので、下部は降下軽石、上部は火山灰である。年代は約11,000年前のものである。

VIII層 二分層され、VIII<sub>a</sub>層は黒色粘質土、VIII<sub>b</sub>層は茶褐色粘質土である。細石器文化層相当。

IX層 橙褐色粘質土で遺物層である。以下、シラス（始長Tn火山灰）へと続く。

注1. 大庭耳、富田克利、山本温彦「鹿屋市王子遺跡発掘現場の“暗黒色腐食土”II<sub>c</sub>、II<sub>b</sub>およびII<sub>a</sub>の物質構成・噴出源・識別および軽石層（III）の噴出源・火山層序対比」1983・5。

注2. 德之島高校成尾英仁氏の御指導による。

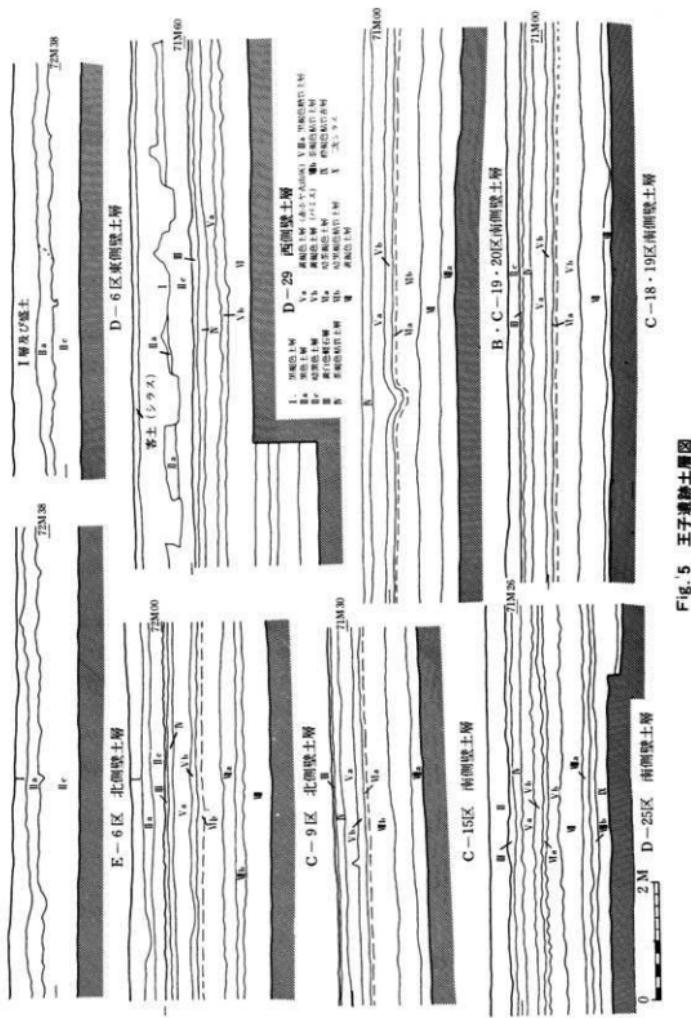
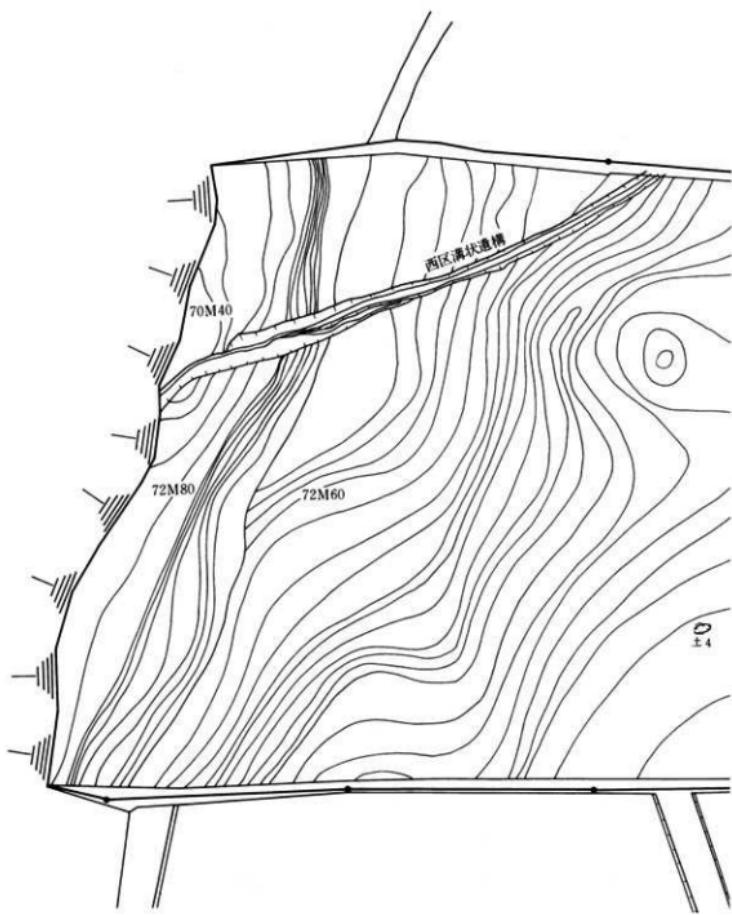
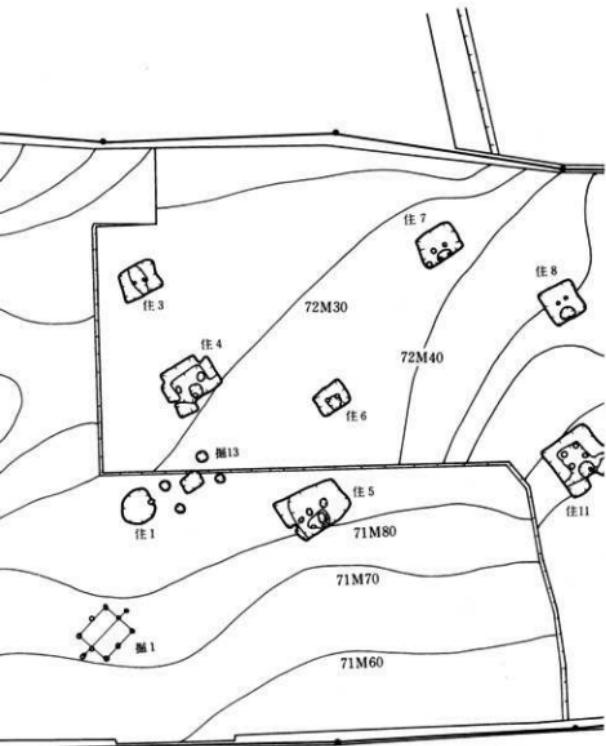


Fig. 5 王子遺跡土層圖





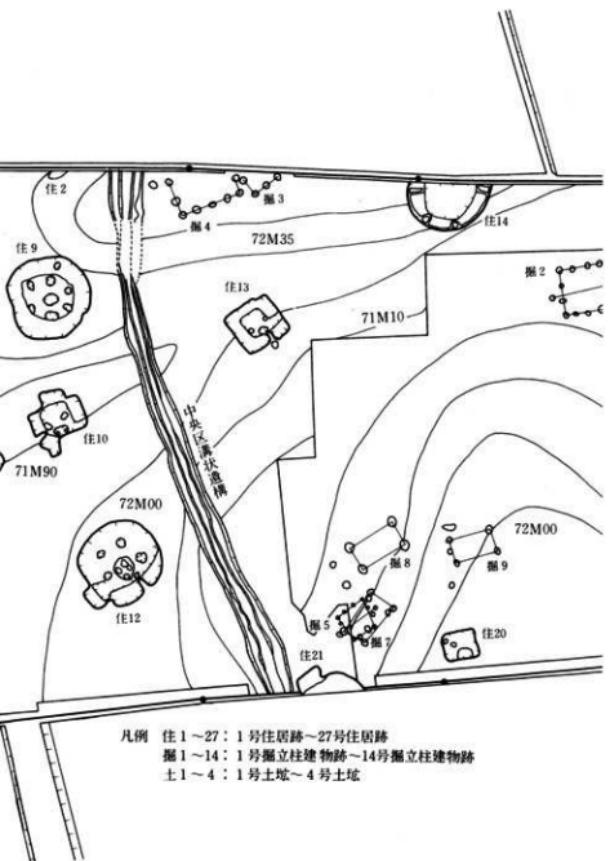
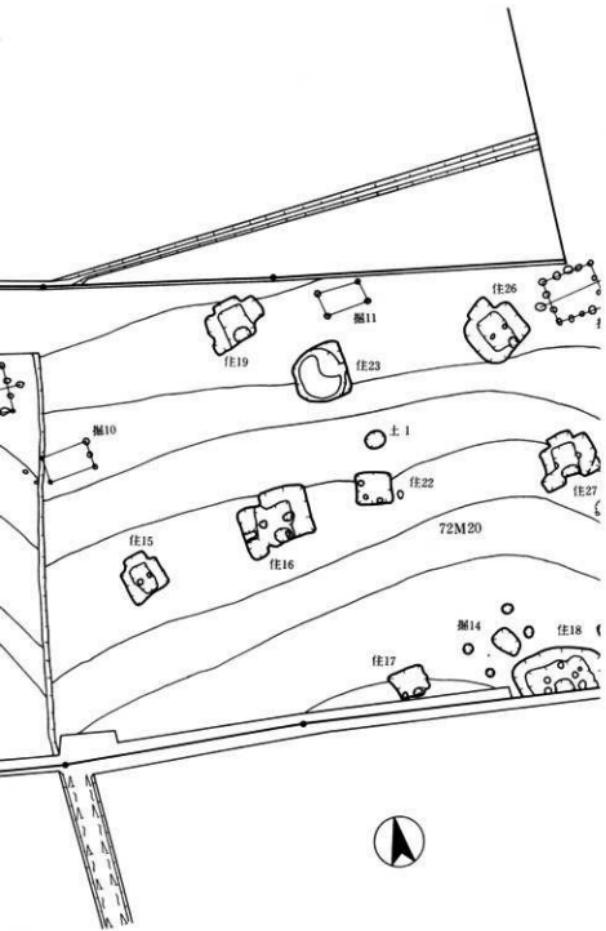
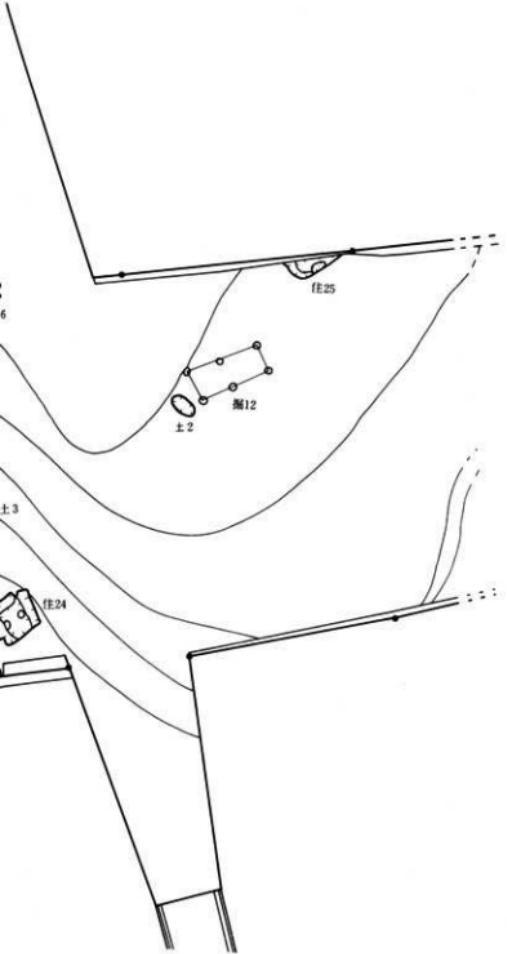


Fig. 6 王子遺跡遺構配置図





## 第5章 弥生時代の遺跡

王子遺跡で検出された弥生時代の遺構は、竪穴式住居跡27基、掘立柱建物跡14棟[掘立柱建物跡(棟持住付6棟)、掘立柱建物跡6棟、掘立柱建物に土塀を伴うもの2棟]、土塀4基、溝状遺構2条などを検出した。さらに鹿屋バイパス建設予定地外に遺構の拡がりが考えられる。

### 第1節 竪穴式住居跡 (Fig. 7~100, PL. 4~21)

住居跡は、調査区西側7区から東側24区までの約180mの範囲に27基を検出した。うち5基については鹿屋バイパス建設予定地の路線外へのびている。さらに住居跡群は拡がるものと類推される。

王子遺跡の住居跡は、その形状から方形と円形がある。方形の住居跡は上屋を支えるための2本の掘立柱と中央南側壁際に設けられた土塀からなる。方形及び四隅のコーナーを円く潰した隅丸方形住居跡、外側に張り出し、中央の床面から一段高く作られたベッド状張り出しのある住居跡を検出した。円形の住居跡は、主柱穴が現存で5~7本の掘立柱と中央に設けられた土塀からなる住居跡が判明している。

#### ①1号住居跡 (Fig. 7, 11)

発掘調査の最西部より以東約60mに位置する。4号住居跡との最短距離は北東約6.8mで、13号掘立柱建物跡まで約1.6m、C-7区のⅢ層上面で検出された。

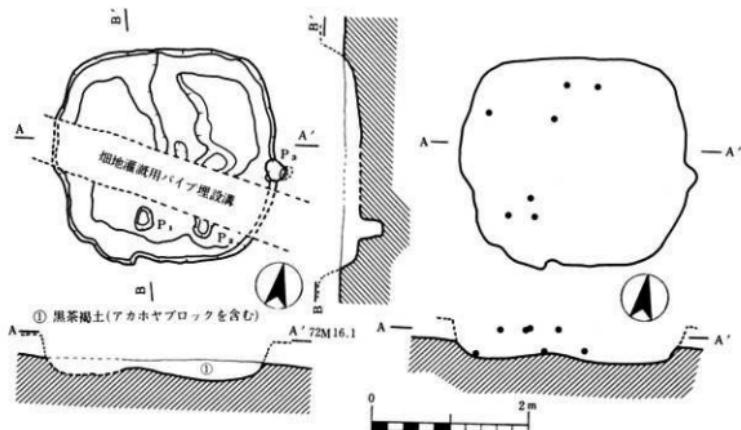


Fig. 7 1号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

長軸300cm、短軸275mの略円形を呈し、遺構の検出面からの深さは約25cmである。畠地灌漑用パイプ埋設時に削平を受け、床面はⅣ層で、部分的に貼り付け調整を認める。柱穴は新しい溝により一部削平を認めるが、現存で3本検出し、P<sub>1</sub>：径29~32cm、深さ31cm、P<sub>2</sub>：径22~25cm（現存）、深さ26.8cm、P<sub>3</sub>：径28~30cm、深さ58cmで斜めの掘込である。

なお、本住居跡の床面からの出土遺物は、数片の土器破片と炭化物の微片で、埋土中からの出土も数点で、他の小破片は図化できなかった。

### ②2号住居跡（Fig. 8）

9号住居跡との最短距離は北側約4.0mで、中央部の溝状遺構まで約6.3m、F-11区Ⅱ層で検出された。

本住居跡は、その大半が予定地外へのびるため不詳である。現存の遺構での状況は、長軸205cm、短軸111cm、遺構の検出面からの深さは62cmを測り、小規模で略方形を呈するため、13・14号掘立柱建物跡と同様の遺構を想定し、柱穴の検出に努めたが、検出出来なかつた。本遺構は南側及び南西部に張り出しをもつ住居跡の可能性が考えられる。床面はⅣ層の上位付近で、切り出しによる調整を認めた。なお、住居跡内埋土より土器小破片を出土したが、図化出来るものは少ない。

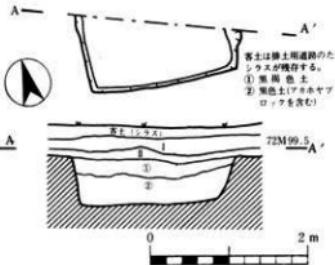


Fig. 8 2号住居跡実測図

### ③3号住居跡（Fig. 9~11, PL. 5）

発掘調査の最西部より以東約60mで、本遺跡の住居跡群最北西端部に位置する。4号住居跡との最短距離は南側約5.7mで、E-7区Ⅱ層中で検出された。

長軸350cm、短軸258mで、遺構検出面からの深さは46.0cmを測る。主軸の方位はN-83.5°-Eをとる。本住居跡の平面プランは略方形を呈し、南北隅と南北隅は丸味をもち、西側辺の中央部より北側付近は丸味を帯びながら若干突き出し、南側辺と東側辺は若干内側へはいり込むような形状を呈する。

主柱穴は2本で、西側：径29~32cm、深さ57cm、東側：径27~45cm、深さ55cm、心心距離は90cmである。床面は一部に貼り付け調整を認めた。主柱穴を取り囲むように北壁中央部から南北中央付近にかけて略長方形状の掘込を認め、床面との北高差は約20cm前後を測る。西側床面の北壁側の一部から西壁側のほぼ中央部にかけて幅6~7cm、深さ5~6cmの壁帶溝を検出した。

なお、本住居跡の出土遺物には、大型壺形土器・甕形土器・壺形土器・鉢形土器などがあり、大型壺形土器は二か所に分散し、埋土中にみられ底部を欠く。

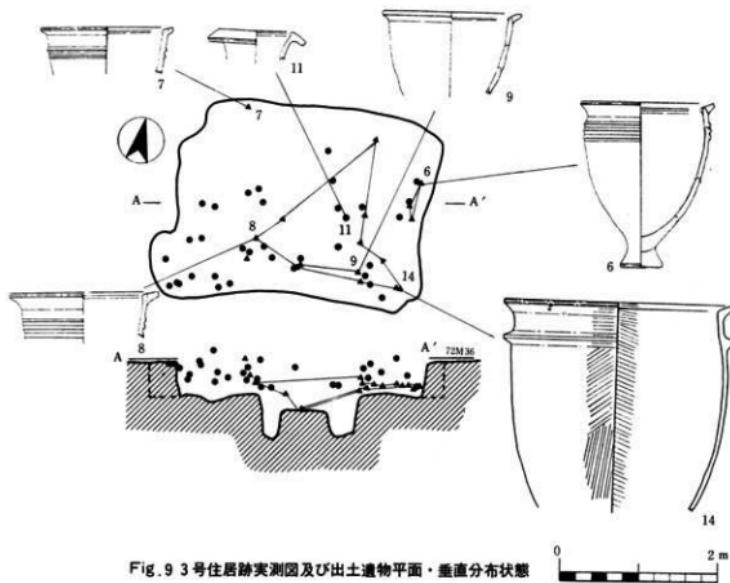
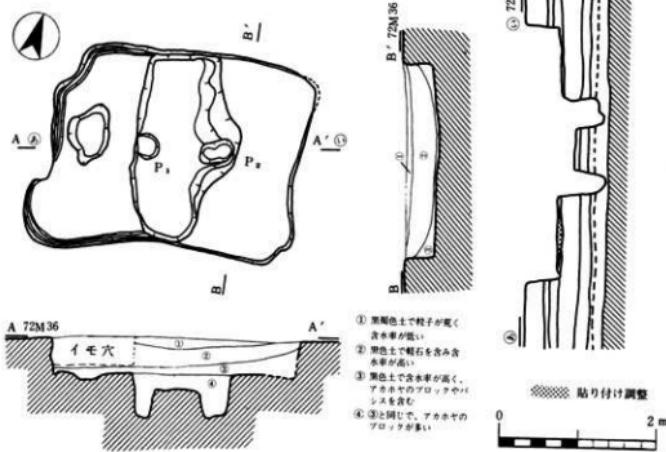


Fig. 9 3号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

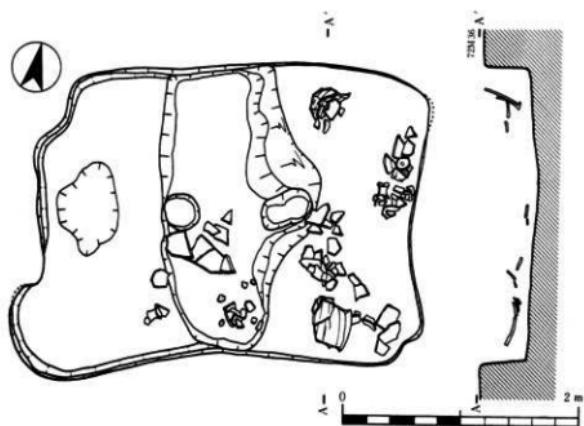


Fig. 10 3号住居跡内遺物出土状態

Tab. 2 1・2・3号住居跡内出土土器一覧表

(注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 備考

番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
1 PL 29	壺 口縁部	①(722)	茶褐色	Q P <sub>L</sub> M	垂れ下りる気味に外反する口縁部で、口縁部 裏面は平坦面を作る	内・外表面ともに横位の刷毛 などで調整である。
2 *	壺 胴部		茶褐色	Q P <sub>L</sub>	現存で三条の断面三角形貼付突帯を認める。	外側は横位の刷毛などで調整 して、内側は胎部在調整後の横 位の刷毛などで調整である。
3 *	壺 底部		褐色	Q P <sub>L</sub> M	丸実した舞台である。底は短く、あまり 広がりがなく、底の裏面は凹んで、円錐状を 呈する。	横位及び横位の刷毛などで調 整である。
4 *	壺 口縁部		暗褐色	Q P <sub>L</sub> M	逆S状に外反する口縁部で、口縁部裏面は 凹み、口縁部内側には張り出しを作る。底の 付着を認める。	内・外表面ともに横位の刷毛 などで調整である。
5 *	壺 口縁部		暗褐色	Q P <sub>L</sub>	口縁部裏面は凹む。小破片のため形状は不 明で、貼付け部より剥離している。底の付着 を認める。	横位の刷毛などで調整である。

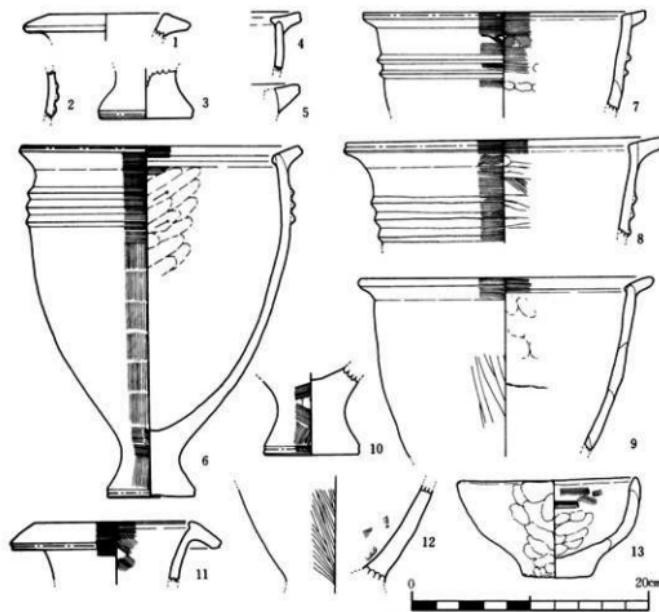


Fig. 11 1・2・3号居跡内出土遺物実測図(1)

番号	図版 番号	器種-器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
6	PL 29	壺 完形品	①23.8 ②29.8 ③22.6 ④7.4	暗褐色	Q P.L	光沢した脚台付の菱形土器で、速さの約 縦型で、口縁部は内凹し、くの字状に外反する。 口縁部前面は円む。口縁部内側には張り出し を作る。三条の前面三角形貼付帯を廻らす。 指捺の付着を認める。	外面は三角突帯付近まで横 位。奥帶より下は縮位。底 脚付近は横位。斜位及び縮位 の崩毛などで調整で、内面は指 捺注調整後横位の崩毛などで調 整である。
7	*	壺 口縁部 胴部	①23.9 ③21.4	暗褐色	Q P.L	胴部よりやや外方気味に直線的に立ち上がりながら口縁部を作り、速し字状に外反する。 口縁部前面は円む。口縁部内側にはわざから張り出しを作る。二条の前面三角形貼付帯を廻らす。底の付着を認める。	外面は横位。内面は指捺注 調整後、横位及び斜位の崩毛 などで調整を認める。
8	*	壺 口縁部 胴部	①(26.8) ③(22.4)	褐色	Q P.L	胴部よりやや外方気味で直線的に立ち上がりながらわざかに内凹する口縁部で、速し字 状に外反する。口縁部前面は円み、口縁部内側 にはわざかに張り出しを作る。現在で三条の 前面三角形貼付帯を廻らす。	外面は横位。内面は指捺注 調整後横位及び斜位の崩毛な ど調整を認める。

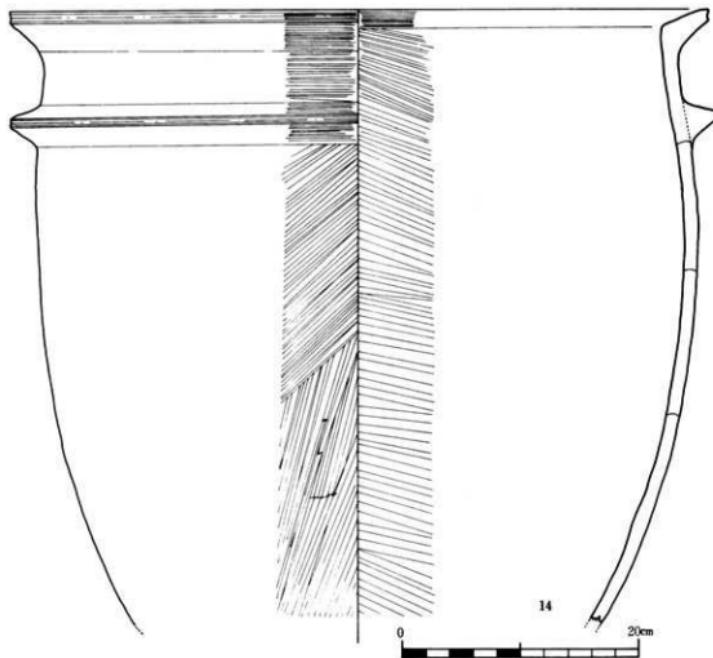


Fig. 12 3号住居跡内出土遺物実測図(2)

番号	器名 器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
9 PL 29	甕 口縁部 胴部	①24.8 ③21.0	暗褐色	Q P_L	胴部よりやや外方気味で直線的に立ち上がりながら口縁部をつくり、くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は丸味を帯びる。口縁部内側にはわずかな張り出しを作る。変形はない。底の付着を認める。	外表面は横位の刷毛なで調整が見られるが、胴部より下位は直書きで、内面は横位のなで及び指遍圧調整である。
10	甕 底部	④ 8.0	褐色	Q P_L	光沢した舞台である。瓶は長くあまり広がりがなく、瓶の端面は凹んで、円錐状を呈す。	指遍圧調整後横位及び斜位の刷毛なで調整である。
11	甕 口縁部	①(17.8)	暗茶褐色	Q P_L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹んで、口縁部内側には張り出しを作る。	外表面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛なで調整である。

番号	測量番号	器種・基部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
12	PL 29	甕 底部付近		褐色	Q P.L. M	光沢した口縁台のつく底部付近と思われる。 煤の付着が認められる。	外表面は施磨きが認められ、 内面は磨削しているが、部分的に斜位の刷毛などで調整を認める。
13	*	鉢 完形品	① 6.8 ② 8.2 ④ 3.0	灰褐色	Q P.L. H	底部は平底で外方へ大きく開きながら直線的に立ち上がり口縁部を作る。口唇部は丸味を帯びる。	内・外表面ともに指擦圧調整痕を残す。内面には斜位及び横位の刷毛などで調整を認める。
14		大型 甕 口縁部 脇部 下位	①59.0 ③55.8	赤茶褐色	Q P.L. M	脇部はわずかに脇込み、わずかに内傾する口縁部である。口縁部はくの字状に外反し、口縁部端面は凹む。口縁部外側直下には台形状跡付突起を廻らし、突起端面は凹む。	外表面は口縁部から突帯まで深い横位、脇部まで斜位で拂拭痕で痕跡がうすく脇部下位には脇位の刷毛目状で比較的あるいはあらい刷毛目状であるが、わずかに斜位から横位方向にその痕跡が残る。

#### ④ 4号住居跡 (Fig. 13~15, PL. 6)

発掘調査の最西部より以東約65mで、住居跡群の西端部付近に位置する。3号住居跡との最短距離は約5.7mで、6号住居跡まで7.8m、13号住居跡まで7.8cm、13号掘立柱建物跡まで3.1mを測り、D・E・8・9区のⅡ層中で検出された。

長軸475cm、短軸463cm（ともにベッド状張り出し部を含む）を測り、主軸の方位はN-80°-Eをとる。主柱穴は2本で、西側：径40-55cm、深さ36cm、東側：51-60cm、深さ49cmで、重心距離は228cmを測る。遺構検出面からの深さは73cmで、ベッド状遺構まで45cmである。

本住居跡の平面の形状は、基本的に長方形を呈し、北壁、西壁及び南西隅にはベッド状張り出しを認める。ベッド状張り出し部は、北壁：347×95-110cm、西側：90×190cm、南西側：173×107cmを測る。東壁際には90-100×100cmのベッド状遺構を検出する。ベッド状遺構の床面はⅤ層上部やⅥ層中に造られ、北側に1か所、南西側の壁際に3か所の浅い掘込を認め、西側及び北側ベッド状遺構は連続する。床面との比高差は約20cmで、南西隅側は約16cmを測る。北側、西側及び東側ベッド状遺構や床面は貼り付け調整され、床面はⅤ層下位である。各ベッド状遺構と南東隅から東側中央付近にかけての壁際には、幅約5-10cm、深さ約4-7cmの壁帶溝を検出した。住居跡南側中央壁際には、115×110cm、深さ31cmの略円形の土塙を認め、土塙内には柱穴状の掘込を検出した。主柱穴及び土塙内の柱穴状の掘込はⅣ層中位から下部付近まで達し、比較的硬質な層まで掘込み、北側、西側及び東側ベッド状遺構はⅣ層上位、床面はⅤ層下位付近で、比較的軟質なため貼り付け調整を認める。

なお、本住居跡の出土遺物は床面からの出土はあまりみられず、埋土中より大型甕形土器・甕形土器・壺形土器などの破片が出土した。甕形土器は床面より約15cm上位の埋土より出土し、器面には煤の付着を顕著に認める。

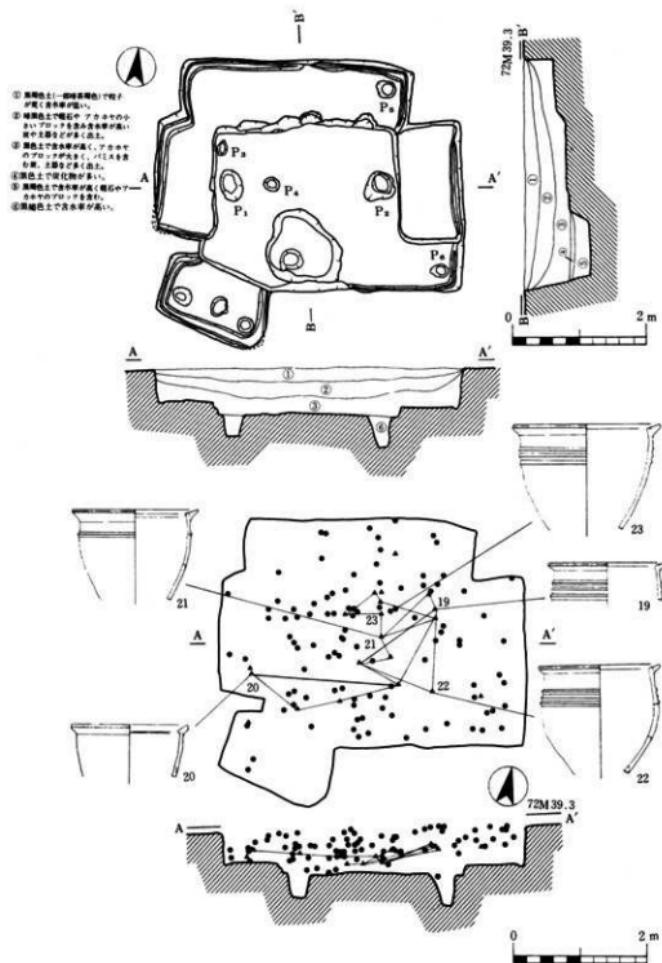


Fig.13 4号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

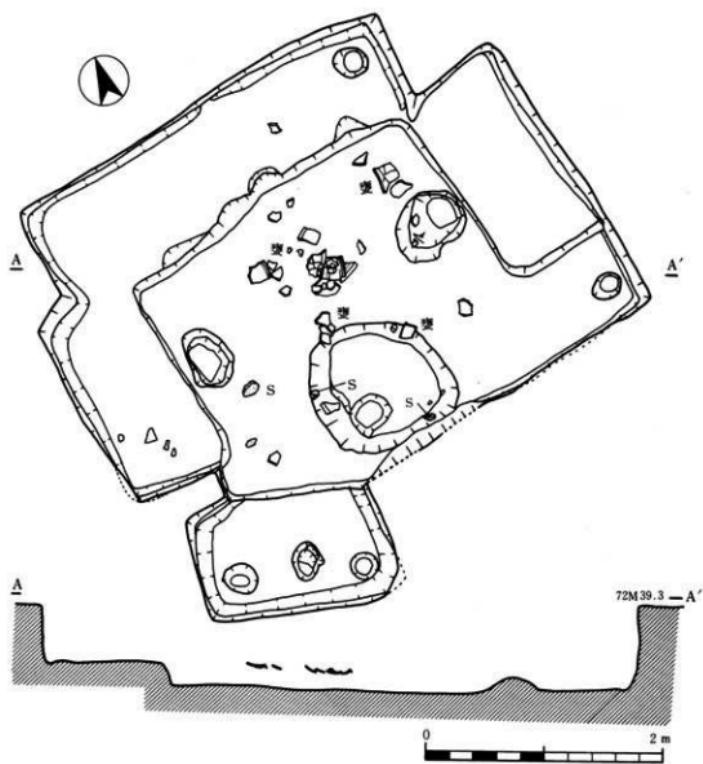


Fig. 14 4号住居跡内遺物出土状態

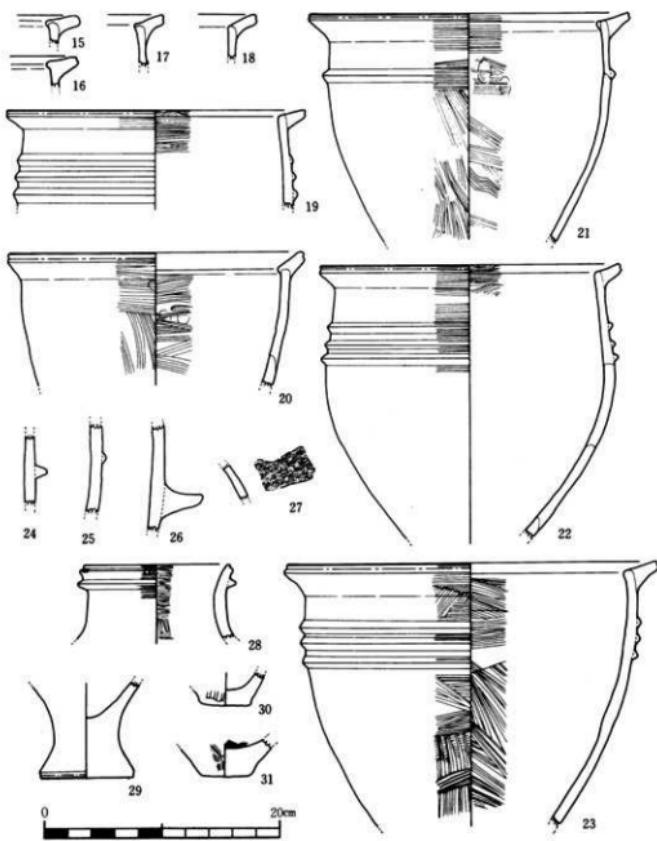


Fig. 15 4号住居跡内出土遺物実測図

Tab. 3 4号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号 測定 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴 、 そ の 他	手 法 の 特 徴	
15 PL 29	甌 口縁部		暗茶褐色	Q P L M	達し字に近く外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作る。底の付着を認める。	内・外面とも横位のなで調整を認める。	
16	*	*	暗茶褐色	Q P L M	達し字状に近く外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作る。底の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛にて調整を認め、指紋の付着を認める。	
17	*	*	黒褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。現在で一条の断面三角形貼付突起を認らす。底の付着を認める。	外面は横位の刷毛にて調整を認め、内面は指紋は調整後横位の刷毛にて調整の痕跡をみる。	
18	*	*	灰褐色	Q P L H M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。現在で三条の断面三角形貼付突起を認らす。底の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛にて調整を認めが、わずかに横位の刷毛にて調整の痕跡をみる。	
19 PL 29	甌 口縁部 胴部	①(25.2) ③(24.2)	黒褐色	Q P L	わずかに内傾する口縁部で、達し字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。現在で三条の断面三角形貼付突起を認らす。底の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛にて調整を認め。	
20	*	*	①(25.2) ③(22.2)	淡褐色	Q P L	外方へ直線的に立ち上がる口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。突帯はない。底の付着を認める。	内・外面ともに横位及び斜位の刷毛にて調整で、指紋圧内側には張り出しを作る。突帯はない。底の付着を認める。
21	*	*	①(27.2) ③(24.0)	灰褐色	Q P L	外方へひらきながら直線的に立ち上がる口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。現在で一条の断面三角形貼付突起を認らす。	内・外面ともに横位・斜位及び斜位の刷毛にて調整を認めが、内面には指紋圧調整痕も残る。
22 PL 29	*	①(25.4) ③(24.4)	黒褐色	Q P L M	刷毛が少しきらら内傾する口縁部で、口縁部内側には縦を作り出す。三条の断面三角形貼付突起を認らす。輪縁の手法を残す。底の付着を認める。	内・外面ともに刷毛を認めが、外側は横位及び斜位、内面は横位及び斜位の刷毛にて調整がみられ、下位は剥落して不明である。	
23	*	*	①(31.2) ③(27.2)	黒褐色	Q P L H	外方へひらきながら立ち上がり刷毛は張らず、わずかに内傾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。三条の断面三角形貼付突起を認らす。底の付着を認める。	外面は横位、斜位及び斜位、内面は横位及び斜位の刷毛にて調整を認める。
24	*	大型 甌 胴部上位	明茶褐色	Q P L	おそらく口縁部外側の部位に想定される突帯で、一条の断面三角形貼付突起を認らす。底の付着を認める。	内・外面とも横位の刷毛にて調整を認める。	

番号	図版 番号	器種・基部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
25	PL 29	甕 肩部		明灰色	Q P.L	肩部付近の突筋で、一条の断面三角形貼付突筋を残す。	内・外面とも横位の刷毛などで調査である。
26	◆	大型 甕 肩部上位		茶褐色	Q P.L M	口縁部外側の部位付近で、細長い略断面台形状の突筋である。	剥落しているが横位にうすくクシメ状の痕跡を認める。
27	◆	甕 肩部		茶褐色	Q P.L H	薄手の器形で、瓶口内系の壺の肩部付近と思われ、小破片のためはっきりしないが、施工工具による一列の列点文を見る。他区出土の遺物は二列の列点文を確認する。	肩位の刷毛目状の痕跡が明瞭に認め、内側は剥落しているため不明である。
28	◆	甕 口縁部		暗茶褐色	Q P.L M	口縁部は外反し、口肩部端面は凹み、凹みの下部は施工工具による突筋を一部に認める。口肩部外側端面に断面三角形貼付突筋を残す。口縫部が二段式を呈する。	外面は横位。内面は横位、斜位及び底位の刷毛などで調査で、外側の一部は剥落している。
29	◆	甕 底部	④8.0	明茶褐色	Q P.L M	充実した脚部である。壺は長く、あまり広がらがない。壺の端面は凹んで凹縫状を呈する。	剥落しているため調整痕は不明である。
30	◆	甕 底部	④4.4	明茶褐色	Q P.L H	外方へ開きながら立ち上がると思われる器形で、わりと薄手の平底の底部である。	ほとんど剥落しているが、一部に斜位の刷毛などで調査である。
31	◆	甕 底部	④4.3	明褐色	Q P.L H	外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形で、ぶ厚い平底の底部である。	内・外面ともに斜位の刷毛などで調査である。

##### ⑤ 5号住居跡 (Fig. 16, 17, PL. 6)

6号住居跡との最短距離は4.0mで、13号掘立柱建物跡まで6.6mを測り、C・D-8・9区のⅡ層中の検出で、一部は確認調査時に確認された。

長軸555cm(ベッド状張り出しを含む)、短軸430cm、主柱穴は2本で、西側：径45~46cm、深さ78cm、東側：径50~68cm、深さ66cm、重心距離134cmを測る。主軸の方位はN-84.5°-Eをとる。構造検出面からの深さは48cmで、ベッド状遺構までは25cmを測る。

住居跡の平面の形状は、西壁及び東壁の一部は新しい溝(畑地の区割)で、北壁の大半は畠地灌漑用パイプ埋設時に削平を受けているが、基本的には隅丸の略長方形を呈する。西側2か所には削り出しによるベッド状張り出しを検出した。床面との比高差は約23cmを測る。床面の北西側ベッド状構造際には幅10~12cm、深さ5~6cmの壁帶溝の一部を検出する。床面はV層中位付近で部分的に貼り付け調整され、新しい溝は床面まで達していない。住居跡の南側中央壁際には185×133cmの略円形の土塙が検出され、土塙内には5か所の柱穴状の掘込を認めた。

なお、本住居跡の出土遺物は、埋土中より変形土器・壺形土器などの破片や磨製石鎌2が出土し、変形土器は口縁部破片や底部、壺形土器は口縁部を多くみた。

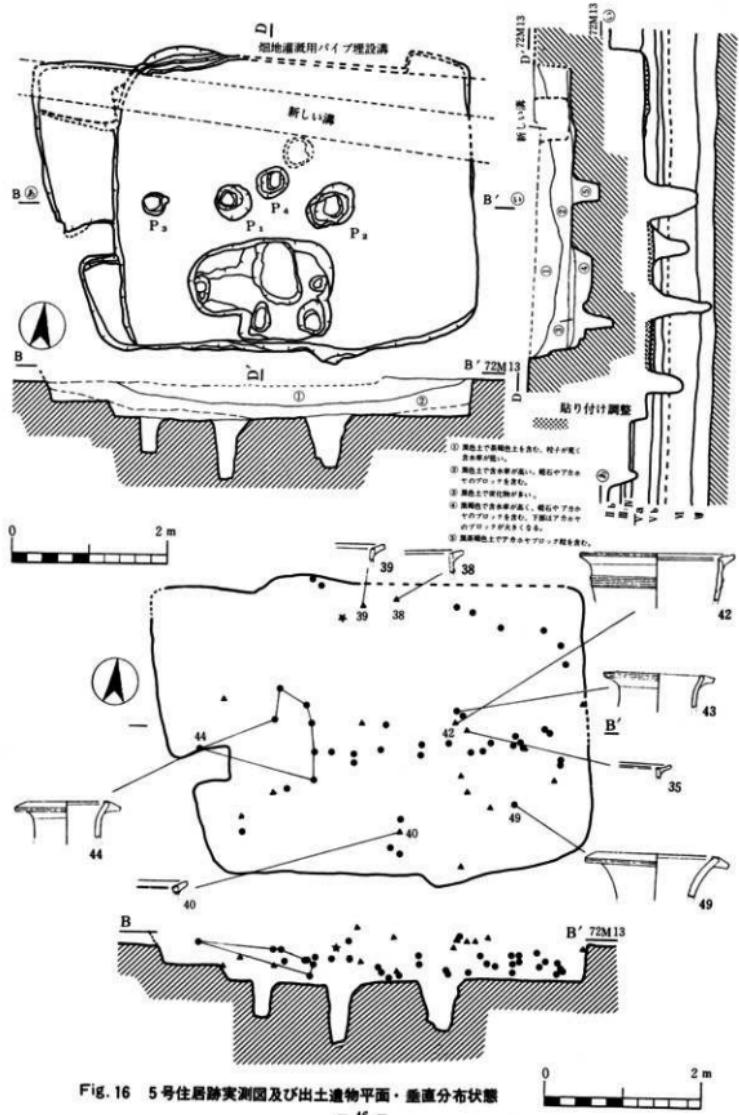


Fig. 16 5号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

⑥ 6号住居跡 (Fig. 17, PL. 8)

5号住居跡との最短距離は4.0mで、4号住居跡まで7.8mを測り、D-8・9区Ⅱ層中の検出で、一部は確認距離調査時にⅢ層上面で検出された。

長軸290cm、短軸228cmで、柱痕跡を認める。主柱穴は2本で、西側：径23~38cm、柱痕跡は径14~15cm、東側：径30~33cm、深さ30cm、柱痕跡径17~18.5cmを測る。主軸の方位はN-79°-Eをとる。心心距離は86cmである。

住居跡の平面の形状は、隅丸長方形を呈し、西壁、南壁及び北壁の一部は確認調査時にⅢ層上面での検出のため削平を受ける。遺構検出面からの深さは35cmで、南側中央壁際には9×84cm、深さ13cmの土塙を認めた。柱穴には柱痕跡を認め、土塙を造ったあと柱穴の掘込が認められる。

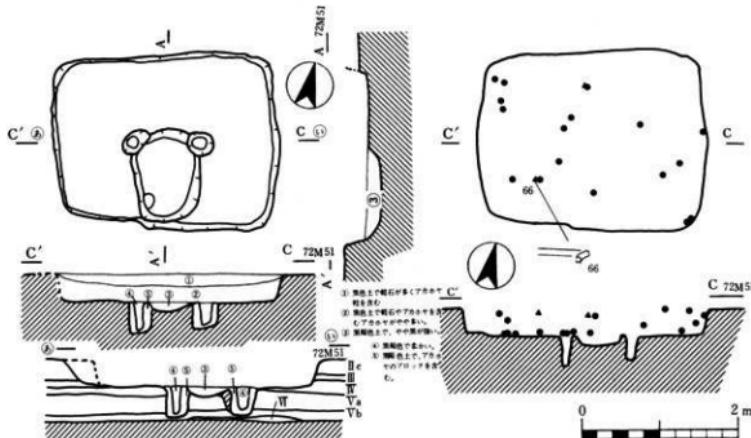


Fig. 17 6号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

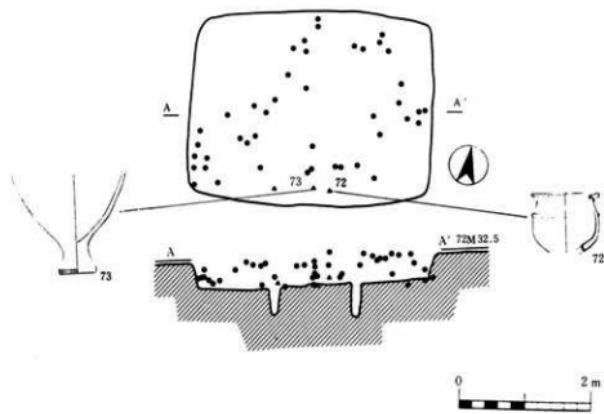
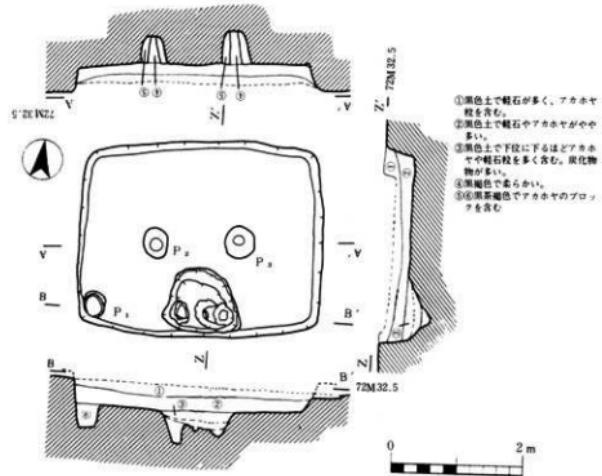


Fig. 18 7号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

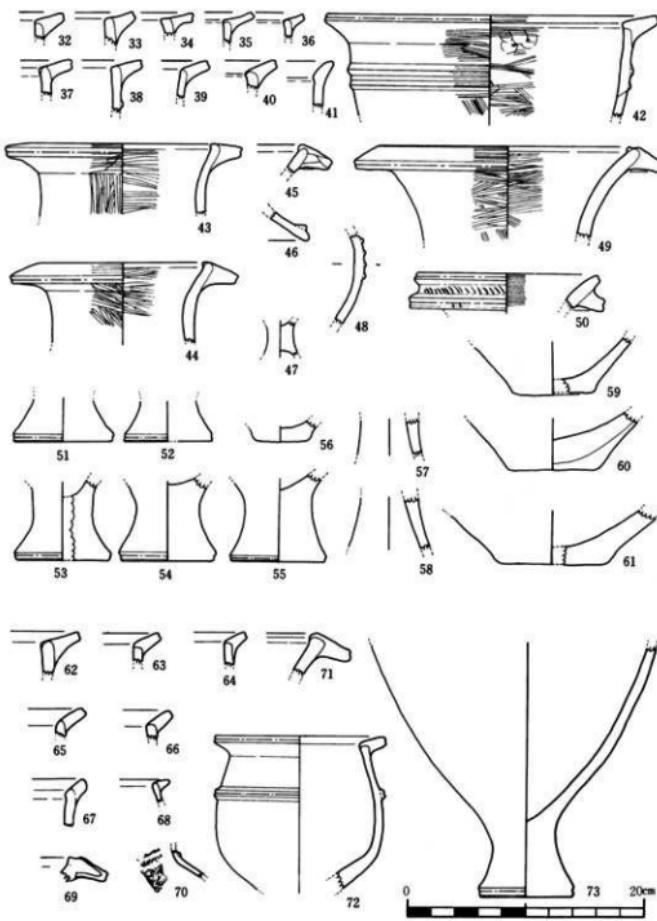


Fig. 19 5·6·7号住居跡内出土遺物実測図

⑦ 7号住居跡 (Fig. 19~20, PL. 8)

8号住居跡との最短距離は7.6mで、6号住居跡まで12mを測り、E・F-9・10区のⅡ層中の検出で、一部は確認調査時にⅢ層上面で確認された。

長軸379cm、短軸297cm、主柱穴は2本で、西側：36~48cm、深さ42cm、柱痕跡19~21cm、東側：径46~50cm、深さ53cm、柱痕跡16~17cmを測る。主軸の方針はN-84°-Eをとる。心心距離は124cmである。遺構検出面からの深さは45cmを測る。

住居跡の平面の形状は隅丸長方形でやや胴張りを呈し、西東南北の壁の一部は確認調査の時に確認された。南側西隅には、径32~41cm、深さ53cmの柱穴を検出した。南側中央壁際には、124×95cmの略円形形状の土壙を検出し、土壙内には二か所に柱穴状の掘込を認める。床面は部分的に貼り付けによる調整を認める。柱穴は柱痕跡を検出した。

なお、本住居跡の出土遺物は床面からの出土はあまりなく、変形土器・鉢型土器などの小破片が多い。73は土壙内埋土中より出土した。

土器 (Fig. 19, PL. )

Tab. 4 5・6・7号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 複原徑

番号	図版 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴 、 そ の 他	手 法 の 特 徴
32	PL 29	甌 口縁部		暗褐色	Q P L M H	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
33	*	*		明褐色	Q P L M	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。口縁部上面はわずかに凹む。	外面は横位及び斜位、内面は指圧調節後横位の刷毛などで調整である。
34	*	*		紅褐色	Q P L H	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。口縁部上面はわずかに凹む。	外面は横位、内面は指圧調節後横位の刷毛などで調整である。口縁部上面は裏巻きを認める。
35	*	*		淡赤褐色	Q P L H	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。口縁部上面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
36	*	*		暗灰色	Q P L	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。端面の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
37	*	*		暗褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。端面の付着を認める。	外面は横位に及ぶ斜位、内面は横位の刷毛などで調整である。
38	*	*		暗褐色	Q P L H	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には棱を作り出す。現在で、一条の筋面三角形筋付突帯を残す。端面の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

番号	試験番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
39	PL 29	甕 口縁部		暗褐色	Q P L M	く字状に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。	内・外表面ともに横位の刷毛などで調整である。
40	*	*		暗茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しがある。基の付着を認める。	内・外表面ともに横位の刷毛などで調整である。
41	*	*		明褐色	Q P L H	屈せずに大きく外反する口縁部で、口縁部裏面は丸味を帯び、口縁部内側にはわずかに張り出しがある。	内・外表面ともに輪廻が施し、調整痕は不明である。
42	*	甕 口縁部 胸部	①(28.0) ③(23.6)	明茶褐色	Q P L	外方へ立ち上がりながら内湾する口縁部で、進し字状に近く外反し、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しがあり出す。二条の断面三角形貼付突帯を認める。	外面は横位及び斜位。内面は指圧圧痕後横位及び斜位の刷毛などで調整で、輪積みの手法を残す。
43	*	甕 口縁部	①(20.0)	暗茶褐色	Q P L H	肩部より立ち上がりながら内湾する口縁部で、進し字状に近く外反し、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しがあり出す。	内・外表面ともに輪廻を認める。
44	*	*	①(19.2)	暗茶褐色	Q P L H	肩部より立ち上がりながら内湾する口縁部で、垂れ下り気味に外反し、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しがあり出す。	内・外表面ともに輪廻を認める。
45	*	*		黒褐色	Q P L	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しがあり出す。	外面は横位の刷毛などで調整で、口縁部上面には輪廻を認める。
46	*	蓋 裾		明黄褐色	Q P L M H	腹部裏面は丸味を帯び、外側裏面上位には略三角形貼付突帯を認める。	内・外表面ともに刷毛などで調整である。
47	*	手捏ね 土器 底部		明褐色	Q P L	手捏ね土器の底部付近と考える。	磨滅しているため調整痕は不明である。
48	*	甕 腹部		暗茶褐色	Q R M	甕の腹部付近で、現在で、四条の断面三角形貼付突帯を認める。	外面は横位の刷毛などで、輪廻を認める。内面は斜位の刷毛などで調整する。
49	*	甕 口縁部	①(26.2)	暗茶褐色	Q P L M	大きく外湾する口縁部で、垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には断面三角形の削り出しが突帯を認める。	外側の口縁部付近は指圧圧痕後横位。それ以下は斜位の刷毛などで調整で、内面は横位の刷毛などで調整を認める。内・外表面とも刷毛などで調整後輪廻を認める。
50	*	*	①(15.8)	赤茶褐色	Q P L M	大きく外湾する口縁部と思われる。口縁部の外側直下に突帯を認らし、口縁部裏面と突帯間に2~6mm程度の間隔に直状の施文具により短かい沈線が施されている。両端面ともに凹む。二叉状を呈する。	内・外表面ともに横位の刷毛などで調整である。

番号	因版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
51	PL 29	甕 底部	④ 8.2	褐色	Q P L M	光実した舞台である。瓶は鋭角的に広がり瓶の端面は凹んで、凹錐状を呈する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
52	*	*		褐色	Q P L M H	光実した舞台である。瓶はあまり広がりはなく、瓶の端面は凹んで、凹錐状を呈し、一部欠損する	薄い横位及び瓶の刷毛などで調整である。
53	*	*		明褐色	Q P L M	光実した舞台である。瓶は長く、鋭角的に広がり、瓶の端面は凹んで、凹錐状を呈する。	斜位及び斜位の刷毛などで調整である。
54	*		④ 7.8	褐色	Q P L M H	光実した舞台である。瓶は長く、あまり広がりではなく、瓶の端面は凹んで、凹錐状を呈する。	削落しており調整痕は不明である。
55	*		④ 8.0	褐色	Q P L M	光実した舞台である。瓶は長く、あまり広がりではなく、瓶の端面は凹んで、凹錐状を呈する。	薄い横位及び斜位の刷毛などで調整である。
56	PL 29	壺 底部	④(4.8)	淡褐色	Q P L	平底の底部で、外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形である。	指添圧による調整を認める。
57 · 58	*	高杯 脚部		57 暗茶褐色 58 黒褐色	Q P L M	高杯形土器の脚部付近と思われる器形である。	裏書きによる調整を認める。
59	*	甕 底部		明茶褐色	Q P L H M	平底の底部で、外方へ立ち上がりながら立ち上がると思われる器形で、わりと厚手である。一部欠損する。	内・外側ともに削落や削落を認め、調整痕は不明である。
60	*		④(7.2)	暗茶褐色	Q P L M	平底の底部で、外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形で、厚手である。	外面は粗粒の施釉で、内面刷毛などで調整を認める。
61	*			明茶褐色	Q P L	平底の底部で、外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形である。	内・外側は大部分が削減し、裏書きを認める。
62	PL 29	甕 口縁部		褐色	Q P L M H	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内面には棱を作り出す。	外面は横位。内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
63	*	*		明褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部端面はわずかに凹む。	内・外側とともに微位の刷毛などで調整である。

番号	回収 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴 、 そ の 他	手 法 の 特 徴
64	PL 30	要 口縁部		黒褐色	Q P <sub>L</sub>	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。底の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛にて調整である。
65	*	*		灰褐色	Q P <sub>L</sub> M H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛にて調整である。
66	PL 30	*		暗褐色	Q P <sub>L</sub> M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。底の付着を認める。	磨滅しているが内・外面ともに横位の刷毛にて調整である。
67	*	*		明褐色	Q P <sub>L</sub> M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は丸くなり、口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛にて調整である。
68	*	鉢 口縁部		明褐色	Q P <sub>L</sub> H	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は丸味を帯びる。	磨滅している。外表面はわずかに横位の刷毛にて調整である。
69	*	壺 口縁部		黒褐色	Q P <sub>L</sub> H	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側に断面三角形の削り出し突起を有する。	内・外面ともに横位の刷毛にて調整である。
70	*	壺 頸部		褐色	Q P <sub>L</sub> M	壺の頸部付近で薄手の器形である。剥目突起を認める。	外表面は斜位及び縱位のうすい刷毛にて調整で、内表面は斜基して不明である。
71	*	壺 口縁部		茶褐色	Q P <sub>L</sub> M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。	内・外面ともに横位の刷毛にて調整である。
72	*	鉢 口縁部 胴部	①(14.4) ③(14.2)	褐色	Q P <sub>L</sub> H	底部より外方へ大きく開きながら立ち上がり内側する口縁部で、口縁部は逆L字状に逆外反し、口縁部端面は凹む。胴部上部には断面V形突起を認らし、端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛にて調整である。
73	*	要 底部	④ 8.0	暗褐色	Q P <sub>L</sub> M	光沢した両台付の要で、胴部より上位は欠損する。底部の幅は細くあり開口が狭く、内側の底面は凹み、凹縫合を呈する。底面より外方へ開きながら立ち上がる器形である。	外表面は斜位及び縱位のうすい刷毛にて調整で、内表面は著減しているため調査は不明である。

### 石器 (Fig. 20, PL. 35)

5号・7号住居跡からは出土ではなく、74・75は、5号住居跡内の埋土中からの出土である。

74は頁岩を石器の素材として用いた磨製石錐。

扁平無茎であり先端部は欠損する。最大長2.7cm,

最大幅1.6cm, 最大幅0.15cm, 重さ1.6gを測り,

研磨痕を認める。75も74も同様の石材を用い、扁

平無茎で先端及び基部両端を欠損する。最大長

2.6cm, 最大幅1.4cm, 最大幅0.3cm, 重さ1.6gを

測り、一部に研磨痕を認める。



Fig. 20 5号住居跡内出土石器実測図

⑧ 8号住居跡 (Fig. 21, PL. 8, 9)

9号住居跡との最短距離は4.0mで、7号住居跡まで7.6mを測り、E-10・11区のⅡ層中で検出された。

長軸313cm、短軸310cmを測り、主柱穴は2本で柱痕跡を認め、西側：径32~35cm、深さ47cm、柱痕跡径：19~19cm、東側：径42~46cm、深さ49cm、柱痕跡径：16~16cmを測る。主軸の方位はN-90°~Eをとる。心心距離80cmである。遺構検出面からの深さは55cmを測る。

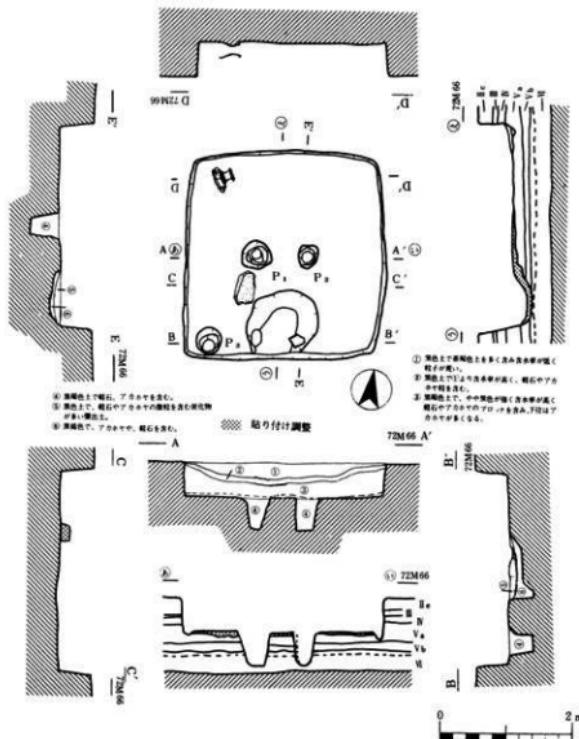


Fig. 21 8号住居跡実測図

住居跡の平面の形状は、隅丸方形で、東壁中央付近が若干突出している小型の住居跡である。南西隅には径38~39cm、深さ39cmの柱穴を認め、南側中央壁際には120×95cm、深さ20cmの略円形の土塹を検出した。土塹付近には51×32×13cm規模の石が床面で検出され、台石の可能性が考えられる。床面には貼り付けによる調整を認めた。

なお、本住居跡の出土遺物は、床面より胴部から口縁部にかけての壺形土器、土塹内の埋土上位より壺形土器で、煤の付着を顕著に認める破片が出土した。埋土中より壺形土器・壺形土器・鉢形土器・石器などが出土した。

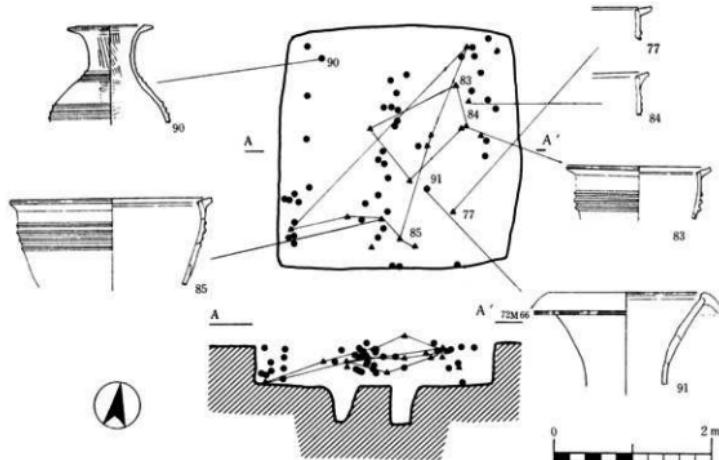


Fig. 22 8号住居跡出土遺物平面・垂直分布状態

#### 土器 (Fig. 23~25, PL.30)

Tab. 5 8号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴 、 そ の 他	手 法 の 特 徴
76		壺 口縁部		赤褐色	Q P.L.	内凸気味の口縁部で、逆し字状に外反し、口縁端部わずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。現在で二条の断面三角形貼付突帯を残らす。煤の付着を認める。	内・外縁ともに横位の刷毛なで調製である。

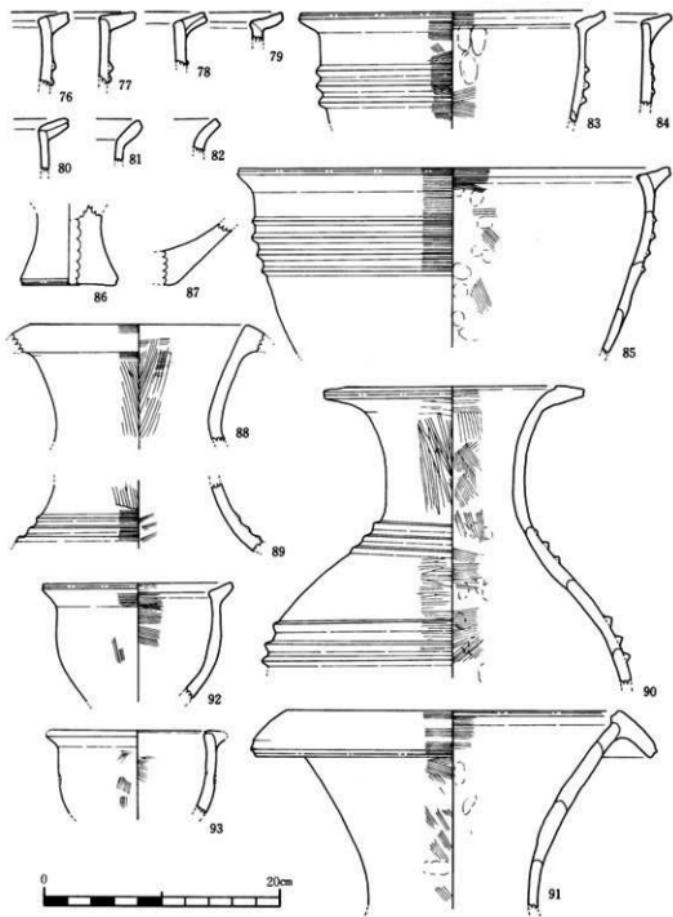


Fig. 23 8号住居跡内出土物実測図

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
77	PL 30	甕 口縁部		明褐色	Q P L	直口気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には棱を作り出す。現存で、二条の断面三角形貼付突帯を残す。器の付着を認める。	外面は横棱。内面は指屈圧調査後機位の刷毛などで調整を認める。
78	*	*		暗赤褐色	Q P L M	内傾気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には棱を作り出す。現存で、一条の断面三角形貼付突帯を残す。	内・外両とも機位の刷毛などで調整で、解明である。
79	*	*		褐色	Q P L	通字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には棱を作り出す。現存で、一条の断面三角形貼付突帯を残す。	内・外両ともに機位の刷毛などで調整を認める。
80	*			明褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。器の付着を認め。	外面は機位の刷毛などで調整で、内面は剥落している。
81	PL 30	*		明赤褐色	Q P L H	くの字状に強く外反する口縁部で、口縁部端面は丸味を帯びる。	内・外両ともに剥落して不明である。
82	*	*		明灰褐色	Q P L H	屈折せず大きく外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。	内・外両ともに機位の刷毛などで調整がある。
83	*	甕 口縁部 胴部	①(25.5) ③(22.4)	明褐色	Q P L M	内傾気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しが作り出す。三条の断面三角形貼付突帯を残す。	外面は斜位及び機位。内面は指屈圧調査後機位の刷毛などで調整である。
84		*		暗茶褐色	Q P L M	直口気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部端面は丸味を帯びる。口縁部内側には棱を作り出す。現存で、三条の断面三角形貼付突帯を残す。	内・外両ともも唐差をうけているが、うすい機位の刷毛などで調整である。
85		*	①(36.2) ③(32.8)	暗褐色	Q P L	外方へとらきながら立ち上がり口縁部は大きく内済する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しが作り出す。四条の断面三角形貼付突帯を残す。器表面にはI~2mm前後の器の付着を全形に認める。	外側はほとんど器の付着のためはっきりしないが機位。内面は指屈圧調査後機位及び斜位の刷毛などで調整で輪積みの手法も残す。
86	PL 30	甕 底部		褐色	Q P L	ひらがり、瓶の底面は凹んで、凹縮底を呈する。	機位及び斜位の刷毛などで調整である。
87	*	壺 底部		茶褐色	Q P L H	平底の底部で大きく開きながら立ち上がる器形と思われる。厚手の底部で、大半が欠損する。	外側は壺なので、内面は機位の刷毛などで調整である。
88	*	壺 口縁部		茶褐色	Q P L	大きく外反する口縁部で、口縁部端面は欠損するが垂れ下り気味に外反する。	内・外両ともに垂れを認める。
89	*	壺 房部		暗茶褐色	Q P L H	肩部に現存で、三条の断面三角形貼付突帯を残す。	外側は垂れを認め、突帯付近は機位の刷毛などで調整で、内面は大半が剥落し不明である。

番号	図版 番号	器種・部位	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
90		壺 口縁部 腹部	①21.9 ③30.8	暗褐色	Q P.L	腹部は球形を呈すると思われ、肩部より立ち上がりながら外方へ大きく外溝する口縁部で、若千垂れ下り気味に外反する。口縁部内面は凹む。口縁部内側にはわざかな張り出しがある。腹部及び肩部にはそれぞれ三条の断面三角形貼付突起を施します。	外面は口縁部付近から肩部までは横位の施書きを認める。肩部以下は横位及び斜位に施書きで、内面は筋毛などで調整を認める。
91	PL 30	壺 口縁部	①(34.4)	褐色	Q P.L M	肩部より大きく外方へ大きく外溝する口縁部で、口縁部は垂れ下り気味に外反し、口縁部内側は凸む。口縁部内側には張り出しがある。	外面は横位及び縦位の施書きで、内面は筋毛などで後推動を認める。
92	*	鉢 口縁部 胴部	①(16.1) ③(14.0)	茶褐色	Q P.L H	肩部より立ち上がりながら内側に気味の口縁部である。口縁部はくの字状に外反する。口縁部内側には張り出しがある。	内・外ともに剥落しているが、横位の筋毛などで調整で内面は指圧圧溝を施すので調整である。
93	*	*	③12.9	暗茶褐色	Q P.L H	内溝する口縁部で、口縁部は逆さに外反し、口縁部内側には欠損する。口縁部内側にはわざかな張り出しがある。	外面は横位及び斜位、内面は剥落を認めるが横位の筋毛などで調整である。

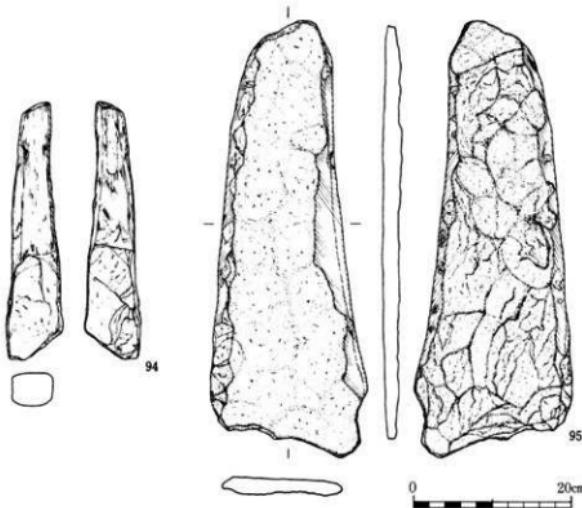


Fig. 24 8号住居跡内出土石器実測図 (1)

### 石器 (Fig. 24, 25, PL. 35, 36)

本住居跡出土の石器は94と95が砂岩、96はフォンフェルスを石器の素材としている。94は棒状の叩き石で、最大長16.2cm、最大幅3.6cm、最大厚2.1cm、重さ148cmを測る。先端部は敲打によるためか剥離されているため不明である。基部付近は四面ともに研磨を認めるが、素材のためか研磨痕は不明である。95は土掘り具の用途が考えられる石器で、最大長27.6cm、最大幅10.0cm、最大厚1.1cm、重さ430gを測る。扁平な素材を用い両面ともに周縁部には研磨を認め、素材のためか研磨痕は不明である。両面ともに中央部に自然面及び一部剥離痕を残す。先端部は欠損し不明である。96は磨製石鎌で先端部及び片側の一部を欠き、扁平無茎の凹型式で二等辺三角形状を呈する。両面ともに器面全体に研磨痕を観察し、製作時のものと思われる。両面ともに鶴がはっきりし先端部付近で両方にわかれて基部までつづく。

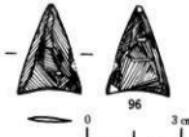


Fig. 25 8号住居跡内出土石器  
実測図(2)

### ⑨ 9号住居跡 (Fig. 26~28, PL. 9, 10)

8号住居跡との最短距離は4.0mで、2号住居跡まで4.0m、10号住居跡まで6.8m、中央溝状遺構まで2.4mを測り、E・F-11区のII層中で検出された。

長軸7.48m、短軸69.4mを測る。主柱穴は6本で、P<sub>1</sub>:径40~48cm、深さ36cm、P<sub>2</sub>:径58~75cm、深さ82cm、P<sub>3</sub>:径56~58cm、深さ86cm、P<sub>4</sub>:径44~46cm、深さ74cm、P<sub>5</sub>:径60~68cm、深さ78cm、P<sub>6</sub>:径47~100cm、深さ80cmを測り、P<sub>6</sub>は掘方を二か所に認め立替えの可能性が考えられる。それぞれの心心距離は、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>:198cm、P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>:193cm、P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>:162cm、P<sub>4</sub>-P<sub>5</sub>:130cm、P<sub>5</sub>-P<sub>6.1</sub>:140cm、P<sub>6.1</sub>-P<sub>6.2</sub>:46cm、P<sub>6.2</sub>-P<sub>1</sub>:166cmを測る。遺構検出面からの深さは73cmで、ベッド状遺構までは47cmである。

住居跡の平面の形状は、ほぼ円形を呈し、住居周縁部には幅150~190cmのベッド状遺構が主柱穴をとり開むように廻っていた。ベッド状遺構は貼り付けによる調整で、貼り付けの痕跡が東壁側の一部を除き認められ遺存状態は良好でない。住居跡のほぼ中央部には118×102cm、深さ25cmの土壙を認め、土壙内には深さ32cmと27cmの柱穴状の掘込を検出した。北側周縁寄りのベッド状遺構上には42~55cm、深さ32cmの柱穴を検出した。

なお、本住居跡の出土遺物は、床面より大型壺形土器、壺形土器、壺形土器などの破片が出土し、埋土中より土器破片のはか磨製石鎌13（うち未製品4）などが出土した。

### 土器 (Fig. 28, PL. 30)

Tab. 6 9号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位 1cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	器種 器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
97	壺 口縁部		明茶褐色	Q P.L.	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む、口縁部内側には縦を作り出す。	内・外側とともに横窓の刷毛で調整を認める。

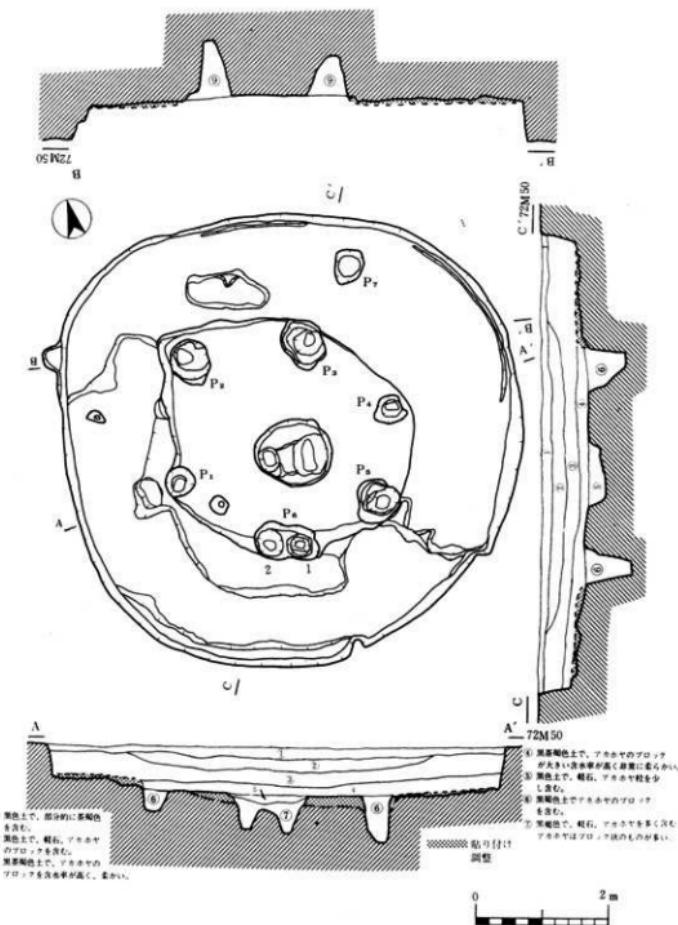


Fig. 26 9号住居跡実測図

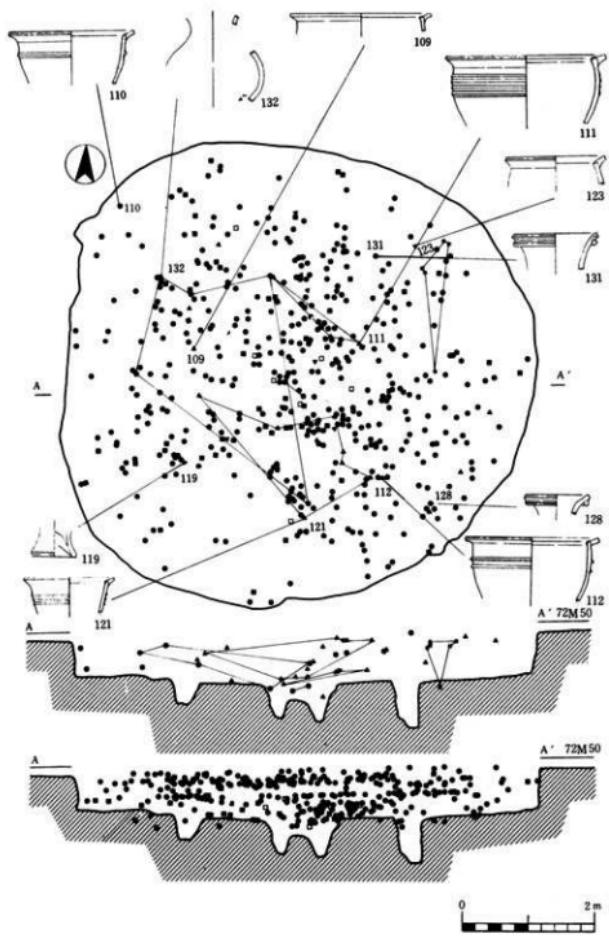


Fig. 27 9号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

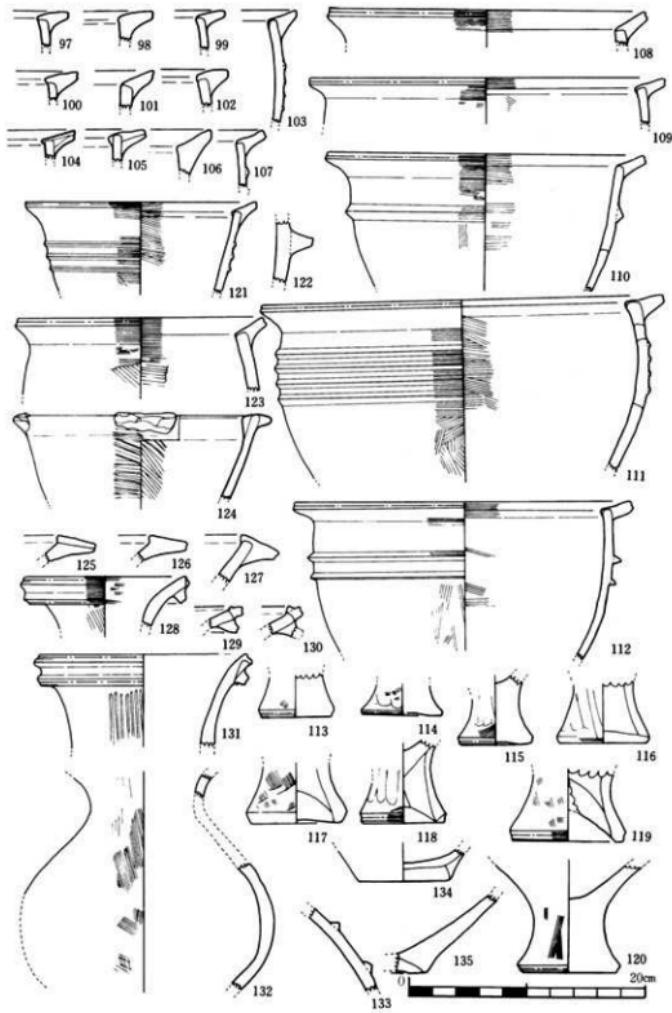


Fig. 28 9号住居跡内出土土器実測図

番号	固形 番号	器種・器部	法 量	色 調	粘 土	形 態 の 特 徴 、 そ の 他	手 法 の 特 徴
98		甌 口縁部		褐色	Q P L	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には棱を作り出す。僅の付着を認める。	外側は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
99	*			明茶褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部で、逆L字状に外反する。口縁部端面は丸味を帯びる。口縁部内側には棱を作り出す。	内・外ともに横位の刷毛などで調整である。
100	*			明茶褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。僅の付着を認める。	内・外ともに横位の刷毛などで調整である。
101	*			黒褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。僅の付着を認める。	内・外ともに横位の刷毛などで調整である。
102	*			茶褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しが作り出す。僅の付着を認める。	内・外ともに薄い刷毛などで調整である。
103	甌 口縁部 胴部			赤褐色	Q P L M H	内凹する口縁部である。くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹み。口縁部内側には棱を作り出す。現在で四条の断面略で角形状の貼付突帯を巡らす。僅の付着を認める。	外側は横位、内面指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
104	甌 口縁部			暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。僅の付着を認める。	内・外ともに横位の刷毛などで調整である。
105	*			明褐色	Q P L M	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。僅の付着を認める。	内・外ともに横位の刷毛などで調整である。
106	*			暗褐色	Q P L M	大きいくの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。僅の付着を認める。	外側は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
107	*			明灰褐色	Q P L H	内湾する口縁部である。くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹み、口縁部上面も凹む。現在で二条の断面三三角形貼付突帯を巡らす(東洋図では一筋)。僅の付着を認める。	外側は横位、内面は指頭圧調整後、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
108	*	①(26.3)		暗褐色	Q P L M	くの字に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。僅の付着を認める。	内・外ともに横位の刷毛などで調整である。

番号	固版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
109		甕 口縁部	①(30.0)	明褐色	Q P L M	内消する口縁部でくの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には縦をつくる。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整を認める。
110	PL 30	甕 口縁部 胴部	①(26.5) ③(22.4)	暗褐色	Q P L M	外方へ直線的に立ち上がりながら外傾する口縁部で、逆く字状に近く外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しそを作り出す。四条の断面三角形貼付突起を握らす。底の付着を認める。	外面は横位及び斜位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整を認める。
111	*		①(34.2) ③(31.4)	明茶褐色	Q P L M H	外方へ開きながら立ち上がり、腹は張り内消する口縁部で、くの字状に外反し口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しそを作り出す。四条の断面三角形貼付突起を握らす。底の付着を認める。	外面は横位、斜位及び縦位、内面は指調査調整後横位及び斜位の刷毛などで調整を認める。輪様の痕を残す。
112	PL 30	*	①(28.7) ③(25.4)	茶褐色	Q P L	外方へ開きながら立ち上がり内側気泡の口縁部でく字状に近く外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しそを作り出す。二条の断面三角形貼付突起を握らす。	外面は横位及び縦位、内面は指調査調整後横位及び斜位の刷毛などで調整を部分的に認める。
113	甕	底部	④(6.4)	赤褐色	Q P L	光実した脚台である。腹は短かく、あまり開かず、腹の端面は凹み、凹縫状を呈し、一部欠損する。	斜位の刷毛などで調整を部分的に認める。
114	*		④(7.0)	褐色	Q P L	光実した脚台である。腹は短かく、鋸角的に広がり、腹の端面はわずかに凹み、凹縫状をする。裏面中央部はわずかに凹み、一部欠損する。	横位及び縦位の刷毛などで調整を認める。
115	*		④(6.4)	褐色	Q P L M	光実した脚台である。腹は長く、鋸角的に広がり、腹の端面は凹んで、凹縫状を呈する。裏面中央部は少々凹み、一部欠損する。	斜位の刷毛などで調整を認め。
116	*		④(7.8)	褐色	Q P L M	光実した脚台である。腹は短かくあまり開かず、腹の端面は丸味を帯びる。裏面中央部は少々凹む。一部欠損する。	横位及び縦位の刷毛などで調整を認める。
117	*		④(7.4)	明茶褐色	Q P L M	光実した脚台である。腹は短かく、あまり開かず、腹の端面は丸味を帯びる。裏面中央部は少々凹む。一部欠損する。	斜位の刷毛などで調整を認め。
118	*		④(8.6)	暗褐色	Q P L	光実した脚台である。腹は長く、鋸角的に広がり、腹の端面は凹んで、凹縫状を呈し、一部欠損する。	横位、斜位の刷毛などで調整を認める。
119	*		④(9.8)	褐色	Q P L H	あげ底の脚台である。腹は長く、鋸角的に広がり、腹の端面は凹んで、凹縫状を呈し、一部欠損する。	横位及び斜位の刷毛などで調整を認める。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
120		甕 底部	④8.6	暗褐色	Q P L M	光亮した舞台である。幅は長く、観内に広がり、底の端面は凹んで、凹縦状を呈する。	剥落しており不明である。
121		甕 口縁部 肩部	①(19.6) ③(15.9)	黒褐色	Q P L H	直立的に立ち上がりながら外傾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹み、口縁部内側には張り出しを作り、三条の新面三角形貼付突帯を握らす。底の付着を認める。	外面は横位、斜位及び縦位、内面は縦位及び斜位の刷毛などで調整である。
122		大甕		黒褐色	Q P L M	大型變形土器の口縁部外側直下の階台形状の貼付突帯握らす。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は不明である。
123		甕 口縁部	①(21.4)	暗茶褐色	Q P L M	大きく内凸する口縁部である。くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。	外面は横位の刷毛などで後退書きで、内面は指頭圧調整後斜位の刷毛などで後退書きを施した所もある。
124	PL 30	鉢	①(20.0) ③(18.0)	暗褐色	Q P L M	直立的に立ち上がり、若干内傾する口縁部で速し字状に外反する。口唇部から口縁部外側にかけては二か所に耳状突起を張り付ける。底の付着を認める。	外は斜位、内面は指頭圧調整後斜位の刷毛などで調整を認める。
125		壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位の刷毛などで後退書き、内面は縦位の刷毛などで調整である。
126	*			黒褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外ともに横位の刷毛で調整である。
127	*			明褐色	Q P L H M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位の刷毛などが見られ、突帯より下位は裏書きで、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
128	*		①(14.3)	明茶褐色	Q P L M	大きく外方へ開く口縁部で、口縁部外側直下に突帯を握らし、口縁部が二叉状を呈する。口縁部端面及び突帯端面は凹む。口縁部内側には新面三角形貼付突帯を握らす。底の付着を認める。	内・外ともに横位の刷毛などで調整である。
129	*			茶褐色	Q P L M	口縁部外側直下に突帯を握らし、口縁部が二叉状を呈する。口縁部端面及び突帯端面は凹む。口縁部内側には新面三角形貼付突帯を握らす。	内・外ともに横位の刷毛などで調整である。
130	*			黒褐色	Q P L M H	口縁部外側直下に突帯を握らし、口縁部が二叉状を呈する。口唇部端面は凹む。突帯端部は欠損する。口縁部内側には新面三角形貼付突帯を握らす。	内・外ともに批書きを認める。

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
131		壺 口縁部	①(18.6)	暗茶褐色	Q P.L. H	大きく外方へ開く口縁部で、口縁部外表面下に突唇を有し、口縁部が二叉状を呈する。 口縁部裏面及び突唇裏面は凹んでいる。	外側は口縁部付近は削落して不明で、突唇より下位は堅位の施磨きがなされている。 内面は削落しているものの施磨きが認められる。
132	PL 30	壺 肩部 腹部		赤茶褐色	Q P.L. M	腹部が環形状を呈し、頭部でしめる。腹部の最大径より少し上位に現存で二個の円形浮文が施されている。	外側は堅位及び斜位の刷毛なで施磨後直轍なれが認められ、内面は削落して不明である。
133		壺 肩部		黒色	Q P.L. M	者の肩部付近と思われる。二条の突唇を有している。上位は前面三角形筋付突唇を下位には、裏面台形状突唇を有し、裏面は凹んでいる。	外側は横位の施磨、内面は横位の刷毛なで調査が認められる。
134		壺 底部	④8.0	明褐色	Q P.L. M	外方へ開きながら立ち上がると思われる器形で、若干厚めの底盤である。	内・外面ともに施磨が著しく調査痕は不明である。
135	*			暗茶褐色	Q P.L.	外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる若干厚め底盤の底部である。	外側は施磨が認められ、内面は削落しており不明である。

#### 石器 (Fig. 29, PL. 36)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鎌（未製品を含む）等である。137・138は紫頁岩、139～142・144～148はフォンフェルス、143・149は頁岩、136は砂岩を素材に用いている。136は最大長11.0cm、最大幅4.4cm、最大厚3.1cm、重さ192gを測る。先端部及び基部は欠損のため不明であるが、棒状の敲打具が想定される石器である。137～145は磨製石鎌で、146～148は研磨が認められず製作途中のものと思われる。これらの磨製石鎌は扁平無茎で145を除いて基部にえぐりを認める。145は基部中央部が若干はらみをみる。138を除き二等辺三角形状を呈し、鎌がはっきりし先端部付近で両方にわかれ基部までづく。また使用により欠損していると思われる石鎌も認められる。137～145までの磨製石鎌は、両面ともに斜位、横位及び堅位に研磨痕を顕著に認める。

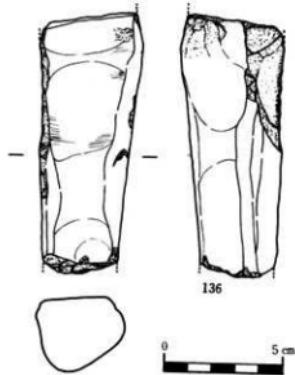


Fig. 29 9号住居跡内出土石器実測図 (1)

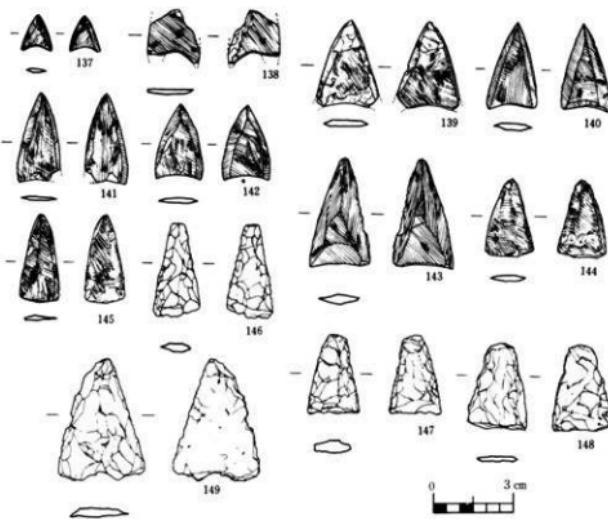


Fig. 30 第9号住居跡内出土器実測図(2)

Tab. 7 9号住居跡内出土石鎌一覧表

(注) 法量の単位cm及びg

番号	現存最大長	現存最大幅	現存最大厚	現存重量	石 材	完 欠	備 考
137	1.4	1.2	0.15	0.3	紫頁岩	○	磨製石鎌
138	(2.0)	(2.0)	(2.0)	1.0	紫頁岩	○ *	
139	3.2	(2.35)	0.25	2.2	フォルンフェルス	○ *	
140	3.3	1.9	0.25	1.7	タ	○	タ
141	3.2	(2.35)	0.25	2.2	タ	○	タ
142	2.8	1.9	0.2	1.2	タ	○	タ
143	4.1	(2.3)	0.35	3.1	頁岩	○	*
144	(2.9)	1.8	0.25	1.9	フォルンフェルス	○	タ
145	(3.3)	1.55	0.20	1.5	タ	○	タ
146	3.5	1.8	0.35	3.0	タ	○	製作途中
147	3.0	2.0	0.5	3.0	タ	○	タ
148	3.25	2.2	0.25	2.8	タ	○	*
149	4.55	3.3	0.35	6.1	頁岩	○	*

⑩10号住居跡 (Fig. 31, 32, PL. 10)

11号住居跡との最短距離は3.3mで、8号住居跡まで9.1m、9号住居跡まで、4.3m、12号住居跡まで7.3m、中央区溝状遺構まで5.3mを測り、D-11・12区のⅡ層中で検出された。

長軸476cm、短軸529cm（ともにベッド状張り出し部を含む）を測る。主軸の方位はN-89°-Eをとる。主柱穴は2本で、西側：径44-64cm、深さ60cm、東側：径37-62cm、深さ51cm、心心距離は177cmを測る。遺構検出面からの深さは63cmで、ベッド状遺構までは約40である。

本住居跡の平面の形状は、基本的にほぼ長方形を呈するが、北壁、西壁及び南西隅にはベッド状張り出しを検出し、北壁側は、206×116cm、西側は211×81cm、南西隅は180×155cmを測る。また、住居跡内の東壁寄りには、118×214cmのベッド状遺構を検出し、床面との比高差は約20を測る。西側及び南西隅のベッド状遺構には、柱穴状の掘込を検出した。西側及び東側のベッド状遺構は切り出し調整により、北側及び南西隅のベッド状遺構は貼り付けによる調整がなされている。北側及び東側ベッド状遺構及び住居跡内床面には、壁帶溝を検出した。北側ベッド遺構の壁帶溝は、切り出しによりベッド状遺構が造られたあと、貼り付けにより調整され、その一部が辛じて遺存し、幅3-5cm、深さ約2-5cmを測る。東側ベッド状遺構の壁帶溝は北壁から東壁寄りにかけてみられ、幅8-18cm、深さ5-7cmを測る。また、住居跡の床面には、西側ベッド状遺構直下に幅8-11cm、深さ3-6cmを測る溝状遺構を認めた。住居跡の床面は貼り付けの調整を部分的に認め、南側中央壁際には、118×84cm、深さ36cmの略円形状の土塗を検出した。土塗の中には径27×35cm、深さ17cm、と径35-44cm、深さ18cmの柱穴状の掘込を検出し、その形状は略方形である。

なお、本住居跡の出土遺物は埋土中より壺形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器などの破片や鉄製の鉗が出土した。

土器 (Fig. 32, PL. 30)

Tab. 8 10号住居跡内出土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胸部最大径④底径 ( ) 復元径

番号	回数 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
150	PL 30	壺 口縁部		赤茶褐色	Q P L M H	追し字状に近く外反する口縁部で、口縁部前面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外側ともに横位の網毛なで調査である。
151	*	*		暗褐色	Q P L M	追し字状に近く外反する口縁部である。口縁部前面はわずかに凹む。口縁部内側はわずかに張り出しを作り出す。器の付着を認める。	内・外側ともに横位の網毛なで調査である。
152	*	*		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部前面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しがある。	内・外側ともに横位の網毛なで調査である。

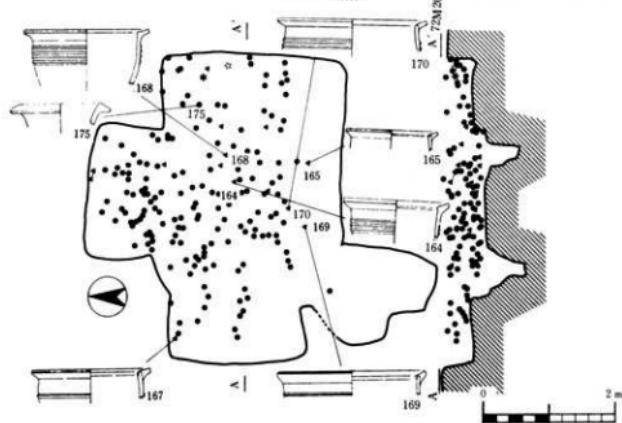
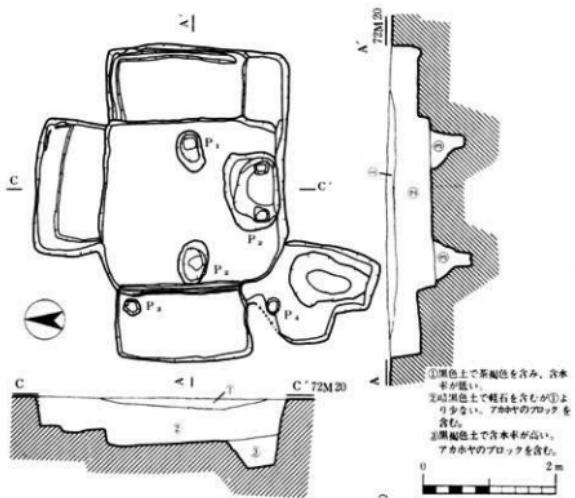


Fig.31 10号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

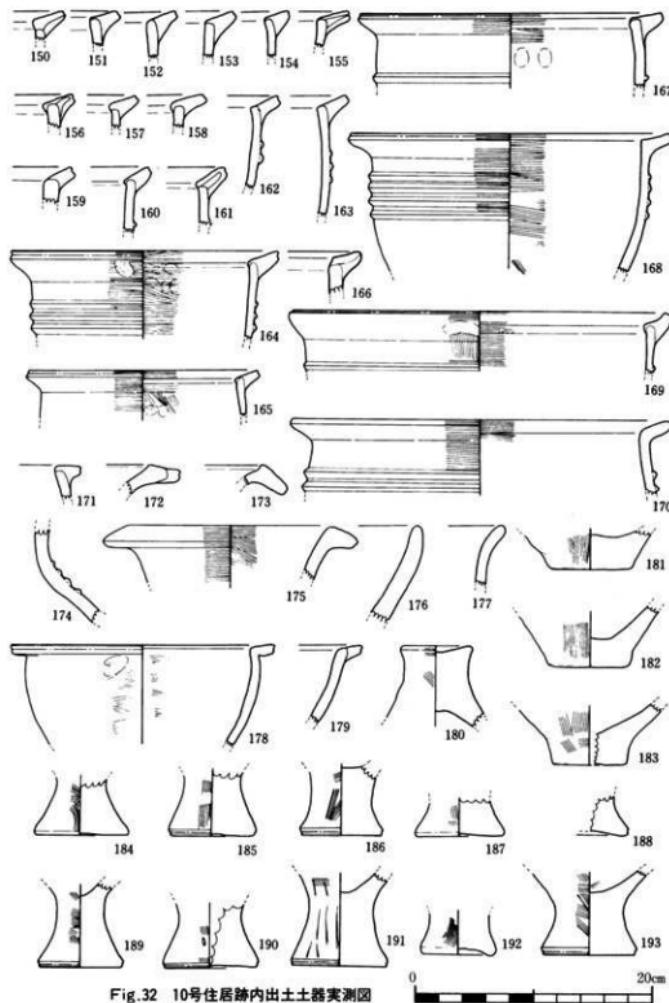


Fig.32 10号住居跡内出土土器実測図

番号	固形 番号	基種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
153	PL 30	甕 口縁部		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。	外面は横位。内面は横位及び斜位の刷毛な どで調整である。
154	*	*		暗褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部で、口縁部上面 は短く、口縁部裏面はわずかに凹む。口縁 部内側には棱を作り出す。	外面は横位及び斜位。内面 は沿頭圧調整後横位の刷毛な どで調整である。
155	*	*		茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。	内・外面とともに横位の刷毛 などで調整である。
156	*	*		暗茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面は凹む。口縁部内側には短い。僅の付 着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛 などで調整である。
157	*	*		暗茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出 す。僅の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛 などで調整である。
158		*		明褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出し を作り出す。僅の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛 などで調整である。
159	PL 30	*		暗茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面は凹む。僅の付着を認める。	外面は横位及び斜位。内面 は横位の刷毛などで調整であ る。
160	*	*		茶褐色	Q P L H	直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部裏面はわずかに凹む。口縁部内側には 張り出しを作り出す。一帯の断面三角形貼付 突帯を残す。	内・外面とともに横位の刷毛 などで調整である。
161	*	*		明褐色	Q P L H	内湾気味の口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出し を作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を残 す。僅の付着を認める。	外面は横位。内面は指頭圧 調整後横位の刷毛などで調整で ある。
162	*	甕 口縁部 胴部		暗褐色	Q P L	内湾する口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部裏面は凹む。口縁部内側には棱を作り 出す。二条の断面三角形貼付突帯を残す。 僅の付着を認める。	外面は僅のため部分的であ るが横位。内面は指頭圧調整 後横位の刷毛などで調整であ る。
163	*	*		褐色	Q P L M	内湾する口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部裏面は凹む。口縁部内側には棱を作り 出す。三条の断面三角形貼付突帯を残す。 僅の付着を認める。	内・外面とともに深い横位の 刷毛などで調整である。

番号	回数 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
164	PL 30	甕 口縁部	①(22.8) ③(18.9)	灰褐色	Q P.L	わずかな外輪気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。現在で、三条の断面三角形貼付突帯を越らす。	外面は横位。内面は指頭位調整後横位の刷毛などで調整。外面には指紋の付着を認める。
165	*	*	①(20.0)	暗茶褐色	Q P.L	内輪気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側へ張り出しが作り出す。窓の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭位調整後、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
166	*			暗茶褐色	Q P.L	口縁部は逆し字状に近く外反する。口縁部端面は丸味を帯びる。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
167	甕 口縁部 肩部	①(25.6)	黒褐色	Q P.L M	内凹する口縁部で、逆し字状に近く外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しが作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を越らす。口縁部上面まで窓の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭位調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。	
168	*	①(27.4) ③(23.6)	明褐色	Q P.L H	肩部は張らず、直口する口縁部で、逆し字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には窓を作り出す。四条の断面三角形貼付突帯を越らす。口縁下部及び窓下位には1~2mm程度の窓の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。	
169	PL 30	甕 口縁部	①(32.4)	褐色	Q P.L M	直口気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部端面は凹む。口縁部上面も大きく凹む。口縁部内側には張り出しが作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を越らす。	外面は指頭位調整後横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
170	*	*	①(32.3)	暗茶褐色	Q P.L M	内輪気味の口縁部で、逆し字状に近く外反する。口縁部端面は丸味を帯びる。二条の断面三角形貼付突帯を越らす。窓の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
171	*	鉢 口縁部		明茶褐色	Q P.L	内傾する口縁部で、逆し字状に外反し口縁部上面は窓が多く、口縁部端面は凹む。口縁部内側には窓を作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
172		壺 口縁部		暗茶褐色	Q P.L H	大きく外反するとと思われる口縁部である。口縁部は重ね下り気味に外反し、口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しが作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
173	PL 30	*		茶褐色	Q P.L M	口縁部は重ね下り気味に外反し、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しが作り出す。	内・外ともに横位の刷毛などで調整である。
174	*	壺 肩部		暗茶褐色	Q P.L M	肩部と思われるが、破片のため不詳である。四条の断面三角形貼付突帯を越らす。	外面突帯上位は横位。突帯付近は横位。突帯より下位は斜位の刷毛などで、内面指頭位調整を認める。

番号	因数 番号	基種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
175	PL 30	蓋 口縁部	①(21.6)	茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面及び口縁部内側とも丸味を帯びる。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛なで調整である。
176	*	鉢 口縁部		暗茶褐色	Q P L H	底部付近より外方へ大きくひらきながら立ち上がり、口縁部付近は直口気味の口縁部で、口唇部端は丸味を帯びる。	内・外面とともに指添圧調整後刷毛なで調整である。
177	*	*		黒褐色	Q P L M	屈折せず外反する口縁部である。口唇部は丸味を帯びる。	着底のため不明である。
178	*	鉢 口縁部 胸部	①(22.4) ③(19.6)	明茶褐色	Q P L	底部付近より外方へ開きながら立ち上がる器形とされ、口縁部近で内湾する口縁部で、道し字状に外反する。口縁部端面は円入	外面は横位及び斜位、内面は指添圧調整後横位及び斜位の刷毛なで調整である。
179		*		赤茶褐色	Q P L H	外方へ立ち上がりながら外傾気味の口縁部で、道し字状に外反する。口縁部端面は凹入	内・外面とともに指添圧調整後横位及び斜位の刷毛なで調整である。
180		蓋		赤茶褐色	Q P L H	頂部のつまみ部は凹んでいる。變形土器の蓋と思われる。	器面は全体的に削落し、部分的に刷毛目を残す。
181		蓋 底部	④6.8	暗茶褐色	Q P L M	平底の底面部である。外方へ開きながら立ち上ると思われる器形で厚い底盤である。	横位及び斜位の刷毛なで調整である。
182		*	④7.6	暗褐色	Q P L H	平底の底面部である。外方へ開きながら立ち上ると思われる器形で、ぶ厚い底盤である。	横位の刷毛なで調整である。
183		*		暗茶褐色	Q P L M	平底の底面部である。外方へ大きく開きながら立ち上ると思われる器形で、ぶ厚い底盤である。	横位及び斜位の刷毛調整である。
184	PL 30	甕 底部	④(8.0)	明褐色	Q P L	光実した舞台である。瓶は短かく、瓶角的に広がり、瓶の端面は丸味を帯びる。底面中央部に若干の凹みを認め、一部欠損する。	斜位及び斜位の薄い刷毛なで調整である。
185	*	*	④(7.5)	赤茶褐色	Q P L	光実した舞台である。瓶は短かく、あまり広がりがなく、瓶の端面は凹んで、凹錐状を呈する。底面中央部に若干の凹みを認め、一部欠損する。	横位の刷毛なで調整である。
186	*	*	④7.0	褐色	Q P L	光実した舞台である。瓶は短かく、あまり広がりがなく、瓶の端面は凹んで、凹錐状を呈する。	斜位の刷毛なで調整である。
187		*	④7.6	褐色	Q P L	光実した舞台である。一部欠損しているため不明であるが、瓶はあまり広がりがないと思われる。瓶の端面は丸味を帯びる。底面中央部は若干凹む。	横位及び斜位の刷毛なで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
188		裏 底部		褐色	Q P.L	大半が欠損し、裏の裏面は凹む。光沢した脚台である。裏面は若干凹むと思われる。	横位及び斜位の薄い刷毛などで調整である。
189	PL 30	*	④(7.2)	褐色	Q P.L	光沢した脚台である。幅は狭く、足内的に広がり裏の裏面は凹んで、凹縫状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
190		*	④(8.2)	褐色	Q P.L	光沢した脚台である。幅は狭く、足内的に広がり裏の裏面は凹んで、凹縫状を呈する。 裏面は若干凹み、一部欠損する。	横位及び斜位の刷毛などで調整で部分的に認める。
191	PL 30	*	④8.2	褐色	Q P.L	光沢した脚台である。幅は狭く、あまり広がりがなく、裏の裏面は凹んで、凹縫状を呈する。	指圧による調整であるが鮮明さに欠け、部に横位の刷毛などで調整を認める。
192		*	④6.4	褐色	Q P.L H	光沢した脚台である。欠損しているが、幅は狭く、裏の裏面は丸味を帯びる。裏面中央部は若干凹む。	斜位の刷毛などで調整である。
193	PL 30	*	④8.0	暗褐色	Q P.L	光沢した脚台である。幅は狭く、あまり広がりがなく、裏の裏面は凹んで、凹縫状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。

#### 鉄器 (Fig. 33, PL. 37)

194は鉄製の鉈で、住居跡内埋土の上部より出土した。現在最大全長108mm、最大幅20mm、最大厚2.5mm、重さ15.7gを測る。断面が三日月形を呈し、柄部に革紐巻を施した痕跡を認め、柄部末端部には刃部とは逆円反りを観察し、隨所に銹塊を残す。吉ヶ浦長峰式に分類され、柄部末端の一部のサンプリングによる分析の結果、鍛造品である。

注1. 小田氏によると、鉈を吉ヶ浦型と立岩型に分類し、

前者は幅1.2~2センチで長さ五センチ程度の短峰

式と10センチを超える長峰式に分け、後者は幅1~1.2cmと吉ヶ浦型よりせまく、長さ15センチくらいの長峰式で先端部は凸面型の中央に鏽をつけて横断面がV字形をなし、先端にむかって次第に反り上がりしていく側面型を呈するとされている。(橋口達也「ふたたび初期鉄製品をめぐる二、三の問題について」たたら研究会・1893による。)

注2. 大澤正己氏の分析による。

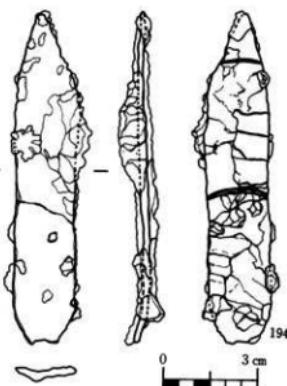


Fig. 33 10号住居跡内出土鉄器実測図

①11号住居跡 (Fig. 34~36, PL. 11)

10号住居跡までの最短距離は、3.3mで、12号住居跡まで、9.7m、8号住居跡まで8.5m、5号住居跡まで、14.4mを測り、C・D-10・11区のII層中で検出された。

長軸508cm、短軸497cmを測る。主軸の方位はN-73.5°-Eをとる。主柱穴は2本で、西側：径44~52cm、深さ48cm、東側：径45~54cm、深さ56cmで、心心距離は190cmを測る。遺構検出面からの深さは59cmで、ベッド状遺構上面までは22~34cmである。

本住居跡の平面の形状は、基本的にはほぼ隅丸方形を呈する。南西隅と南東隅寄りにはベッド状張り出しを認めた。西壁の一部から北壁の一部にかけては、約70cm幅において煙地溝底バブイ型埋設のため削平を受けている。西壁の一部から北壁の一部にかけて110~130cmの幅で、貼り付け調整によるベッド状遺構を検出した。南西隅には190×103~120cm、南東隅には115×148cm

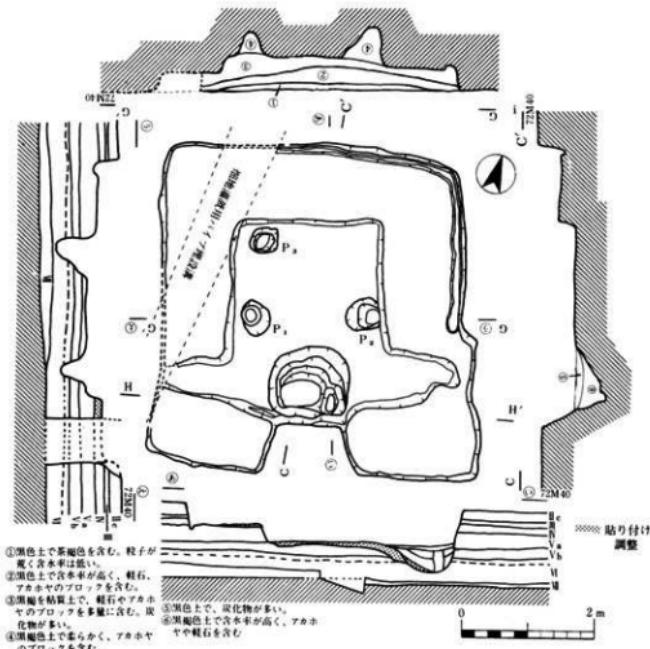


Fig. 34 11号住居跡実測図

の規模で、削り出しによるベッド状遺構を検出し。南壁中央部は、台形状の障壁を呈する格好となる。西側、北側及び東側壁寄りのベッド状遺構の北側壁際の一部から東側壁際中央付近にかけては、幅10~16cm、深さ6~8cmの壁帶溝を検出した。床面の中央付近は硬く踏み締められ、部分的に貼り付け調整を認めた。南側の台形状を呈する障壁際には、122×109cm、深さ41cmの略円形状の土括を検出し、土括中には径24~40cm、深さ10cmの柱穴状の掘込を認め、土括内埋土との色調を異にする。

なお、住居跡内の出土遺物は、床面に壺形土器破片が見られ、埋土には壺形土器、壺形土器、鉢形土器、手捏ね土器などの破片や磨製石鎌、軽石製品が出土した。軽石製品は、磨る作用のためか図化上は平坦面を呈しているが、よく観察すれば若干の凹みを認める。

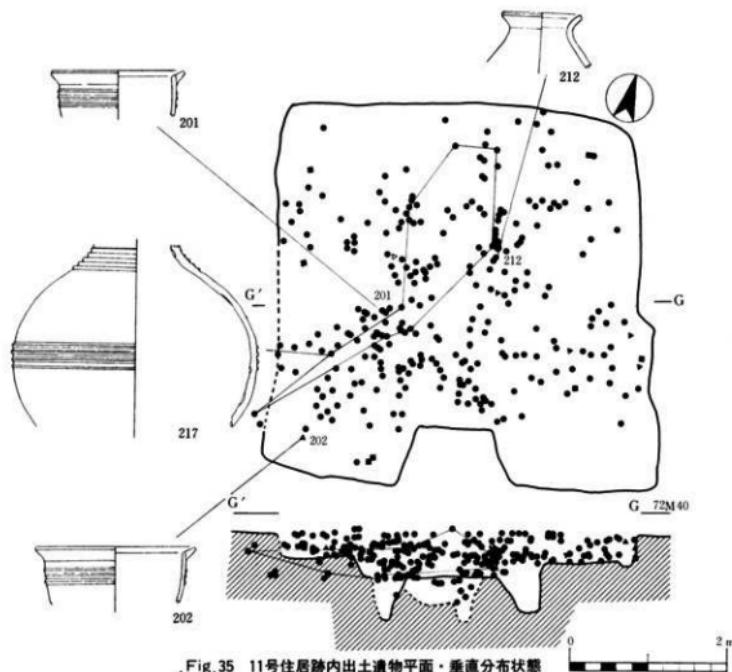


Fig. 35 11号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

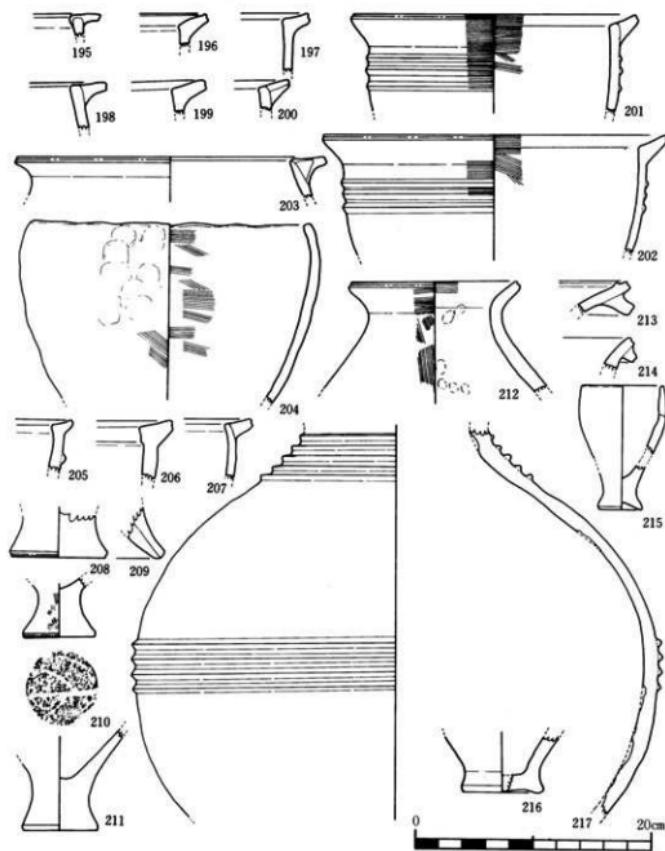


Fig. 36 11号住居跡内出土土器実測図

土器 (Fig. 36, PL. 31)

Tab. 9 11号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復元径

番号	形態 器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
195	PL 31 口縁部		褐色	Q P_L M	造し字状に外反する口縁部である。口縁部裏面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛で調整である。
196	*	*	褐色	Q P_L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側にはわずかに張り出しを作り出す。縁の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛で調整である。
197	*	*	暗茶褐色	Q P_L M	造し字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には縁を作り出す。縁の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位である。
198	*	*	暗褐色	Q P_L H	造し字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には縁を作り出す。縁の付着を認める。	外面は指頭圧調整後横位、内面は横位の刷毛などで調整である。口縁部上面は施毛書きを認める。
199	*	*	黒褐色	Q P_L M	造し字状に近く外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には縁を作り出す。縁の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛で調整である。
200	*	*	暗茶褐色	Q P_L M	造し字状に近く外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には縁を作り出す。縁の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛で調整である。
201	甕 口縁部 胴部	①(24.4) ③(21.2)	暗褐色	Q P_L M	直行気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には縁を作り出す。三条の断面三角形貼付帯を施す。縁の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
202	*	①(29.2) ③(25.6)	暗茶褐色	Q P_L M	外傾気味に立ち上がりながら直口する口縁部である。くの字状に外反する。口縁部裏面はわずかに凹む。三条の断面三角形貼付帯を施す。縁の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
203	甕 口縁部	①(26.8)	明褐色	Q P_L H	大きく述べる口縁部と思われる器形で、口縁部は造し字状に外反し、口縁部裏面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛で調整で、一部施毛書きを認める。
204	鉢 口縁部 胴部	①(23.4) ③(25.4)	暗茶褐色	Q P_L M	底部付近より外方へひらきながら立ち上がり、内側する口縁部である。口縁部裏面は丸味を帯びる。縁の付着を認める。	外面は指頭圧調整板が施し認められ、縁の付着が著しいが、斜位の刷毛などで調整で、内面は指頭圧調整を認める。
205	PL 31 口縁部		明茶褐色	Q P_L	外傾気味の口縁部で、造し字状に外反する。口縁部裏面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出で作り出す。一条の断面三角形貼付帯を施す。縁の付着を認める。	外面は不明、内面は指頭圧調整後刷毛などで調整である。

番号	国版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
206		壺 口縁部		暗茶褐色	Q P_L	速し字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には幅の広い縫を作り出す。縫の付着を認める。	内・外表面とも指屈圧調整で、外表面は横位の刷毛などで調整。指紋の付着を見る。内面は施磨きを一部に認める。
207	PL 31	*		暗茶褐色	Q P_L	内湾する口縁部で、速し字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。張の付着を認める。	内・外表面とも横位の刷毛などで調整である。
208		壺 底部	④(8,2)	褐色	Q P_L	光亮した脚台である。瓶はあまり広がりがなく、瓶の端面は凹んで、凹縫状を呈し、一部欠損する。	薄い刷毛などで調整である。
209	*			黒褐色	Q P_L M	破片のため詳細は不明であるが、瓶は大きくながら、あげ底の脚台である。	施磨きを認める。
210	*		④6.3	褐色	Q P_L H	光亮した脚台である。瓶は短く、瓶の端面に広がり、瓶の端面は凹んで、凹縫状を呈する。底面に木の葉の印痕を認める。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
211	*		④6.6	褐色	Q P_L M	光亮した脚台である。瓶は短く、あまり広がりがない。瓶の端面は丸味を帯びている。	外表面は横位、斜位及び現位、内面は口縁部分附近は横位の刷毛などで調整で、内面は削落が著しい。
212	PL 31	壺 口縁部 肩部付近	①(14.4)	明灰色	Q P_L	肩部より内側しながら立ち上がり、頭部でしまり、外方へ大きく外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。	内・外表面とも横位の刷毛などで調整である。
213		壺 口縁部		明茶褐色	Q P_L M	大きく外方へひらく口縁部と思われる。口縁部の外側直下に突起を廻らし、口縁部が二又状を呈する。口縁部端面及び突起端面は凹む。口縁部内側に断面三角形貼付突起を廻らす。	内・外表面とも横位の刷毛などで調整である。
214	*			暗褐色	Q P_L M	口縁部の外側直下に突起を廻らし、口縁部が二又状を呈する。口縁部端面及び突起端面は凹む。	内・外表面とも横位の刷毛などで調整である。
215	PL 31	手捏ね土器	①(6,8) ②(10,6) ③(7,4) ④(3,8)	暗茶褐色	Q P_L	若干あげ底の底部より外方へあまりひらく立ち上がりながら廣口気味の口縁部である。口縁部は丸味を帯びる。	内・外表面とも指屈圧調整で、一部外表面には施磨きを認める。輪積みの手法を残す。
216	*	壺 底部		褐色	Q P_L	若干あげ底で、外方へひらくながら立ち上がる底部で、一部欠損する。	横位及び斜位の刷毛などで調整を認める。
217		壺 肩部 腹部	③(44,4)	茶褐色	Q P_L H	剥の張った様形に近い器形で、肩部には五条、肩部には四条の断面三角形貼付突起を廻らす。	外表面は横位、斜位及び現位のクランメ状の調整を認め、内面は削落か磨滅のため不明である。

### 石器 (Fig. 37, PL. 35)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鎌の3点である。218・219はフォルンフェルス、220は頁岩を素材に用いている。218は、最大長2.6cm、最大幅1.4cm、厚さ0.2cm、重さ1.5gを測り扁平無茎の円基式で、二等辺三角形状を呈する。細身の鎌で、先端部は欠損し、両面には研磨痕を残す。219は、最大長2.85cm、最大幅1.8cm、厚さ0.25cm、重さ2.2gを測り、扁平無茎の凹基式で、二等辺三角形状を呈し、両側辺ともに若干丸味を帯びる。先端部及び基端部及び基部片側は一部欠損する。両面ともに研磨痕を認める。220は、最大長3.6cm、最大幅2.2cm、厚さ0.25cm、重さ2.2gを測り、扁平無茎で、両側辺や両基部端及び先端部の大半を欠損しているため詳細には不明である。研磨痕は一部に認める。

### 軽石製品 (Fig. 38)

221は軽石製品で、最大長11.4cm、最大幅7.1cm、最大厚2.3cmを測り、一部を欠損する。片面は自然面を残し、片面は平坦面を呈し、斜位に磨る作業のためか、その痕跡を観察できる。

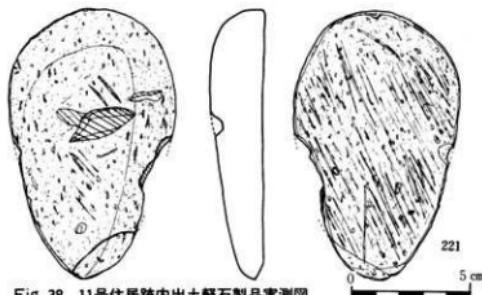


Fig. 37 11号住居跡内出土石器実測図

### ⑩12号住居跡 (Fig. 39~42, PL. 13)

10号住居跡までの最短距離は7.3mで、11号住居跡まで9.7m、21号住居跡まで13.6m、中央区溝状遺構まで3.44mを測り、B・C-11・12区のⅡ層中で検出された。

長軸793cm(ベッド状張り出し部を含む)、短軸718mを測る。主柱穴は5本で、P<sub>1</sub>:径54~66cm、深さ63cm、P<sub>2</sub>:径72~78cm、深さ68cm、P<sub>3</sub>:径56~100cm、深さ69cm、P<sub>4</sub>:径40~48cm、深さ78cm、P<sub>5</sub>:径50~80cm、深さ79cmを測る。それぞれの心心距離は、P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>

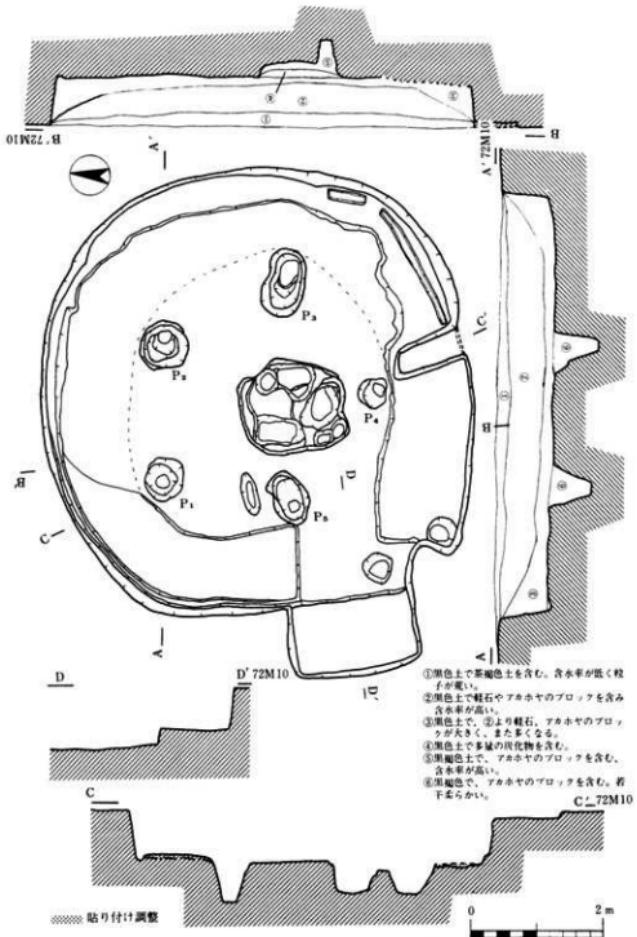


Fig. 39 12号住居跡実測図

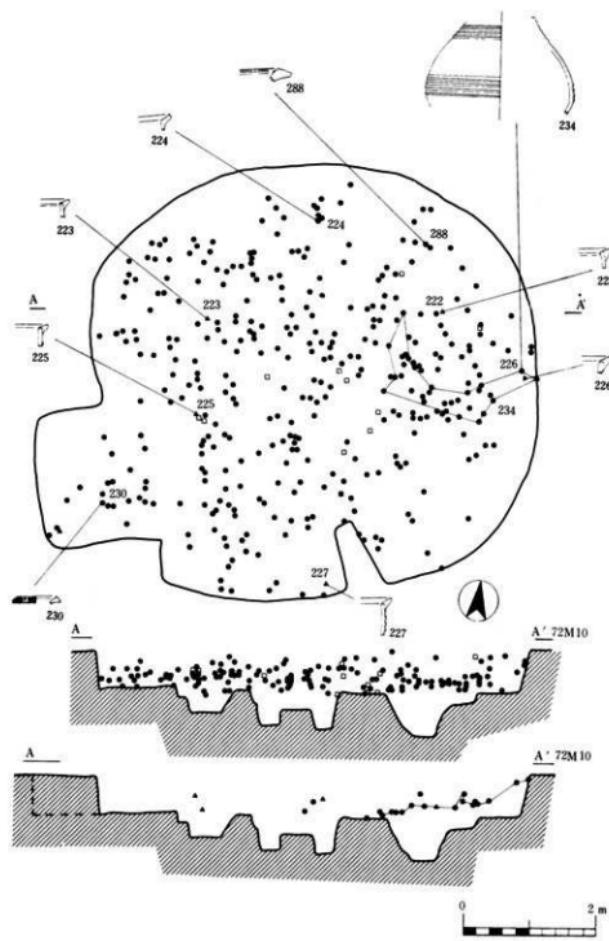
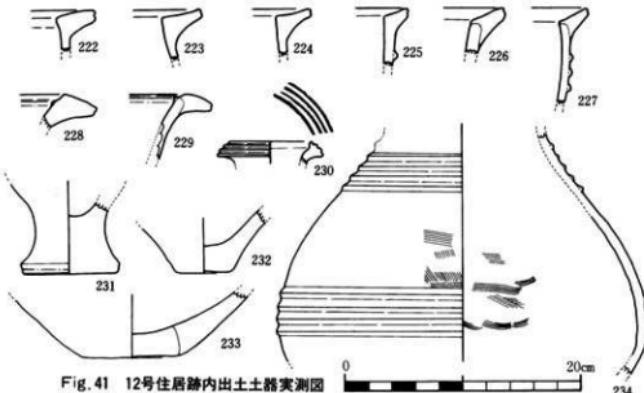


Fig. 40 12号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

: 212cm, P<sub>2</sub> ~ P<sub>3</sub> : 218cm, P<sub>3</sub> ~ P<sub>4</sub> : 221cm, P<sub>4</sub> ~ P<sub>5</sub> : 216cm, P<sub>5</sub> ~ P<sub>1</sub> : 217cmを測る。遺構検出面からの深さは85cmで、ベッド状遺構面まで約65cmである。

住居跡の平面の形状は、ほぼ円形状を呈する。南西側には200×120cmのベッド状張り出しを認める。南側壁より110×51cm、高さ70cmの障壁が北西方向に突出したような格好で検出された。床面においては、貼り付けにより調整され、西側壁際から柱穴P<sub>1</sub>付近までと南側壁際より障壁まではベッド状遺構を認め、北側周縁壁寄りから南側障壁にかけて周縁部の壁際には、わずかにその痕跡が残存し、遺存状態は良好でない。その現況から見れば主柱穴を取り廻むようなベッド状遺構が想定される。床面の西側壁際から北側壁際一部までと南東側壁際の一部には、幅8~15cm、深さ6cmの整帶溝を認めた。床面のほぼ中央部には、163×141cm、深さ45cmの土括が検出され、その土括内には複雑な掘込みがみられた。

なお、本住居跡内の出土遺物は、床面からの出土は認められるものの量は少なく、土括内埋土中より棒状炭化物を含む多量の炭化物、変形上器破片（媒の付着）や石片などが出土地。住居跡内の埋土中よりは、変形上器破片、壺形土器の肩部から腹部にかけての破片、瀬戸内系の門線文の壺形土器、磨製石織が出土した。



土器 (Fig. 39~42, PL. 31)

Tab. 10 12号住居跡内出土土器一覧表

法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径( )復元径

番号	器種 器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
222	壺 口縁部		明茶褐色	Q P.L. H	逆し字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出 す。	内・外面とともに横位の刷毛 織面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出 す。

番号	測定 部位 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
23		要 口縁部		暗褐色	Q P_L M	透し字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には幾を作り出す。口縁部上面は凹む。煤の付着を認める。	内・外面とともに植位の刷毛なで調整である。
224	*			暗茶褐色	Q P_L M	透し字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には幾を作り出す。口縁部上面は凹む。煤の付着を認める。	外面は植位、内面は斜位及び植位の刷毛なで調整である。
225	*			暗茶褐色	Q P_L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には幾を作り出す。 一番の断面三角形貼付突帯を離らす。煤の付着を認める。	内・外面とともに植位の刷毛なで調整である。
226	*			暗褐色	Q P_L M H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。	外面は植位、内面は斜位及び植位の刷毛なで調整である。
227	*			黒褐色	Q P_L M	内汚気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には幾を作り出す。三条の断面三角形貼付突帯を離らす。煤の付着を認める。	外面は植位、内面は斜位で調整後植位及び斜位の刷毛なで調整である。
228	要 口縁部			暗茶褐色	Q P_L M	重れ下り字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には、一条の断面三角形貼付突帯を離らす。	内・外面とともに植位の刷毛なで調整である。
229	要 口縁部			明茶褐色	Q P_L M	大きく外方へひらきながら重れ下り字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には、一条の断面三角形貼付突帯を離らす。	外面は植位、内面は斜落が著しいが植位の刷毛調整で、口縁部は施磨きを認める。
230	PL. 31	*		明茶褐色	Q P_L M	短かい口縁部が大きく外反し、口縁部端面が肥厚が張さる。その肥張部に三条の凹縫文を施している。	内・外面ともに植位の刷毛なで調整である。
231	要 底部	④8.4		褐色	Q P_L M	光亮した脚台である。脚は短く、あまり広がらず、脚の端面は凹んで、倒錐状を呈する。	脚頭に調整後刷毛なで調整を部分的に認める。
232	要 底部	④4.6		黒褐色	Q P_L M	平底の底部で、外方へひらきながら立ち上がると思われる器形で、ぶ厚い底盤である。	施磨きを認める。
233	大要 底部	④(8.0)		明茶褐色	Q P_L M	平底の底部で、外方へ大きくなりながら立ち上がると思われる器形で、厚い底盤である。	削落しているため調整は不明である。
234	要 肩部 腹部	③31.2		黑茶褐色	Q P_L M	腹部の張った錐球形に近い器形で、肩部に五条、胴部に四条の断面三角形貼付突帯を離らす。	外面は施磨きで、内面は削落し、調整は不明である。



Fig. 42 12号住居跡内出土石器実測図

#### 石器 (Fig. 42, PL. 35, 36)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鎌、砥石などである。235は頁岩、236はフォンフェルス、237はフォンフェルス化した頁岩、238は細粒砂岩を素材に用いている。235は、磨製石鎌で、大半は欠損している。現存最大張1.6cm、最大張2.7cm、厚さ0.4cm、重さ3gを測り、内・外面ともに研磨痕を一部に残している。236は、扁平無茎の凹基式の磨製石鎌で、二等辺三角形状を呈し、最大長3.55cm、最大幅2.1cm、厚さ0.3cm、重さ1.7gを計る。鎌は先端部から基部につづき、内外面ともに器面全体に研磨痕を認める。237は、用途は不詳で、最大長3.1cm、最大幅2.4cm、厚さ0.45cm、重さ6gを測る。両器面とも研磨痕を認め、先端部及び基部ともに磨かれ、製作時のものと思われる。238は扁平な素材を用い、最大長8.3cm、最大幅6.75cm、厚さ0.5cm、重さ30kgを測り、両面ともに研磨を認め、素材のためか研磨痕は不明で、砥石の用途が考えられる。

#### ③13号住居跡 (Fig. 43~45, PL. 12)

3号・4号掘立柱建物跡までの最短距離は、8.3mで、9号住居跡まで、11.2m、10号住居跡まで、14m、14号住居跡まで、14m、中央区溝状遺構まで、6.3mを測り、C・D-13区のⅡ層中で検出された。

長軸440cm、短軸420cmを測り、主軸の方位はN-65°-Eをとる。主柱穴は2本で、西側：径36~50cm、深さ54cm、東側：径40~43cm、深さ48cmを測り、心心距離は182cmである。東側柱穴には径20×20cmの柱痕跡を認めた。遺構検出面からの深さは66cmで、ベッド状遺構までは43~50cmを測る。

本住居跡の形状は、基本的に隅丸方形を呈する。南壁中央付近には102×50cm、高さ63cmの略長方形状の障壁を認めた。南東隅には、112×90cm、高さ18cmの切り出しによるベッド状遺構や南側障壁際から西側及び北側の壁際にかけては、幅96~118cm、高さ15cmの貼り付け調整によるベッド状遺構が連続した状態で検出された。また北東隅には、100~118×190cm、高さ21cmの切り出しによるベッド状遺構を認めた。北側ベッド状遺構の一部には、貼り付け調整の遺存が悪く認められない部分と東側壁寄りの一部を除き、全壁周際には、幅6~13cm深さ6

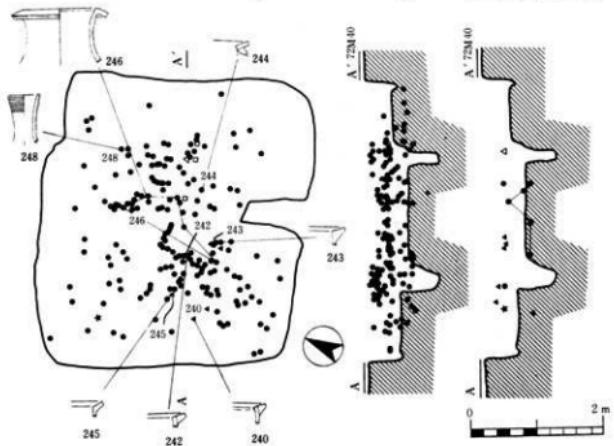
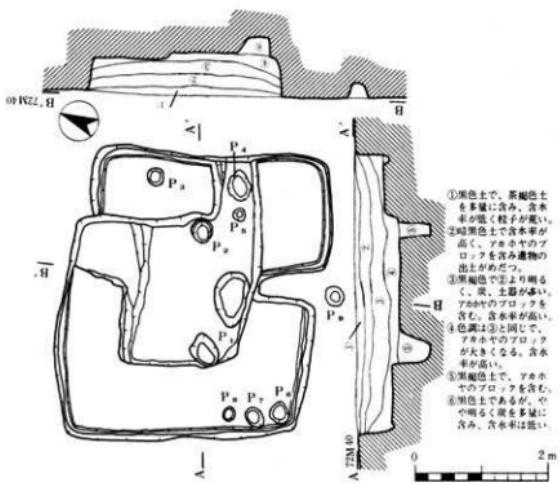


Fig. 43 13号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

～10cmの壁帶溝を検出した。ベッド状造構の床面には、浅い柱穴状の掘込が、南西隅寄りに三か所、北東隅より約60cmの所に一か所検出した。床面は張り貼けにより調整され、障壁際には、81×51cm、深さ24cmの略円形の土壙を検出した。ベッド造構上には、大小の浅い柱穴状の掘込を認める。なお、住居跡外の障壁の基部寄りには、径28～29cm、深さ23cmの柱穴を検出した。

本住居跡の出土遺物は、床面よりの出土はあまり見られず、埋土中より甕形土器・壺形土器・鉢形土器などの破片や砾石が出土した。壺形土器の中には、移入土器と思われる口縁部から頭部にかけての破片で、口縁部内外に凹線文をもつものである。

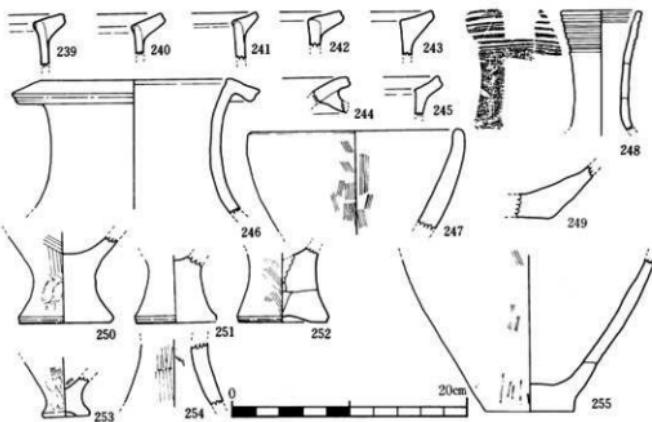


Fig. 44 13号住居跡内出土土器実測図

#### 土器 (Fig. 44, PL. 31)

Tab. 11 13号住居内出土土器一覧表

(注) 法量の単位cm ①口徑②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	形態 器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
239 PL 31	甕 口縁部		茶褐色	Q P.L.	内凸の口縁部で、達し字状に近く外反する。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。蓋の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛など調査である。
240	*	*	暗褐色	Q P.L.	くの字状に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。蓋の付着を認める。	外表面は輪位及び横位。内面は指面に調整後横位の刷毛などで調査である。
241	*	*	暗茶褐色	Q P.L.	くの字状に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。蓋の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛など調査である。

番号	試験番号	器種・部品	法量	色調	粘土	形態の特徴、その他	手法の特徴
242	PL 31	甕 口縁部		黒褐色	Q P L M	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部 裏面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。 縦の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧 調整後横位の刷毛などで調整 である。
243	*	*		暗茶褐色	Q P L M	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部 裏面はわずかに凹む。口縁部内側には縦を作 り出す。縦の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで調整 で、内面は不明である。
244	*	*		明茶褐色	Q P L M	L字状に外反する口縁部で、口縁部裏面 は凹む。口縁部上面はわずかに凹む。口縁部 内面は張り出しを作り出す。縦の付着を認め る。	内・外面ともに横位の刷毛な ど調整である。
245	*	甕 口縁部		暗茶褐色	Q P L	口縁部外面の直下に突帯を造らし、口縁部 裏面が二又状を呈する。口縁部裏面は凹む。突 帯裏面を欠損する。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
246	*		①(21.0)	茶褐色	Q P L	肩部より外方へ立ち上がりながら、垂れ下 り気味に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹 む。口縁部内側には縦を作り出す。	外面は瓶位の最高まで、内 面は指頭圧調整後斜位の差崩 きを認める。
247	PL 31	鉢 口縁部	①(18.0)	褐色	Q P L	底部付近より外方へひらきながら立ち上 がると思われる器形で、口縁部はわずかに立ち 上がり。口縁部は丸味を帯び、器壁は厚い。	内・外面ともに指頭圧調整 後斜位及び瓶位の刷毛など調 整である。
248	*	甕 口縁部 頸部	①(6.8)	暗茶褐色	Q P L M	頭部でしまりわずかに外反し、口縁部に重 り。口縁部はわずかな平面を作る。口縁部 から頸部にかけては七条、口縁部内側には二 条の凹線文を認する。	外面の凹線文付近は横位の 刷毛など、下位は瓶位の先着 きで、内面は横位の刷毛など 調整を認める。
249	*	甕 底部		茶褐色	Q P L	平底の底部で、外方へ大きく立ち上ると 思われる器形で、厚い底部であり。一部欠損 する。	外面は剥落のため不明で、 内面は指頭圧調整を認める。
250	*	甕 底部	④8.0	褐色	Q P L	光実した脚台である。瓶は瓶かく。瓶角的 に広がり、瓶の裏面は凹んで凹線状を呈する。	指頭圧調整後斜位の刷毛な ど調整である。
251	*	*	④7.0	赤茶褐色	Q P L H	光実した脚台である。瓶は瓶かく。瓶角的 であるが広がりがなく、瓶の裏面は凹んで、 凹線状を呈する。	瓶減しているため不明であ る。
252	*	*	④(7.8)	褐色	Q P L H	光実した脚台である。瓶は瓶かく。あまり 広がりがなく、瓶の裏面は凹んで、凹線状を 呈し、底面中央部は若干凹む。一部欠損する。	指頭圧調整後横位、斜位及 び瓶位の刷毛など調整であ る。

番号	測定 部位 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
253	PL 31	手程ね器	④(4.2)	褐色	Q P.L. H	手程ね土器の底部である。輪は別なく、圓角的であるが広がりがなく、輪の裏面は丸味を帯びる。外方へ立ち上がる器形と思われる。底面中央部は削痕により円む。	指頭圧調整後斜位及び輪位の刷毛などで調整を部分的に施める。
254	*	高环 脚部		黒褐色	Q P.L. M	高环形土器の脚部と思われる器部の一部である。	外面は輪位の刷毛などで調整で、内面は磨滅のため不明である。
255	*	壺 底部	④7.4	赤茶褐色	Q P.L. H	平底の底部である。お厚い底部より外方へ立ち上がる器形と思われる。	内・外面とともに削痕が残り、外側は部分的に輪位及び斜位の刷毛などで調整である。

#### 石器 (Fig. 45, PL. 36)

本住居跡内出土の石器は、砥石である。256は細粒細岩を素材にしている。現存最大長11.9cm、最存最大幅6.2cm、最存最大長13.5cm、重量150gを測り、扁平な砥石で、両端部及び片側面は欠損する。現存している片側面及び片面ともに研磨痕を認めるもの随所に剥落が観察される。

#### ⑥ 14号住居跡 (Fig. 46~52, PL. 13)

2号掘立柱建物跡までの最短距離は、7.9mで、3号・4号掘立柱建物跡まで、10.8m、13号住居跡まで、14.1mを測り、E・F-14・15区のⅢ層中で検出された。

本住居跡は、バイパス建設予定地外へ造構のがびるため、規模は不詳である。遺存している遺構の規模は、670×390cm (遺存径) を測る。造構検出面からの深さは、90cmで、ベッド状造構までは約70cmである。

住居跡の平面の形状は、円形状を呈するものと思われる。主柱穴は路線外へのびているために不明である。遺存する柱穴は7本で、P<sub>1</sub>：径43~44cm、深さ20cm、P<sub>2</sub>：径54~54cm、深さ72cm、P<sub>3</sub>：径36~37cm、深さ16cm、P<sub>4</sub>：径51~52cm、深さ76cm、P<sub>5</sub>：径26~32cm、深さ50cm、P<sub>6</sub>：29~? (路線外) cm、深さ50cmを測り、それぞれの心距離は、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>：170cm、P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>：114cm、P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>：125cm、P<sub>1</sub>-P<sub>5</sub>：114cm、P<sub>1</sub>-P<sub>6</sub>：147cmである。

本住居跡には、検出面より約20~30cm下位に壁周縁より内側に突出するような状態で障壁を4か所認めた。各障壁間には、それぞれベッド状造構を検出し、110~115cm×160~190cm、84

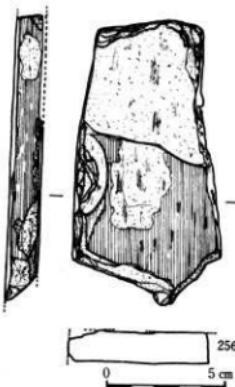


Fig. 45 13号住居跡内出土石器実測図

~98cm×160~190cm, 66~87cm×320~380cmを測り、床面との比高差は15~20cmである。北西隅の障壁際には土壇状の掘込を認めるが、大半は路線外へのびている。床面は貼り付けにより調整され、ほぼ中央部付近（北側壁寄り）には、100×100（遺存径）cm、深さ30~45cmの略円形状の土壇を検出した。土壇中には、柱穴状の掘込を二か所検出し、埋土上面及び周辺には炭化物や土器破片が多く出土した。

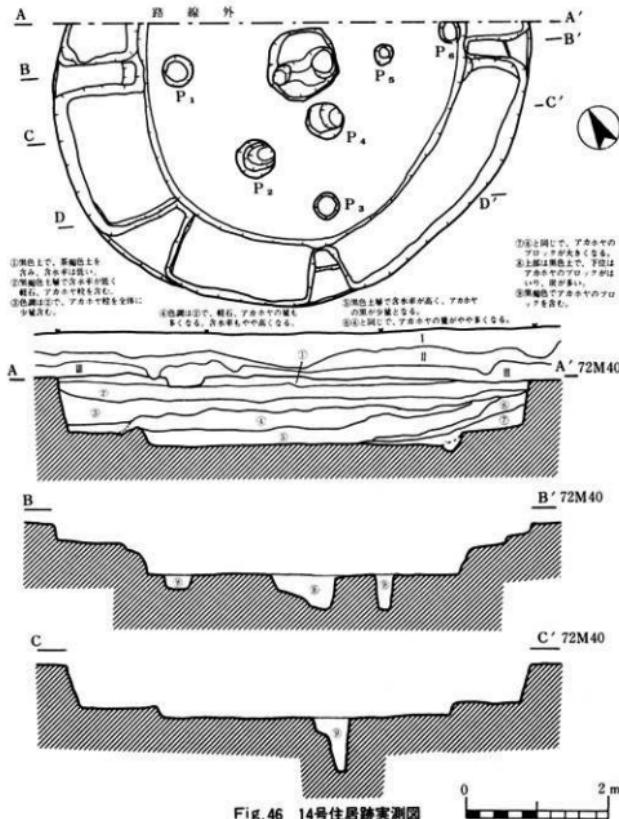


Fig. 46 14号住居跡実測図

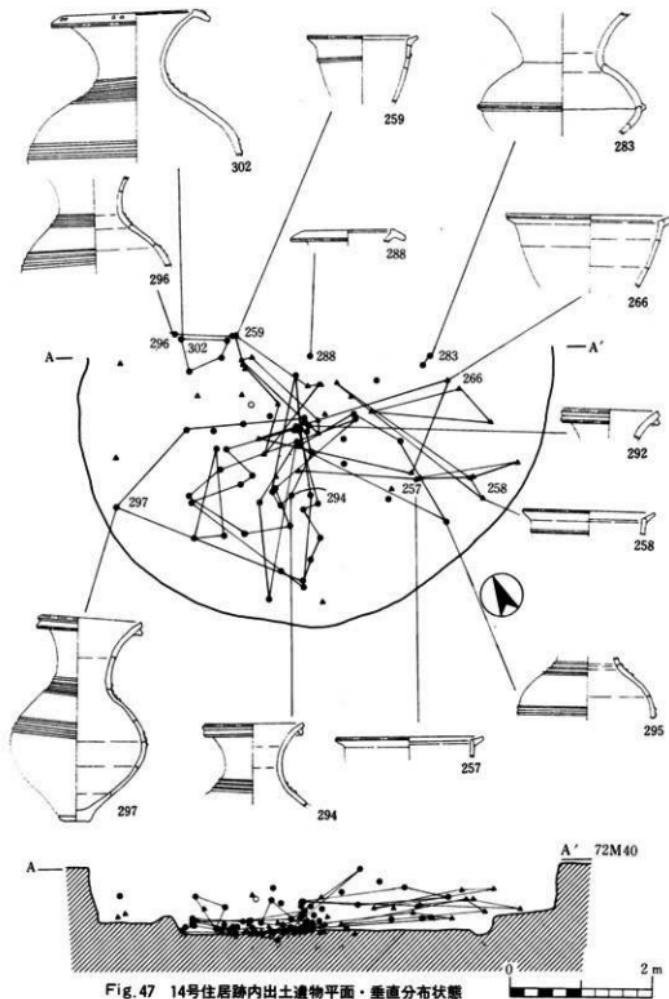


Fig. 47 14号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

なお、本住居跡内の床面には、二又状口縁をもつ壺形土器やくの字状に外反する口縁部の壺形土器、高杯形土器の脚部などの破片が出土した。埋土中には、上位から下位にかけて、土器大小破片を多く認め、床面近くの埋土中には壺形土器が口縁部を下位にした状態や壺形土器一括の破片が西側壁際から床面の方へ流れ込んだような状態で出土した。

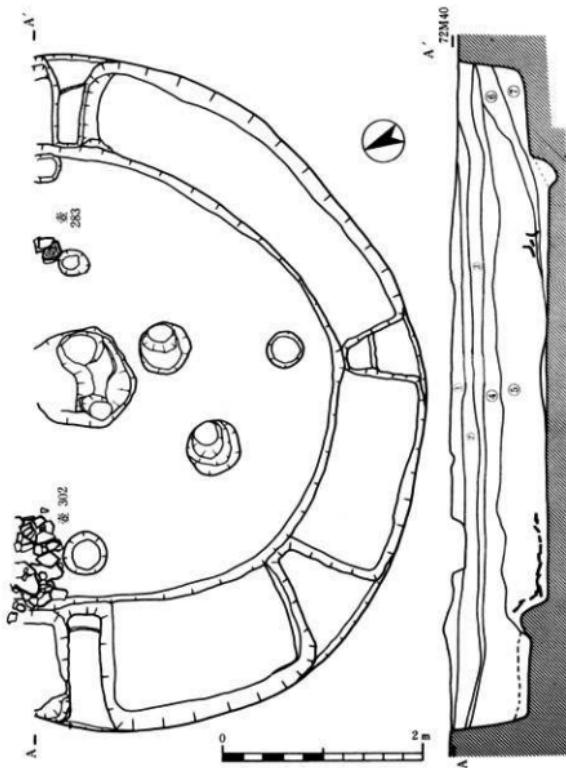


Fig. 48 14号住居跡内遺物出土状態（壺形土器）

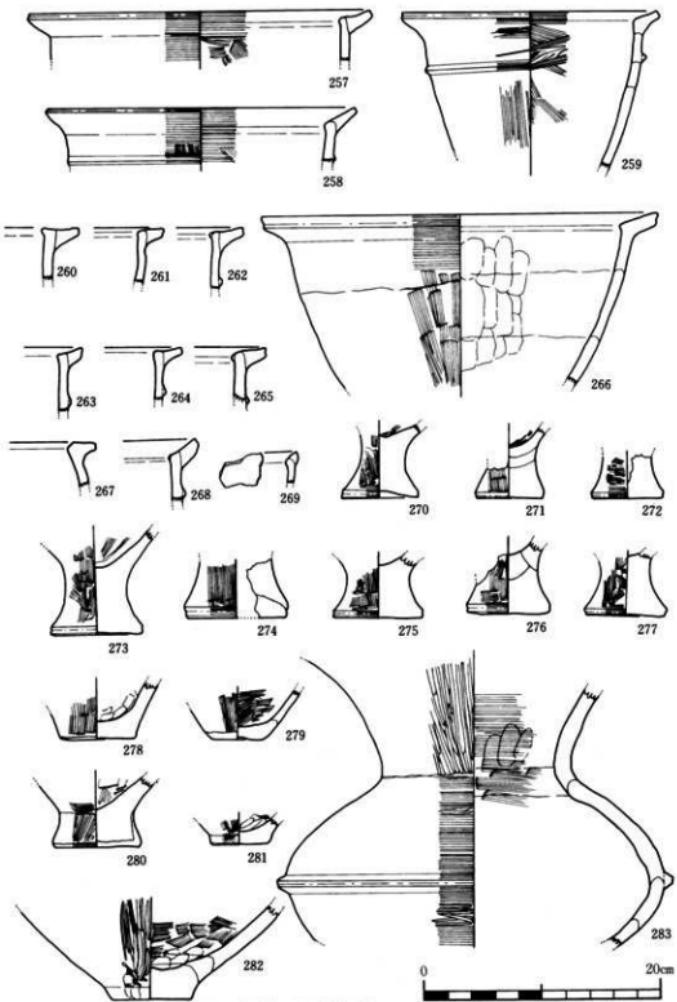


Fig. 49 14号住居跡内出土土器実測図(1)

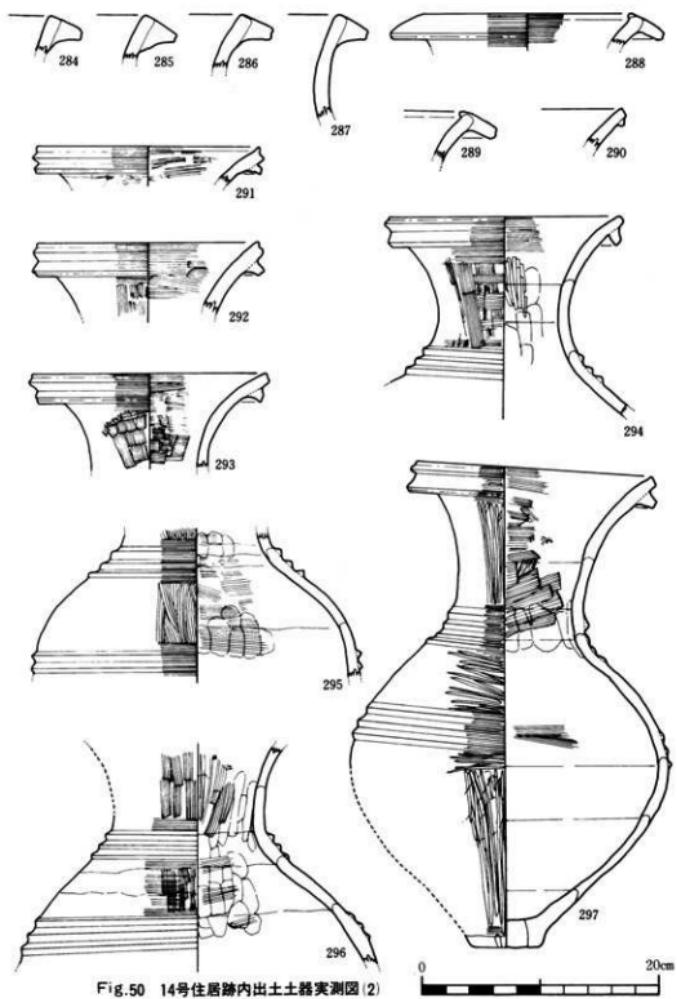


Fig.50 14号住居跡内出土土器実測図(2)

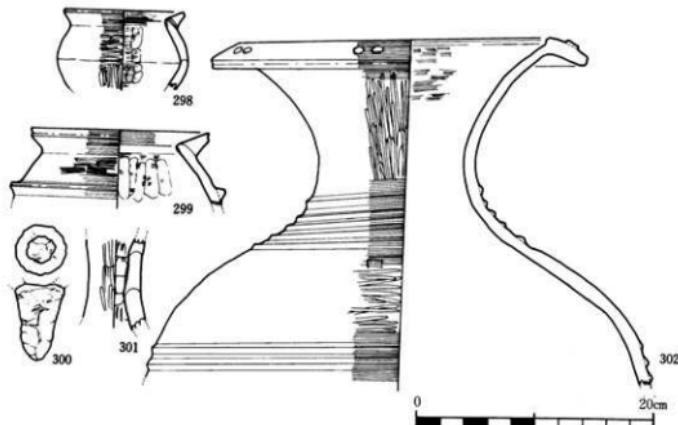


Fig. 51 14号住居跡内出土土器実測図(3)

土器 (Fig. 49~51, PL. 31)

Tab. 12 14号住居跡内出土土器一覧表

法量の単位:cm (①口径②器高③胸部最大径④底径 ( ) 復元径

番号	団版 器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴	
257	甕 口縁部	①(29.2)	暗茶褐色	Q P L M	直口氣味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部上面及び前面は円む。口縁部内面には張り出しを作り出す。縁の付着を認める。	外面は横位。内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。	
258	PL 31	*	①(26.4)	明茶褐色	Q P L H	外縁氣味の口縁部で、大きくくの字状に外反する。口縁部前面は円む。口縁部内面には張り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を施す。縁の付着を認める。	外面は横位及び斜位。内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
259	甕 口縁部 胸部	①21.8 ③17.8	暗茶褐色	Q P L	直口氣味に立ち上がりながら直口氣味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部前面は円む。口縁部内側には縁を作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を施す。縁の付着を認める。	外面は横位及び斜位。内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。	
260	PL 31	甕 口縁部	明茶褐色	Q P L H	直し字状に外反する口縁部で、口縁部前面は円む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位。内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。	
261	*	明茶褐色	Q P L M	直し字状に外反する口縁部で、口縁部前面は円む。口縁部内側は若干凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作る。	内外面とも剥落して不明である。内面に微細な調整痕がある。		

番号	因数 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴 、そ の 他	手 法 の 特 徴
262	PL 31	甕 口縁部		茶褐色	Q P L M	達し字状に外反する口縁部で、口縁部端面 は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。 一条の断面三角形貼付突帯を施す。	外面は横位、内面は横位と 斜位の刷毛などで調整である。
263	*	*		黒褐色	Q P L M H	達し字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面 は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。 一条の断面三角形貼付突帯を施す。窓の付 着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
264	*	*		茶褐色	Q P L M	達し字状に外反する口縁部で、口縁部端面 及び上面は凹む。口縁部内側には棱を作り出 す。一条の断面三角形貼付突帯を施す。窓の付 着を認める。	外面は横位の刷毛などで、内 面は指頭圧調整である。
265	*	*		黒茶褐色	Q P L H	達し字状に外反する口縁部で、口縁部端面 は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。 一条の断面三角形貼付突帯を施す。窓の付 着を認める。	外面は横位、内面は横位及 び指頭圧調整である。
266	甕 口縁部 刷部	①(33.6) ③(27.0)		褐色	Q P L M	外方へ立ち上がる器形である。外反する口 縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は 凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに剥落してい るため不明で、輪積みの手法 を残す。
267	PL 31	鉢 口縁部		褐色	Q P L H	内湾する口縁部で、達し字状に外反する。 口縁部端面はわずかに凹む。	外面は横位の刷毛などで調整 で、内面は指頭圧調整である。
268	甕 口縁部			暗褐色	Q P L M	直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側に張 り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付突 帯を施す。窓の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整。内面は指頭圧調 整を認める。
269	鉢 口縁部			明茶褐色	Q P L	内湾する口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部端面は直角である。	着底を認め調整箇所不明であ る。
270	甕 底部	④6.5	明茶褐色	Q P L H	光実した舞台である。幅は短く、扇角的 であるがあまり広がりがない。幅の端面は凹 んで、凹縫状を呈する。底面はわずかに凹む。 一部欠損する。	横位及び斜位の刷毛などで、 底面中央部は指頭圧調整のた めか指紋の付着を認める。	
271	*	④5.8		褐色	Q P L H M	光実した舞台である。幅は長く、あまり広 がりがない。幅の端面は凹んで、凹縫状を呈し、 一部欠損する。	横位及び斜位の刷毛などで調 整である。
272	*	④6.0		褐色	Q P L H	光実した舞台である。幅は短く、あまり広 がりがない。幅の端面は凹んで、凹縫状を呈 し、一部欠損する。	横位及び斜位の刷毛などで調 整である。

番号	実数 番号	器種・器部	法量	色調	粘土	形態の特徴、その他	手法の特徴
273		甕 底部	④7.8	褐色	Q P L M	光実した舞台である。瓶は長く、鋭角的に広がり、瓶の端面は凹んで、円錐状を呈する。瓶面はわずかに凹む。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
274	*			暗褐色	Q P L M	光実した舞台である。瓶は長いと思われ、あまり広がりがない。瓶の端面は凹んで、円錐状を呈し、一部欠損する。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
275	*			茶褐色	Q P L M	光実した舞台である。瓶は短く、鋭角的に広がり、瓶の端面は凹んで、円錐状を呈する。	横位、斜位及び斜位の刷毛などで調整である。
276	*			褐色	Q P L M	光実した舞台である。瓶は長く、あまり広がりがない。瓶の端面は凹んで、円錐状を呈して、一部欠損する。	横位、斜位及び斜位の刷毛などで調整である。
277	*			褐色	Q P L M	光実した舞台である。瓶は短く、鋭角的に広がり、瓶の端面は凹んで、円錐状を呈する。	斜位、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
278	PL 31	壺 底部		茶褐色	Q P L M	平底の底部である。わりと厚い底部で、外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。	外面は斜位の刷毛などで、内面は指頭圧調整である。
279	*	*		暗褐色	Q P L	平底の底部で、中央部が若干凹む。薄手の底盤で、外方へ大きくひらきながら立ち上がると思われる器形である。	外面は先書きで、内面は指頭圧調整後で調整である。
280		鉢 底部		茶褐色	Q P L	平底の底部で、舞台を思わせる。外方へ大きくひらきながら立ち上がると思われる器形である。	外面は先書きで、内面は削減しているため不明である。
281	PL 31	壺 底部		黒褐色	Q P L M	平底の底部である。薄い底盤で外方へ大きくひらきながら立ち上がると思われる器形である。	外面は斜位のなで、内面は指頭圧調整を認める。
282	*	*		褐色	Q P L H	大型壺の可能性が強い底部である。平底でぶ厚い底盤で、外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形である。	外面は指頭圧調整後高巻き、内面は指頭圧調整後なで調整である。
283	*	壺 颈部 肩部		黒茶褐色	Q P L M	広口の口縁部をもつものと思われ、肩部には一条の断面形状突起部を削らし、突起部は凹む。	外面は斜位及び横位の先書き、内面は指頭圧調整後横位及び斜位のなで調整で、削落して不明な部位も認める。

番号	回数 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
284	PL 31	壺 口縁部		茶褐色	Q P L M	重れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部 裏面はわずかに凹む。	内・外面ともに横位の刷毛 なで調整である。
285	+	+		茶褐色	Q P L	重れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部 裏面は凹む。	外面は横位、内面は横位及 び斜位の刷毛なで調整であ る。
286	+	+		茶褐色	Q P L M	重れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部 裏面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛 なで調整である。
287	+	+		茶褐色	Q P L M	わずかに外反する口縁部である。口縁部は 重れ下り気味に外反し、口縁部裏面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛 なで調整である。
288	+	+	①(22.8)	茶褐色	Q P L M	重れ下り気味に外反する口縁部である。口 縁部裏面は凹む。口縁部内側に張り出しを作 り出す。	内・外面ともに横位の刷毛 なで調整である。
289	+	+		茶褐色	Q P L M	大きく外反する口縁部と思われる。口縁部 は重れ下り気味に外反し、口縁部裏面は凹む。 口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛 なで調整である。
290		*		茶褐色	Q P L M	大きく外反する口縁部と思われる。口縁部 外側下面には前面三角形貼付突起を施す。 口縁部は凹む。	磨減しているため調整痕 不明である。
291	PL 31	*	①(19.4)	茶褐色	Q P L	大きく外反する口縁部である。口縁部外側 に突起を施し、口縁部及び突起裏面は凹む。 二又状口縁を呈する。	内・外面ともに横位の刷毛 なで調整である。
292	+	*	①(19.2)	暗茶褐色	Q P L M	わずかに外反する口縁部である。口縁部外 側に突起を施し、口縁部及び突起裏面は凹 む。二又状口縁を呈する。	外面は横位及び斜位、内面 は横位及び斜位の刷毛なで調 整である。
293			①(20.2)	茶褐色	Q P L H M	大きく外反する口縁部である。口縁部外側 に突起を施し、口縁部及び突起裏面は凹む。 二又状口縁を呈する。	外面は横位、斜位及び横位、 内面は横位及び斜位の刷毛な で調整である。
294	PL 31			暗茶褐色	Q P L O b M	頭部でしまり。大きく外反する口縁部であ る。口縁部外側直下に突起を施し、口縁部 及び突起裏面は凹む。二又状の口縁を呈する。 頭部上位には三条の前面三角形貼付突起を施 らす。	内・外面ともに施書きが認 められる。

番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
295	壺 肩部 腹部上位		暗褐色	Q P L M	肩部は若干張り、肩部には三条。胴部には二条の断面三角形貼付突帯を施す。	外面横位、縦位及び斜位の刷毛などで調整を認める。肩部突起上位は施す限りで、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整を認める。輪縁のみの手法を残す。
296	壺 肩部 頸部		暗茶褐色	Q P L M	肩部は張らず腹部で盛り、外反して口縁部に至る器形と思われる。肩部及び胴部にはそれぞれ三条の断面三角形貼付突帯を施す。	外面は施す限りで、内面は指頭圧調整後施すことを認める。
297 PL 31	壺 完形	①(20.8) ②(40.6) ③(27.0) ④(5.8)	暗茶褐色	Q P L H	わりと厚い平底の底部で、外方へ立ち上がりながら胴部は若干張り、肩部は張らず、頸部で盛り外反する口縁部である。口縁部外側に突起を認め、口付部及び突起部は凹む。口縁部は二又孔を呈する。肩部には四条、胴部に三条の断面三角形貼付突帯をそれぞれ施す。	外面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整を認める。
298	鉢	①(10.2) ②(11.0)	暗褐色	Q P L H M	胴部外より大きく内傾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。	外面は施す限りで、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
299	鉢	①(15.0) ②(17.6)	暗褐色	Q P L M	大きく内傾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな突起を出せる。胴部には一条の断面三角形状の貼付突帯を施す。突起端面は凹む。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
300 PL 31	高环		褐色	Q P L M	高环の脚部の一部と考えられる。手捏ねである。	指頭圧による調整である。
301 *	高环 脚部		暗茶褐色	Q P L M	高环の脚部の一端と考えられる。	外面は施す限りで、内面は指頭圧調整後施す。
302 *	壺 口縁部 肩部	①(31.7) ②(42.6)	暗茶褐色	Q P L M	肩部は張らず、腹部で盛り、外方へ大きく外反する口縁部で、垂れ下り気味に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には出し口を作り出す。口縁部上面には、二個の円形浮きを三か所に認める。肩部は五条。胴部に三条の断面三角形貼付突帯を施す。	外面は横位及び縦位の施す限りで、内面は口縁部付近は施すが、ほとんどが剥落して不明である。

### 石器 (Fig. 52, PL. 36)

本住跡内出土の石器は、用途不明の石器である。303は、砂岩を素材に用い現存最大長2.6cm、現存最大幅1.4cm、厚さ0.5cm、重さ0.4gを測る。基部及び先端面は欠損している小型のもので、両面の一部には、わずかな凹凸面を残し、両側面及

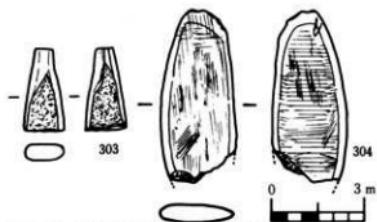


Fig. 52 14号住居跡内出土石器実測図

び基部面には研磨を認めるが、素材のためか研磨痕は観察されない。304は、破岩を素材に用い、現存最大長5.5cm、最大幅2.5cm、厚さ0.6cm、重さ12gを測る。先端面は欠損し、基部は一部を欠損する。器面全体は研磨され研磨痕を認める。

#### ⑨ 15号住居跡 (Fig. 53~56, PL. 14)

16号住居跡との最短距離は、7.2mで、10号住居跡まで、8mを測り、C・D-17区のⅡ層中で検出された。

長軸380cm、短軸367cmである。主軸の方位はN-88°-Eをとる。主柱穴は2本で、東側：径42~54cm、深さ52cm、西側：径31~42cm、深さ48cm、心心距離は104cmを測る。遺構後出面からの深さは56cmである。

本住居跡の平面の形状は、基本的には隅丸長方形状を呈しているが、204×95cmの張り出しを北側に造り出している。西側及び東側の床面は切り出しにより、北側の床面は貼り付けにより調整され、東側床面の北東隅寄りには、30×18×13cmの規模の石を検出し台石の可能性が考えられる。床面には主柱穴を取り囲むように、268×138~150cmの略長方形状の掘込を検出し、床面との比高差25cmを測る。掘込の床面は貼り付け調整されている。この掘込の形状は、3号住居跡の掘込と類似している。

本遺跡の出土遺物には、埋土中よりくの字状に外反する変形土器の口縁部の破片、大型変形土器の復元完形品や変形土器の底部で様穀痕や木の葉の圧痕のあるもの、壺形土器などの破片や打製石器、砥石、磨石などである。また住居跡内の掘込の埋土中より多量の棒状の炭化物を検出した。

#### 土器 (Fig. 54, 55, PL. 32)

Tab. 13 15号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口徑②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復元径

番号	因版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
305	*	壺 口縁部		明茶褐色	Q P.L.	透し字状に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。僅の付着を認める。	内・外面ともに機位の刷毛などで調整である。
306	*			褐色	Q P.L.	透し字状に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。口縁部上面も凹む。僅の付着を認める。	内・外面ともに機位の刷毛などで調整である。
307	*			褐色	Q P.L. M	透し字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。	内・外面ともに機位の刷毛などで調整である。
308	*			明褐色	Q P.L.	透し字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。口縁部上面は凹む。	外側は機位の刷毛なので、内面は荒書きの痕跡がある。

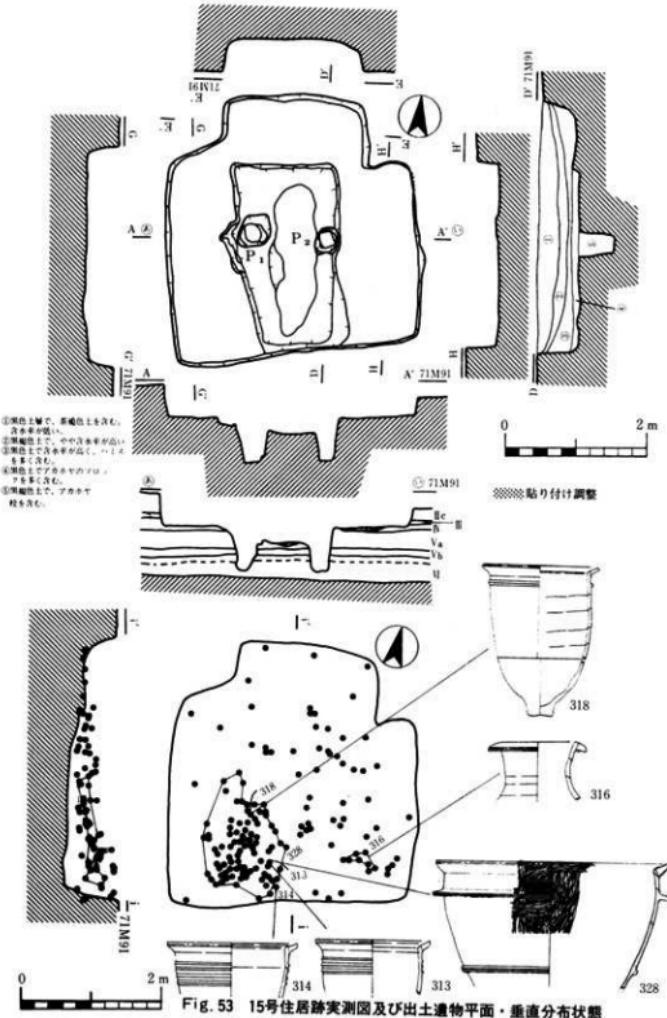


Fig. 53 15号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

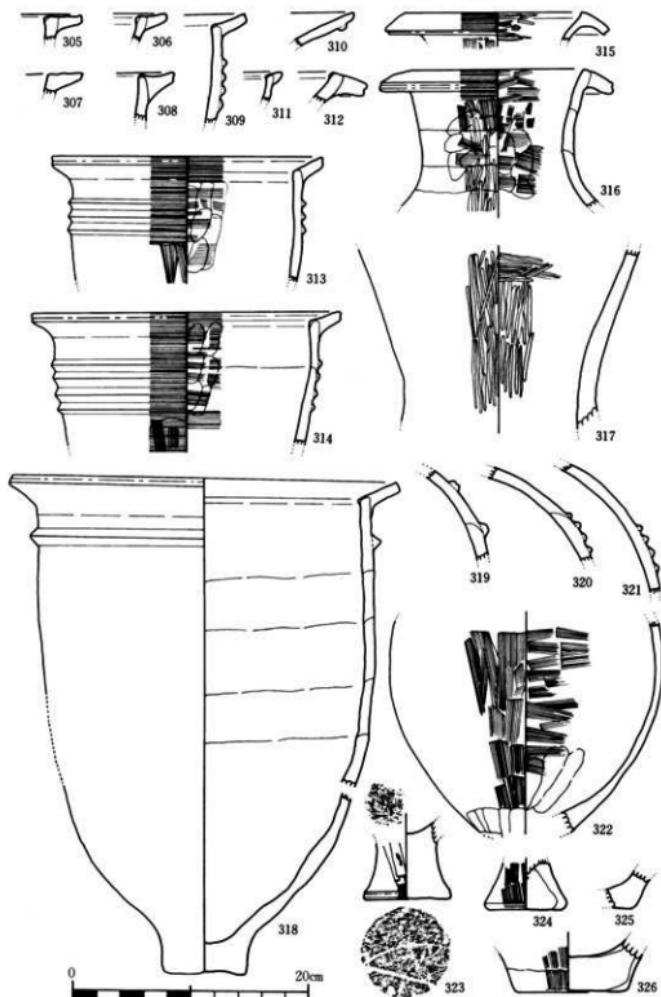


Fig. 54 15号住居跡内出土土器実測図(1)

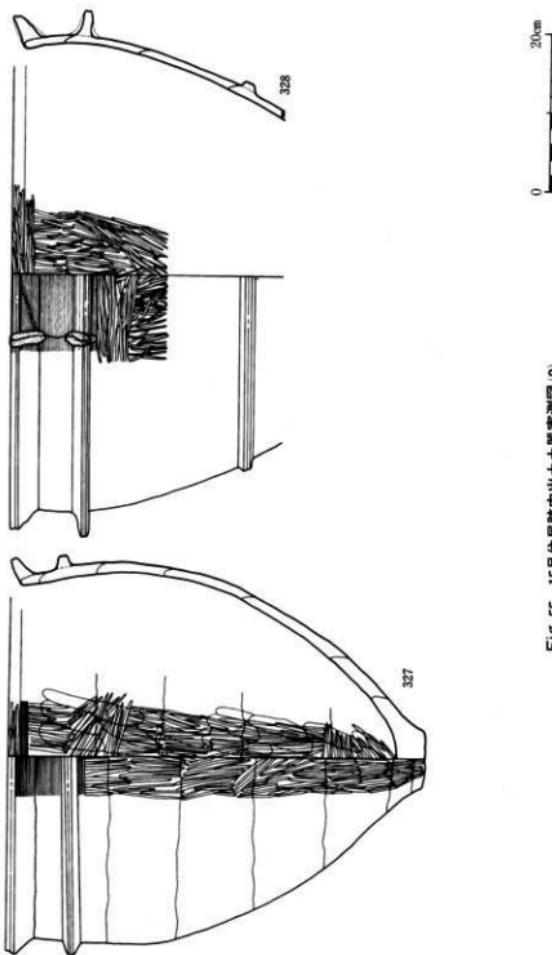


Fig. 55 15号住居跡内出土土器実測図(2)

番号	固版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
309	PL 32	甕 口縁部		茶褐色	Q P L M	若干内溝する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。三条の断面三角形貼付突帯を巡らす。底の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は削減しているため不明である。
310		甕 口縁部		暗褐色	Q P L	大きく外反する口縁部で、口縁部は丸味を帯びる。口縁部外側底面に突帯を施す器形である。	内・外面とともに横位の刷毛などで調整である。
311		鉢 口縁部		明褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部上面は翫かく。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。	外面は剥落が著しく不明で、内面は指圧圧調整である。
312		甕 口縁部		黒褐色	Q P L	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位及び斜位。内面は指圧圧調整後横位の刷毛などで調整である。
313		甕 口縁部 肩部	①(23.0) ③(19.6)	褐色	Q P L M	直行気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。三条の断面三角形貼付突帯を巡らす。底の付着を認める。	外面は横位及び斜位。内面は指圧圧調整後横位の刷毛などで調整である。
314	*		①(26.2) ③(21.8)	明茶褐色	Q P L H	外傾気味に立ち上がりながら若干内傾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。三条の断面三角形貼付突帯を巡らす。	外面は横位及び斜位。内面は指圧圧調整後横位の刷毛などで調整で、輪積みの手法を残す。
315		甕 口縁部	①(19.0)	暗褐色	Q P L H	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹み、口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位及び斜位の刷毛などで、内面は剥離を認める。
316	PL 32	甕 口縁部 頸部	①(19.8)	明茶褐色	Q P L H	頸部より立ち上がりながら頸部でしまり、外反する口縁部で、垂れ下り気味に外反する。口縁部端面は凹み、口縁部内側には縦を作り出す。	内・外面ともに指圧圧調整後、外面は横位、斜位及び斜位の刷毛などで、一部削ぎを認め、内面は斜位の刷毛などで調整で、輪積みの手法を残す。
317	*	甕 頸部		明褐色	Q P L M	頸部でしまり大きく外反する器形と思われる。大型の壺形土器の頸部である。	内・外面ともに剥離を認める。
318	*	甕 完形	①(33.2) ②(41.8) ③(28.4) ④6.8	明茶褐色	Q P L H	小さい平底の底部より外方へ大きく開きながら立ち上り、直口気味で、やや内傾する口縁部である。長胴化の器形で、口縁部はくの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部外側底面には一条の断面三角形貼付突帯を巡らす。	外面は剥離で、内面は指圧圧調整後刷毛などで調整で、輪積みの方法を残す。
319		甕 肩部		茶褐色	Q P L M	甕の肩部付近と思われる。二条の断面台形状の貼付突帯を巡らす。突帯端面はそれぞれ凹む。	外面は横位の刷毛などで、内面は剥落し、不明である。

番号	固形品 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
320		壺 胴部		黒褐色	Q P L M	四条の前面三角形貼付突帯を施らす胴部である。	外面は黒書き、内面は刷毛が書いたため不明である。
321	*	*		明茶褐色	Q P L	四条の前面三角形貼付突帯を施らす胴部である。	外面は黒書き、内側は刷毛で調整している。
322	P.L.	壺 胴部 底部 上位	③(23.2)	暗褐色	Q P L M	底面より外方へ大きく開きながら立ち上がり、胴は張らず、肩部へのびると思われる器形である。	外面は斜位及び縱位、内面は横位に調整を斜位及び横位の刷毛などで調整である。
323	*	壺 底部	④7.4	褐色	Q P L H	光亮した舞台である。瓶は長く、縱角的に広がり、瓶の前面は凹んで、凹凸状を呈する。 瓶の側面には粗粒、底面には木の葉の圧痕を認める。	外面は指頭に調整及び横位である。 の刷毛などで調整である。
324	*	*	④7.0	褐色	Q P L H	光亮した舞台である。瓶は短かく、縱角的であるがあり広がらなく、瓶の端面は丸味を帯びる。	横位及び縱位の刷毛などで調整である。
325		壺 底部		褐色	Q P L H	平底の底部の破片である。外方へ大きく立ち上がると思われる器形である。	横位の刷毛などで調整である。
326	P.L. 32	大甕 底部		茶褐色	Q P L H	平底の底部でお厚く、若干中央付近は凹む。	縱位の刷毛などで調整である。
327	*	大甕 完形品	①50.2 ②53.4 ③48.2 ④7.2	茶褐色	Q P L M H	底部は平底で、外方へ大きく立ち上がりながら口縁部で内凹する口縁部で、くの字方に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部外側直下には、帖台形状の貼付突帯を施し、突帯端面は凹む。胴部より上位に一条の前面台形状の貼付突帯を施し、突帯端面は凹む。瓶の付着を認める。	外面は口縁部から突帯まで横位の刷毛などで、突帯より底部までは黒書きで、内面は指頭調整後黒書きを認める。
328	*	大甕 口縁部 胴部	①64.8 ③56.6	明灰褐色	Q P L H	外方へ大きく立ち上がりながら内凹する口縁部で、くの字形に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部外側直下には、帖台形状の貼付突帯を施し、突帯端面は凹む。胴部より上位に一条の前面台形状の貼付突帯を施し、突帯端面は凹む。	内・外面ともに黒書きが認められる。

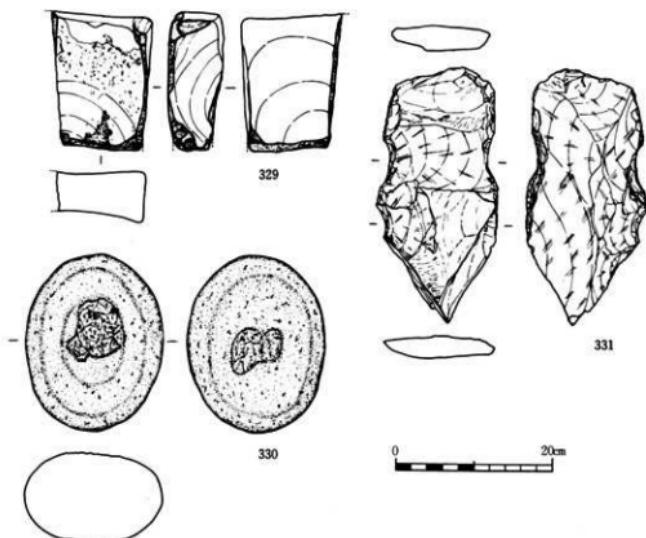


Fig. 56 15号住居跡内出土石器実測図

石器 (Fig. 56, PL. 36)

本住居跡内出土の石器は、砥石、打製石器、磨石である。329は、砂岩を石器の素材として用いた砥石で、一部を欠するが、最大長8.7cm、最大幅3.2cm、最大厚3.2cm、重さ262gを測る。磨面は三ヶ所に認め、研磨のため内・外側ともに窪み、素材のためか研磨痕は不明である。330は、砂岩を石器の素材として用いた磨石である。最大長11.2cm、最大幅8.8cm、最大厚5.7cm、重さ757gを測り、形状は梢円状を呈している。内・外側ともに敲打面を認め、周辺部は研磨面を観察する。素材のためか研磨痕は不明である。331は、頁岩を石器の素材として用いた有肩の打製石器である。横剥ぎの剥片を用い、最大長16.2cm、最大幅7.7cm、最大厚1.4cm、重さ200gを測る。刃部を欠損しているが扁平で、基部に両面削離により抉りを作り出し、側縁部の調整痕等は認められない。用途としては、土掘り具が考えられる。

⑩ 16号住居跡 (Fig. 57~60, PL. 15)

22号住居跡との最短距離は、4.3mで、15号住居跡まで、7.2m、23号住居跡まで、6.8mを測り、C・D-18・19区のⅡ層中で検出された。

長軸597cm、短軸520（張り出しを含む）cmである。主柱穴は2本で、西側：径50~58cm、深さ69cm、東側：径70~79cm、深さ50cmを測り、心地距離は228cmである。主軸の方位はN-93°-Eをとる。遺構検出面からの深さは86cmで、ベッド状造構まで、66~78cmである。

本住居跡の平面の形状は、基本的には隅丸長方形形状を呈し、北壁は373×82cm、南北隔際は175×65cmの張り出しを認めた。西壁側には45~60×120cm、高さ54~58cmの障壁が検出され、障壁と北西隔際にかけては、207×125cmの切り出しによるベッド状造構を検出し、床面との比高差は約20cmである。北壁張り出しから東側及び南側の壁間にかけては、幅110~180cmの貼り付け調整によるベッド状造構を連続した状態で検出し、床面との比高差は、約8~13cmを測る。床面はV字層で貼り付けによる調整である。南側壁寄りには、110×135cm、深さ約30cmの略円形状の土括を検出し、土括内には、深25cmと28cmの柱穴状の掘込を検出した。

本住居跡内の出土遺物には、壺形土器のくの字状に外反する口縁部の破片や底部が多く、そのほか壺形土器の口縁部、肩部、底部などの破片、鉢形土器の完形成品、磨製石器5点などが埋土中より出土した。床面からの出土は、小破片が多くまとまりはない。

土器 (Fig. 59, PL. 32)

Tab. 14 16号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径( )復原径

番号	回収番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
332	PL 32	壺 口縁部		明茶褐色	Q P L M	直口気味の口縁部で、くの字形に外反し、口縁部裏面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを認め、口縁部上面も凹む。	内・外面とともに機位の刷毛なで、内面は指添は調整後の内面を認める。
333	*	*		暗褐色	Q P L	くの字形に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。口縁部上面も凹む。	外面は斜書き、内面は機位の刷毛なで調整である。
334		*		暗褐色	Q P L H M	くの字形に近く外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。底の付着を認める。	内・外面とともに機位の刷毛なで調整である。
335	PL 32	*		明茶褐色	Q P L	内湾気味の口縁部で、くの字形に外反し、口縁部裏面は凹む。口縁部上面は凹む。三角の断面三角形貼付突起を認す。底の付着を認める。	外面は機位。内面は機位及び斜位の刷毛なで調整である。
336	*	*		黒褐色	Q P L H	くの字形に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。一条の断面三角形貼付突起を認す。底の付着を認める。	外面は斜位及び斜位。内面は指添調整後の刷毛なで調整である。

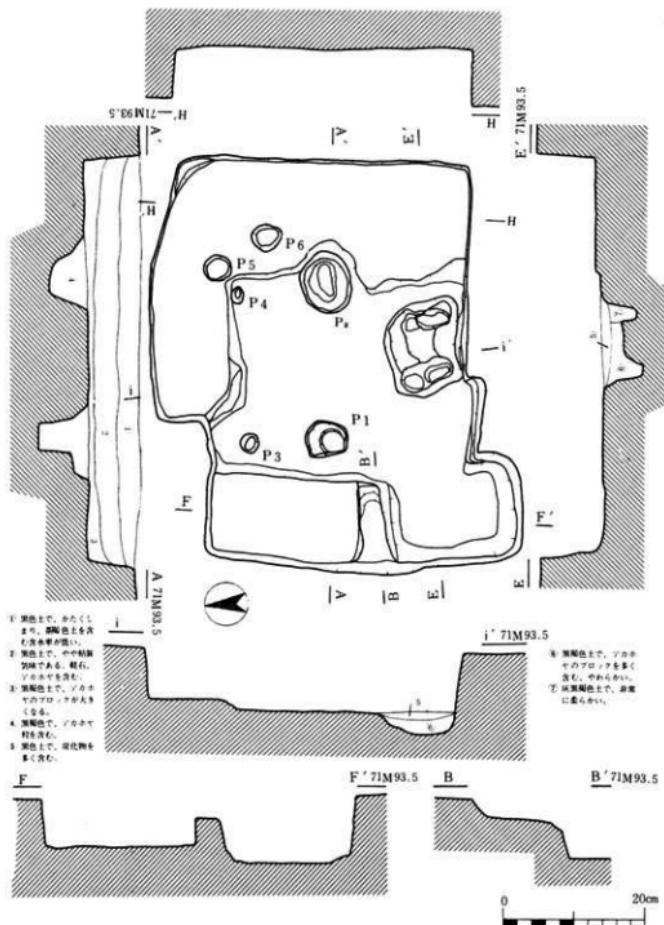


Fig. 57 16号住居跡実測図

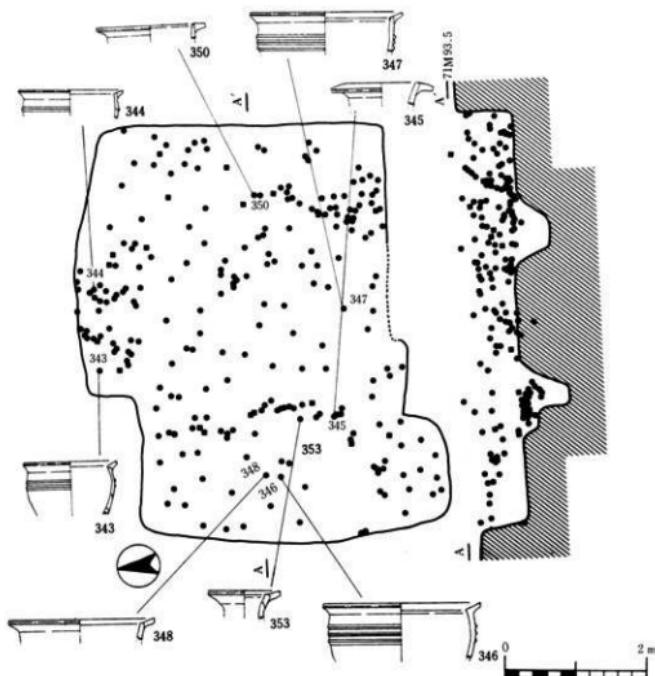


Fig. 58 16号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
337	P. 32	要 口縁部		褐色	Q P.L. H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り 出す。塗の付着を認める。	外側は横位。内面は沿頭圧 調整後横位の刷毛などで調整で ある。
338	*	*		暗茶褐色	Q P.L. H M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。口縁部内側には張り出しをわざ かに作り出す。口縁部上面は凹む。塗の付着 を認める。	内・外側ともに横位の刷毛 内で調整である。
339	*	*		暗茶口縁 部	Q P.L.	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。口縁部内側には張り出しをわざ かに作り出す。塗の付着を認める。	内・外側ともに横位の刷毛 などで調整である。

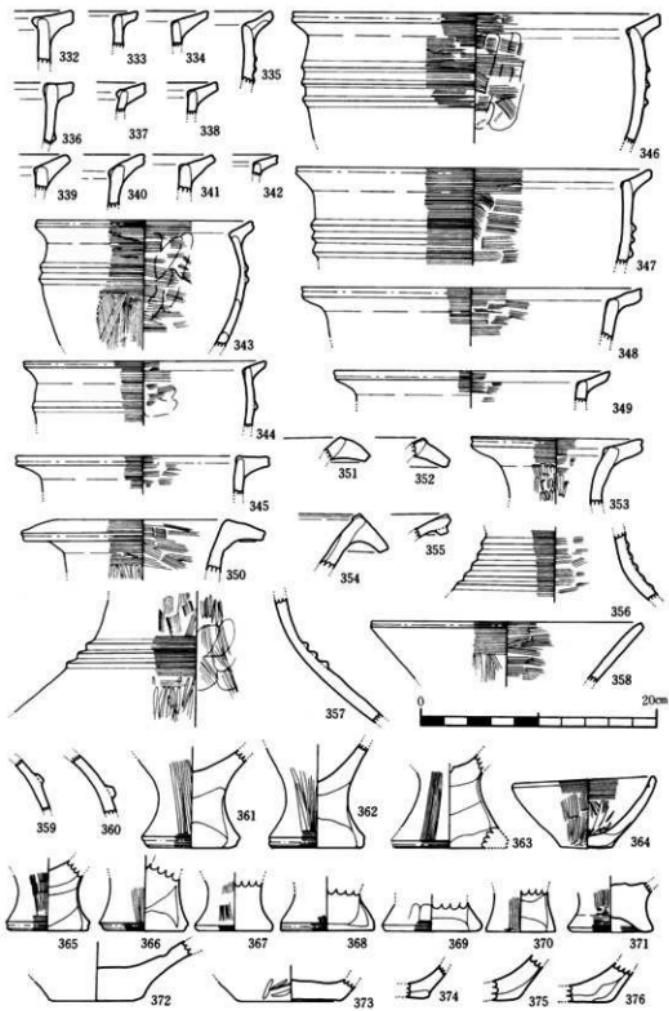


Fig. 59 16号住居跡内出土土器実測図

番号	頭部 番号	基準・部位	法量	色調	胎土	形態の特徴。その他	手法の特徴
340	PL 32	甕 口縁部		明褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。	内・外側とともに横位の刷毛などで調整である。
341	*	*		口縁部	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。口縁部上面は凹む。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は剥落が著しく調整痕は不明である。
342	*	*		明茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。他の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
343	甕 口縁部 胴部	(1)(18.6) (3)(17.4)	茶褐色	Q P L H	脇部は張り、内凹する口縁部である。くの字状に外反し、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には縦を作り出す。一条の正面三角形貼付突帯を認らす。他の付着を認める。	外面は横位、斜位及び斜位、斜位に外反し、口縁部端面はわずかに凹む。内面は指頭圧調整後、横位及び斜位の刷毛などで調整で、輪郭の手法を残す。	
344	PL 32	*	(1)(20.6) (3)(18.6)	暗褐色	Q P L M	内汚気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には縦を作り出す。一条の正面三角形貼付突帯を認らす。	外面は横位。内面は指頭圧調整後、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
345	甕 口縁部	(1)(21.6)	暗褐色	Q P L	逆くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。他の付着を認める。	内・外側とともに横位の刷毛などで調整である。	
346	PL 32	甕 口縁部 胴部	(1)(31.2) (3)(29.0)	暗褐色	Q P L H	内凹する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかに張り出している。三条の正面三角形貼付突帯を認らす。他の付着を認める。	外面は横位。内面は指頭圧調整後、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
347	*	*	(1)(30.2) (3)(27.0)	暗褐色	Q P L	内汚気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側はわずかに張り出している。三条の正面三角形貼付突帯を認らす。他の付着を認める。	外面は横位。内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
348	*	甕 口縁部	(1)(28.8)	暗褐色	Q P L	くの字状に反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。他の付着を認める。	外面は横位。内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
349	*	*	(1)(23.4)	明茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。口縁部上面はわずかに凹む。他の付着を認める。	内・外側は横位の刷毛などで調整である。
350	*	甕 口縁部	(1)(20.6)	褐色	Q P L M	わずかに外反する口縁部である。口縁部の垂れ下り気味に外反し、口縁部端面は凹む。	外面は横位の刷毛などで調整後垂れ下り、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。

番号	因版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
351	PL 32	壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部上面は張らむ。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
352	*	*		黒褐色	Q P L	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部裏面はわずかに凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
353	*	①(14.6)		明褐色	Q P L M	立ち上がりながら外反する口縁部である。多くの字状に近く外反し、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	面は横位の刷毛などで及び斜位の施磨きで、内面は指添圧調整後横位の刷毛などでである。一部に横位の施磨きを認める。
354	*			茶褐色	Q P L M H	大きく外反する口縁部で、垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部内側には断面三角形貼付突部を認める。	外側は横位の刷毛などで後施磨き、内面は剥落し、部分的に横位の刷毛などで調整を認める。
355	*			暗褐色	Q P L H	大きく外反する口縁部である。口唇部は凹む。口縁部外側直下には断面台形状貼付突部を認める。突部裏面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
356	PL 32	壺 肩部		黒褐色	Q P L M	肩部附近で、五条の断面三角形貼付突部を認める。	外側は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
357	*	*		暗茶褐色	Q P L H	肩は張らず立ち上がると思われる器形で、肩部に三条の断面三角形貼付突部を認める。	外側は斜位及び横位の刷毛などで、突部より下を施磨きで、内面は指添圧調整後斜位の刷毛などで調整で、一部施磨きを認める。
358	PL 32	鉢 口縁部		暗茶褐色	Q P L	大きく外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。裏の付着を認める。	外側は横位、斜位及び横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
359	*	壺 胴部		黒褐色	Q P L M	肩部で、断面台形状貼付突部を認めし、突部裏面は凹む。	外側は施磨きで、内面は指添圧調整後斜位の刷毛などで調整である。
360	*	*		暗茶褐色	Q P L M	肩部で、断面台形状貼付突部を認めし、突部裏面は凹む。	外側は施磨きが見られ、内面は横位の刷毛などで調整である。
361	壺 底部	④(8.3)		褐色	Q P L M H	光沢ある脚脚台である。脚は長く、鋭角的には広がらず、脚の裏面は凹んで、凹凸状を呈し、脚の付着を認める。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。

番号	試験番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
362		甕 底部	④(8.1)	暗茶褐色	Q P L H	光実した脚台である。瓶は長く、鋭角的に広がり、瓶の端面は凹んで、円錐状を呈する。	施削りで、瓶端面付近は横位の刷毛などで調整である。
363		*		褐色	Q P L H	光実した脚台である。瓶は長く、鋭角的に広がり、瓶の端面は凹んで、円錐状を呈し、一部欠損する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
364		鉢 完形	①(12.2) ②(6.0) ③(10.2) ④(4.2)	暗褐色	Q P L H	底部は平底で、外方へ開きながら立ち上がり、口縁部をつくる。口唇部は丸味を帯び、口縁部内側には径2mmの円孔が穿かれた。途中まである。	内・外面とともに横位の刷毛などで及び縦位及び斜位の施削を認める。
365		甕 底部	④(7.1)	褐色	Q P L H	光実した脚台である。瓶は短く、鋭角的であるが開きがなく、瓶の端面は凹んで、円錐状を呈する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
366		*	④(7.4)	明茶褐色	Q P L M	光実した脚台である。瓶は短く、あまり開きがなく、瓶の端面は凹んで、円錐状を呈する。	大部分が磨滅しているが、わずかに横位、縦位の刷毛などで調整である。
367	PL 32	*	④6.6	褐色	Q P L M	光実した脚台である。欠損しているため定できないが、瓶は鋭角的であり、瓶の端面は凹んで、円錐状を呈する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
368		*	④(7.9)	褐色	Q P L H	光実した脚台である。欠損しているため定できないが、瓶の端面は凹んで、円錐状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調整で、大半は不明である。
369		*	④(8.4)	茶褐色	Q P L M	光実した脚台である。瓶の端面は丸味を帯び、大半が欠損する。	横位の刷毛などで調整で、大部分は剥落しているため不明である。
370		*	④(5.8)	赤茶褐色	Q P L	光実した脚台である。瓶はほとんど開きは認められない。	縦位の施削を認める。
371		*	④(7.2)	褐色	Q P L	若干あげ底の底部である。瓶は短く、あまり開きがなく、瓶の端面は丸味を帯びる。	横位の刷毛などで及び縦位の施削を認める。
372	PL 32	大甕 底部	④(8.0)	暗茶褐色	Q P L H M	平底のふ厚い底部である。大きく外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。	外面は施削を認め、内面は剥落している。

番号	測定番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
373	PL 32	煮 底部	④8.6	暗褐色	Q P.L. H	平底の底面である。外方へ開きながら立ち上がるとと思われる器形である。	内・外面ともに荒削りを認める。
374	*			灰褐色	Q P.L.	平底の底面と思われる。大半が欠損し、外方へ立ち上がりながら開く器形と思われる。	小破片で構成しているため不明である。
375	*			茶褐色	Q P.L. H	平底の底面と思われる。大半を欠損する。外方へ立ち上がりながら開く器形と思われる。	璇位の刷毛などで調整である。
376	*			暗茶褐色	Q P.L. H	平底の底面と思われる。大半を欠損する。外方へ開きながら立ち上がると思われる。	璇位及び斜位の刷毛などで調整である。

### 石器 (Fig. 60, PL. 35)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鏃 5 点である。377・379・380 は頁岩、378・381 はフォルフェルスを素材として用いている。

377 は、扁平無茎で、基部はわずかに凹み、小形の石鏃である。最大長 1.9cm、最大幅 1.5cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.6g を測り、二等辺三角形状を呈し、両側面ともに直線的に研磨され、両面とも一部を欠損する。研磨を認め、研磨痕を観察する。378 は、扁平無茎で、基部は平坦面を作り出す。最大長 2.4cm、最大幅 1.6cm、最大厚 0.25cm、重さ 1.2g を測り、二等辺三角形状を呈し、片側面と両側面は研磨され、平坦面を作り出し、研磨痕を観察する。379 は、基部を欠損す

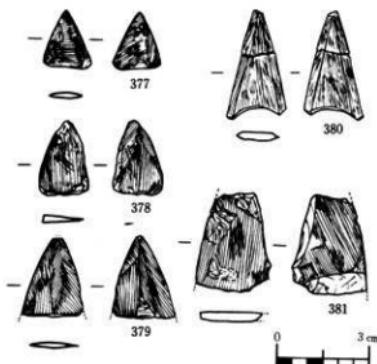


Fig. 60 16号住居跡内出土石器実測図

るが扁平無茎で二等辺三角形状を呈するものと思われる。現存で、最大長 2.6cm、最大幅 2.0cm、最大厚 0.2cm、重さ 1.2g を測る。鏃がはっきりし先端部から基部へつづくと思われる痕跡を認め、両面ともに研磨され、研磨痕を観察する。380 は、扁平無茎で、基部は凹み、二等辺三角形状を呈する石鏃である。最大長 3.6cm、最大幅 1.95cm、最大厚 0.25cm、重さ 2.6g を測り、先端部及び基部片面が欠損している。鏃がはっきりと先端部から基部へつづく。研磨を認め、研磨痕を観察する。381 は先端部、片側面及び基部を欠損するが、扁平無茎の二等辺三角形状を呈するものと思われる。現存で、最大長 3.2cm、最大幅 2.3cm、最大厚 0.3cm、重さ 6.8cm を測り、その遺存状態からみれば大きい石鏃で、両面ともに研磨を認め、研磨痕を観察する。

⑪ 17号住居跡 (Fig. 61, 62, PL. 15)

14号掘立柱建物跡までの最短距離は、2.1mで、18号住居跡まで、7.2m、22号住居跡まで、13.3m、18号住居跡まで、13.8mを測り、B・C・-19、20区のⅡ層中で検出された。

長軸310cm、短軸263cmを測る。床面には柱穴は検出されず、主軸（長軸）の方位はN-88°-Eをとる。遺構検出面からの深さは、約54cmを測る。

本住居跡の形状を呈する。新しい溝により影響を受けて、一部床面まで達する。側壁は比較的しっかりしたもので急傾斜で、新しい溝状の掘込の北側については立ち上がる。床面はⅣ層で、ほぼ中央部に34×38cmの赤茶褐色を呈する焼土と思われる痕跡を認めた。南側壁から東側壁際にかけて、幅8cm、深さ5cmの壁帯溝を検出した。床面は部分的に貼り付けによる調整を認める。南北隔には径：44～51cm、深さ30cmの柱穴を検出し、南側壁際には、73×46cm、深さ34cmの略円形状の土坑を検出した。

本柱跡の出土遺物は、床面からほとんど出土せず、埋土中から甕形土器の口縁部の破片や壺形土器の肩部の破片や大型甕形土器破片が出土した。

土器 (Fig. 62, PL. 16)

Tab. 15 17号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	回数 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 态 の 特 徴 、 そ の 他	手 法 の 特 徴
382	PL 32	甕 口縁部		明茶色	Q P L M H	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出 しを作り出す。口縁部上面も凹む。	内・外面とも横位の刷毛な で調整である。
383		+		暗茶褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。 僅の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛 なで調整である。
384	PL 32	+		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。口 縁部上面は凹む。僅の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛 なで調整である。
385		+		暗茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面は凹む。口縁部内側にわずかに張り出しを 作る。口縁上面は凹む。僅の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛 なで調整である。

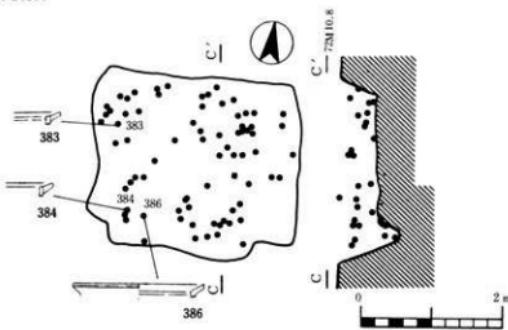
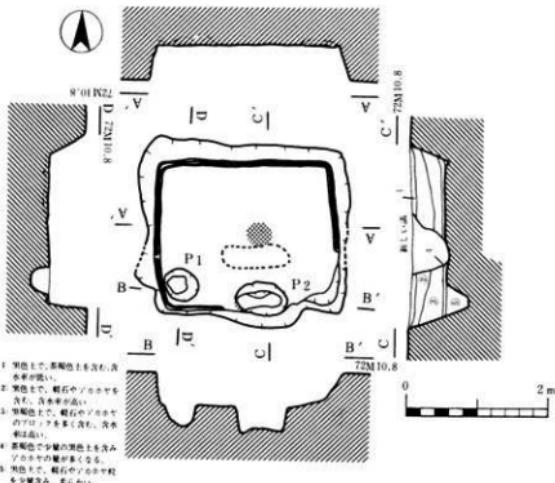


Fig. 61 17号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

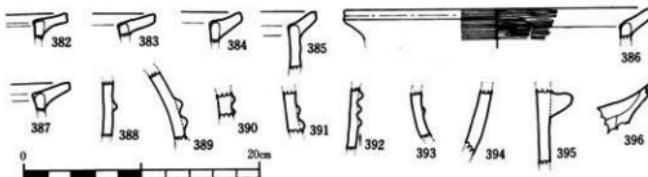


Fig. 62 17号住居跡内出土土器実測図

番号	器種 部位	基種・器部	法量	色調	胎 土	形思の特徴、その他の 付着を記める。	手法の特徴
386	甕 口縁部	①(26.1)		暗茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部は凹む。口縁部内側には板を作り出す。底の付着を認める。	内・外表面とともに横位の刷毛なで調整である。
387	*			茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。底の付着を認める。	内・外表面とともに横位の刷毛なで調整である。
388	PL 32	甕 肩部		褐色	Q P L M	一条の断面三角形貼付突帯を認らす。	外面は横位。内面は斜位の刷毛なで調整である。
389	*	甕 肩部		暗褐色	Q P L M	二条の断面三角形貼付突帯を認らす。	外面は差書きを認め、内面は削減しているため不明である。
390	*	*		黒褐色	Q P L M	小破片のため詳細は不明であるが、二条の断面三角形貼付突帯を認らす。	外面は差書きを認め、内面は削減しているため不明である。
391	*	甕 肩部		暗茶褐色	Q P L M	二条の断面三角形貼付突帯を認らす肩部附近と思われる。	内・外表面ともに横位の刷毛なで調整である。
392	*	甕 肩部		暗褐色	Q P L H	三条の断面三角形貼付突帯を認らす。底の付着を認める。	外面は横位。内面は指頭圧調整後横位の刷毛なで調整である。
393	*	甕 肩部		明褐色	Q P L M	一条の断面三角形貼付突帯を認らす肩部附近と思われる。	外面は横位。横位。内面は横位の刷毛なで調整である。
394	*	?		褐色	Q P L M	器種は不明であるが、いずれかの底部近くの破片と思われる。	外面は斜位及び斜位の刷毛なで調整。内面は削減のため不明である。
395	*	大甕 口縁部 下位		褐色	Q P L M	大甕の口縁部の外側直下の突帯と考えられる。突帯裏面は凹む。	外面は横位の刷毛なで調整で、内面は指頭圧調整痕が残る。
396	*	甕 底部		褐色	Q P L	尖端しているのが底部と思われる。	外面は差削りを認めるが、鮮明さに欠け。内面は不明である。

⑩ 18号住居跡 (Fig. 63~66, PL. 16)

14号掘立住建物跡との最短距離は、1.6mで、24号住居跡まで、1.9m、17号住居跡まで、7.2mを測り、B・C-20・21区のII層中で検出された。

本住居跡は、バイパス建設予定地外へ遺構がのびるため、規模は不詳である。現存している遺構の規模は、676×295~550 (遺存径) cmを測る。遺構検出面からの深さは、約77cmである。

住居跡の平面の形状は、ほぼ円形状を呈するものと思われる。主柱穴は南側路線外へのびているため不明である。遺存する柱穴は6本で、P<sub>1</sub>: 径52~42 (路線外) cm, P<sub>2</sub>: 径52~60cm, 深さ58cm, P<sub>3</sub>: 径42~50cm, 深さ160cm, P<sub>4</sub>: 径44~60cm, 深さ42cm, P<sub>5</sub>: 径56~80 (路線外) cm, 深さ64cm, P<sub>6</sub>: 径31~38cm, 深さ60cmを測り、それぞれの心心距離は、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>: 124cm, P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>: 165cm, P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>: 160cm, P<sub>4</sub>-P<sub>5</sub>: 112cm, P<sub>5</sub>-P<sub>6</sub>: 154cm, P<sub>6</sub>-P<sub>4</sub>: 74cmである。北側壁周縁の一部は、17号住居跡よりのびる新しい溝により影響を受けている。

本住居跡の床面はIV層で、貼り付けによる調整を認めた。壁周縁寄りには、幅約95~130cmの貼り付けによるベッド状遺構を認め、柱穴を取り囲むような状態で、床面との比高差は約9~16cmを測る。住居跡のほぼ中央部は、路線外へのびるが、160×90 (遺存径) cm, 深さ45cmの土壙が検出され、三か所に柱穴状の掘込を認めた。その中には、深さ約50cmを測るものもある。

本住居跡の出土遺物は、床面からの出土はほとんどなく、埋土中より変形土器は、くの字に外反する口縁部の土器破片や底部、壺形土器の破片、鉢形土器などや石器は棒状の叩石が出土した。土埴土上面より棒状のわりと大きい炭化物が認められた。

土器 (Fig. 65, PL. 32)

Tab. 16 18号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	区段 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
397		壺 口縁部 胴部	①(32.6) ③(28.6)	褐色	Q P L M	直線的に立ち上がりながら内湾気味の口縁部で、くの字に外反する。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。三条の断面三角形貼付突唇を施す。薄く窪みの付着を認める。	内・外面とも指振压調整後、外面は横位び伏位、内面は横位及び横位の刷毛などで調整がなされ、外面は一部荒削りを認める。
398	PL 32	*	①(29.9)	茶褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部で、くの字に外反する。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。二条の断面三角形貼付突唇を施す。	外側は横位、内側は指振压調整後横位の刷毛などで調整を認める。
399		*	①(31.2) ③(26.4)	茶褐色	Q P L M	外方気味に立ち上がり、胴部は張らず、内湾する口縁部である。口縁部裏面はわずかに凹む。四条の断面三角形貼付突唇を施す。窪みの付着を認める。	内・外面ともに断面全体に崩落が見られるが、外面は横位、内面は指振压調整後、横位及び横位の刷毛などで認める。

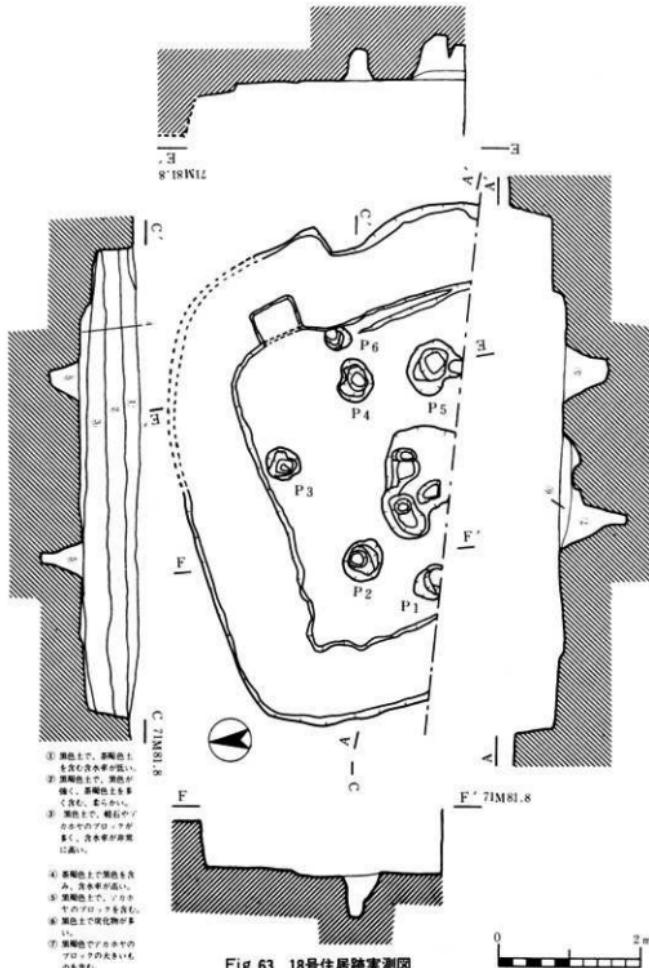


Fig. 63 18号住居跡実測図

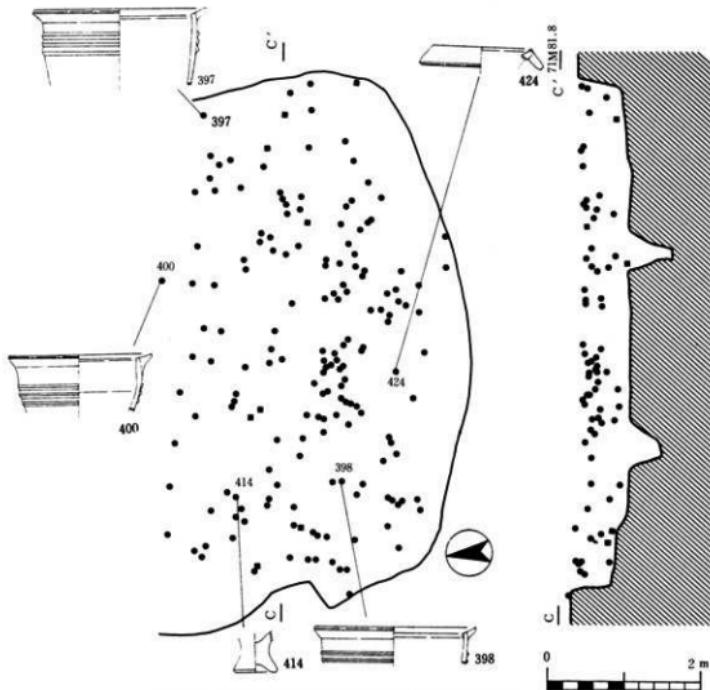


Fig. 64 18号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

番号	因版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
400		甕 口縁部 胴部	①(26.8) ③(22.5)	暗茶褐色	Q P L M	剥離付近より直線的に立ちあがる口縁部で、くの字状に外反する。口縁部裏面は凹む。口縁部内側にはねわかな張り出しを作り出す。 口縁基上面は凹む。三条の断面三角形貼付突審を避らす。塗の付着を認めめる。	外面は指振圧調査後横位及び斜位。内面は横位及び斜位の刷毛などで調査を認める。
401	PL 32	*	①(21.6)	茶褐色	Q P L M	直口する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部裏面は凹む。口縁部内側にはねわかな張り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付突審を避らす。塗の付着を認めめる。	外面は横位及び部分的に斜位。内面は指振圧調査後横位の刷毛などで調査を認める。
402	*	甕 口縁部		暗茶褐色	Q P L H	直口の字状に外反する口縁部で。口縁部裏面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調査を認める。

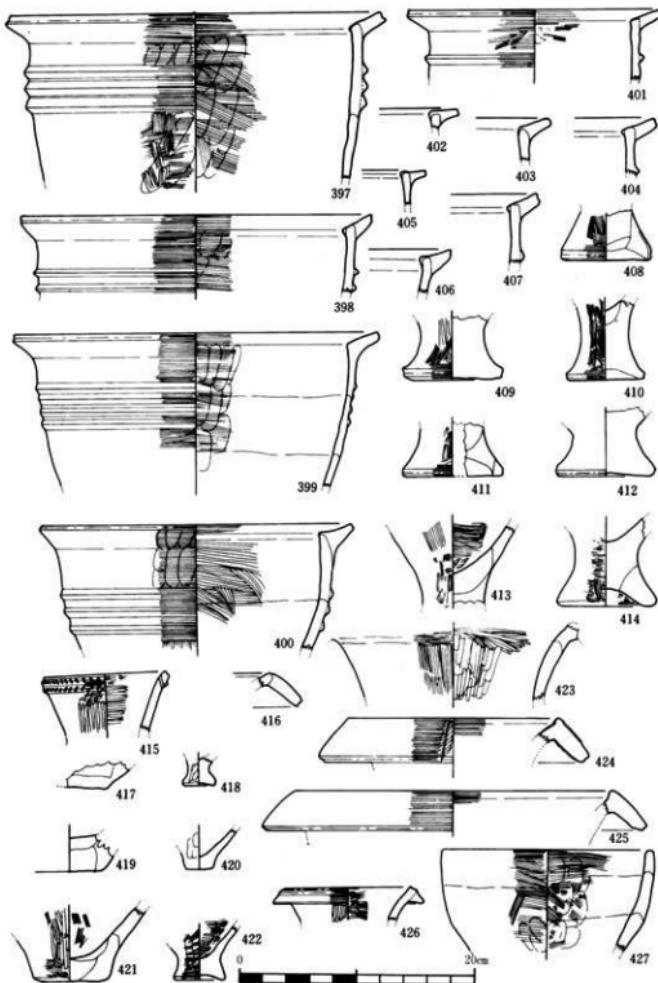


Fig. 65 18号住居跡内出土土器実測図

番号	回数 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴	
403	PL 32	甕 口縁部		黒褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。 口縁部上面は凹む。	外面は横位及び一部斜位。 内面は横位の刷毛などで調整で ある。	
404	*	*		黒褐色	Q	P L M	くの字に外反する口縁部で、口縁部端面は 凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。 口縁部上面もわずかに凹む。一条の断面三角形 貼付突帯を認める。底の付着を認める。	外面は横位。内面は指頭圧 調整後横位の刷毛などで調整で ある。
405	*	*		暗褐色	Q P L M	透し字状に外反する口縁部である。口縁部 端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出 しを作り出す。口縁部上面は凹む。器壁は全 体的に薄く、底の付着を認める。	外面は指頭圧調整後横位。 内面は横位の刷毛などで調整で ある。	
406	*	*		暗茶褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出 しを作り出す。口縁部上面は凹む。底の付着 を認める。	内・外面をもに横位の刷毛 などで調整である。	
407	甕 口縁部			茶褐色	Q P L H M	直口する口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出し を作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を認 める。	内・外ともに指頭圧調整 後横位の刷毛などで調整であ る。	
408	PL 32	甕 底部	①(7.4)	灰褐色	Q P L H	光実した脚台である。脚は短かく、あまり 広がりがなく、脚の端面は凹んで、凹縫状を 呈する。	横位及び横位の刷毛 などで調整である。	
409	*	*	④8.6	茶褐色	Q P L H	光実した脚台である。脚は長く、鋸歯的に 広がり、脚の端面は凹んで、凹縫状を呈する。	横位、斜位及び斜位の刷毛 などで調整である。	
410	*	*	④(6.6)	茶褐色	Q P L H	光実した脚台である。脚は非常に長く、鋸 歯的であるが、あまり広がりがなく、脚の端 面は凹んで、凹縫状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調 整である。	
411	*			茶褐色	Q P L	光実した脚台である。脚は鋸歯的に広がり、 脚の端面は凹んで、凹縫状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調 整である。	
412	PL 32	*	④8.4	茶褐色	Q P L M	光実した脚台である。脚は短かく、鋸歯的 に広がり、脚の端面は凹んで、凹縫状を呈する。 底面中央膨付部は若干凹む。	器面全体に削減や剥落を認 めの不明である。	
413	*			茶褐色	Q P L M	光実した脚台のつく底部附近と考えられる。 内面に底の付着を認める。	外面は削落しているもの の横位及び斜位、内面は横位の 刷毛などで調整である。	

番号	回収 年号 多号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
414	PL 32	甕 底部		褐色	Q P L M	若干あげ底の底部である。縁は長く、鋸角的に広がり、縁の端面は丸味を帯びる。内面には係の付着を認める。	横位及び斜位の刷毛なで調整である。一部、底面にも刷毛なでを認める。
415	*	甕 口縁部		暗茶褐色	Q P L	直線的に外反する口縁部で、口縁部は凹む、口縁部直下に背面三角形黏付突起を認らす。口縁部外側と裏面とそれ斜行する刻みを認める。現在で2ヶ所に美帶直下からと口縁部内側より2×2mmの円孔を穿つ。外面の一部には丹を認める。	外面は、横位及び斜位のなでや横位の差削りを認め、内面は横位の刷毛なで調整である。
416		*		茶褐色	Q P L M	大きく重ね下がり外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側内傾には、わずかな張り出しを作り出す。	内・外ともに横位の刷毛なで調整である。
417		甕 底部		茶褐色	Q P L M H	小破片のための不詳であるが、平底の底部である。	小破片のため不明であるが、一部に刷毛なで調整を認める。
418	手捏ね土器			茶褐色	Q P L M	手捏ね土器の底部で、若干あげ底である。縁はごく短く、鋸角的に広がり、縁の端面は丸くなる底部である。	指添圧調整痕を一部に残す。
419	大甕 底部			茶褐色	Q P L	破片のため定めないが、平底の厚さから大型彫形土器のものと思われる。	調整痕は不明である。
420	PL 32	手捏ね土器 底部	④2.2	暗褐色	Q P L	平底の小さな底部で、底部より外方へ立ち上がりながらのびる器形と思われる。	指添圧調整痕を残す。
421	*	甕 底部	④6.4	暗茶褐色	Q P L H	平底の底部で厚く、外方へ立ち上がりながらのびる器形と思われる。	外面は横位の刷毛なで及び薬剤を認める。内面は刷毛なで調整を一部に認める。
422	* 手捏ね土器 底部		④2.8	灰褐色	Q P L	若干あげ底の小さい底部で、縁は短かくあまり広がりがなく、縁の端面は丸くなる。底部より外方へ立ち上がりながらのびる器形と思われる。	外面は指添圧調整痕を残し、横位及び斜位のなで、内面に横位の刷毛なで調整を認める。
423	甕 口縁部 頸部			茶褐色	Q P L M	外側へ大きく外反する器形と思われ。口縁部の一部を欠損する頸部である。	外面は、横位及び斜位の刷毛なで、内面には指添圧調整痕を残し、薬剤を認める。
424	甕 口縁部			茶褐色	Q P L M	大きく重ね下がり外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。内・外ともに刷毛を認める。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外とも横位の刷毛なで調整で、外窓の一部に薬剤を認める。

番号	試験番号	器種・器部	法 番	色 調	胎 土	形態の特徴、その他の	手法の特徴
425		甕 口縁部	①(23.8)	茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には、張り出しを作り出す。口縁上面は幅広い。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
426	PL 32	*	①(12.9)	暗茶褐色	Q P L M	口縁部は外反する。口縁部外側には断面三角貼付余裕を残し、口縁部を作り出す。口縁部裏面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
427	*	砵 口縁部 胴部	①(18.0)	暗褐色	Q P L H	外方へ開きながら立ち上がり、外傾気味の口縁部である。口縁部裏面は、丸味を含む。	外面は、横位及び斜位の刷毛などで、胴部より下位は断面三貼付余裕を残す。内部は、折衷調整で後横位及び斜位の刷毛などである。輪積みの方法を残す。

### 石器 (Fig. 66, PL. 36)

本住居跡出土の石器は、棒状の叩石がみられる。428は、安山岩を石器の素材に用いている。最大長12.8cm、最大幅、4.0cm、最大幅3.5cm、重さ252g、器面全体を研磨を認め、部分的に研磨痕を観察する。上下端面には敲打によるためか剥離痕を認めることから叩石としての用途が考えられる。

### ⑨ 19号住居跡 (Fig. 67~71, PL. 16)

22号住居跡との最短距離は、3.5mで、11号掘立柱建物跡まで、4.2mを測り、E・F-18区のII層中で検出された。

長軸554cm、短軸405cm（ともにベッド状張り出し部を含む）を測る。主軸の方位は、N-78°-Eをとる。主柱穴は2本で、西側：径44~46cm、深さ56cm、東側：径38~46cm、深さ44cmを測り、心心距離は180cmである。遺構検出面からの深さは65cm、ベッド状遺構まで約50~58cmを測る。

本住居跡の平面の形状は、基本的には隅丸方形を呈し、南西隅、北側及び東側には、ベッド状張り出しを認めた。南西隅には、100~110×65cm、北側には、205~215×75~80cm、東側には、215~222×75cmを測り、それぞれの壁際には、幅100~130cmの貼り付け調整によるベッド状遺構を検出し、床面との比高差は約7~15cmである。南西隅壁際のベッド状遺構床面には、幅10~16cm、深さ約6cmの壁帯溝を検出した。床面はV-a層で、貼り付け調整を認めた。南側壁際には、98×80cm、深さ30cmを略円形状の土壙を検出した。床面及びベッド状遺構上面に台

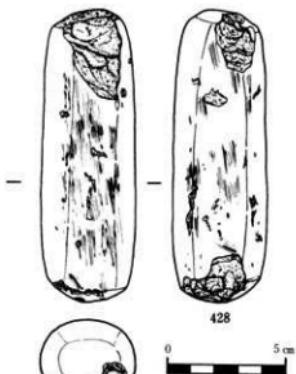


Fig. 66 18号住居跡内出土石器実測図

石と思われる3個の平坦面をもつ柱状の石を認め、ベッド造構上のものは傾斜した状態で検出された。

本柱居跡内の出土遺物は、大型壺形土器、壺形土器の破片や磨製石鎌・砥石などである。壺形土器は、口縁部の形状がくの字状に外反する破片が主体で、逆し字状に外反する小破片も認めた。壺形土器は、口縁部の小破片や肩部の破片、大型壺形土器は、口縁部を欠くが、口縁部付近の破片である。住跡床の床面からの出土はあまりなく、土器小破片を含めて埋土中からの出土が多い。また土塙内埋土上位より炭化物を多く認めた。

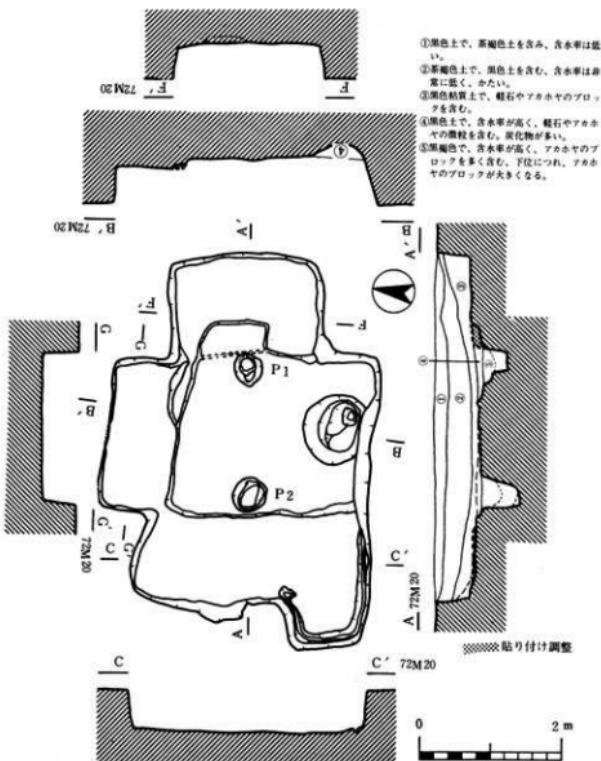


Fig. 67 19号住居跡実測図

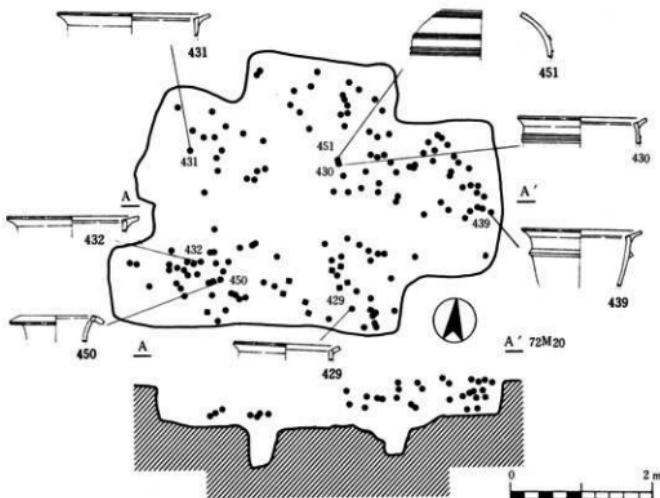


Fig. 68 19号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

土器 (Fig. 69, PL. 32)

Tab. 17. 19号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	団組 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴 、 そ の 他	手 法 の 特 徴
429	PL 32	甌 口縁部	①(21.2)	黒褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には、縦を作り出す。口縁部上面はわずかに凹む。甌の付着を認め。	内・外側ともに横位の刷毛などで調整である。
430	*	*	①(25.4)	暗茶褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部裏面はわずかに凹む。口縁部内側には、張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。二条の断面三角形筋付突起を認め。甌の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
431	*	*	①(30.5)	茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には、張り出しを作り出す。甌の付着を認める。	内・外側ともに横位の刷毛などで、内面の一部に斜位の刷毛などで調整を認める。
432	*	*	①(26.4)	暗褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には、張り出しを作り出す。甌の付着を認める。	内・外側ともに横位の刷毛などで調整である。

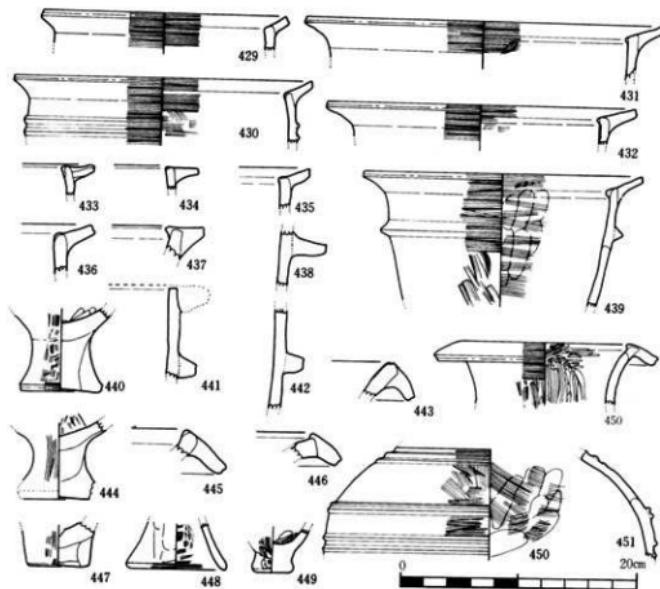


Fig. 69 19号住居跡内出土土器実測図

番号 試験 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
433 32	P. 口縁部		暗褐色	Q P.L	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部前面 は円む。口縁部内側には、わずかに張り出し を作り出す。口縁部上面は円む。僅の付着を 認める。	外面は横位の刷毛などで調整 され、内面は施削りを認める。
434	*	*	暗褐色	Q P.L	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部前面 は円む。口縁部内側には、わずかに張り出し を作り出す。口縁部上面は円む。僅の付着を 認める。	内・外表面ともに横位の刷毛 などで調整である。
435	*	*	暗褐色	Q P.L	くの字状に外反する口縁部で、口縁部前面 は円む。口縁部内側には、わずかに張り出し を作り出す。口縁部上面は円む。僅の付着を 認める。	内・外表面ともに横位の刷毛 などで調整である。
436	*	*	暗茶褐色	Q P.L M H	くの字状に外反する口縁部で、口縁部前面 は円む。口縁部上面は円む。口縁部内側に棱 を作り出す。	外面は横位の刷毛などで、一 部は施削りで、内面は削減して いるため不明である。

番号	品目 試験 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
437		壺 口縁部		褐色	Q P <sub>L</sub> M	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛なで調整である。
438	PL 32	大・壺 口縁部 下位		灰褐色	Q P <sub>L</sub> H	口縁部外側直下の突帯である。突帯端面は凹む。	外面は横位の刷毛なで、突帯下は横位の削取り、内面は縦位及び斜位の削取りを認められる。
439	*	壺 口縁部 胴部	①(23.7) ③(18.9)	茶褐色	Q P <sub>L</sub>	外側に直線的に立ち上がりながら外輪気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出してを作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を認める。器壁は全体的き薄い。	外面は、横位及び斜位の刷毛なで、内面は削除後調整後斜位。横の刷毛なで調整である。
440	*	壺 底部	④(17.0)	茶褐色	Q P <sub>L</sub> H	光実した脚台である。脚は長く、鋸角的に広がり、瓶の端面は凹んで、凹穂状を呈する。底面中央部は若干凹む。	削減のためか薄い斜位及び縦位の刷毛なで調整を認められる。
441	*	大・壺 口縁部		黄茶褐色	Q P <sub>L</sub>	直口気味の口縁部である。口縁部は貼付部より削離している。口縁部外側直下には断面台形状貼付突帯を認らし、突帯端面は凹む。突帯下面端に粗粒の圧痕を認める。	外面は横位の刷毛なで、内面は施磨きを認める。
442	*	大・壺 口縁部 下位		黄褐色	Q P <sub>L</sub>	若干内輪気味の口縁部を作り出すと思われる器形で、口縁部外側直下には断面台形状貼付突帯を認らし、突帯端面は凹む。器の付着を認める。	内・外面ともに施磨きを認める。
443	*	壺 口縁部		茶褐色	Q P <sub>L</sub> M	重れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。	口縁部内側は、剥落が著しく、口縁部上面は、施磨きを認め、口縁部下面は、横位の刷毛なで調整である。
444	*	壺 底部		明茶褐色	Q P <sub>L</sub> H	光実する脚台である。脚は長く、鋸角的な広がりが考えられる。瓶の端面は欠損しているため不明である。底面中央部が若干凹む。	外面は、縦位の刷毛なで、内面は、裏削りを認める。
445	*	壺 口縁部		明茶褐色	Q P <sub>L</sub> M H	重れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面とも縦位の刷毛なで調整である。
446	*	*		明茶褐色	Q P <sub>L</sub> H	重れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は、一部に裏削り、内面は、横位の刷毛なで調整である。
447	*	壺 底部	④(5.2)	暗茶褐色	Q P <sub>L</sub>	光実した底部である。小型の底盤で、瓶は丸味を帯びる。斜形土器の脚台を思われるような器形である。	縦位の刷毛なで調整である。

番号	実物 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他の	手法の特徴
448		高杯 脚部	④ 8.6	黄茶褐色	Q P L H	高杯形土器の脚部の裾部付近と思われる。縁はあまり開かず、端面は丸味を帯びる。	外面は、指面に調整痕が残る。椎位の削毛などで、内面は椎位及び斜位の削毛などで調整である。
449	PL 32	手捏ね 土器	④ 3.6	明褐色	Q P L H	平底の底部である。縁はほとんどなく、端面は丸味を帯びる。外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。	指面は調整後斜位の削毛などで調整を認める。
450	PL 33	壺 口縁部	①(19.0)	茶褐色	Q P L H	頭部より大きく外反し、口縁部は垂れ下り気味に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は、椎位の削毛などで及ぼす位置及び斜位の差異を、内面は、椎位、斜位及び複数の差異を認める。
451	*	壺 肩部 (1) 胸部	③(28.0)	茶褐色	Q P L M	底部から肩部にかけての部位で、肩部には三つの断面三角形點付突起を残らす。側面よりや上位には、断面台形状點付突起を残らし、肩部付近には二条の断面三角形點付突起を残らす。	外面は剥離り、内面は側面三つの断面三角形點付突起を残らす。側面よりや上位には、断面台形状點付突起を部分的に認め、剥落も美しい。

### 石器 (Fig. 70, 71, PL. )

本住居跡内の石器は、磨製石鏡2、磨製石器、石刀である。452・453は、扁平無茎の磨製石鏡で、先端部及び片側基部は欠損している。その残存の形状から基部は四み、二等辺三角形

を呈するものと思われる。鏡がはつきりし、両面ともに両側寄りに認め、基部まで続いている。452は頁岩を素材に用い、最大長21cm、最大幅2.0cm、最大厚0.3cm、重さ1.7gを測る。453は頁岩を素材に用い最大長1.7cm、最大

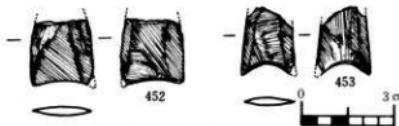


Fig. 70 19号住居跡内出土石器実測図 (1)

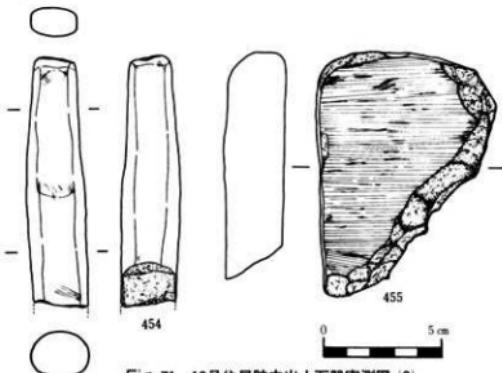


Fig. 71 19号住居跡内出土石器実測図 (2)

幅1.7cm、最大厚0.3cm、重さ0.7gを測る。454は、細粒砂岩を石器の素材とした磨製の石器である。先端部が欠損し、用途は不明である。最大長10.5cm、最大幅2.5cm、最大厚2.2cm、重さ70gを測り、器面全体に研磨を認め、部分的に研磨痕を観察する。455は、粗粒砂岩を石器の素材とした砥石で、一部を欠損する。最大長7.6cm、最大幅9.9cm、最大厚2.7cm、重さ310gを測り、片面のみの研磨であり、部分的に研磨痕を観察する。

#### ㉙ 20号住居跡 (Fig. 72~74, PL. 17)

5号・6号掘立住建物跡との最短距離は4.5mで、9号掘立住建物跡まで、5m、7号掘立住建物跡まで、7.7m、21号住居跡まで、8.1mを測り、B-15区のⅡ層中及びⅢ層最下面で検出された。

長軸306m、短軸250mを測り、主軸（長軸）の方位はN-107°-Eをとる。住居跡のほぼ中央部には、主柱穴1が認められ、径36~37cm、深さ70cmである。柱穴内には、径14~16cmの柱痕跡を検出した。遺構検出面からの深さは、5~35cmを測る。

本住居跡の平面の形状は、隅丸方形を呈し、南側壁は若干外側へ張り丸味を帯びる。西壁及び北壁は、Ⅲ層中の生活面と想定される所で、大半は、Ⅲ層最上面近くでの検出で、小型の浅い住居跡である。床面はⅢ層及びⅣ層上面で、主柱穴のほかに、南西隅、北西隅、北東隅のそれぞれに柱穴を検出した。P<sub>1</sub>: 径20~23cm、深さ8cm、P<sub>2</sub>: 径23~25cm、深さ5cm、P<sub>3</sub>: 径23~37cm、深さ26cmを測り、P<sub>3</sub>は斜めの掘込である。南側壁中央には74×52cm、深さ11cmの略円形状の土壙を検出した。

なお、本住居跡内の出土遺物は、埋土中より甕形土器、鉢形土器などの破片や磨製石鏡が出土した。甕形土器には、口縁部がくの字状に外反するものが多く、小破片のみである。壺形土器には、口縁部が重ね下り気味に外反するもので、口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らすものや二叉状口縁部をもつ破片で内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。また、床面には棒状の炭化物を認めた。

#### 土器 (Fig. 73, PL. 33)

Tab. 18 20号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 複原径

番号 器種 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴 、 そ の 他	手 法 の 特 徴
456 PL. 33	甕 口縁部	①(26.9)	暗茶褐色	Q P.L. 砂粒	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。僅の付着を認める。	内・外面とともに棱位の網目なで調整を認める。
457	*	①(26.3)	暗褐色	Q P.L. H	大きくくの字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側に張り出しを作る。僅の付着を認める。	内・外面とともに棱位の網目なで調整を認める。

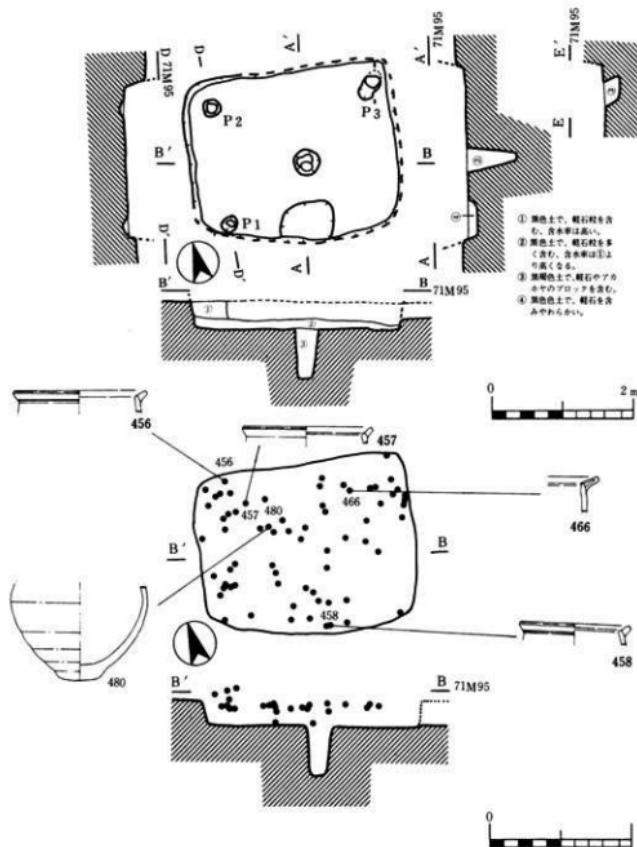


Fig. 72 20号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

番号	固形 区分	器種・基部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
458 33	PL 口縁部	甕	①(22.2)	明茶褐色	Q P.L.	内薄気味の口縁で、くの字状に外反する。 口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。口縁部外側には二条の沈線を残す。	外面は削減して不明で、内面は、横位の削位の崩毛などで調整である。

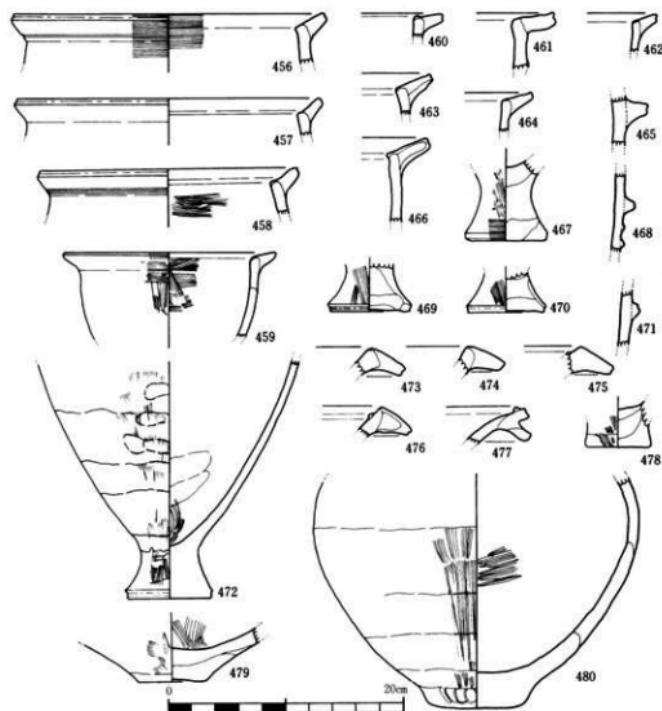


Fig. 73 20号住居跡内出土土器実測図

番号	式数 器種・器品	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
459	PL 33 口縁部 脚部	①(18.2) ②(15.0)	暗褐色	Q P.L	外方へ開きながら立ち上がり、直口気味の口縁部で、逆L字状に近く外反する。口縁部端面は大きくなる。底の付着を認める。	外表面は、横位、斜位及び縱位。内表面は、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
460	＊ 受 口縁部		暗褐色	Q P.L	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。底の付着を認める。	内・外表面ともに横位の刷毛などで調整である。

番号	国版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
461	PL 33	大・甕 口縁部		茶褐色	Q P L H	達し字状に外反する。口縁部内側に瘤を作り出す。口縁部上面は長い器形である。	外面は指頭圧調整後横位。 内面は横位の刷毛などで調整である。
462	*	甕 口縁部		明茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。瘤の付着を認める。	外面は横位。内面は指頭圧調整後、横位の刷毛などで調整である。
463		*		茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。瘤の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛などで調整である。
464	PL 33	*		明茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部裏面はわずかに凹む。瘤の付着を認める。	外面は横位。内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
465		大甕 口縁部 下位		明茶褐色	Q P L H	口縁部側面直下につく断面台形状貼付突帯で、突帯裏面は凹む。	外面は横位。内面は斜位の刷毛などで調整である。
466	PL 33	大甕 口縁部		明茶褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。口縁部上面は、長い器形である。瘤の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛などで調整である。
467		甕 底部	④ 7.0	褐色	Q P L M	光実した舞台である。瘤は長く、鋭角的であるが広がらず、瘤の裏面はわずかに凹んで、深い凹状を呈する。	横位及び横位の刷毛などで調整である。
468		甕 胴部		茶褐色	Q P L H M	胴部付近、断面台形状貼付突帯を一条通らし、突帯は凹む。突帯下位には二条の断面三角形貼付突帯を通らす。	内・外面とともに横位の刷毛などで調整である。
469		甕 底部	④ 7.1	褐色	Q P L H	光実した舞台で、一部欠損する。瘤は短かく、鋭角的に広がり、瘤の裏面は凹んで、凹錐状を呈する。底面は若干凹む。	斜位の刷毛などで調整である。
470		*		褐色	Q P L M	光実した舞台で、一部欠損する。瘤は短かく、鋭角的であるが、あまり広がりがなく、瘤の裏面は凹んで、凹錐状を呈する。底面は若干凹む。	斜位の刷毛などで調整である。
471		甕 胴部		暗茶褐色	Q P L H M	變形土器の胴部付近で、一条の断面三角形貼付突帯を通らし、突帯裏面は凹む。	内・外面とともに荒削りを認める。

番号	国版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
472	PL 33	甕 底部	④ 7.3	暗褐色	Q P L H	光亮した脚台で、腹は短かく、鋭角的で広がりがなく、底の腹面は凹み、円錐状を呈する。 底部より外方にへき離的に立ち上がる器形である。	外面は粗面仕上げ後斜位及び粗粒化、内面は磨滅が新しいが、斜位の刷毛などで調整である。
473	*	甕 口縁部		暗褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部腹面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
474	*	*		暗茶褐色	Q P L H M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部腹面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
475	*	*		暗茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部腹面は凹む。口縁部内側には、一条の前面三角形貼付突帯を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
476	*			茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部腹面は凹む。わずかに凹む。口縁部内側には、一条の前面三角形貼付突帯を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
477	*			褐色	Q P L M	大きく外反する口縁部である。口縁部腹面は凹む。口縁部外側直には突帯を認める。突帯腹面は凹む。口縁部は二叉状を呈する。口縁部内側には一条の前面三角形貼付突帯を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
478	鉢 底部	④ 5.4		暗茶褐色	Q P L	光亮した脚台である。腹は短かく、ほとんど広がらなく、底の腹面はわずかに丸味を帯びる。	表面に調整後斜位の刷毛などで調整である。
479	大・甕 底部	④ 5.8		暗茶褐色	Q P L H	平底の底部で、若干中央部が凹む。外方へ大きく開きながら立ち上がる器形と思われる。鋸がはっきりし先端部より基部へづく、研磨痕を認める。	外側の斜位の刷毛などで調整で、内面は磨削りを認める。
480	甕 胴部 底部	③(27.4) ④ 8.4		暗茶褐色	Q P L	底部は平底で、外方へ大きく開きながら立ち上がり。胴部が若干張る器形である。	内・外面ともに削離や磨滅を認め、外側は斜位の刷毛などでである。また、磨削を部分的に認める。内面も一部に斜位の刷毛などで認める。

### 石器 (Fig. 74, PL. 35)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鎌である。481は紫頁岩を石器の素材とした扁平無茎で、基部は凹み、先端部及び片脚部は欠損するが、二等辺三角形状を呈するものと思われる。鎌がはっきりし先端部より基部へづく、研磨痕を認める。最大長2.4cm、最大幅2.4cm、最大厚の3cm、重さ2gを測る。

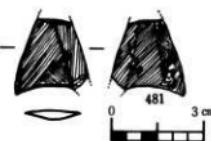


Fig. 74 20号住居跡内出土石器実測図

㉙ 21号住居跡 (Fig. 75~77, PL. 17)

5号、6号掘立柱建物跡との最短距離は、5.6mで、20号住居跡まで、8.1m、中央区溝状構まで、0.3mを測り、B-13・14区のⅡ層中で検出された。

住居跡の大半は、バイパス建設予定地外へ遺構がのびるため、その規模は不詳である。遺存する遺構の規模は、長軸500cm、短軸200mを測る。遺構検出面からの深さは、55cmで、ベッド状遺構まで39cmである。

本住居跡の平面の形状は、遺存する遺構では不明である。しかし、北側には232×140cmの略長方形の張り出しを認めた。張り出し部には、貼り付け調整によるベッド状遺構を検出し、床面との比高差は16cmである。床面はV字層で、貼り付け調整を認め若干軟質である。ベッド状遺構には、径52×36cm、深さ86.6cmの柱穴を認めた。

本住居跡内出土の遺物は、床面からの出土はほとんどなく、埋土中より大型壺形土器、壺形土器（復原完形品を含む）、壺形土器などの破片が出土した。壺形土器の完形品は埋土中より一括して出土した。このほか、口縁部の形状が大きくてくの字状に外反する土器破片が床面近くから出土した。壺形土器には、口縁部の形状が二叉状口縁を呈するものや肩部から肩部にかけての破片を多く認めた。

土器 (Fig. 76)

Tab. 19 21号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量単位cm ①口径②器高③復原口径④底部( )復原径

番号	回収 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
482	PL 33	壺 口縁部		茶褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部裏面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付突起を巡らす。	外面は横位。内面は前頭位 調整後横位。新位の刷毛などで調整である。
483	+	+		暗茶褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部と思われ、くの字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。僅の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛などで調整である。
484		+		暗褐色	Q P L M H	逆くの字状に外反する口縁部で、口縁部裏面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。僅の付着を認める。	外面は横位。内面は前頭位 調整後横位の刷毛などで調整である。
485		+		暗褐色	Q P L H	逆くの字状に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。僅の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛などで調整である。

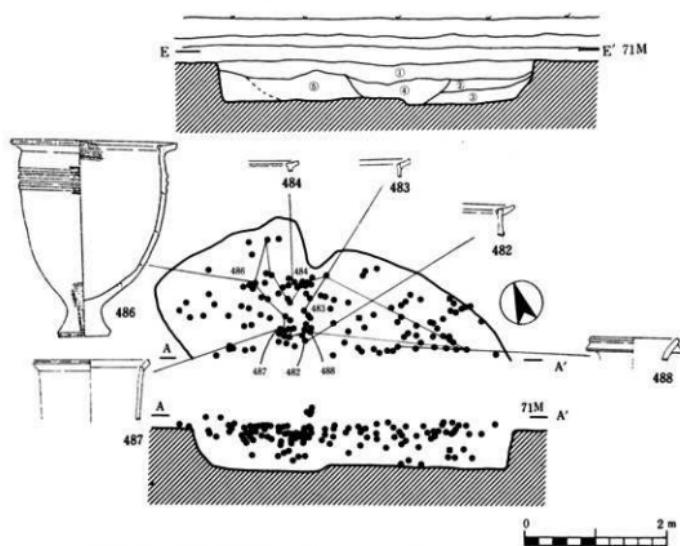
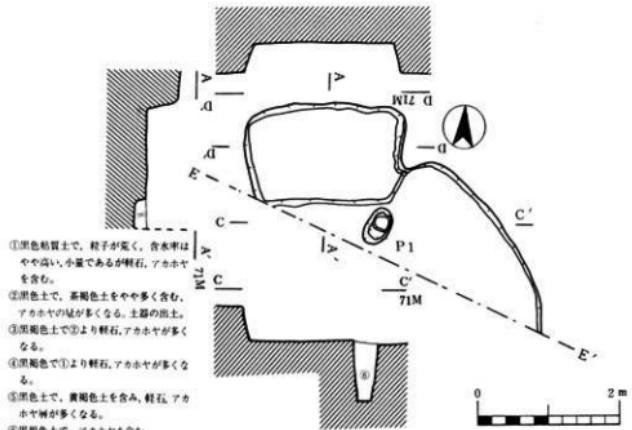


Fig. 75 21号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

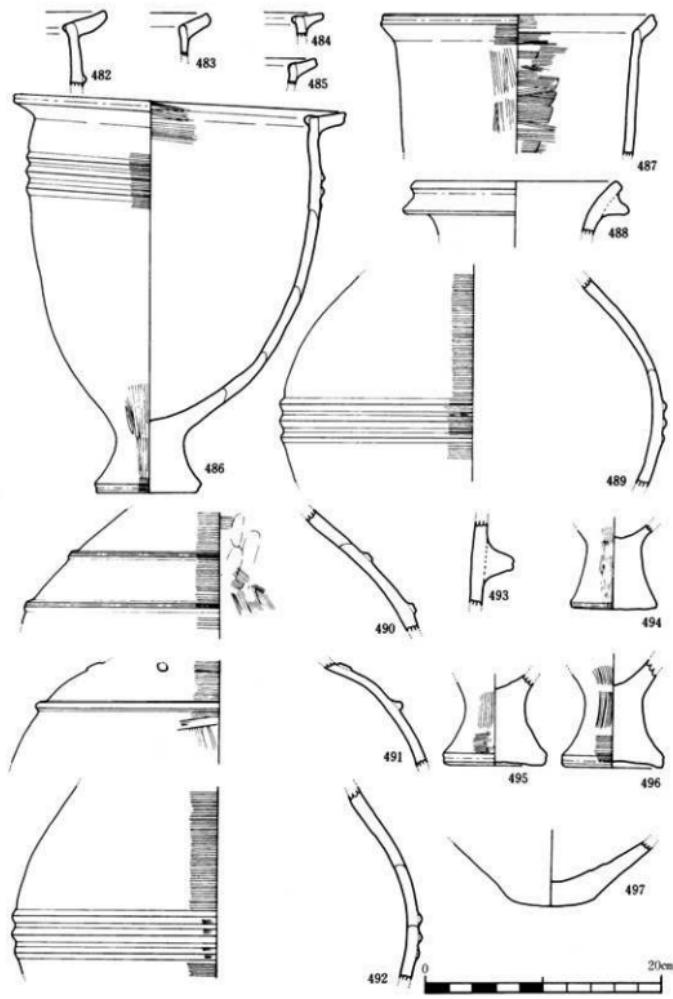


Fig. 76 21号住居跡内出土土器実測図

番号	品目番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
486	PL 33	甕 宍形	①(28.3) ②33.2 ③(26.2) ④9.0	暗茶褐色	Q P.L. M	光美した脚台で、外方へ開きながら立ち上がり、やや長脚化した脚部を呈し、やや内傾する様部で、遂に平底に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作れる。 三条の断面三角形貼付突帯を施らす。窓の付帯を認める。	内・外面はほとんど磨滅を認めが、外面は横位、斜位、内面は横位。斜位の刷毛などで調整はある。
487	◆	甕 口縁部 肩部	①(23.3) ③(20.0)	暗茶褐色	Q P.L. M	直口茶碗に立ち上がる口縁部で、大きいくらいに外反する。口縁部端面は凹む。窓の付帯を認める。	内・外面ともに断面圧調整後、外面は横位、斜位、内面は横位の刷毛などで調整である。
488	◆	甕 口縁部	①(17.8)	茶褐色	Q P.L. M	外反する口縁部で、口縁部外表面下に突帯を施らし、突帯端面は丸味を帯びる。口縁部が二叉状を呈する。	内・外面ともに磨滅が認められ、調整痕は不明である。
489	◆	甕 肩部	③(32.4)	茶褐色	Q P.L. M	瘤状に近い器形で、肩部はあまり張らず、三条の断面三角形貼付突帯を施らす。	外は磨滅が美しいが、わずかに横位の刷毛などで認め、内面は剥落が著しく不明である。
490	◆	甕 肩部		茶褐色	Q P.L. M	肩部と脚部上位付近と思われる部位で、それそれに一組の断面台形状貼付突帯を施らす。突帯端面は凹む。	外は横位、内面は断面圧調整後横位。斜位の刷毛などを認める。
491		◆		暗茶褐色	Q P.L. M	肩部付近と思われる。現存で1個の円形浮文を認める。一組の断面台形状貼付突帯を施らし、突帯端面は丸味を帯びる。	外は磨滅が美しいが横位、斜位の刷毛などで調整してある。
492	PL 33	甕 肩部 脚部		茶褐色	Q P.L. M	肩部は張らず、肩部から脚部にかけての部位で、脚部には三条の断面三角形貼付突帯を施らす。	外は磨滅が著しいが横位、脚部の刷毛などで調整で、内面は剥落が著しく不明である。
493	◆	大甕 口縁部 付近		赤茶褐色	Q P.L. M	口縁部外側底下的断面台形状貼付突帯で、突帯端面は凹む。	外は横位。内面は横位などが主体で、一部窓位の刷毛などで調整である。
494	◆	甕 底部	④7.3	暗褐色	Q P.L. M	光美した脚台である。甕は長く、縱角的に広がり、甕の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面は若干凹む。	窓位及び斜位の刷毛などで調整である。
495	◆	◆	④8.8	灰茶褐色	Q P.L. M	光美した脚台である。甕は長く、縱角的に広がり、甕の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面は若干凹む。	窓位、斜位及び横位の刷毛などで調整である。
496	◆	◆	④8.6	明茶褐色	Q P.L. M	光美した脚台である。甕は長く、縱角的に広がり、甕の端面は凹んで、凹線状を呈する。若干底面は凹む。	窓位及び窓位の刷毛などで調整である。
497		甕 底部	④7.0	茶褐色	Q P.L. M	平底の底部である。外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形である。	内・外面ともに磨滅や剥落のため調整痕は不明である。

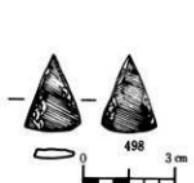


Fig. 77 21号住居跡内出土石器実測図 (1)

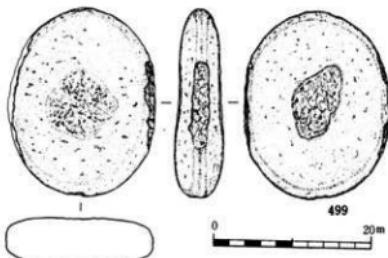


Fig. 78 21号住居跡内出土石器実測図 (2)

#### 石器 (Fig. 77, 78, PL. 53, 36)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鎌と叩石である。498は、フォルンフェルスを石器の素材として用い、扁平無茎で、最大長2.5cm、最大幅0.3cm、重さ厚0.3cm、重さ1.5gを測る。その形状は、二等辺三角角を呈し、両側縁は研磨を認め直線的となり、基部の外側は丸部を帯びる。内外面とも研磨を受け、研磨痕を認める。499は、安山岩を石器の素材として用いた叩石である。最大長11.8cm、最大幅9.4cm、最大厚2.9cm、重さ540gを測り、その形状は梢円形を呈する。両面中央部には凹部を作り出す。一部には研面を認め、磨る作業も同時に行なったものと思われる。

#### ② 22号住居跡 (Fig. 79~81, PL. 17)

16号住居跡との最短距離は、4.3mで、23号住居跡まで、6.4m、26号住居跡まで、11.7m、27号住居跡まで、13mを測り、D-19区のⅡ層中で検出された。

長軸308cm、短軸271mを測る。主軸(長軸)の方位は、N-110°-Eをとる。遺構検出面までの深さは34cmである。

本住居跡の平面の形状は、略方形を呈する。床面は、Ⅱ層最下部からⅢ層上面で、3本の柱穴が認められ、P<sub>1</sub>:径34~45cm、深さ26cm、P<sub>2</sub>:径34~44cm、深さ24cm、P<sub>3</sub>:径38~50cm、深さ54cmを測る。心心距離は、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>:112cm、P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>:260cm、P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>:168cmである。他の小型住居跡に認める2本の主柱穴や土塀は検出できなかった。

本住居跡内の出土遺物は、床面からの出土はあまりなく、埋土中より大型壺形土器・壺形土器・壺形土器・蓋形土器の破片や製作途中と思われる石鎌が出土した。壺形土器には、口縁部の形状がくの字に外反する破片が多く、壺形土器は、肩は張らず口縁部付近で盛り、口縁部の形状が逆L字に外反するタイプもある。

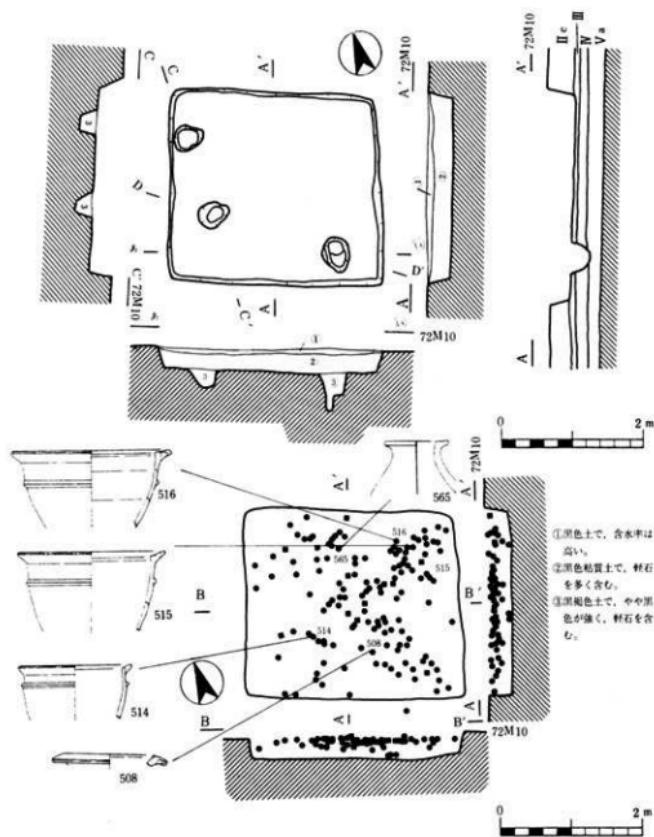


Fig. 79 22号住跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

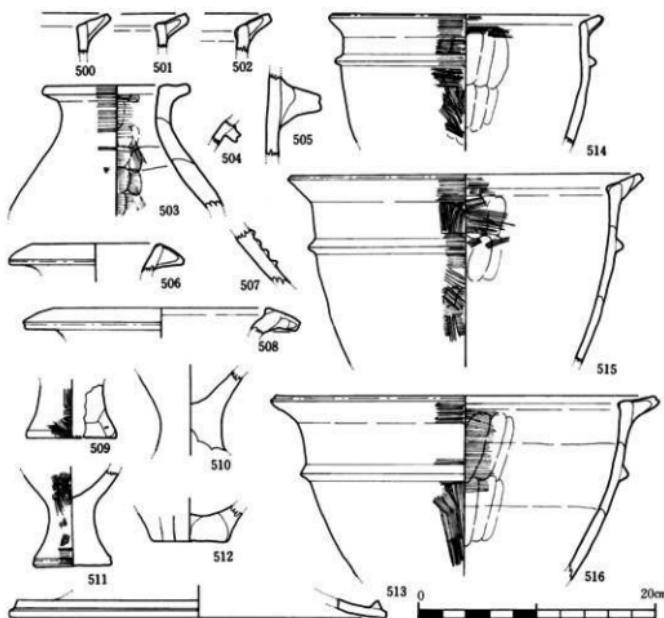


Fig. 80 22号住居跡内出土土器実測図

土器 (Fig. 80, PL. 33)

Tab. 20 22号住居跡内出土土器一覧表

(注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

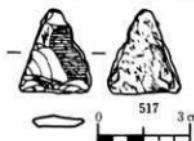
番号	国版 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴、そ の 他	手 法 の 特 徴
500		甌 口縁部		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面はわずかに凹む。口縁部内側には縦を作 り出す。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
501	*	*		暗茶褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り 出す。口縁部上面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
502	PL 33	要 口縁部		明茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛なで調整である。
503	PL 33	壺 口縁部 頸部	①(12.4)	茶褐色	Q P L	肩は張らず、内横気味に立ち上がりながらわずかに外反する口縁部で、口縁部は逆く字状に外反する。口縁部裏面は丸味を帯びる。口縁部上面は凹む。	外面は横位。内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
504		壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L M	口縁部裏面は欠損している。口縁部外側直下には断面台形状貼付突帯を残す。突帯端は凹む。口縁部は二又状を呈する器形である。	内・外面ともに刷毛なで調整である。
505		大要 口縁部 下位		茶褐色	Q P L M	口縁部は欠損している。口縁部外側直下の突帯で、断面台形状貼付突帯を残し、突帯裏面は凹む。	外面は指頭圧調整後横位。内面は横位の刷毛なで調整である。
506	PL 33	壺 口縁部	①(14.8)	明茶褐色	Q P L M H	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部上面は丸味を帯びる。	内・外面ともに横位の刷毛なで調整である。
507	*	壺 肩部		赤茶褐色	Q P L M	壺の肩部付近と思われる。四条の断面三角形貼付突帯を残す。	外面は施削り、内面は指頭圧調整後横位の刷毛なで調整である。
508	*	壺 口縁部	①(23.6)	明茶褐色	Q P L H	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位の刷毛なで及び施削り、内面は横位の刷毛なで調整である。
509		要 底部		明褐色	Q P L H	光実した脚台である。裾は短く、あまり広がりがなく、裾の裏面は丸味を帯びている。一部欠損する。	横位、斜位、縦位の刷毛なで調整である。
510	*			茶褐色	Q P L H	光実した脚台がつく底部付近と思われる。裾の裏面及び底面部分は欠損する。内面は裾の付着を認める。	外面は剥落し、内面は磨滅して調整痕は不明である。
511	PL 33	*	④6.7	褐色	Q P L H	光実した脚台である。裾は長く、弧角的に広がり、裾の裏面は凹んで、凹線状を呈する。	横位、斜位、縦位の刷毛なで調整である。
512	*		④6.7	暗茶褐色	Q P L H	平底の底部である。本厚い底部より外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。	指頭圧調整痕を認める。

番号	器種・部位	法量	色調	胎土	形態的特徴、その他	手法的特徴
513	蓋		明茶褐色	Q P L H	裏の裏と思われる。口縁部が強く外反し、口縁部の裏面は平面を作る。口縁部の裏面付近上面には断面三角形貼付け突帯を有する。口縁部の裏面内側と裏面には漆の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛などで調整が認められる。
514	PL. 33 口縁部 剥離	①(23.2) ③(21.0)	暗褐色	Q P L H	外縁丸味に立ち上がり剥離部付近からは直立ち上がりながら若干内汚気味の口縁部で、口縁部はくの字状に外反する。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出している。剥離部よりやや上方に一条の断面三角形貼付け突帯を認める。表面に粗粒の痕跡が認められる。漆の付着を認める。	内・外面とも指添は調整後、外面は横位、斜位、竪位、内面は剥離位の刷毛などで調整が認められる。内面口縁部付近のみで以下は整成しており不明である。
515	*	①(30.2) ③(25.2)	暗茶褐色	Q P L H	外縁しながら立ち上がり剥離部付近から立ち上がりながら若干内汚気味の口縁部で、口縁部はくの字状に外反する。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出している。剥離部よりやや上方に一条の断面三角形貼付け突帯を認める。表面に粗粒の痕跡が認められる。漆の付着を認められる。	外表面は横位、斜位、竪位、内面は指添は調整後、外面は横位、斜位、竪位の刷毛などで調整が認められる。内面は一部指添は調整が認められ、もわずに残る。
516	*	①(33.0) ③(26.0)	暗茶褐色	Q P L H	大きく外縁しながら立ち上り外反する口縁部である。口縁部は逆立字状に近く外反し、口縁部裏面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出している。剥離部付近には一条の断面三角形貼付け突帯を認める。漆の付着を認められる。	外表面は横位、斜位、竪位、内面は指添は調整後、指添位の刷毛などで調整が認められる。

### 石器 (Fig. 81, PL. 35)

本遺跡出土の石器には、フォルンフェルスを石器の素材として用いた石鏃である。517は磨製石鏃の製作途中のものと思われる。最大長2.7cm、最大幅2.3cm、最大厚0.4cm、重さ2.5gを計る。形状は二等辺三角形を呈する。外面は剥離面を残し、一部研磨を認め、内面は平坦面を呈する。



㉙ 23号住居跡 (Fig. 82, 83, PL. 18)

Fig. 81 22号住居跡内出土石器実測図

本遺構は、他住居跡と比べ特異な形態をとり、特殊遺構とし扱うべきであったが、現在、他に類例の知見がないため、いちおう住居跡に分類しておいた。今後の課題である。

11号掘立構築物跡との最短距離は、1.7mで、19号住居跡まで、3.5m、22号住居跡まで、6.5m、16号住居跡まで、6.75m、24号住居跡まで、10.85mを測り、E-18・19区のⅡ層中で検出された。

長軸495cm、短軸471mを測る。遺構検出面までの深さは27cmである。

本遺構の平面の形狀は、基本的には方形の形狀であるが、北壁中央部付近から南壁中央付近にかけては、略円形の形狀を呈する。床面はⅢ層上面で、一部貼り付け調整を認めた。床面には、径415~424cmの円形周溝状の遺構が掘り込まれ、その規模は、上面幅33~40cm、下面幅27~30cm、深7cmである。北東側の溝状遺構と床面にかけて、径31~40cm、深さ26cmの柱穴を認めた。

本遺構内からの出土遺物は、床面から壺形土器の口縁部の破片が少量出土した。埋土中より壺形土器や壺形土器の破片で小破片が多い。円形周溝状遺構の底面より壺形土器の口縁部及び壺形土器胴部破片が出土した。

土器 (Fig. 83, PL. 33)

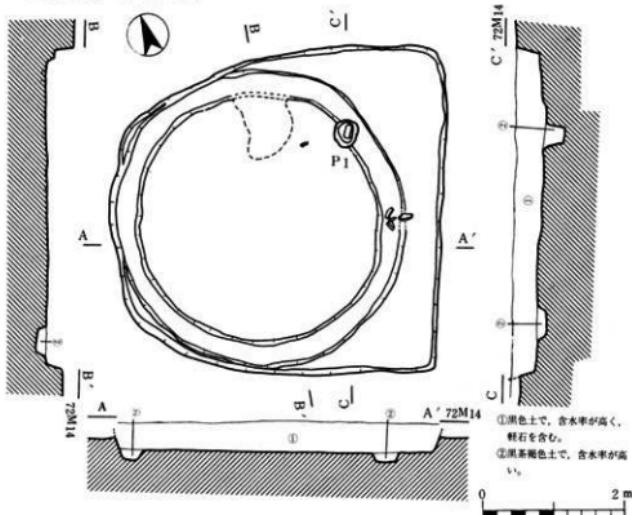


Fig. 82 23号住居跡実測図

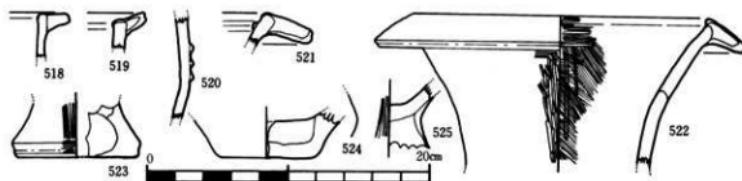


Fig. 83 23号住居跡内出土土器実測図

土器 (Fig. 83, PL. 33)

Tab. 21 23号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③腹部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	出所 記号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
518		甕 口縁部		褐色	Q P L H	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は、わずかに凹むものの、大半は欠損している。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。	内・外面とともに横位の刷毛などで調整である。
519		々		褐色	Q P L	多くの字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面も凹む。底の付着を認める。	内・外面とともに横位の刷毛などで調整である。
520		甕 腹部		明茶褐色	Q P L M H	腹部は若干膨らむと思われる。三つの断面三角形貼付突起を認める。	外側は横位及び斜位。内面は断面に調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
521		甕 口縁部		明茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には断面三角形貼付突起を認める。	器形全体に着減を認め、内・外面ともにわずかに横位の刷毛などで調整である。
522		甕 口縁部 頭部		褐色	Q P L M	頭部でしまり外方に外反する口縁部を作る。垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面は横位、斜位の刷毛などで調整で、外側は腹位の刷毛であり、内面は一部に施削りを認める。
523		甕 底部	④(7.0)	茶褐色	Q P L	光実した脚台である。破片のため詳細は不明で、腹位短かくと思われる。底角が広がり、腹の断面が凹んで、凹縫状を呈する。	横位及び腹位の刷毛などで調節する。
524		甕 底部		褐色	Q P L	平底の底部で、お厚く外方へ大きく開きながら立ち上がる器形と思われる。	着減しているため不明である。
525 PL. 33		甕 底部 付近	①26.4	暗褐色	Q P L H	甕形土器の底部と思われる。おそらく光実した脚台との接合部付近である。	横位の刷毛などで調整である。

㉙ 24号住居跡 (Fig. 84, PL. 18)

本住居跡内は、住居跡群の南東端部に位置する。18号住居跡との最短距離まで、1.85mで、14号掘立構造物跡まで、5.5m、27号住居跡まで、10.4mを測り、E・F-20区のⅡ層中で検出された。

長軸474cm、短軸396cm（ともに張り出し部を含む）を測り、主柱穴は2本で、西側：径42～50cm、深さ45cm、東側：径47～56cm、深さ63cmで、心心距離は164cmである。主軸の方位はN-77°-Eをとる。遺構検出面からの深さは76cm、ベッド状遺構まで49-55cmである。西側張り出し部から南側隅にかけて、幅120-175cmにわたり、17・18号住居跡からのびる新しい溝の掘込の影響を受けている。

本住居跡の平面の形状は、基本的には隅丸方形を呈するが、西側及び北側壁には、張り出し造構を確認した。張り出し部は、西側で75×226cm、北側で47×67×235cmを測る。南側壁の一部を除いて、それぞれの壁際には、貼り付けによる調整によるベッド状造構を認めた。ベッド状造構と床面との高差は、西側で23cm、北側で21cm、東側で28.5cmを測る。床面はVa層で、貼り付けによる調整である。南側床面の一部や西側及び東側ベッド状造構の一部は新しい溝により影響を受ける。土塙は新しい溝の影響で検出できなかった。

なお、本住居跡内の出土遺物は、床面からの出土はほとんどなく、埋土中より変形土器、壺形土器、鉢形土器の破片が出土した。変形土器は、口縁部の形状が逆L字状に外反する土器破片が大半である。床面やベッド状造構上には棒状の炭化物が検出された。

①黒色土で、茶褐色土を多く含み、含水率が高い。

②黒色土で、含水率が高く、軽石、アカホヤのプロックを多く含む。

③色調②と同じで、非常に軟質である。

④黒褐色で、アカホヤのブロックが大きくなる。

⑤黒茶褐色であるが、黒色は少なくなり、アカホヤの量が多く、プロック④と同じくらいである。含水率が高い。

⑥黒褐色土で、アカホヤを含む。

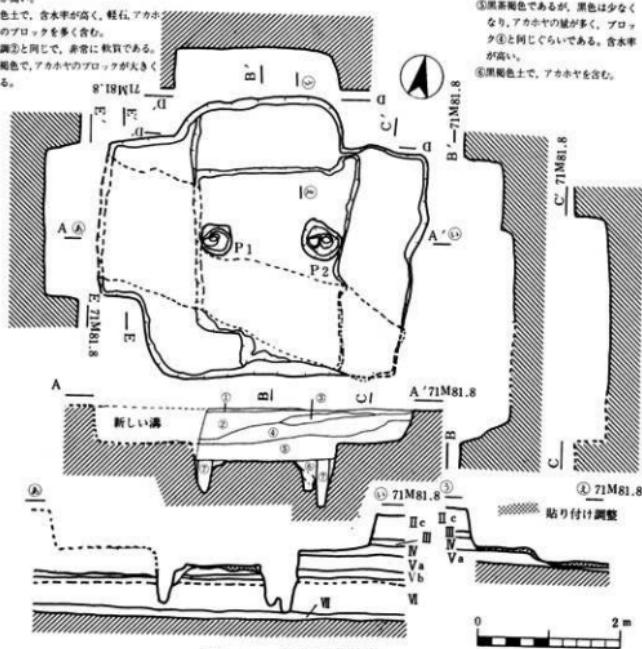


Fig. 84 24号住居跡実測図

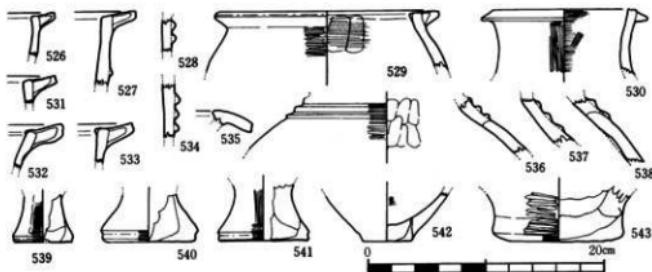


Fig. 85 24号住居跡内出土土器実測図

土器 (Fig. 85, PL. 33)

Tab. 22 24号住居跡内出土土器一覧

注) 法量の単位cm ①口径②器高③脚部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	固版 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴 、そ の 他	手 法 の 特 徴
526		甕 口縁部		茶褐色	Q P.L.	追し字状に外反する口縁部で、口縁部裏面 は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。口縁部 上面は凹む。	内・外ともに横位の刷毛 なで調整である。
527	PL. 33	*		明褐色	Q P.L. M	追し字状に外反する口縁部で、口縁部裏面 は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。一条の 断面三角形貼付突部を造らす。	外表面は横位、内面は横位及 び斜位の刷毛なで調整である。
528	*	甕 胸部		茶褐色	Q P.L. M	胸部分付近と思われる破片で、一条の断面三 角形貼付突部を造らす。	外表面は横位、内面は斜位の 刷毛なで調整である。
529	*	鉢 口縁部	①(19.2)	明褐色	Q P.L.	内傾気味の口縁部で、追し字状に外反する 口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内 側には張り出しそれを作り出す。	内・外ともに薄い横位の刷毛 なで調整を認め、内面は指振 仕調査位のなで調整である。
530	*	甕 口縁部	①(10.0)	暗茶褐色	Q M	肩部より立ち上がりながら腹部で若干しま り、外傾気味の口縁部である。口縁部は凹む。 口縁部外側には断面三角形貼付突部を造らし口 縁部を作り出す。口縁部裏面は凹む。	外表面は横位及び斜位の刷毛 なで調整で、内面は横位が主 体で、一部斜位のなで調整で ある。
531		甕 口縁部		暗褐色	Q P.L. H	追し字状に外反する口縁部で、口縁部裏面 は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。口縁 部上面は凹む。張の付着を認める。	内・外ともに横位の刷毛 なで調整である。

番号	通版 番号	器種・器部	法量	色調	釉土	形態の特徴、その他	手法の特徴
532	PL. 33	甕 口縁部		明茶褐色	Q P_L H	逆L字に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。	器面全体に磨減を認め、解明さに欠けるが、内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
533	*	*		暗茶褐色	Q P_L M	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。底の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
534	*	*		暗褐色	Q P_L H	三条の貼付三角形貼付突帯を施す。底の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
535	*			暗褐色	Q P_L	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
536	PL. 33	壺 肩部		暗茶褐色	Q P_L M	肩部に現存で三条の貼付断面三角形突帯を施す。肩部の張りは認められない。壺の破片である。	外表面は横位の刷毛などで調整で、内面は削落圧調整板を認める。輪積み手法を残す。
537	*	*		暗茶褐色	Q P_L M	現存で三条の貼付断面三角形突帯を施す。壺の肩部付近と思われる器形である。	外表面は横位、内面は斜位の刷毛などで調整である。
538	*	*		茶褐色	Q P_L M H	肩は張らず、現存で二条の貼付断面三角形突帯を施す。壺の破片である。	外表面は横位及び斜位の施削りで、解明さに欠ける。内面の大半は削落し、斜位の刷毛などで調整で、輪積みの手法を残す。
539		甕 底部		褐色	Q P_L	光実した脚台である。裾は長く、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹縫状を呈する。小型の底部である。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
540	PL. 33	*	④8.0	灰褐色	Q P_L H M	破片のため不詳であるが、現存部位では、裾は鋭角的に広がり、凹んで凹縫状を呈する。	磨減しているため調整痕は不明である。
541	*	*	④7.8	明灰褐色	Q P_L	光実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、端面は凹んで、凹縫状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
542		壺 底部	④4.4	暗茶褐色	Q P_L M	平底の底面である。外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。底部は小さい。	削落しているため調整痕は不明である。
543	PL. 33	大甕 底部	④12.2	暗茶褐色	Q P_L M	平底の底部で、底厚約2.8cmで、外方へ大きく外反しながら立ち上がると思われる器形である。	横位の刷毛などで調整や横位の施削りを認める。

㉙ 25号住居跡 (Fig. 88~86, PL. 19)

本住居跡は、住居跡群の北東端部に位置する。12号掘立柱建物跡との最短距離は、3.5mで、6号掘立柱建物跡まで、25m、26号住居跡まで、28.8mを測り、F-24区のⅡ層中で検出された。

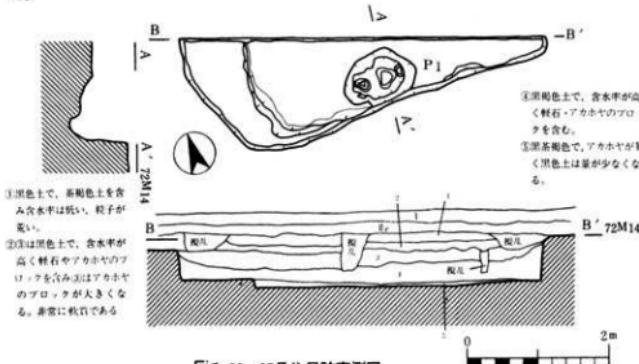


Fig. 86 25号住居跡実測図

住居跡の大半は、バイパス建設予定地外へ遺構がのびるため、その規模は不詳である。遺存する住居跡は、長軸443cm、短軸22~200cmを測る。

主軸(長軸)の方位はN-88°-Eをとる。  
遺構横面からの深さは、51cmで、ベッド状遺構までは40cmである。

本住居跡の平面の形状は、遺存する遺構では不明であり、基本的には隅丸方形の住居跡が想定される。床面はⅣ層~V層で、貼り付けにより調整され、比較的軟質である。西側には貼り付けによるベッド状遺構を検出した。床面との比高差は約11cmである。南側中央壁際には109×72cm、深さ24cmの楕円状の土壠を検出し、土壠内には二か所の柱穴状の掘込を認めた。

本住居跡の出土遺物は、床面より出土の土器は小破片が少量である。埋土中より、壺形土器・壺形土器・蓋形土器などの土器破片や石器が出土した。

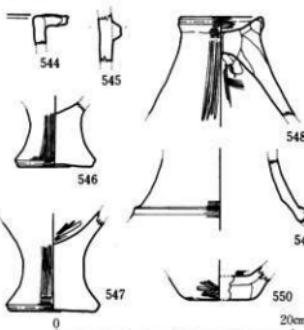


Fig. 87 25号住居跡内出土器実測図

土器 (Fig. 87, PL. 33)

Tab. 23 25号住居跡内出土土器一覧

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法 量	色 満	胎 土	形 独 の 特 徴 、 そ の 他	手 法 の 特 徴
544	PL. 33	甌 口縁部		暗褐色	Q P L	邊し字状に外反する口縁部である。口縁部 裏面は凹む口縁部内側には棱を作り出す。	外面は横位 内面は指頭圧 調整後横位の刷毛などで調整で ある。
545	*	甌 胴部		明茶褐色	Q P L M	甌の胴部付近と思われる破片で断面台形状 貼付突帯を残す。突帯の裏面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
546	*	甌 底部	④6.8	茶褐色	Q P L H	光実した舞台である。帯は長く鋭角的に広 がり、帯の裏面は凹んで、凹縫状を呈する。 床面中央部が若干凹む。	横位及び縦位の刷毛などで調 整で、指頭圧調整が現る。
547	*	*	④8.0	褐色	Q P L M	光実した舞台である。帯は長く、鋭角的に 広がり、帯の裏面は凹んで、凹縫状を呈する。 中央部は若干凹む。稜柱の位置が残る。	横位及び縦位の刷毛などで調 整を認める。
548	*	蓋	頂部径 (7.2)	明茶褐色	Q P L H	甌の蓋と思われ、帯部の一部は欠損してい る。つまみ筋は大きく凹む。頂部外側裏面は 凹んで、凹縫状を呈する。	外面は横位及び縦位の刷毛 の刷毛などで調整である。
549	*	甌 肩部		明赤茶褐色	Q P L H M	肩部付近と思われ、現存で一条の断面三角 形貼付突帯を残す。	内・外面ともに刷毛が著し く調整度は不明である。しか し突帯付近に横位の刷毛などで 調整がわずかに残る。
550		甌 底部		明茶褐色	Q P L	平底の底部である。ぶ厚い底部より外方へ 大きく開きながら立ち上がると思われる器器 である。	横位及び縦位の刷毛で 内面にわずかな横位の刷毛を で調整を認める。

石器 (Fig. 88, PL. 36)

本住居跡内出土の石器は、柱状両刃石斧がある。551は珪質凝灰岩を石器の素材として用い、抉りは認められず、両刃である。最大長11.5cm、最大幅3.75cm、最大厚さ2.3cm、重さ185gを測り、器面全体に研磨を認める。刃部は両刃で刃こぼれを認め、使用による痕跡である。

◎ 26号住居跡 (Fig. 89~95, PL. 20)

6号掘立柱建物跡との最短距離は、1.7mで、27号住居跡まで、8.1m、11号掘立柱建物跡まで、8.8m、23号住居跡まで、10.85m、22号住居跡まで、11.65mを測り、E・F-20区のⅡ層中で検出された。

長軸493cm、短軸493cm(張り出し部を含む)である。主軸の方位はN-77.5°-Eをとる。

主柱穴は2本で、西側：径54~60cm、深さ84cm、東側：径44~72cm、深さ76cmを測る。心心距離は155cmである。造構検出面からの深さ59cm、ベッド状造構まで44~51cmを測る。

本住居跡の平面の形状は、基本的には隅丸方形形状を呈するが、北側に張り出し部を作り出し、西側壁は丸味を帯びている。南壁の一

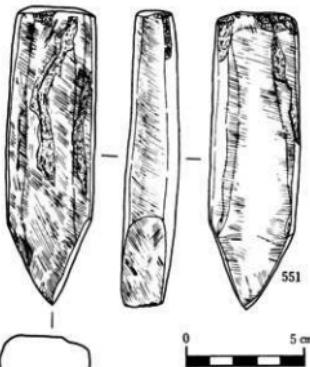


Fig. 88 25号住居跡内出土石器実測図

部を残して各壁際には、幅115~180cmの切り出しによるベッド状造構が連続した状態で検出されベット状造構の床面はⅡ層最下部からⅢ層上面で、床面との比高差は9~15cmを測る。床面はⅢ層で部分的な貼り付けによる調整を認めた。主柱穴2本は、ベッド状造構と相接し、主柱穴内には、西側：径16~19cm、東側：径17~20cmの柱痕跡を検出した。南側壁際には120×90cm、深さ34cmの土坑を認め、土坑西側はベッド状造構と隣接し、土坑内には二か所に柱穴の掘込を認めた。

なお、本住居跡内の出土遺物は、東側ベッド状造構床面に、壺形土器や壺形土器破片が出土した。特に、北東隅際のベッド状造構から床面にかけて、頸部でしまり外方へ大きく外反する口縁部で動形口縁を呈し、口縁部上面に施した沈線を施した壺形土器が出土した。床面には、土坑付近に頸部から口縁部までの完形品の壺形土器(動型口縁)がベッド状造構へもたれるような格好で出土した。埋土中には、逆し字状に外反する口縁部で、胴部の若干張る完形の壺形土器が棒状の炭化物といっしょに西側ベッド状造構約10cmほど上位より出土した。そのほか磨製石器・砥石などの石器や土製品として勾玉が出土した。

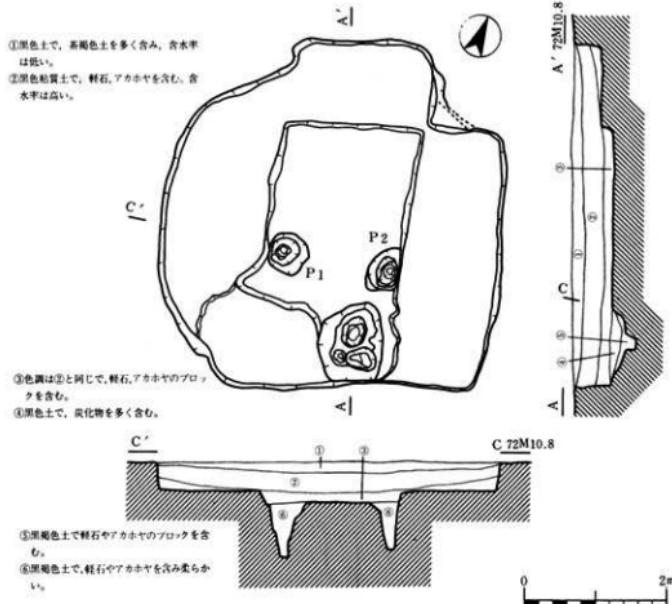


Fig. 89 26号住居跡実測図  
土器 (Fig. 92, 93, PL. 33, 34)

Tab. 24 26号住居跡内出土土器一覧

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	実測 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴 そ の 他	手 法 の 特 徴
552	PL. 33	甌 完形	①23.7 ②24.2 ③21.4 ④6.8	茶褐色	Q P.L. H	底部は平底で腹はわずかに認め、腹の端部は丸味を帯び、底面中央部は若干凹む。底部より外方へ開きながら立ち上がり、胴部中央や上位で膨らむ。口縁部は内凸し、逆し字状(外反する)。口縁部端面はわずかに凹む。胴部や上位には、一連の断面三角形貼付突審を巡らす。底の付着を認める。	内・外側とも磨滅が著しいが、外側は横位、継位の刷毛などで、底面付近には施削り及び指當圧調査痕が残る。内面は指當圧調査後、横位の刷毛などで及び斜位の施削りを認めると。
553	*	甌 口縁部		褐色	Q P.L. M	直口気味の口縁部である。逆し字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。二条の断面三角形貼付突審を巡らす。底の付着を認める。	内・外側とも横位の刷毛などで調整である。
554	*	明褐色	明褐色	明褐色	Q P.L. M	逆し字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には棱を作り出す。一条の断面三角形貼付突審を巡らす。	外側は横位で、内面は横位、斜位の刷毛などで調査である。

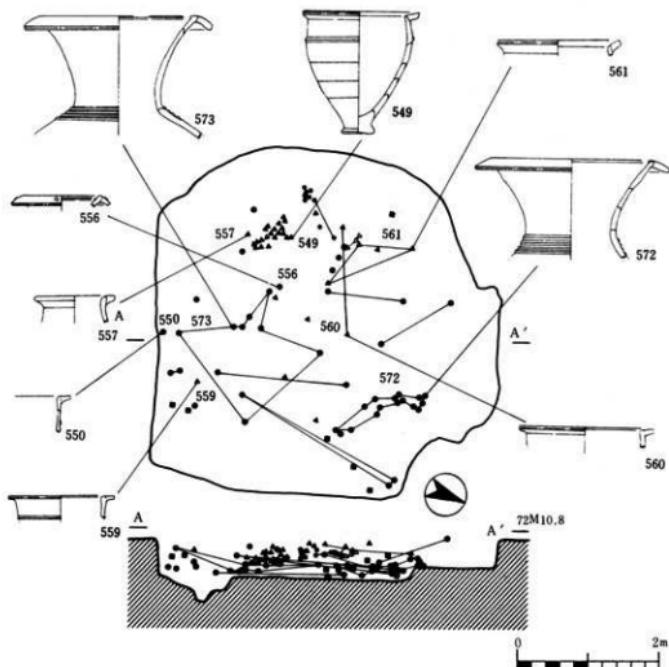


Fig. 90 26号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
555 34	甕 口縁部		明褐色	Q P.L. M	達し字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。	外面は横位で、内面は指振圧調整後横位の刷毛などで調整である。
556	*	*	暗褐色	Q P.L.	達し字状近く外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側にわずかに張り出しそれを作り出す。係の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
557	*	*	灰黒褐色	Q P.L. M	達し字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。係の付着を認める。	外面の大半は剥落しているが、内・外とともに横位の刷毛などで調整である。

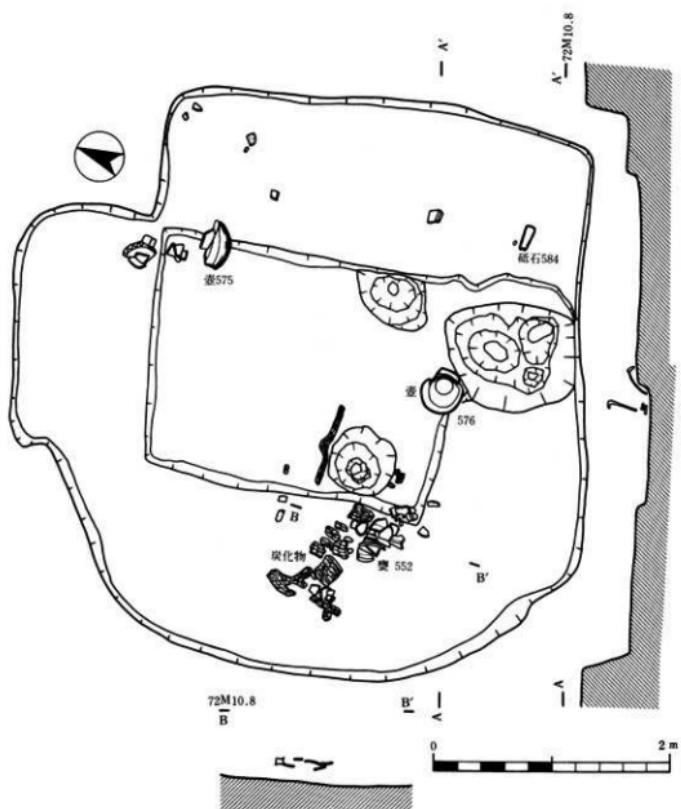


Fig. 91 26号住居跡内遺物出土状態

番号	版面 番号	器種・基部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
558	PL. 33	甕 口縁部		明黄褐色	Q P.L.	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 底面はほぼ平滑面を作る。	内・外面とともに縁位の粗毛 なで調整である。
559		甕 口縁部	①(20.2)	明茶褐色	Q P.L. H	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口 縁部底面はわずかに凹む。口縁部内側には、 張り出しを作り出す。口縁部内側には、断面 三角形貼付突唇を施す。口縁部上面には、 現存で一體の円形浮文を認める。	内・外面とともに縁位の粗毛 なで調整である。

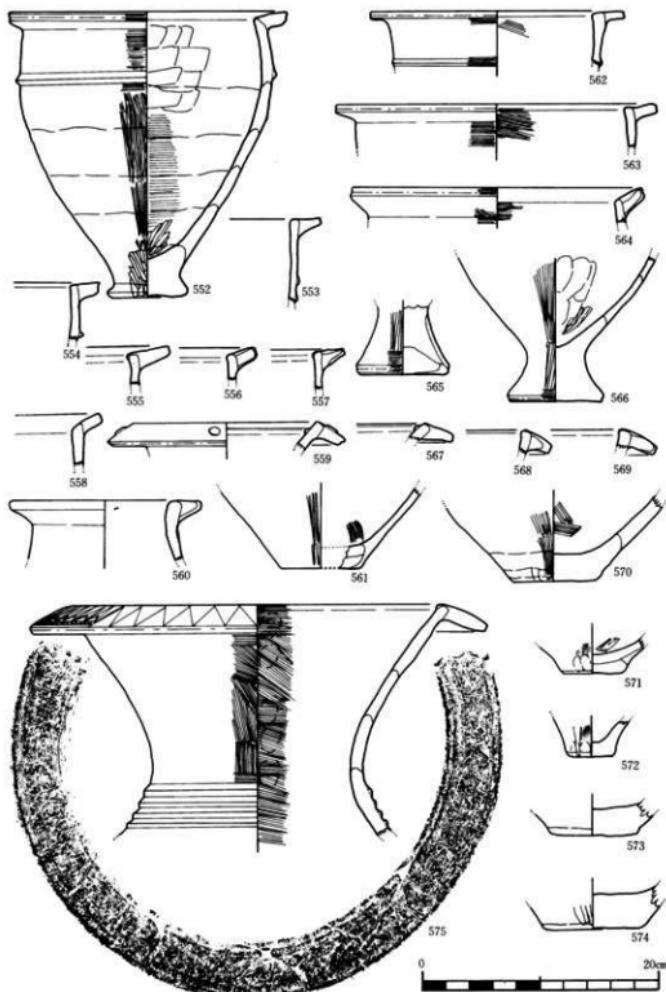


Fig. 92 26号住居跡内出土土器実測図(1)

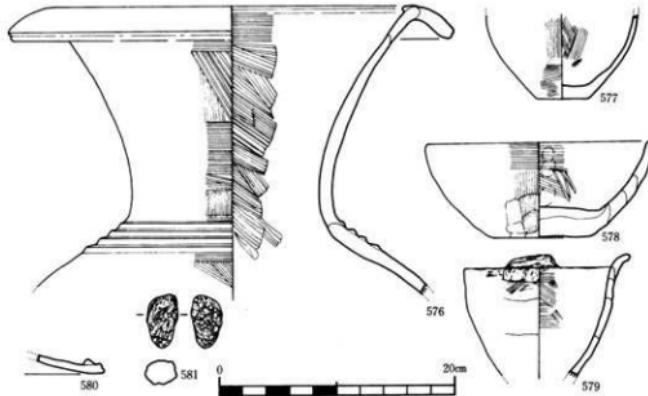


Fig. 93 26号住居跡内出土土器実測図(2)

番号	測量 参考 寸法	器種・部器	法 量	色 調	胎 土	形態の特徴、その他の 付着物	手法の特徴
560		壺 口縁部	①(16.4)	明茶褐色	Q P L M	内側気味に立ち上がりながらわずかに外反する口縁部である。逆し字状に外反し、口縁面は大部分が剥落しているが、丸くなると思われる。	内・外ともに剥落しているため調査痕は不明である。
561		壺 底部		暗褐色	Q P L H M	底の底部の破片である。外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。係の付着を認めるが、二次的に付着したものと思われる。	外表面は窓位の剥り、内面は新位の崩毛などで調整である。
562		壺 口縁部	①(21.4)	黄褐色	Q P L M	内両気味の口縁部で、逆し字状に外反する。口縁部裏面はわずかに凹む。口縁部内側には縦を作り出す。一条の断面三角形貼付突起を残す。係の付着を認める。	外表面は槽底と係の付着のたため大部分は不明で、わずかに横位で、内面は新位の崩毛などで調整を一部に認める。
563	P.L. 34	*	①(27.2)	明褐色	Q P L M	内溝する口縁部で、逆し字状に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。口縁部上面は凹む。係の付着を認める。	外表面は横位、内面は横位及び新位の崩毛などで調整である。
564	*	*	①(25.0)	暗褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には、縦を作り出す部分もある。	外表面は横位及び斜位。内面は横位の崩毛などで調整である。

番号	器種・部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴	
565	甕 底部	④8.0	褐色	Q P L M	充実した舞台である。裾は長く、鋭角的に広がり、腹の端面は四んで、凹縫状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。	
566	PL. 33	*	④8.2	明茶褐色	Q P L H	充実した舞台である。裾は短く、鋭角的に広がり、腹の端面は四んで、凹縫状を呈する。模様の手法を残す。模様の仕痕の痕跡を認める。	外面は横位の刷毛などで及び斜位の刷毛で、内面は指頭圧調整後擦りりを認める。
567	甕 口縁部			褐色	Q P L H	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。	外面は横位の刷毛などで、内面は擦きを認める。
568	*			暗褐色	Q P L H M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部内面にはわずかな張り出しを作り出す。	内・外とも横位の刷毛などで調整である。
569	*			明褐色	Q P L H M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内面にはわずかな張り出しを作り出す。	内・外とも横位の刷毛などで調整である。
570	PL. 34	大甕 底部	④7.0	茶褐色	Q P L M	平底の薄い底部である。外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形で、大型彫土器の底部と複形土器の底部の可能性も考えられる。	外面は斜位及び斜位の刷毛などで、内面は斜位の刷毛などで調整である。
571	甕 底部	④5.0	明茶褐色	Q P L M H	平底の底盤で、小型の器形である。外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形である。	外面は指頭圧調整後斜位の刷毛などで、内面は斜位の刷毛などで調整である。	
572	*	④4.0	明茶褐色	Q P L H	平底で小型の底盤と思われる。器形は薄く、外方へ開きながら立ち上がる器形と思われる。	外面は指頭圧調整後斜位の刷毛などで、内面は削落しているため不明である。	
573	PL. 34	底部	④7.2	赤茶褐色	Q P L M	平底の薄い底部で、大きく外方へ開きながら立ち上がると思われる器形で、複形土器の底部の可能性も考えられる。	削減及び剥落を認め、調整痕は不明である。
574	*	*	④8.4	暗褐色	Q P L M	平底の底盤でぶ厚く、大型の底盤と思われる。底面には4か所に模様の圧痕を認め、また植物繊維と思われる痕跡もみられる。	斜位の擦りりを認める。
575	PL. 33	大甕 口縁部 肩部	①39.0	茶褐色	Q P L M	肩部でしまり、ゆるやかに大きく外反して口縁部で、垂れ下り気味に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側に張り出しがある。口縁部上面には、二つの断面文と二つの沈縫間に格子目状の沈縫文を施す。内側は斜位の刷毛などで調整している。肩部上位に現存で四条の折曲三外形貼付突帯を残す。	外面は斜位及び斜位の刷毛などでや一部斜位の刷毛で、内面は指頭圧調整後斜位及び斜位の刷毛などで調整である。

番号	分類 器種・基部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴	
576	PL. 34 大・壺 口縁部 肩部	①36.0	茶褐色	Q P L M	肩部は削り、肩部の上位付近でしまり。外方へ大きくなり外反する口縁部で、重ねてアクリーに外反し、口縁部内側には盛り出しが作り出す。肩部上位には、三条の断面三角形貼付要素を施す。瓶形口縁をなす。	外面は斜位、斜位及び縦位のなので、内面は横位。斜位の範囲なで調整である。縦位の範囲なで調整である。斜位の範囲なで調整である。	
577	*	壺 底部	④	明茶褐色	Q P L M	底部は小さい平底で、外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。小型の壺形土器である。	外面は縦位で、内面は斜位で調査後斜位の範囲なで調整である。
578	*	鉢 変形	①(19.4) ②(8.0) ④(8.6)	明茶褐色	Q P L M	平底の厚い底盤より外方へ大きく開きながら外縁へ向かって内側へ凹む。口縁部端面は丸味を帯びる。	外面は指頭圧調整痕が底部付近に残る。横位、縦位の範囲なで調整で、斜位の範囲なで調整で、一部施削を認める。
579	*	鉢 口縁部 肩部		暗茶褐色	Q P L H	底部より外方へ開きながら立ち上がり外縁へ向かって内側へ凹む。口縁部端面には耳状突起を二か所に施し付ける。器形は薄く、器の内側の付着を認める。	外面は剥落が著しく、その付着部は横位及び斜位で、内面は斜位で、斜位の範囲なで調整である。
580	蓋 根部		暗褐色	Q P L H	口縁部が大きく広がる器形で、口縁部端面は円形。口縁部外側に、断面三角形貼付要素を施す。内面口縁部端面付近には底の付着を有して認められる。	内面は斜位及び縦位で、内面は指頭圧調整後横位の範囲なで調整である。	
581	上製品		明褐色	Q P L M	粘土をこねた状態のものと思われる。		

### 石器 (Fig. 94, PL. 35)

本住居跡内出土の石器には、磨製石錐・砥石がある。

582は、フォルンフェルスを石器の素材とした磨製石錐である。扁平無茎で、二等辺三角形状を呈し、基部には抉りを認める。先端部及び両脚部は欠損するが、錐がはっきりとし、先端部付近から基部両端へつづく。研磨痕を認め、最大長1.7cm、最大幅1.7cm、最大厚0.2cm、重さ0.8gを測る。583は、582と同様の石材を用いている磨製石錐である。扁平無茎で、ほぼ三角形状を呈し、基部には抉りを認める。錐がはっきりとし、先端部から両側縁寄りに認め、基部へつづく。研磨痕を認めるが、片面中央部付近に一部自然面が残る。最大長2.3cm、最大幅2.1cm、最大厚0.2cm、重さ2gを測る。584は、砂岩を石器の素材とした砥石である。

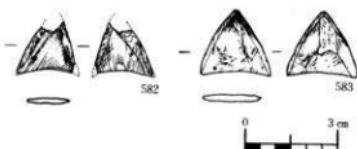
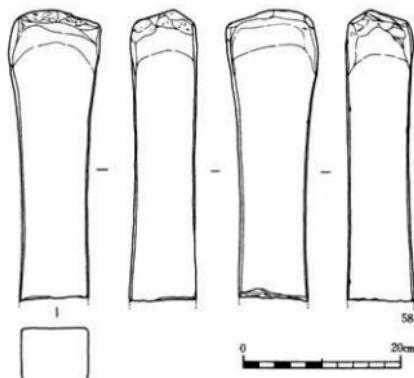


Fig. 94 26号住居跡内出土石器実測図(1)

最大長18.1cm、最大幅5.8cm、最大厚3.7cm、重さ740gを測る。方柱状を呈し、下端部を欠損する。砥面は四面ともに認め全般的に使い込んでいる。砥面には研磨を認めるが、素材のためか研磨痕は観察できない。

土製品 (Fig. 162, PL. 37)



土製勾玉が埋土中より出土した。第6章 第4節で図化し、また、特徴について説明を加える。

② 27号住居跡 (Fig. 96~100, PL. 21)

26号住居跡との最短距離は、8.0m、11号掘立柱建物跡まで、8.9m、14号掘立柱建物跡まで、10.0m、24号住居跡まで、10.3m、22号住居跡まで、13mを測り、D-21区のⅡ層中で検出された。

長軸537cm、短軸438cm（ともに張り出し部を含む）を測る。主軸の方位はN-89.5°-Eをとる。主柱穴は2本で、西側：径42~43cm、深さ66cm、東側：34~39cm、深さ72cmで、心心距離は73cmである。遺構後出面からの深さは、73cmを測り、ベッド状遺構まで53~62cmである。

本住居跡の平面の形状は、基本的にはほぼ長方形を呈するが、南西隅際及び北側は張り出し、南壁中央際には略台形状の障壁を認める。南西隅際の張り出しあは、127×66cm、北側は227×64~82cmを測る。西壁から北壁、東壁には、貼り付け調整によるベッド状遺構を検出した。ベッド状遺構は、西側では、59×111cm、北側は、88~105cm×194cm、東側は、135~168cm×348~158cmで、床面との比高差は11~20cmである。なお、南東隅には切り出しによる調整で、略三角形状を呈する施設で、ベッド状遺構の床面との比高差は約20cmを測る。床面はV字層で、貼り付けにより調整され、南側障壁際には、78×98cm、深さ29cmの略方形の土塙を検出した。土塙内には大小の柱穴状の掘込を認めた。南西隅床面には平坦面をもつ台石と思われる4個の石が傾斜した状態で検出された。

本住居跡内床面からの出土遺物は、口縁部の形状が逆L字に外反する壺形土器の破片、磨石、棒状炭化物などである。埋土中より大型壺形土器・壺形土器・壺形土器・鉢形土器などの土器

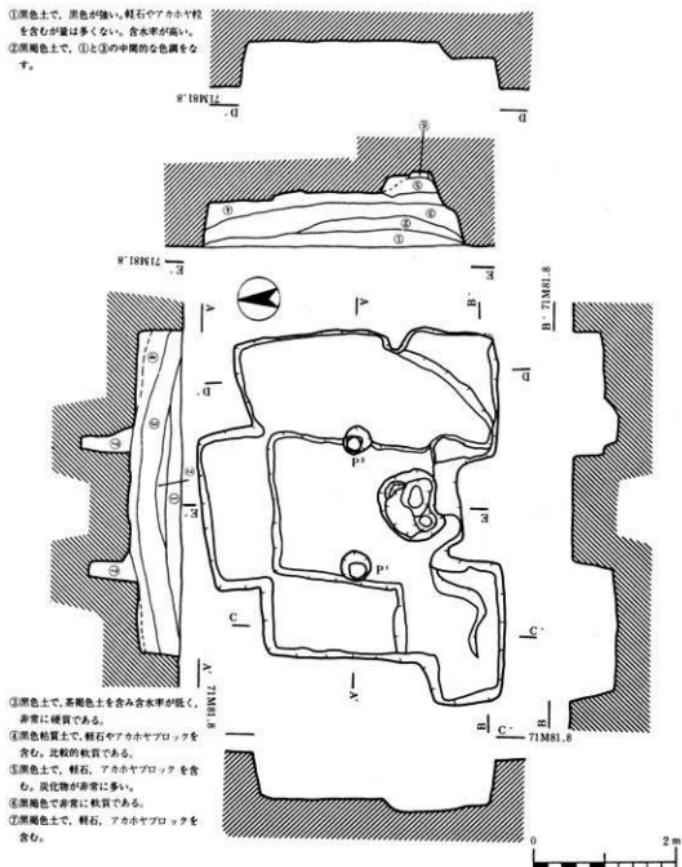


Fig. 96 27号住居跡実測図

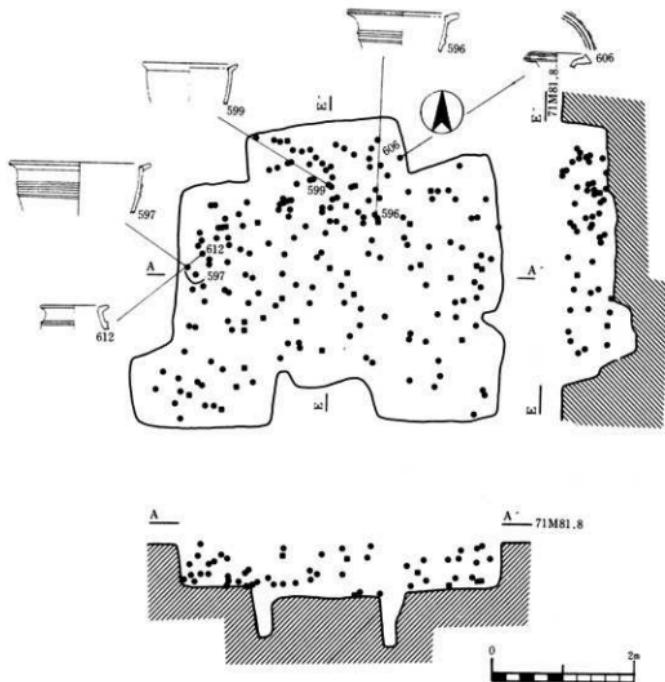


Fig. 97 27号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

破片や磨製石器などの遺物が出土した。壺形土器は、口縁部の形状がくの字状に外反する破片が多く、壺形土器は、大型の壺形土器の口縁部破片や瀬戸内系の凹線文をもつ口縁部破片がある。鉢形土器は大きく内傾し、逆L字状に外反する口縁部破片などが出土した。

#### 土器 (Fig. 98, PL. 34)

Tab. 25 27号住居跡内出土遺物一覧

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	国版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
585		壺 口縁部		褐色	Q P.L H M	逆L字状に外反する口縁部で、口縁端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。 口縁上面は凹む。	削減しているが、内・外面ともに複数の筋毛などで調整である。

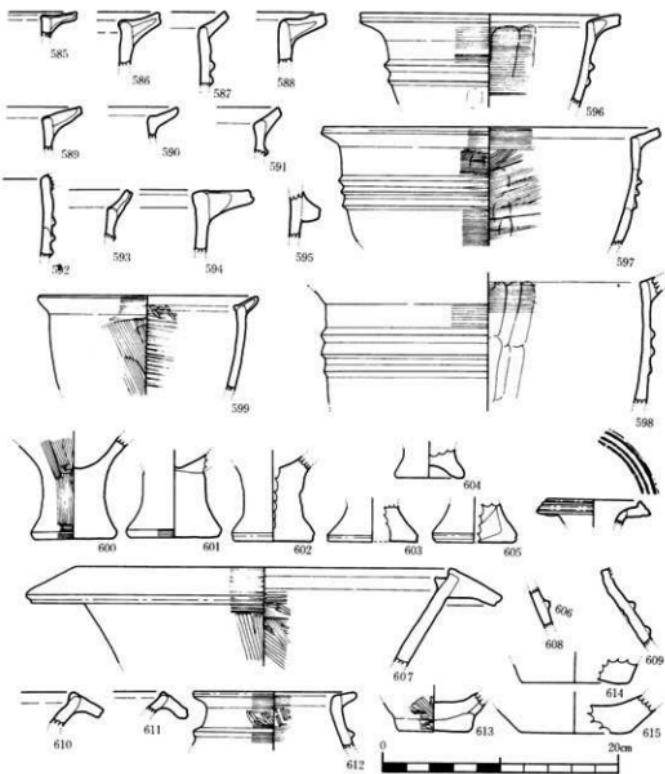


Fig. 98 27号住居跡内出土土器実測図

番号 測定 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
586 P.L. 34	甕 口縁部		茶褐色	Q P.L. H	速し字状に近く外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内裏には張り出しが作り出す。口縁部上面は凹む。	内・外ともに、捺須注溝後復位の崩毛なで調整である。

番号	固形 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
587	P.L. 34	甕 口縁部		明褐色	Q P.L. H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。 口縁部上面は凹む。二条の断面三角形貼付突 きを施す。	外面は横位、内面は指頭圧 調整後横位の刷毛などで調整で ある。
588	*	*		茶褐色	Q P.L. M	逆し字状に外反する口縁部である。口縁部 端面はわずかに凹む。口縁部上面も凹む。口 縁部内側には縦を作り出す。	内・外曲ともに横位の刷毛 などで調整である。
589	*	*		暗茶褐色	Q P.L. M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。 窓の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧 調整後横位の刷毛などで調整で ある。
590	*	*		赤茶褐色	Q P.L. H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。口縁部上面は凹む。	内・外曲ともに削落してい るため調整痕は不明である。
591	P.L. 34	*		暗褐色	Q P.L. M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。口縁部内側には縦を作り出す。 口縁部上面はわずかに凹む。一条の断面三角 形貼付突きを施す。窓の付着を認める。	内・外曲ともに横位の刷毛 などで調整である。
592	*	*		暗茶褐色	Q P.L. H	内済気味の口縁部である。口縁部端面は貼 付部分より削離している。現在三条の断面 三角形貼付突きを施す。窓の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧 調整後横位の刷毛などで調整で ある。
593	*	*		黒色	Q P.L.	大きいくの字状に外反する口縁部である。 口縁部端面は凹む。口縁部内側には縦を作り 出す。	外面は指頭圧調整後横位 で、内面は横位の刷毛などで調 整である。
594	P.L. 34	大甕 口縁部		茶褐色	Q P.L. M	内済気味の口縁部である。逆し字状に外反 する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には削 り出しを作り出す。	内・外曲ともに横位の刷毛 などで調整で、外曲の一部に削 りを認める。
595	*	大甕 口縁部 下位		明茶褐色	Q P.L. M	口縁部外側の下位につく断面台形状貼付突 きの部位で、窓の付着を認める。	内・外曲ともに横位の刷毛 などで調整でいる。
596	*	甕 口縁部 副部	①(22.2) ③(16.8)	明茶褐色	Q P.L. H	外傾気味に立ち上がりながら直口気味の口 縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は 凹む。口縁部内側にはわずかな 張り出しを作り出す。二条の断面三角形貼付 突きを施す。窓の付着を認める。	内・外曲ともに指頭圧調整 後横位の刷毛などで調整であ る。
597	*		①(28.8) ③(24.6)	灰褐色	Q P.L. H	外傾気味に立ち上がりながら直口気味の口 縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は 凹む。口縁部内側には縦を作り出す。三条の 断面三角形貼付突きを施す。	内・外曲ともに指頭圧調整 後外曲では横位、内面は横位 及び斜位の刷毛などで調整で、 輪積みの手法を残す。

番号	品目番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
598		甕 口縁部 刷部	③(27.6)	暗茶褐色	Q P L M	内済気体の口縁部である。口縁部端面付近は欠損している。口縁部内側には模を作り出す。三条の断面三角形貼付突帯を認らす。僅の付着を認める。	外面は横位で、内面は垂張 在調整後端部の刷毛などで調整 である。
599 51. 34		鉢 口縁部	①(18.6) ③(16.4)	明褐色	Q P L	外方へ開きながら立ち上がり、内済気体の 口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面 は丸くなる。口縁部上面は凹む。口縁部内側 には張り出しを作り出す。僅の付着を認める。	外面は横位。斜位などで、 内面は斜位の刷毛などで調整後 垂張りを認める。
600	*	甕 底部	④7.2	褐色	Q P L M	光実した脚台である。脚は長く、鋭角的で 若干広がる。脚の端部は丸味を帯びる。	横位及び斜位の刷毛などで調 整である。
601	*	*	④(8.0)	赤茶褐色	Q P L M	光実した脚台である。脚は長く、鋭角的で 広がり、脚の端部は丸味を帯びる。	垂張のため調整度は不明で あるが、一部に横位の刷毛を で調整を認める。
602	*	*	④(7.0)	赤茶褐色	Q P L	光実した脚台である。脚は長く、鋭角的に 広がり、脚の部は円んで、凹縫状を呈する。	剥落のため調整度は不明で ある。
603	*			褐色	Q P L H	光実した脚台で、大半を欠損する。残存部 の形状から脚は短く、鋭角的に広がり、脚 の端部は凹んで、凹縫状を呈する。	横位の刷毛などで調整であ る。
604	*			赤茶褐色	Q P L	光実した脚台である。大半を欠損する。そ の残存の器部から脚は短く、脚は鋭角的に 広がり、脚端面は丸味を帯びる。底面は若干 の凹凸である。	剥落のため調整度は不明で ある。
605	*			赤茶褐色	Q P L H	光実した脚台である。大半を欠損する。脚 は鋭角的に広がり、脚の端部は凹んで、凹縫 状を呈する。	剥落しており調整度は不明 である。
606		壺 口縁部	①(9.6)	明茶褐色	Q P L M	軽かい口縁部が大きく外反し、口縁部端面 が肥厚延張され、その延張部に3条の凹縫文 を施し、壺内系の土器破片である。	内外ともに、横位の刷毛 などで調整である。
607		大壺 口縁部	①(40.6)	暗茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に大きく外反する口縁部で、 頭部から口部丸味に外傾する。口縁部内側に は張り出しを作り出し、その張り出し直下に は断面三角形貼付突帯を認らす。	外面は横位の刷毛などで、斜 位の垂張りで、内面は横位及 び斜位の垂張りを認める。
608 51. 34		壺 刷部		暗茶褐色	Q P L M	一条の断面台形状貼付突帯を認らす。突帯 端面は凹む。僅の付着を認める。	外面は垂張りで、内面は横 位及び斜位の刷毛などで調整で ある。

番号	測定番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
609	PL. 34	煮		黒茶褐色	Q P.L. M	二条の断面三角形貼付突起を残す。	外面は鉛削りを認め、内面は剥落しており調整痕は不明である。
610	*	煮 口縁部		茶褐色	Q P.L. M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面とともに横位の刷毛なで調整である。
611	*	タ		明茶褐色	Q P.L. H	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面とともに横位の刷毛なで調整が鮮明である。
612	PL. 34	鉢 口縁部 刷毛部	①(14.0)	明茶褐色	Q P.L. M H	大きく内側する口縁部で、逆J字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。一条の断面三角形貼付突起を残す。	外面は横位で、内面は鉛削りと調整後横位の刷毛なで剥落と鉛削りを認める。
613	壺 底部	④(6.0)	黒褐色	Q P.L.		平底でぶ厚い底盤である。外方へ大きく開きながら立ち上がる器形と思われる。	鉛削りを認め、内面及び底面は鉛削りと調整痕を残す。
614	*			茶褐色	Q P.L. H	小破片である。平底の底盤と思われる。若干底盤中央部が凹む基形である。	斜位の刷毛なで調整である。
615	大甕 底部			赤茶褐色	Q P.L. H	大型壺形土器の底盤としたが、人型の壺形土器底盤の可能性を考えられる。平底の底盤と思われ、厚い底盤である。外方へ大きく開きながら立ち上がる器形と思われる。	裏剥きを認める。

### 石器 (Fig. 99, PL. 35)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鎌と叩石である。叩石は住居跡内床面より、磨製石鎌は埋土中からの出土である。616は千枚岩を石器の素材として用いた磨製石鎌で、最大長2.85cm、最大幅1.9cm、最大厚0.2cm、重さ0.9gを測る。扁平無茎で基部はわずかに凹む。基部片側の一部を欠損するが、二等辺三角形状を呈する。両面ともに先端部より基部にかけて自然面を多く残し、両面ともに側縫側に鏽が先端部からわかれ基部までつづく。また、両側面には研磨を認め、研磨痕が観察できる。617は砂岩を石器の素材として用いた叩石兼凹石である。最大長10.7cm最大幅9.6cm、最大厚4.2cm、重さ590gを測り、ほぼ円形状の自然縫を使用し、両側面及び下端ともに敲打により凹凸面を作り出す。上端部には敲打痕をわずかに観察できる。また、両面ともに敲打のため凹凸を認め、わずかな凹みである。凹み部周辺部は磨面を認めるが、石材のためか研磨痕は観察できない。



Fig. 99 27号住居跡内出土  
石器実測図(1)

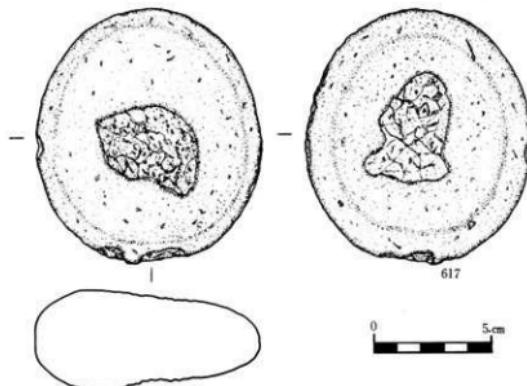


Fig. 100 27号住居跡内出土石器実測図(2)

## 第2節 住居跡内の出土土器について

王子遺跡で検出された住居跡は27基である。住居跡内の出土土器には、壺形土器、大型壺形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、高環形土器、手捏ね形土器などがある。主体は壺形土器、壺形土器及び鉢形土器で、他の土器は少量である。これらの土器は完形品が少なく、口縁部破片や底部が多い。復元完形品は、壺形土器、大型壺形土器、手捏ね形土器など合せて10点余である。大半が胴部もしくは胴部下位付近から底部を欠損するものが多い。住居跡内での出土状態は、住居跡床面からの出土は少なく、その大半が埋土中からのもので、埋土上位には小破片が多く、中位から床面上位にかけては破片も大きく出土量も多い。床面より約10~15cm上位に土器破片がまとまって出土する住居跡もいくつかあった。以下、各土器について概略を述べる。

壺形土器は、口縁部の形状が種々により変化がある。その形状には内湾するもの、直口するもの及び外傾するものがある。逆L字状や逆L字状に近く外反するもの、くの字状に外反するもの、張り出しを作るもの、棱を作るものなどがある。口縁部端面は凹んで凹線状を呈するもの、丸味を帯びるものとがある。口縁部内側や胴部付近もしくはその上位に断面三角形貼付突帯をもたないもの、一条・二条・三条・四条のものがある。底部は充実した脚台で、幅の長いもの、短かいもの、裾が鋭角的に広がるもの、広がりのないものとがある。裾の端面は凹んで凹線状を呈するものや丸味を帯びるものとに分けらる。これらの底部には、充実した脚台とあげ底氣味のものとがあり、その大半は充実した脚台である。

各住居跡についてみれば、1・2号住居跡とともに、壺形土器及び壺形土器は小破片のみで、

その形状は知り得ない。3号住居跡の土器のうち、6は完形品で逆さの釣鐘型状を呈し、若干内湾気味の口縁部を呈する。7～8は口縁部の形状が外傾するもので、7～8は逆し字状に外反し、9はくの字状に外反する。9は突帯をもたない。他は充実した脚台である。4号住居跡の土器のうち、19～23は底部を欠損するが、その形状を知り得る。19・22は内傾し、20・21は直口気味で、23は内湾する。20は突帯をもたず、22は胴部が若干張る。15～18は口縁部破片である。5号住居跡の土器のうち、32～41は口縁部破片である。42は直口気味の口縁部で、逆し字状に外反する。51～55は充実した脚台である。6号住居跡の土器のうち、62～67は口縁部破片で、くの字に外反する口縁部が大半で、全体の器形は知り得ない。7号住居跡の土器のうち、充実した脚台である。8号住居跡の土器のうち、83・84は直口気味の口縁部で、85は大きく内湾し、胴部は張りはない。9号住居跡のうち、97～110は口縁部破片のみである。110は外傾気味で、111は内湾、112は直口気味の口縁部である。111は大きく内湾するために、胴部は若干張る。113～120は底部で、114・145・147の底面は若干凹む。119はあげ底気味である。10号住居跡の土器のうち、150～161、166、169は口縁部破片である。口縁部の形状のうち、162・163・167は内湾する口縁部で、168は直口する。170は内傾する口縁部である。184～192は充実する脚台で、184、185、187、188、190、192の底面は若干凹む。11号住居跡の土器のうち、195～200、203は口縁部破片である。口縁部の形状のうち、201・202は直口する口縁部である。208～211は充実した脚台で、209はあげ底気味の小破片である。210の底面には木の葉の圧痕を認める。12号住居跡の土器のうち、222～227は口縁部破片である。口縁部の形状のうち、227は内湾する。231は充実した脚台である。13号住居跡のうち、239～244は口縁部の破片である。250～252は充実した脚台で、252は底面が若干凹む。14号住居跡の土器のうち、257・258・260～265・268は口縁部破片で、258・268はくの字状に外反する。259は直口気味の口縁部で、くの字状に外反し、輪積みの手法を残す。270～277は充実した脚台で、270・271・273・277の底面は若干凹む。15号住居跡の土器のうち、305～309は口縁部で、309・313・314は直口する口縁部で、胴部は張りがない。323・324は充実した脚台で、323は縁の中位に粗粒、底面に木の葉の圧痕を認める。16号住居跡の土器のうち、332～342、344、348、349は口縁部破片である。口縁部の形状のうち、348は大きく内湾し、胴部に張りをみる。344・346・347は内湾する口縁部である。361～363・365～371は充実した脚台で、371はあげ底気味である。370は鉢の底部の可能性も考えられる。17号住居跡の土器のうち、382～387は口縁部破片である。18号住居跡の土器のうち、397～401は直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。402～407は口縁部である。408～412・414は充実した脚台で、409・412の底面は凹む、414はあげ底気味の底部である。19号住居跡の土器のうち、419～436は口縁部破片である。439は外傾する口縁部で、くの字状に外反する。440・444は充実した脚台で、底面は若干凹む。20号住居跡の土器のうち、456～458・460は口縁部の破片である。467・469・470・472は充実した脚台で、469・470の底面は凹む。21号住居跡の土器のうち、482～485は口縁部破片である。486は完形品で、口縁部は逆し字に外反する。487は

直口する口縁部で、くの字状に外反する。494～496は充実した脚台で、495・496の底面は凹む。22号住居跡の土器のうち、500～502は口縁部破片である。口縁部の形状のうち、514は直口氣味で、516は外傾氣味の口縁部である。509・511は充実した脚台である。23号住居跡の土器のうち、518・519は口縁部の破片で、523は充実した底部である。24号住居跡の土器のうち、526・527・531・533は口縁部破片で、539～541は充実した底部である。25号住居跡の土器のうち、544は口縁部破片で、546・547は充実した脚台で底面は若干凹む。26号住居跡の土器のうち、552は完形品で、底部は脚台をもたず、底面は凹み、胴部は若干張り、内湾する口縁部で逆L字状に外反する。輪積みの手法を残す。553～558、562～564は口縁部の破片で、565・566は充実した脚台である。27号住居跡の土器のうち、585～593は口縁部破片である。口縁部の形状のうち、596は外傾する。597・598は直口氣味の口縁部である。600～605は充実した脚台で、604はあげ底氣味である。600～602の底厚はぶ厚い。

壺形土器は、口縁部の形状が直線的になりながらわざに外反するもの、口縁部内側に張り出しをつくるもの、口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らすもの、口縁部の外面直下に突帯を廻らし二叉状を呈するもの、大きく外反するもの、大きく外反し内側に突帯を廻らすものがある。また、二叉状口縁部をもつものには、口縁部内側に突帯を廻らすものがある。これらの形状のほか、口縁部端面が肥厚拡張され、その拡張部に凹線文を施したもの、頸部でしまり立ち上がりながら大きく外反し、口唇部の凹むもの、無頸や長頸を呈するなど多種にわたる。肩部及び胴部は張るもの、張りのないものがあり、底部は平底の底部である。これらの土器は、完形品が少なく全体の器形を知り得るものは少ない。

各住居跡についてみれば、1号住居跡の土器は口縁部破片で、2号住居跡からは出土しなかった。3号住居跡の土器のうち、11は直線的に立ち上がりながら外反する口縁部である。4号住居跡の土器のうち、27は瀬戸内系の土器と思われ、肩部付近に蓮状施文具による列点文を施す。28は頸部より立ち上がりながらわざかに外反し、二叉状を呈する口縁部である。30・31は平底の底部で、31はぶ厚い。5号住居跡の土器のうち、43、44は頸部より立ち上がりながらわざかに外反する口縁部で、43は逆L字状に、44は逆L字状に近く外反する。45は口縁部破片で、49は大きく外反する口縁部である。50は二叉状を呈する口縁部で、口唇部と突帯間に蓮状工具により短かい沈線を施す。56・59・60・61は平底の底部で、60・61は大型壺形土器の底部の可能性も考えられる。6号住居跡の土器のうち、69は口縁部破片で、70は瀬戸内系のものと思われる頸部下位に刻目突帯を廻らす。7号住居跡からは出土しなかった。8号住居跡の土器のうち、88・91は頸部より直線的に外反する口縁部で、91は口縁部内側に突帯を廻らす。90は肩の張はなく、直線的に立ち上がりながら外反し、逆L字状に外反する口縁部で、89は肩部である。9号住居跡の土器のうち、125～127は口縁部破片である。128～131は二叉状口縁で、129・130・175は口縁部破片である。181～183は平底の底部である。11号住居跡の土器のうち、212は肩の張はなく、頸部は短かく口唇部は凹む器形である。213・214は二叉状を呈する口縁部で、213

は口縁部内側に突帯を廻らす。12号住居跡の土器のうち、228・229は逆L字状に近く外反する口縁部で、内側に突帯を廻らす。230は瀬戸内系の凹線文をもつ口縁部で、232は平底の底部である。234は肩の張はなく、肩部は張るものである。13号住居跡の土器のうち、245は二叉状口縁で、246は頸部より立ち上がりながらわずかに外反する器形である。248は長頸壺で、口縁部及び頸部上位に7条、口縁部内側に2条の凹線文を施す。249は平底の底部である。14号住居跡の土器のうち、壺形土器は多く出土した。口縁部が二叉状を呈する土器が多く、中には復元完形品もある。248～289は口縁部の破片で、290～294・297は二叉状を呈する口縁部で施磨きがみられる。290の口縁部外側突帯は断面三角形を呈する。294・297は大きく外反する口縁部で、輪積みの手法を残す。297は完形品で、歪である。296は肩部から頸部上位までの部位で、輪積みの手法を残し、施削りや施磨きを認める。302は肩の張はなく、頸部でしまり大きく外反する口縁部で、口縁部上面には円形浮文を施す。15号住居跡の土器のうち、315は口縁部で薄手の器形である。316は頸部より立ち上がりながらわずかに外反する器形で、317は大型の壺の頸部である。319～321は胴部付近で、319は断面台形状貼付突帯を廻らし、端面は凹む。16号住居跡の土器のうち、350～355は口縁部破片で、355は二叉状を呈する。253は、わずかに外反し、くの字状に外反する。258は大きく外反する口縁部で口唇部は凹む。357は肩部付近で、359・360は断面台形状貼付突帯で、端面は凹む。372～376は平底の底部で、373は若干凹む。17号住居跡の土器は小破片が多い。18号住居跡の土器のうち、415は直線的に立ち上がりわずかに外反し、口縁部外側に断面三角形貼付突帯を廻らし、口唇部外側と突帯にそれぞれ斜行する刻目を施す。口縁部の二か所に円孔穿つ。丹を一部に認める。423は口縁部を欠損する。414・416・425は口縁部破片である。417・419・421は平底の底部である。19号住居跡の土器のうち、443～446は口縁部破片で、450は立ち上がりながらわずかに外反する器形である。451は肩部から胴部にかけての部位で、断面三角形貼付突帯と断面台形状貼付突帯を廻らす。第20号住居跡の土器のうち、473～477は口縁部の破片で、475・476は口縁部内側に突帯を廻らす。477は二叉状口縁で、大きく外反する器形であり、口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。479・480は平底の底部で、底面は若干凹む。489～492は肩部及び肩部から胴部付近の部位で、490は二か所に断面台形状貼付突帯を廻らし端面は凹む。491は肩部上位に円形浮文を認める。497は平底の底部で端面は若干丸味を帯びる。22号住居跡の土器のうち、503は肩の張はなく、頸部は短かく逆L字状に外反する口縁部である。504は二叉状を呈すると思われる。506・507は口縁部破片で、507は肩部付近と思われ、512は平底の底部である。23号住居跡の土器のうち、521は口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。522は大型の器形で、大きく外反する。524は底部である。24号住居跡の土器のうち、530は立ち上がりながらわずかに外反する器形で、535は口縁部破片である。536～538は肩部付近で、542は平底の底部である。25号住居跡の土器のうち、549は断面三角形貼付突帯を廻らし、550は平底の底部である。26号住居跡の土器のうち、559～561・567～569は口縁部で、559・567は口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。559は口

縁部上面に円形浮文を施す。560は逆L字状を呈し、561～574は平底の底部である。575・576は彫形を呈し、頸部でしまり大きく外反する口縁部で、大型である。575は口縁部上面に蓖による鋸齒文を施す。561・570～574は平底の底部である。27号住居跡の土器のうち、606は瀬戸内系の凹線文土器である。607は大型で直線的に大きく外反し、口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。610・611は口縁部破片で、613～615は平底の底部である。614・615は小破片である。

鉢形土器には、完形品もみられ、充実した脚台つきもある。口縁部の形状のうち、直口するもの、内湾するものの、外傾するもの、内傾するものがあり、くの字状に外反するもの、垂れ下り気味のもの、丸味を帯びるものがある。なお、二か所に耳状突起をもつものもある。口縁部上面は凹むもの、坦面を作るものがある。胴部は丸味を帯びるもの、張りのないものがあり、底部には、平底のものや充実した脚台をもつものがある。これらの土器はほとんどの住居跡に認めたが、量は多くない。

3号住居跡の土器のうち、13は平底の底部で、直口する器形で口唇部は丸味を帯び、完形品で、輪積みや指頭圧調整痕を内、外面に残す。6号住居跡の土器のうち、68は口縁部破片である。7号住居跡の土器のうち、72は底部を欠損するが、内傾する口縁部で、逆L字に近く外反し、断面台形状突帯を廻らす。8号住居跡の土器のうち、92・93は底部を欠損する。92は直口する口縁部で、くの字状に外反する。93は内湾気味で、逆L字状に外反する口縁部である。9号住居跡の土器のうち、124は外傾する口縁部で、二か所に耳状突起を施し、煤の付着が著しい。10号住居跡の土器のうち、176は外傾し、わずかに立ち上がる口縁部で、口唇部は丸味を帯びる。178・179は逆L字状に外反する口縁部である。11号住居跡の土器のうち、205～207は逆L字状に外反し、205・206は直口気味に、207は内湾する口縁部で、205は断面三角形貼付突帯を廻らす。204は大形の鉢で、口縁部は内湾し、口唇部は丸味を帯び、煤の付着が著しい。13号住居跡の土器のうち、247は器形は厚く、口唇部は丸味を帯びる。14号住居跡の土器のうち、267は内湾し、逆L字状に外反する口縁部で、269は小破片でくの字状に外反する。14号住居跡の土器のうち、298・299は大きく内湾する口縁部で、くの字状に外反し、299は大きく内湾する口縁部で、くの字状に外反し、299は胴部上位に断面台形状貼付突帯を廻らす。15号住居跡の土器のうち、311は口縁部破片である。16号住居跡の土器のうち、364は完形品である。18号住居跡の土器のうち、427は直口気味の口縁部で、端面は丸味を帯び、輪積みや指頭圧調整痕を残す。20号住居跡の土器のうち、459は直口する口縁部で逆L字状を呈し、478は底部である。24号住居跡の土器のうち、529は大きく内傾する口縁部で逆L字状を呈する。26号住居跡の土器のうち、578は外傾気味の口縁部で口唇部は丸味を帯び、ぶ厚い平底の底部で、輪積みの手法を残す。579は器壁は薄く、口唇部に耳状突起を貼り付け、輪積みの手法を残し、煤の付着や剥落が著しい。27号住居跡の土器のうち、612は内傾する口縁部で、逆L字状に外反し、断面三角形貼付突帯を廻らす。

その他の土器には、大型菱形土器、高円形土器、手捏ね土器、蓋形土器などがある。

3号住居跡の土器のうち、14は大型壺形土器で底部を欠損する。胴部に張ではなく、内傾気味の口縁部で逆L字状に外反し口縁部外側に断面台形状貼付突帯を廻らす。輪積みの手法を残す。4号住居跡の土器のうち、24と26は大型壺形土器の破片である。5号住居跡の土器のうち、46は蓋形土器で、47は手捏ね土器の破片で、57・58は高环形土器の破片である。9号住居跡の土器のうち、122は大型壺形土器の破片である。10号住居跡の土器のうち、180は蓋形土器のつまみ部である。11号住居跡の土器のうち、215は手捏ね土器の復元完形品で、13号住居跡の土器のうち、253は底部である。14号住居跡の土器のうち、300は高环形土器の環部と脚部付近の部位で、301は脚部破片である。17号住居跡の土器のうち、395は大型壺形土器の破片である。18号住居跡の土器のうち、418・420・422は手捏ね土器の底部である。19号住居跡の土器のうち、438・441・442は大型壺形土器で、449は手捏ね土器の底部である。21号住居跡の土器のうち、493は大型壺形土器である。22号住居跡の土器のうち、505は大型壺形土器である。25号住居跡の土器のうち、548は蓋形土器で、26号住居跡のうち、580は蓋形土器である。27号住居跡のうち、595は大型壺形土器破片である。

各住居跡内の土器は、大半が在地の山ノ口式土器であり、中には在地にみられない土器が埋土中より出土した。4号住居跡の27は瀬戸内系の壺の肩部付近と思われる。6号住居跡の70は壺の頸部及び頭部付近は、移入土器と考えられる。7号住居跡の72は北九州の影響をもつ鉢形土器である。9号住居跡の119はあげ底気味の底部であり、113は壺の肩部付近の部位で、北九州系の影響を受けている。11号住居跡の209はあげ底気味の底部である。12号住居跡の230は瀬戸内系の凹線文をもつ壺の口縁部である。13号住居跡の248は口縁部から頸部の外面に凹線文のみられる長頭壺である。14号住居跡の283は在地の土器に類似品がみられるが、北九州の影響を受けている壺で、299は7号住居跡の72に類似した鉢形土器である。15号住居跡の319は北九州系の影響を受けている壺の肩部付近である。16号住居跡の359・360は北九州系の影響を認める壺の肩部付近で、371はあげ底気味の底部である。18号住居跡の414はあげ底気味の底部で、415は在地の土器と思われない壺の口縁部である。19号住居跡の451は壺の肩部から胴部にかけての部位で、北九州系の影響を受けている。20号住居跡の468・471は壺の胴部付近の部位で、北九州系の影響を受けていると思われる。21号住居跡の487は在地の土器には認められない土器で、490は北九州系の影響を受け、491は瀬戸内系の影響を受けていると思われる壺の肩部付近の部位である。22号住居跡の503は在地に認められない壺である。26号住居跡の559の壺の口縁部や575の口縁部上面には瀬戸内系の影響を受けていると思われる。27号住居跡の604はあげ底気味の底部で、606は瀬戸内系の凹線文をもつ壺の口縁部である。これらの土器のほか、9、20、110、259、266、439、487、515・516、552の壺形土器については、これまでの山ノ口式土器の中でも特異的なタイプである。大型壺形土器は、居住環境から水甕用に用いられたものと考えられる。また、宮崎県の学園都市11号遺跡2号住居跡や新田原6号住居跡出土の大甕と類似したものも認められる。

### 第3節 挖立柱建跡

掘立柱建跡は調査区西側6区から東側23区までの約180mの範囲に14棟が検出された。うち2棟についてはバイパス建設予定地外へのびている。

王子遺跡の掘立柱建跡は、妻側に独立して桟木を支える桟持柱をもつ掘立柱建跡（桟持柱付）、1間×1間と2間×1間の掘立柱建跡。四本の掘立柱の中央に土壇を伴う掘立柱建跡とがある。

#### ① 1号掘立柱建跡（桟持柱付）(Fig. 101, PL. 22)

発掘調査の最西部より以東60mの南西端部に位置する。1号住居跡との最短距離は北東約7mで、13号掘立柱建跡まで、北東約9.1cmを測り、B-6・7区のⅢ層上面で検出された。

本建物跡は、Ⅲ層上面の検出であったが、実際の柱穴の掘込は、Ⅱ層中から掘り込まれる。柱穴でみれば、 $P_1 - P_3 : 335.5\text{cm}$ ,  $P_1 - P_7 : 327.5\text{cm}$ ,  $P_1 - P_9 : 298.5\text{cm}$ ,  $P_3 - P_5 : 313.0\text{cm}$ を測り、さらに妻側にそれぞれ桟持柱が認められ、 $P_4 - P_{10} : 535\text{cm}$ である。梁行2間×桁行2間の桟持柱をもつ建物である。内角はおよそ $\angle P_1 - P_2 - P_3$ は $92.5^\circ$ ,  $\angle P_4 - P_5 - P_6$ は $89.5^\circ$ ,  $\angle P_7 - P_8 - P_9$

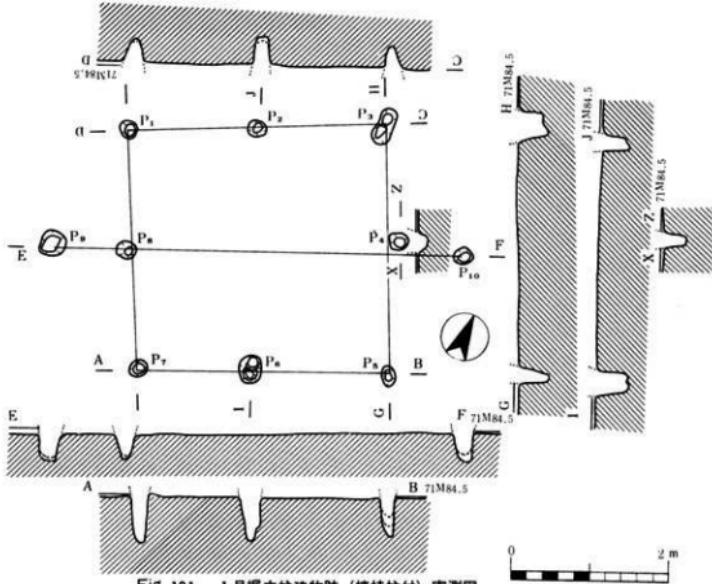


Fig. 101 1号掘立柱建跡（桟持柱付）実測図

$P_1$ ,  $P_2$ は89.5°,  $\angle P_1 P_2 P_3$ は95.5°である。 $P_1 - P_2$ 線上から $P_3$ は略西に16cm、東西の棟持間を結ぶ線上から略南西に約22cmずれている。 $P_1 - P_2$ の方位はN-67°-Eをとる。柱穴の大きさは長径28.7cm、短径は21.5cm、深さは37.7cmで、梁間柱間は152.8cm、桁行柱間は165.7cmの平均を測る。 $P_1$ と $P_2$ の柱穴は二か所の掘込を認め、立替えの可能性が考えられる。 $P_1$ の埋土中には土器破片を認めた。

Tab. 26 1号掘立柱建物跡の一覽表

② 2号据立柱建物跡（據持柱付）(Fig. 102, PL. 22)

発掘調査区のはば中央部に位置する。10号掘立柱建物跡との最短距離は、4.3cmで、14号住居跡まで、7.6cmを測り、E-16区のⅢ層上面で検出された。

本建物跡は、Ⅲ層上面の検出のため柱穴の実際の掘込は大きいものと考える。遺存している柱穴の掘込でみれば、 $P_1 - P_{13} : 449\text{cm}$ 、 $P_{13} - P_3 : 500\text{cm}$ 、 $P_1 - P_{13} : 371\text{cm}$ 、 $P_3 - P_{13} : 387.5\text{cm}$ を測り、さらに妻側にそれぞれ棟持柱を検出した。 $P_1 - P_{13} : 681.5\text{cm}$ である。梁行3間×桁

Tab. 27 2号掘立柱建物跡の一覧表

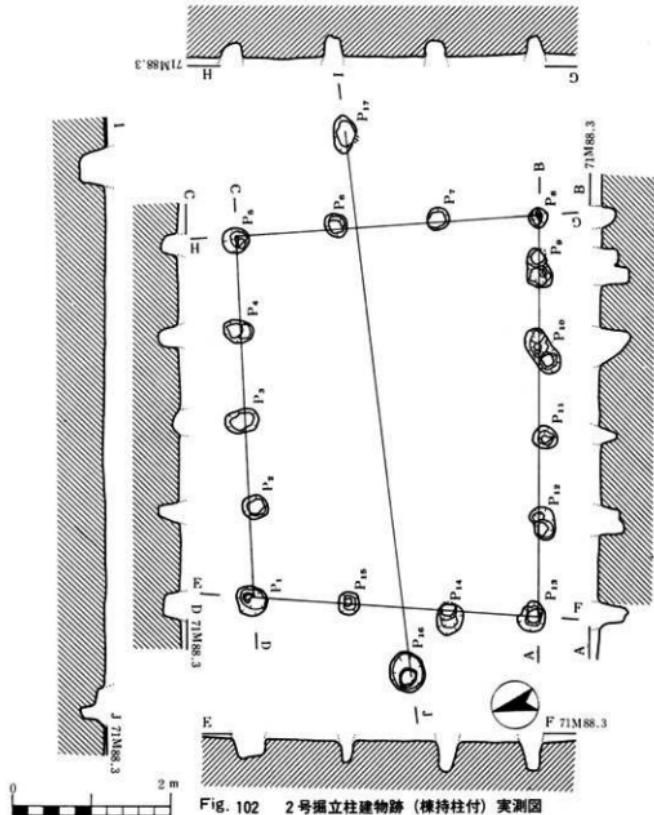


Fig. 102 2号掘立柱建物跡（棟持柱付）実測図

行4間（南側5間）で、棟持柱をもつ建物である。内角はおよそ $\angle P_{13}P_1P_{15}$ は $86.5^\circ$ 、 $\angle P_1P_{16}P_{17}$ は $29.1^\circ$ 、 $\angle P_{15}P_1P_{16}$ は $96.5^\circ$ 、 $\angle P_{16}P_{17}P_{18}$ は $86.5^\circ$ である。棟持柱 $P_{14}-P_{15}$ を結んだ線より $P_{18}$ ：184cm、 $P_1$ ：155cmで、 $P_{16}-P_{17}$ の方位は $N-82.5^\circ-E$ 、 $P_1-P_{16}$ は $N-79.5^\circ-E$ 、 $P_{13}-P_{15}$ は $N-76.5^\circ-E$ をとる。南側桁行が1間多いために全体が北側に歪な長方形を呈する。柱穴の大きさは、長径39.4cm、短径29.5cm、深さ27.9cmで、梁間柱間126.4cm、桁行間112.2cm（北側）、100cm（南側）の平均を測る。 $P_1$ の柱穴は浅いが、実際の掘込は大きいものと考えられる。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_{10} \cdot P_{11} \cdot P_{12}$ の埋土中より土器破片が出土したが、小破片で固化は困難である。

③ 3号掘立柱建物跡（棟持柱付）(Fig. 103, PL. 23)

13号住居跡との最短距離は、南西約8.0cm、14号住居跡まで、南東約11.8cm、2号掘立柱建物跡まで、略南東約24.9mを測り、E-13区のⅡ層中で検出された。

本建物跡は、バイパス建設予定地路線外へ大半がのび、詳細は不明である。4号掘立柱建物跡とは一部が重複するが建物相互間の掘込の切り合いはない。梁間2間以上、桁行3間以上が想定され、4号掘立柱建物跡との関係で棟持柱をもつ掘立柱建物の可能性が考えられる。建物の規

模は、梁間144cm、桁行 $P_3 - P_2$  : 125cm、 $P_2 - P_1$  : 124cmを測り、内角はおよそ $\angle P_3 P_2 P_1 = 89^\circ$ である。 $P_3 - P_2$ の方位はN-78.5°-Wをとる。柱穴の大きさは長径41cm、短径35cm、深さ46.5cmの平均を測る。 $P_2 \cdot P_1$ の埋土から土器小破片が出土した。

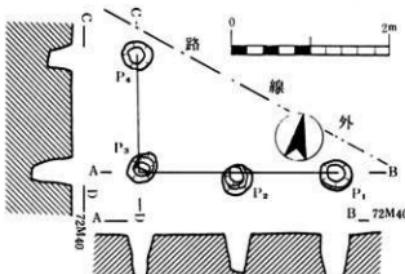


Fig. 103 3号掘立柱建物跡（棟持柱付）実測図

Tab. 28 3号掘立柱建物跡の一覧表

\* S B : 掘立柱建物跡 (単位: cm)

S B	主軸方位	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ
3 山土区	N-79.0-W F-13	W-(144) E-不 明	N-不 明 S-(249)	不 明	1	42×38×54
					2	40×35×48
		梁間柱間	梁間間	桁行柱間	3	42×33×52
					4	40×34×32
		$P_4 - P_3 : 144$	(144)	$P_3 - P_2 : 125$ $P_2 - P_1 : 124$	(249)	備 考
						・遺構の大半が路線外へのびる。

④ 4号掘立柱建物跡（棟持柱付）(Fig. 104, PL. 23)

13号住居跡の最短距離は、略南8.6mで、9号住居跡まで、略南西8.75m、中央の溝状遺構まで、約0.75cmを測り、F-12・13区のⅡ層中で検出された。

本建物跡は、バイパス建設予定地路線外へのびるため、詳細は不明である。3号掘立柱建物跡とは重複するが建物相互間の柱穴の掘込の切り合いはない。梁間2間以上、桁行4間で、梁間 $P_4$ の西側に棟持柱と想定される柱穴が検出される。梁間4間×桁行4間の建物で、東側にそれぞれ棟持柱をもつ建物跡の可能性がある。建物の規模は、西側梁間 $P_4 - P_3$  : 283cm、東側梁間 $P_3 - P_2$  : 126cm、桁行 $P_6 - P_5$  : 490cmを測り、内角はおよそ $\angle P_4 P_3 P_2$ は $90.5^\circ$ 、 $\angle P_5$

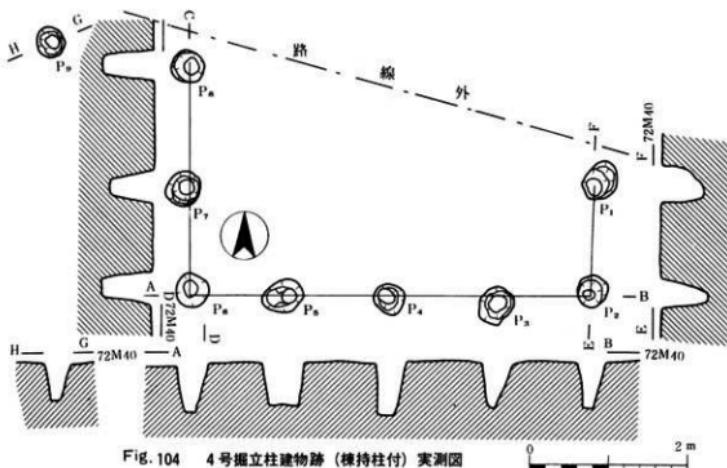


Fig. 104 4号掘立柱建物跡（棟持柱付）実測図

$P_2 - P_1$  は  $92^\circ$  である。 $P_s - P_2$  の方位は  $N - 91^\circ - E$  をとる。柱穴の大きさは長径  $44.4\text{cm}$ 、短径  $38.5\text{cm}$ 、深さ  $57.8\text{cm}$  の平均を測る。 $P_s - P_4 - P_3$  の埋土中より土器小破片が出土した。

Tab. 29 4号掘立柱建物跡の一覧表

\*SB 掘立建物跡 P 柱穴 単位: cm

S B	主軸方位	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	備考
4	N-91°-E	W-(283)	N-不明		1	52×40×54	・遺構の約半分は路線
出土区	F-12, 13	E-(126)	S-490	$P_s$ -不明	2	40×36×58	外へのび。
					3	48×38×58	・推定では4間×4間
					4	40×38×66	の建物跡が考えられ
				$P_s - P_s: 115$	5	52×40×54	る。
				$P_s - P_4: 136$	6	42×40×64	・3号掘立柱建物跡
				$P_4 - P_s: 122$	7	46×42×55	(棟持柱付)と重複する。
				$P_s - P_2: 117$	8	42×39×66	
				$P_2 - ?: (126)$	9	38×34×46	

⑤ 5号掘立柱建物跡（棟持柱付）(Fig. 105, PL. 24)

7号掘立柱建物跡との最短距離は、略南東1.9m、21号住居跡まで、略南西3.05m、20号住居跡まで、略南東5.3m、9号掘立柱建物跡まで、7.7mを測り、B-14区のⅢ層上面（一部Ⅱ層中）で検出された。

本建物跡は、8号掘立柱建物跡と重複し、建物相互間の掘込の切り合いは、柱穴2か所があり、梁間3間、桁行3間（南側4間）で、棟持柱をもつ建物跡である。 $P_2 - P_1 \sim P_{10}$ や $P_{11}$ についてもⅡ層中で検出された。遺物跡の柱穴の掘込は、 $P_1 - P_{10} : 226\text{cm}$ 、 $P_4 - P_{10} : 266\text{cm}$ 、 $P_1 - P_{10} : 291\text{cm}$ 、 $P_1 - P_{11} : 300\text{cm}$ を測る。内角はおよそ $\angle P_1 P_{10} = 90.5^\circ$ 、 $\angle P_{10} P_4 = 89.5^\circ$ 、 $\angle P_1 P_4 = 89.5^\circ$ 、 $\angle P_4 P_{11} = 90.5^\circ$ である。棟持柱 $P_{10} - P_{11}$ を結んだ線より $P_1 : 131\text{cm}$ 、 $P_4 : 128.5\text{cm}$ で、 $P_{10} - P_{11} : 371\text{cm}$ を測る。 $P_{10} - P_{11}$ の方はN-79°-Eをとる。わりと小型の建物である。Ⅱ層中検出の柱穴の大きさは長径41.4cm、短径28.3cm、深さ51.8cm、Ⅲ層上面検出の柱穴の大きさは長径31.8cm、短径24.3cm、深さ30.4cmの平均を測る。棟持柱 $P_{10}$ と $P_{11}$ は、一部の切り合い関係である。また、 $P_{11}$ は重複関係が考えられる。

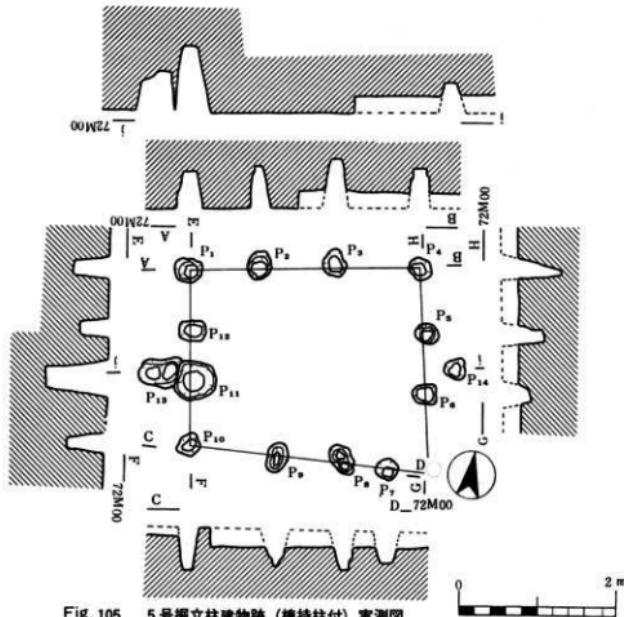


Fig. 105 5号掘立柱建物跡（棟持柱付）実測図

Tab. 30 5号掘立柱建物跡の一覧表

\* S B : 掘立柱建物 P : 柱穴 単位: cm

S B	主軸方位	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長軸×短軸×深さ	P	長軸×短軸×深さ
6	N 79° E	W - 3間 266	N - 3間 291	P <sub>13</sub> - P <sub>14</sub>	1	35×27×47	11	54×46×82
出土区	B - 4	E - 3間 226	S - 4間 300	373	2	36×26×52	12	36×24×34
		梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間			
P <sub>1</sub> - P <sub>12</sub> : 80			P <sub>1</sub> - P <sub>2</sub> : 86		3	33×26×37	13	56×33×49
P <sub>12</sub> - P <sub>11</sub> : 66		P <sub>1</sub> - P <sub>10</sub> : 226	P <sub>2</sub> - P <sub>3</sub> : 95	P <sub>1</sub> - P <sub>10</sub> : 291	4	28×26×54	14	28×24×17
P <sub>11</sub> - P <sub>10</sub> : 80		P <sub>2</sub> - P <sub>3</sub> : 243	P <sub>3</sub> - P <sub>4</sub> : 110		5	30×23×34		備 行
		P <sub>3</sub> - P <sub>8</sub> : 254	P <sub>10</sub> - P <sub>8</sub> : 111		6	32×24×14		8号掘立柱建
P <sub>4</sub> - P <sub>5</sub> : 86		P <sub>8</sub> - P <sub>9</sub> : 85	P <sub>4</sub> - ○ : 300		7	27×24×18		物跡と重複す
P <sub>5</sub> - P <sub>6</sub> : 76	P <sub>4</sub> - ○ : 266 (推定)	P <sub>8</sub> - P <sub>7</sub> : 50			8	41×24×29		る。
P <sub>6</sub> - ○ : 04		P <sub>7</sub> - ○ : 54			9	36×22×24		
					10	30×24×47		

## ⑥ 6号掘立柱建物跡（棟持柱付）(Fig. 106, PL. 24)

26号住居跡との最短距離は、略西約1.7mで、27号住居跡まで、略南西約9.0cmを測り、E・F-21区のⅡ層中で検出された。

本建物跡は、一部市道小原線敷地内に東側梁間及び東側棟持柱を認め、当時の工事施行により一部が影響を受け、現検出面より若干下位で検出された。柱穴の掘込をみれば、P<sub>1</sub> - P<sub>12</sub> : 360cm, P<sub>3</sub> - P<sub>5</sub> : 392cm, P<sub>1</sub> - P<sub>3</sub> : 440cm, P<sub>2</sub> - P<sub>4</sub> : 450cmを測り、さらに妻側にそれぞれ棟持柱を検出し、P<sub>13</sub> - P<sub>14</sub> : 615cmである。梁間3間×桁行4間で、棟持柱をもつ建物跡である。

Tab. 31 6号掘立柱建物跡の一覧表

\* S B : 掘立柱建物 P : 柱穴 単位: cm

S B	主軸方位	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長軸×短軸×深さ	P	長軸×短軸×深さ
6	N 89.5° E	W - 4間 360	N - 3間 440	P <sub>15</sub> - P <sub>16</sub>	1	39×35×50	13	34×32×56
出土区	F - 21	E - 4間 392	S - 3間 450	615	2	41×37×31	14	36×30×45
		梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間			
P <sub>1</sub> - P <sub>12</sub> : 114		P <sub>1</sub> - P <sub>2</sub> : 131			3	46×38×40	15	66×28×82
P <sub>14</sub> - P <sub>13</sub> : 127	P <sub>1</sub> - P <sub>12</sub> 360	P <sub>2</sub> - P <sub>3</sub> : 110		P <sub>1</sub> - P <sub>5</sub> : 440	4	78×31×24	16	63×40×74
P <sub>13</sub> - P <sub>12</sub> : 119		P <sub>3</sub> - P <sub>4</sub> : 65			5	41×32×39	17	68×58×30
		P <sub>4</sub> - P <sub>5</sub> : 134			6	62×30×40		備 考
P <sub>5</sub> - P <sub>6</sub> : 143					7	30×28×24		
P <sub>6</sub> - P <sub>7</sub> : 119	P <sub>5</sub> - P <sub>8</sub> 392	P <sub>12</sub> - P <sub>11</sub> : 100			8	51×36×46		
P <sub>8</sub> - P <sub>9</sub> : 130		P <sub>11</sub> - P <sub>10</sub> : 94		P <sub>12</sub> - P <sub>8</sub> : 450	9	51×38×62		
		P <sub>10</sub> - P <sub>8</sub> : 110			10	44×37×52		
		P <sub>8</sub> - P <sub>9</sub> : 146			11	45×39×55		
					12	42×20×61		

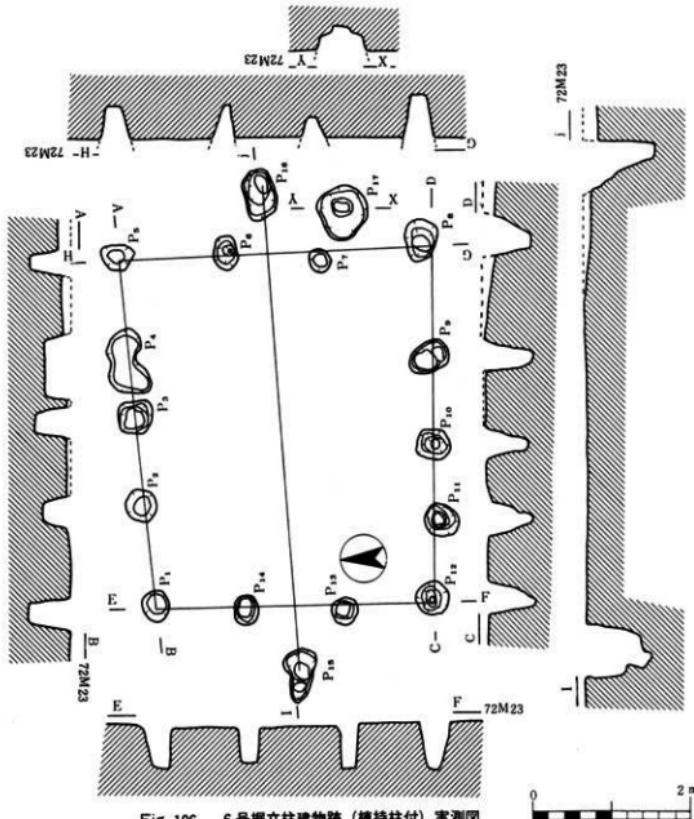


Fig. 106 6号掘立柱建物跡（株立柱付）実測図

内角はおよそ  $\angle P_1 P_{12} P_3$  は  $91^\circ$ 、 $\angle P_{12} P_8 P_3$  は  $87.5^\circ$ 、 $\angle P_8 P_3 P_1$  は  $87^\circ$ 、 $\angle P_3 P_1 P_{12}$  は  $85^\circ$  である。 $P_1 - P_{12}$  線上から  $P_{13}$  は西側に約  $10\text{cm}$ 、 $P_1 - P_8$  線上から  $P_3$  は西側に約  $15\text{cm}$  ずれている。 $P_{13} - P_{14}$  の方位は  $N - 88^\circ - E$  をとる。梁間柱間は西側： $120\text{cm}$ 、東側： $130\text{cm}$ 、桁間柱間は西側： $110\text{cm}$ 、東側： $112.5\text{cm}$  の平均を測り、全体的に西側に歪な長方形を呈する。柱穴の大きさは長径  $48.6\text{cm}$ 、短径  $34.6\text{cm}$ 、深さ  $47.7\text{cm}$  の平均を測る。 $P_1 \cdot P_8 \cdot P_{11}$  の柱穴は 2 か所の掘込を認める。 $P_{13}$  は、本建物跡に付属する柱穴との間連は薄いものと思われる。

⑦ 7号掘立柱建物 (Fig. 107, PL. 25)

5・6号掘立柱建物との最短距離は、略南西1.7mで、9号掘立柱建物跡まで、略南東3.4cm、20号住居跡まで、略南7.7mを測り、C-14区のⅢ層上面で検出された。

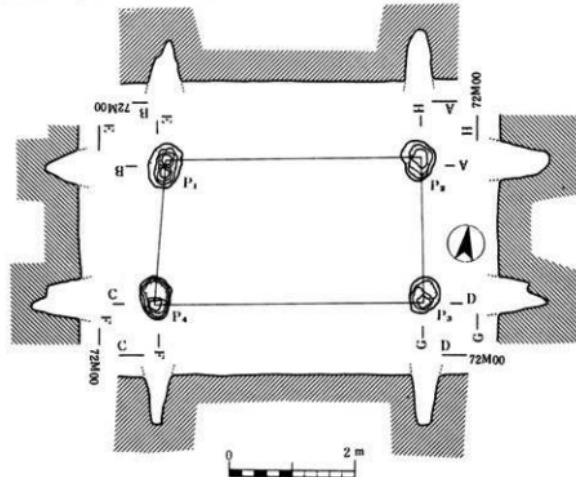


Fig. 107 7号掘立柱建物跡実測図

本建物跡は、Ⅲ層上面での検出のため、実際の掘込はⅡ層中で、梁行1間×桁行1間の建物である。柱穴の実際の掘込は大きく、建物跡の規模は、梁行227.2cm、桁行422cmで、柱穴大きさは長径64.2cm、短径42cm、深さ82.7cmの平均を測る。主軸の方位はN-81°-Eをとる。内角はおよそ∠P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>は90.5°、∠P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>は85.5°、∠P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>は94.5°、∠P<sub>2</sub>-P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>は90°である。P<sub>1</sub>以外の柱穴は二か所に掘込を検出し、おそらく立替えの可能性が考えられる。P<sub>1</sub>の埋土中より土器小破片が出土した。

Tab. 32 7号掘立柱建物跡の一覧表

■ S B : 掘立柱建物跡 P : 柱穴 単位: cm

S B	主軸の方位	梁 間 間	桁 行 間	出 土 区	P	長径×短径×深さ	備 考
7	N-81°-E	W-1間 226	N-1間 433	C-14	1	69×30×90	・Ⅲ層上面で検出する。
		E-1間 229	S-1間 412		2	64×45×81	
					3	60×48×81	
		P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> :226		P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :433	4	64×46×79	
		P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :229		P <sub>4</sub> -P <sub>3</sub> :412			

⑥ 8号掘立柱建物跡 (Fig. 108, PL. 24)

7号掘立柱建物跡との最短距離は、略北東1.6m、20号住居跡まで、略南東4.5m、9号掘立柱建物まで、略西6.0mを測り、B-14区のⅢ層上面（一部Ⅱ層中）で検出された。

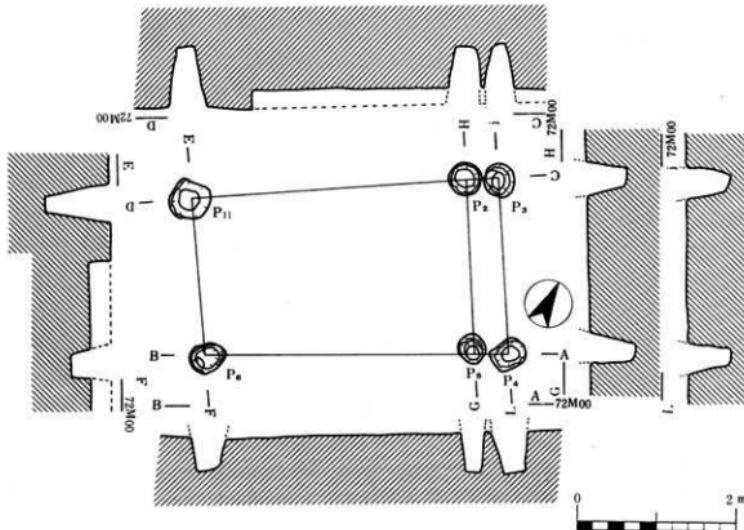


Fig. 108 8号掘立柱建物跡実測図

本建物跡は、6号掘立柱建物跡（棟持柱付）と重複し、建物相互間は柱穴の2か所に重複がみられ、梁間1間×桁行1間の建物である。6号掘立柱建物跡 $P_{11}$ は、本建物跡の $P_1$ と重複し、棟持柱 $P_{11}$ を一部切っている。遺存する柱穴は、梁間間は212cm、桁行間は、391cmと348.5cmで、大きさは長径44.8cm、短径37.5cm、深さ57.3cmの平均をとる。内角はおよそ $\angle P_{11}P_1P_2 = 94.5^\circ$  $\angle P_1P_2P_{11} = 87.5^\circ$ 、 $\angle P_1P_2P_3P_{11} = 89.5^\circ$ 、 $\angle P_1P_3P_{11} = 89.0^\circ$ 、 $\angle P_2P_3P_{11} = 89.0^\circ$ を測り、若干西側へ歪な建物である。また6号掘立柱建物跡（棟持柱付）が消滅したのち造られたものと考えられる。

Tab. 33 8号掘立柱建物跡一覧表

※SB: 掘立柱建物跡 P: 柱穴 単位: cm

SB	主軸方位	梁間間	桁行間	出土区	P		備考
		W - 1間 220	N - 1間 $\frac{353}{395}$		1	54×46×82	・3層上面検出、各柱穴ともに実際の掘込は上位であり径も大きいものと考えられる。
8	N-75.5°-E	E - 1間 196	S - 1間 $\frac{344}{388}$	B - 14	2	41×38×52	・6号掘立柱建物跡と重複する。
					3	42×39×56	
					4	48×34×54	
					5	37×34×58	
					6	47×34×42	

(9) 9号掘立柱建物跡 (Fig. 109, PL. 25)

7号掘立柱建物跡との最短距離は、略北西3.4mで、20号住居跡まで、略南西5.0m、8号掘立柱建物跡まで、略南西6.0mを測り、C-15区のⅢ層上面で検出された。

本建物跡は、Ⅲ層上面の検出で、実際の掘込はⅡ層中で、梁間1間(西側2間)×桁行1間の建物である。柱穴の実際の掘込は大きく、建物跡の規模は、梁間207.5cm、(西側107.5cm)、桁行355cmで、柱穴の大きさは、長径36cm、短径30.8cm、深さ22.6の平均をとる。内角はおよそ∠P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>は94.5°、∠P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>は94.5°、∠P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>は83°である。梁間P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>線よりP<sub>3</sub>は略南に20cmずれている。

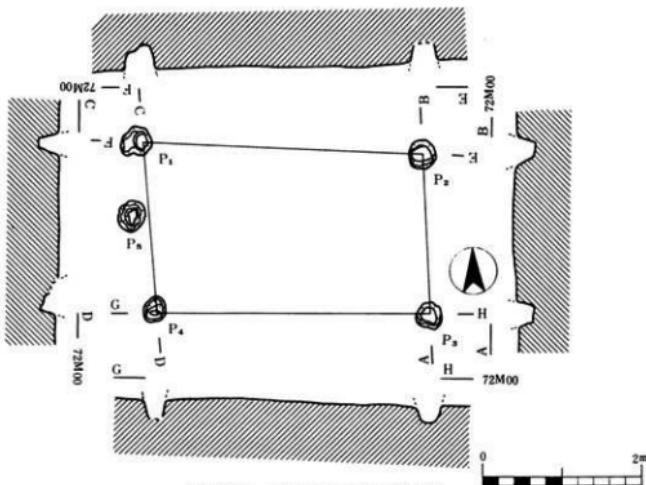


Fig. 109 9号掘立柱建物跡実測図

Tab. 34 9号掘立柱建物跡の一覧表

※SB:掘立柱建物 P:柱穴 単位:cm

SB	主軸方位	梁間間	桁行間	出土区	P	長軸×短軸×深さ	備考
9		W - 2間 200	N - 1間 361		1	39×32×26	・3層上面で
	N 93.2°-E	E - 1間 215	S - 1間 350	C-15	2	36×33×24	の検出である。
					3	34×28×21	(西側梁間)
					4	34×28×22	
					5	37×33×20	
		P <sub>1</sub> -P <sub>5</sub> :92	P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :215	P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :361			
		P <sub>5</sub> -P <sub>4</sub> :123	P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :200	P <sub>4</sub> -P <sub>3</sub> :350			

## ⑩ 10号掘立柱建物跡 (Fig. 110)

2号掘立柱建物跡との最短距離は略北西4.5cmで、15号住居跡まで略南7.9mを測り、D-16・17区のⅡ層中（一部Ⅲ層上面）で検出された。

本建物跡は、西側梁間の柱穴はⅢ層上面の検出で、梁間1間（東側2間）×桁行1間の建物である。建物跡の規模は、梁間221cm（東側110cm）、桁行398.5cmで、柱穴の大きさは長径36.4cm、短径30.2cm、深さ51.4cmの平均をとる。内角はおよそ∠P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>は87.5°、∠P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>-P<sub>5</sub>は89°。

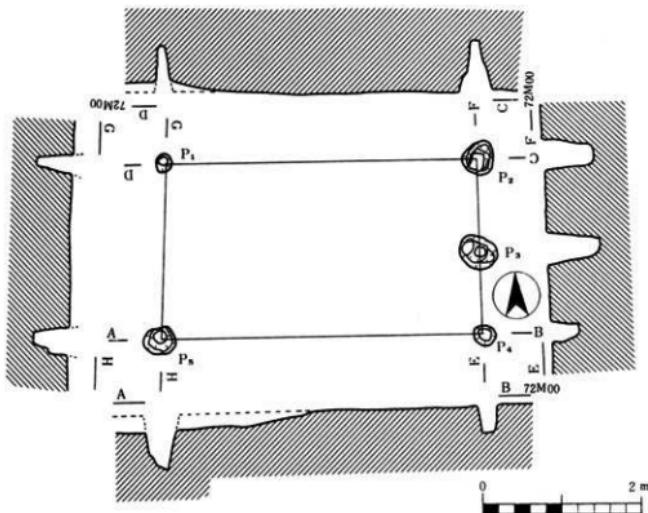


Fig. 110 10号掘立柱建物跡実測図

$\angle P_1 P_2 P_3$  は  $91^\circ$ ,  $\angle P_2 P_3 P_4$  は  $88^\circ$  である。 $P_{13}$  の柱穴は二か所に掘込を検出した。主軸の方位は  $N - 90.5^\circ - E$  をとる。 $P_1 \cdot P_3$  は II 層上面での検出である。

Tab. 35 10号掘立柱建物跡の一覧表

\* S B : 掘立柱建物 P : 柱穴 単位: cm

S B	主軸方位	梁間間	桁行間	出土区	P	長軸×短軸×深さ	備考
9	N-90.5°-E	W - 1間 220 E - 2間 405	N - 1間 392 E - 1間 405	E D-D-16-17	1 2 2	22×19×45 43×37×64	・遺構の一部は 3 層上面での検出で $P_1 \cdot P_3$ について では実際の掘込は 大きいものと考え られる。
					3	50×39×66	
		$P_2 - P_3: 222$ $P_3 - P_4: 120$		$P_1 - P_2: 392$	4	28×22×32	
		$P_3 - P_4: 100$	$P_2 - P_4: 220$	$P_5 - P_4: 405$	5	39×34×50	

#### ⑪ 11号掘立柱建物跡 (Fig. 111, PL. 26)

23号住居跡との最短距離は、略南西1.7m、19号住居跡まで、略西4.2m、26号住居跡まで、略南東8.8mを測り、E・F 19区のII層中で検出された。

本建物跡は、梁間1間×桁行1間の建物である。建物跡の規模は、梁間206cm、桁行362.5cmで、柱穴の大きさは、長径45.7cm、短径39.5cm、深さ59.5cmの平均を測る。内角はおよそ  $\angle P_1 P_2 P_3$  は  $93^\circ$ ,  $\angle P_2 P_3 P_4$  は  $90^\circ$ ,  $\angle P_3 P_4 P_1$  は  $93.5^\circ$ ,  $\angle P_4 P_3 P_2$  は  $83^\circ$  である。主軸の方位は  $N - 92^\circ - E$  をとる。この建物は東側へ歪な長方形を呈する。

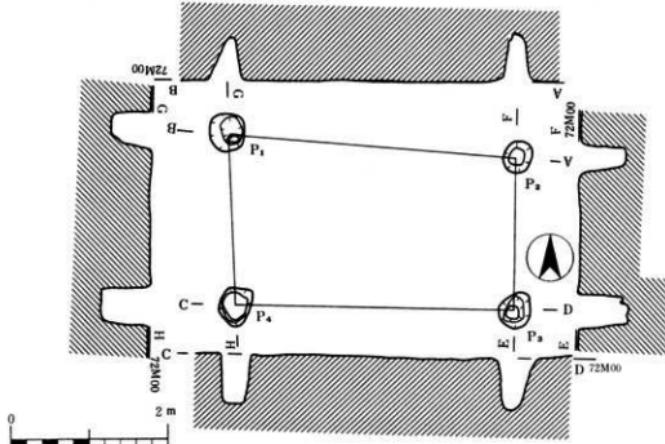
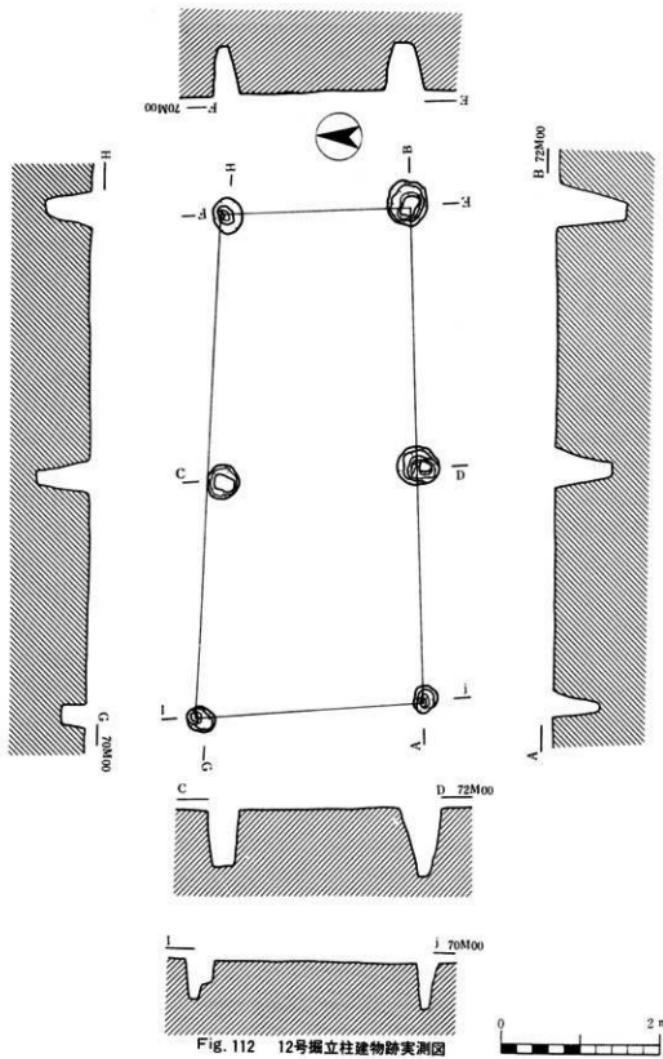


Fig. 111 11号掘立柱建物跡実測図



Tab. 36 II号掘立柱建物跡の一覧表

※ S B : 掘立柱建物跡 P : 柱穴 単位: cm

S B	主軸方位	梁間間	桁行間	出土区	P	長軸×短軸×深さ	備考
II	N-92° E	W-1間 192 E-1間 220	N-1間 370 S-1間 355	F-19	1 2	50×46×50 40×34×60	・2層面の検出である。
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間		3	45×40×66	
	P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> :220 P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :192		P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :370 P <sub>4</sub> -P <sub>3</sub> :355		4	48×38×62	

## ⑩ 12号掘立柱建物跡 (Fig. 112, PL. 26)

本遺跡の発掘調査区の東側端部に位置する。2号土塙との最短距離は、略西0.8mで、25号住居跡まで、略北東約6.5mを測り、E-23・24区のⅡ層中で検出された。

本建物跡は、梁間1間×桁行2間の建物である。建物跡の規模は、梁間265cm、桁行625cmで、柱穴の大きさは、長径44.3cm、短径38.1cm、深さ72cmの平均を測る。主軸の方位はN-89.5°-Eをとる。P<sub>1</sub>は略南へ22cmずれている。内角はおよそ∠P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>, P<sub>3</sub>, P<sub>4</sub>は92°、∠P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>, P<sub>3</sub>, P<sub>4</sub>は89.5°、∠P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>, P<sub>3</sub>, P<sub>4</sub>は95°、∠P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>, P<sub>3</sub>, P<sub>4</sub>は84°を測り、全体に東側に歪な長方形を呈する。

Tab. 37 12号掘立柱建物跡の一覧表

※ S B : 掘立柱建物跡 P : 柱穴 単位: cm

S B	主軸方位	梁間間	桁行間	出土区	P	長軸×短軸×深さ	備考
12	N-89.5-E	W-1間 295 E-1間 235	N-2間 630 S-2間 620	E-23・24	1 2 3	38×30×70 42×38×68 44×35×60	・II層中で一部 III層上面で検出する。
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間				
	P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> :295 P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :335 P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> :235	P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :295 P <sub>4</sub> -P <sub>3</sub> :298 P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> :322	P <sub>1</sub> -P <sub>3</sub> :630 P <sub>4</sub> -P <sub>2</sub> :620		4 5 6	56×50×90 52×48×84 34×28×60	

## ⑪ 13号掘立柱建物跡 (Fig. 113, PL. 27)

本遺跡の住居跡群西側端部に位置する。1号住居跡との最短距離は、西約1.15m、4号住居跡まで、略北東約3.15m、5号住居跡まで、略南西約6.6mを測り、C-D-7区のⅢ層上面(遺構の約半分はⅡ層中)で検出された。

本建物跡は、四本の掘立柱の中央に「土塙」を伴う建物である。梁間1間×桁行1間の建物に、178×126cm、深さ65cmの略円形状の土塙をもつ。建物跡の規模は、梁間234cm、桁行412cmで、柱穴の大きさは、長径57.7cm、短径52.5cm、深さ98.2cmの平均を測る。内角はおよそ∠P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>, P<sub>3</sub>は88.5°、∠P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>, P<sub>4</sub>は88°、∠P<sub>1</sub>, P<sub>3</sub>, P<sub>4</sub>は91.5°、∠P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>, P<sub>3</sub>は93.5°である。遺構内のほぼ中央部に略円形状の土塙が検出され、底面は貼り付けによる調整である。4本の柱穴には、

工具による掘込の痕跡の残縁が遺存していた。土址や柱穴の埋土中には、多量の炭化物の微片や土器破片が出土した。土器小破片につき図化は困難である。

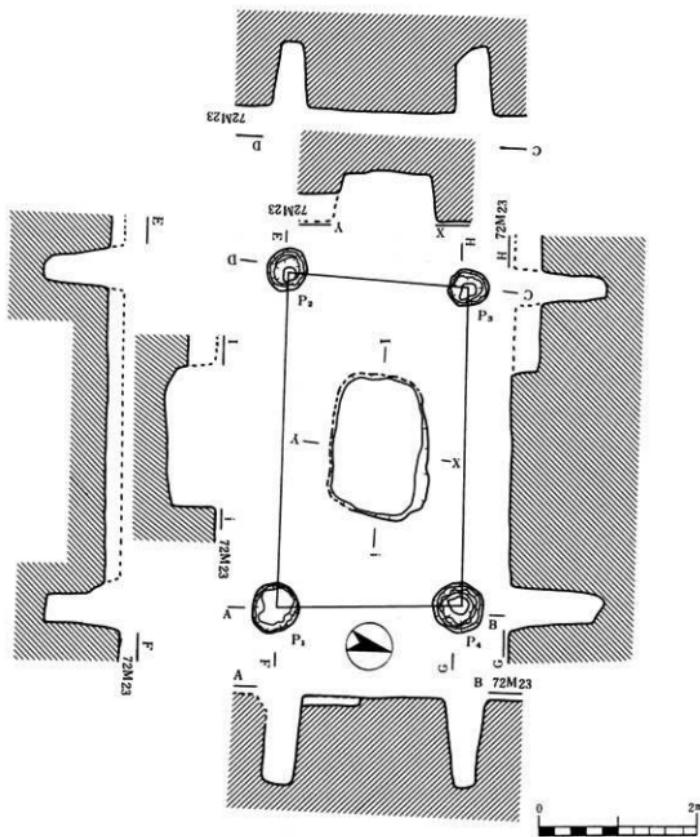


Fig. 113 13号据立柱建物跡実測図

Tab. 38 13号掘立柱建物跡の一覧表

※SB: 掘立柱建物 P: 柱穴 単位: cm

SB	主軸方位	梁間間	桁行間	出土区	P	長軸×短軸×深さ	備考
13	N-80°-E	W-1間 232 E-1間 236	N-1間 400 S-1間 424	C-D-17	1 2 3 4	64×58×113 52×48× 82 52×43× 85 63×61×113	・土塙をもつ ・III層上面 (一部II層 中)で検出 する。
	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間			
		P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> :236		P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :424			
		P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :232		P <sub>4</sub> -P <sub>3</sub> :400		178×126×65	

## (4) 14号掘立柱建物跡 (Fig. 39)

18号住居跡との最短距離は、略南1.7cmで、17号住居跡まで、略南東4.1cm、17号住居跡まで、略西5.5cmを測り、B-C-20区・C-C-21区のII層中(一部III層上面)で検出された。

本建物跡は、四本の掘立柱の中央に「土塙」を伴う建物である。梁間1間×桁行1間の建物に、205×165cm、深さ32cmの略円形状の土塙をもつ。建物の規模は、梁間265cm、桁行625cmで、柱穴の大きさは、長径59.5cm、短径51.0cm、深さ102の平均を測る。内角はおよそ∠P<sub>1</sub>P<sub>2</sub>P<sub>3</sub>は88.5°、∠P<sub>1</sub>P<sub>2</sub>P<sub>4</sub>は89.5°、∠P<sub>3</sub>P<sub>2</sub>P<sub>1</sub>は89.5°、∠P<sub>3</sub>P<sub>2</sub>P<sub>4</sub>は89.5°、∠P<sub>2</sub>P<sub>1</sub>P<sub>4</sub>は92°である。造構内のはば中央部からP<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>線にかけて略円形状の土塙が検出され、床面はIV層上面となる。柱穴はP<sub>1</sub>がII層中(P<sub>1</sub>は一部)の検出で、P<sub>1</sub>は17号住居跡から続く新しい溝により上部は削平され、溝底面は残存する。各柱穴には、それぞれ工具による掘込の痕跡の後線を認めた。土塙内には、大型變形土器破片、棒状炭化物、打製石器が出土した。土器破片は器内面を上位にした破片が多く、棒状炭化物が若干上位に見られ、炭化物は径約5~8cm程度大きい棒状炭化物が西側寄りに、北西から南西にかけて多く検出した。柱穴P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>の埋土中から土器破片や軽石などが出土したが、固化は困難である。

本建物跡の土塙内の棒状炭化物や土器の出土状況からみれば、火災による可能性が考えられる。

Tab. 39 14号掘立柱建物跡の一覧表

※SB: 掘立柱建物跡 P: 柱穴 単位: cm

SB	主軸方位	梁間間	桁間間	出土区	P	長軸×短軸×深さ	備考
14	N-67°-E	W-1間 265 E-1間 273	N-1間 484 S-1間 484	C-20・21	1 2 3 4	60×54×100 70×56×105 50×44×102 58×50×102	・II層中(一部 III層上面)の 検出である。 ・土塙をもつ。 ・大型變形土器 及び棒状炭化 物の出土。
	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間			
		P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> :273 P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :265		P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :484		205×165×32	
				P <sub>4</sub> -P <sub>3</sub> :484			

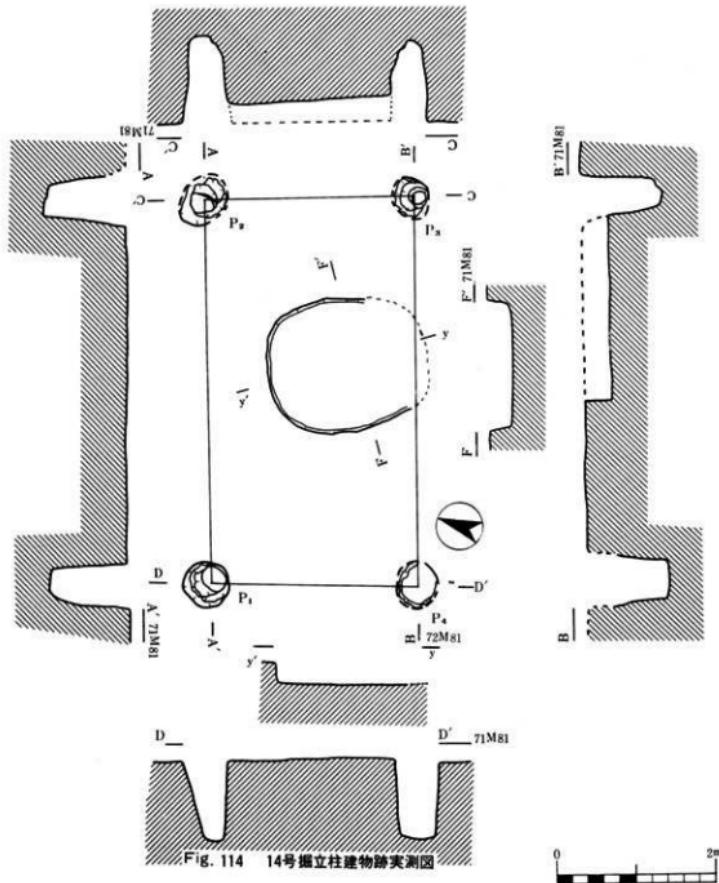


Fig. 114 14号掘立柱建物跡実測図

### 土器 (Fig. 115)

Tab. 40 14号掘立柱建物跡（土塙内）出土土器一覧表

①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	器種・器形	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
619	大甌 口縁部 胴部	①(46.7) ③(44.7)	明茶褐色	Q F <sub>L</sub> H	内済する口縁部で、逆L字状に外反する。 口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面は円み程大きい。口縫部外側直下には、断面台形状貼付突舌を施らす。表面はわずかに凹む。底の付着を認める。	外面は横位及び斜位刷毛など及ぼす凹凸を認める。内部は指捺印調節後横位及び斜位の刷毛などで調整である。

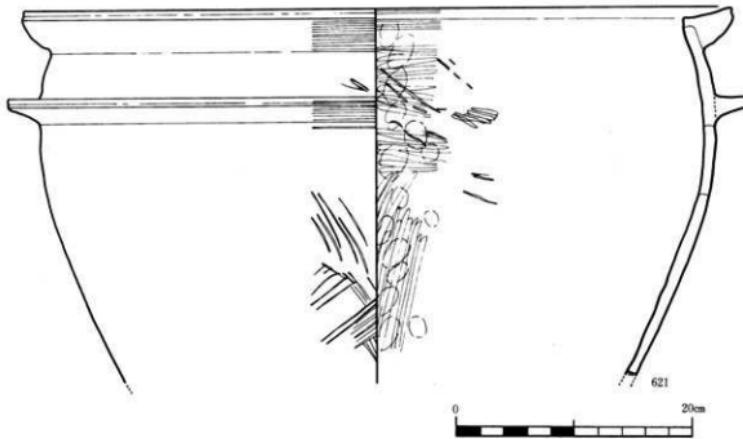
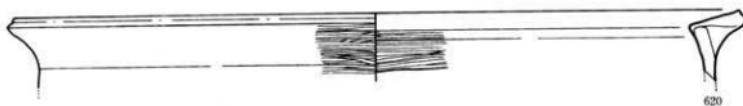
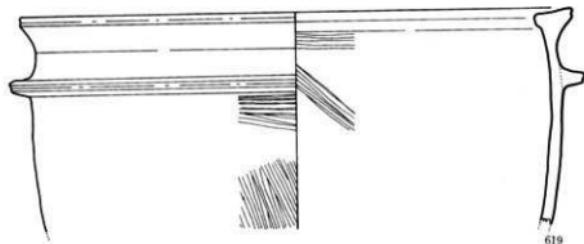


Fig. 115 14号掘立柱建物跡(土塙内)出土土器実測図

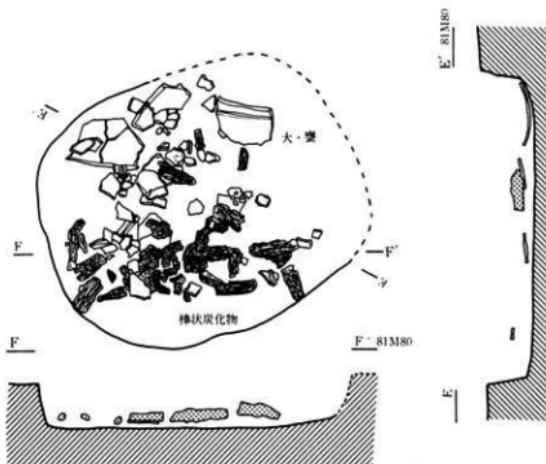


Fig. 116 14号掘立柱建物跡(土塙内) 遺物出土状態

番号	括弧 番号	器種・基部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
620		大要 口縁部	①(62.4)	茶褐色	Q P L M	内凹する口縁部で、逆し字状に近く外反し、口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しが作り出す。	外側は横位、内側は横位。 斜位の刷毛などで調整である。
621		大・要 口縁部 剥離	①(60.2) ③(56.4)	明褐色	Q P L H	外方へ高張的に立ち上がり、剥離が盛り、人きく内凹する口縁部で、逆し字状に外反する。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には後で作り出す。口縁部外側剥離下には、相高い台形状剥付突起を造らす。突起表面は平面を作る。底の付着を認める。	外側は横位。斜位の窓削りで、内側は胎源圧調整後、横位及び斜位の窓削りを認める。

#### 石器 (Fig. 117, PL. 35)

本建物跡の土塙には、埋土中より打製石鎌が出土した。618は、硬質破岩を石器の素材として用いた打製石鎌で、最大長1.9cm、最大幅1.5cm、最大厚0.3cm、重さ0.8gを測る。基部は凹み二等辺三角形状を呈する。表面は交互剥離により調整され、裏面は剥片をそのまま利用し、周縁にわずかな剥離が加えであることから剥片鎌である。

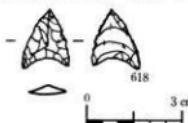


Fig. 117 14号掘立柱建物跡  
(土塙内)出土石器実測図

#### 第4節 土塙 (Fig. 118~126, PL. 27)

土塙は、調査区西側C-5区と住居跡群(約180m)の東側寄りD-6区、D-19区、D-21区・D・E-23区に略円形状の土塙4基が検出された。

##### ① 1号土塙 (Fig. 118~120, PL. 27)

22号住居跡との最短距離は、略北2.0mで、23号住居跡まで、略北西3.5m、26号住居跡まで、略北東10.04mを測り、D-19区の北側ほぼ中央のⅡ層中から検出された。

本土塙は、主軸N-104°-Eをとる。長軸長165cm、短軸長130cm、深さ62cmを測る略円形状で、序々に深くなっている。埋土中より甕形土器、壺形土器、鉢形土器などの中破片や樹皮布叩石(Bark cloth beater)が出土した。

注1. 国分直一 現地指導の中で文  
化財調査報告による。

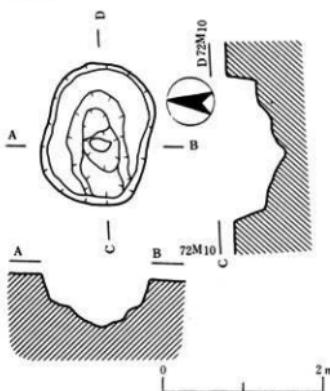


Fig. 118 1号土塙実測図

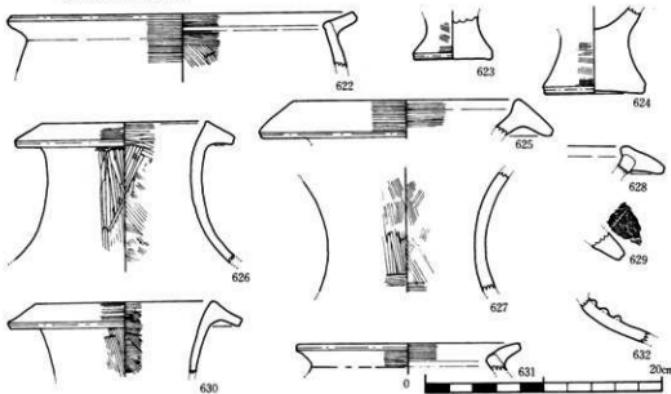


Fig. 119 1号土塙内出土土器実測図

土器 (Fig. 119)

Tab. 41 1号土塙内出土土器一覧表

①口径②器高③胴部最大径④底部径 ( ) 複元径

番号	固有 番号	器種・器部	法 畳	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴 、そ の 他	手 法 の 特 徴
622		甌 口縁部	①(29.8)	明褐色	Q P L M	内凹すると思われる口縁部で、くの字状に外反する。口縁部裏面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しある。器の付着を認める。	外面は横位。内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
623	*		④(6.8)	茶褐色	Q P L H M	光沢した舞台である。欠損しているが、裾は短く、鏡面的で、裾の裏面は凹んで、円錐状を呈する。	表面は調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
624	*		④8.8	明褐色	Q P L M	光沢した舞台である。裾は長く鏡面的に広がり、裾の裏面は凹んで、円錐状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
625		甌 口縁部	①(24.8)	明茶褐色	Q P L M	肩部より立ち上がりながらわざかに外反し、口縁部裏面は垂れ下り気味に外反する。口縁部裏面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しあり出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
626		甌 口縁部 肩部	①(18.6)	暗茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しあり出す。	外面は横位、斜位。内面は横位、斜位の刷毛などで調整で、外面とともに一部削りを認める。
627		甌 口縁部 付近 頭部		明茶褐色	Q P L M	肩部より口縁部下付近の部位である。肩部の裏面である。肩部より立ち上がりながら外反する口縁部を作り出すと思われる。	内・外面ともに横位及び斜位の刷毛などで調整で、先削りを認める。
628		甌 口縁部		暗茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しあり出す。	外面は横位の刷毛などで、内面は先削りを認める。
629	*			黒褐色	Q P L M	口縁部の大半を欠損する。垂れ下り気味の口縁部で、口縁部裏面は凹む。口縁部上面には新歎文を施す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
630	*		①(19.8)	明褐色	Q P L M H	外方へ開きながら、垂れ下りながら外反し、口縁部裏面より凹んで、円錐状を呈している。	内・外面ともに横位及び斜位の刷毛などで調整である。
631		鉢 口縁部	①(19.0)	明褐色	Q P L M	破片であるが、大きく内傾する口縁部と思われる。口縁部はくの字状に外反し、口縁部裏面は凹んでいる。口縁部内側には張り出しあり出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
632		甌 肩部		明茶褐色	Q P L M	甌の肩部付近で、現存で三条の新歎三角形貼付突起を認らす。	外面は横位及び斜位の刷毛などで調整で、内面は削減しているため不明である。

### 石器 (Fig. 120, PL. 36)

本土塙内出土の石器は、細粒の砂岩を用いた樹皮叩石である。633は最大長12.3cm、最大幅5.5cm、最大厚3.8cm、重さ220gを測る。先端部は欠損し、両面は平坦面を作り出す。両側面は敲打により凹凸状の敲打痕を認める。基部付近には握手部分を認め、研磨を認める。部分的に研磨痕が観察される。

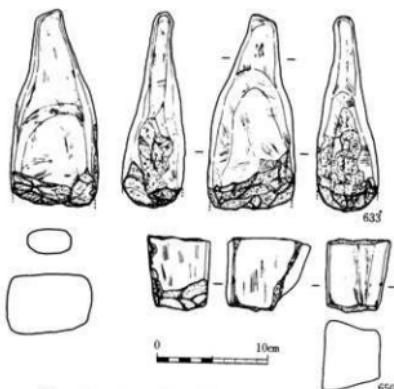


Fig. 120 1・2号土塙内石器実測図

### ②号土塙 (Fig. 121, PL. 27)

12号掘立柱建物跡との最短距離は略東0.7mで、27号住居跡まで略西16.3m、11号掘立建物跡まで略北東17.5mを測り、D・E-23区のほぼ中央部付近のⅢ層中で検出された。

本土塙は、主軸N-103°-Eをとる。長軸長205cm、短軸長130cm、深さ27cmを測る略円形状で床面はほぼ平坦面を呈する。埋土中より大型壺形土器、壺形土器、壺形土器、鉢形土器の破片が出土した。

### 土器 (Fig. 22.23)

Tab. 42 2号土塙内出土遺物一覧表

①口径②器高③胸部最大径④底径 ( ) 復原径

番号 汎用 番号	器種・基部	法量	色調	粘土	形態の特徴、その他	手法の特徴
634	壺 口縁部	①(27.4)	黄褐色	Q P L H	直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部裏面は凹む。口縁部内側には張り出しへ をする。三条の折曲三角形貼付突起を運びます。 縁の付着をめる。	外面は横位。複位。内側は 斜位の崩毛などで調整である。

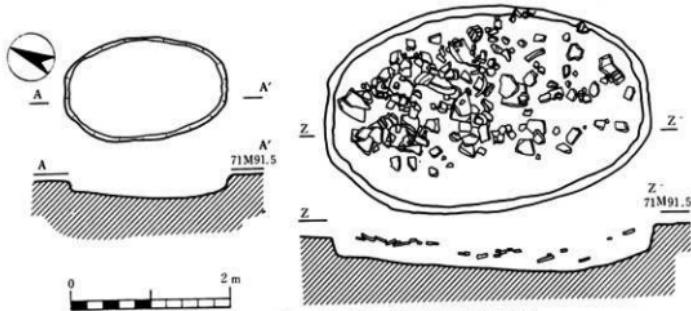


Fig. 121 2号土塙実測図及び土塙内遺物出土状態

番号	国版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他の特徴	手法の特徴
635		甕 口縁部	①(35.4)	黄茶褐色	Q P L	直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを認めている。口縁部上面中央部は若干凹む。	裏面してあるため、解明さを欠くが、外面は横位、斜位で、内面は横位の刷毛などで調整である。
636		甕 口縁部 刷部	①(37.2)	暗茶褐色	Q P L M	外方へ開きながら立ち上がり、内湾する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。底の付着を認める。	外面は横位、斜位。内面は解明な横位及び斜位の刷毛などで調整である。
637		甕 口縁部		灰褐色	Q P L H	直し字状に外反する口縁部である。口縁部の上面及び端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。底の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は裏面しているため調整板は不明である。
638		*		茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
639		甕 底部	④(7.8)	褐色	Q P L H M	光亮した舞台である。幅は長く、傾角的であるが、広がらず、底の端面は凹んで凹縁状を呈する。底面中央部は若干凹む。一部は欠損する。	横位及び斜位の刷毛などで調整が著しい。
640		*	④(7.0)	明茶褐色	Q P L H	光亮した舞台である。幅は短く、傾角的であるが、広がらず、底の端面は凹んで、凹縫状を呈する。底面中央部は若干凹む。一部は欠損する。	指圧圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
641		*	④(9.0)	褐色	Q P L M	光亮した舞台である。幅は長く、傾角的であるが、広がらず、底の端面は凹んで、凹縫状を呈する。一部は欠損する。底面は若干の凹みを認める。	横位、斜位。底面の刷毛などで調整がなされ、一部に指圧圧調整板を認める。
642		壺 口縁部	①(27.0)	茶褐色	Q P L O b M	壺部でしまり大きく外反する口縁部である。垂れ下り気味の口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。現存で二条の断面三角形貼付突起を認める。	内・外面は横位及び斜位の刷毛などで調整で、外面は一部拂拭され、内面は一部指圧圧調整板を認める。

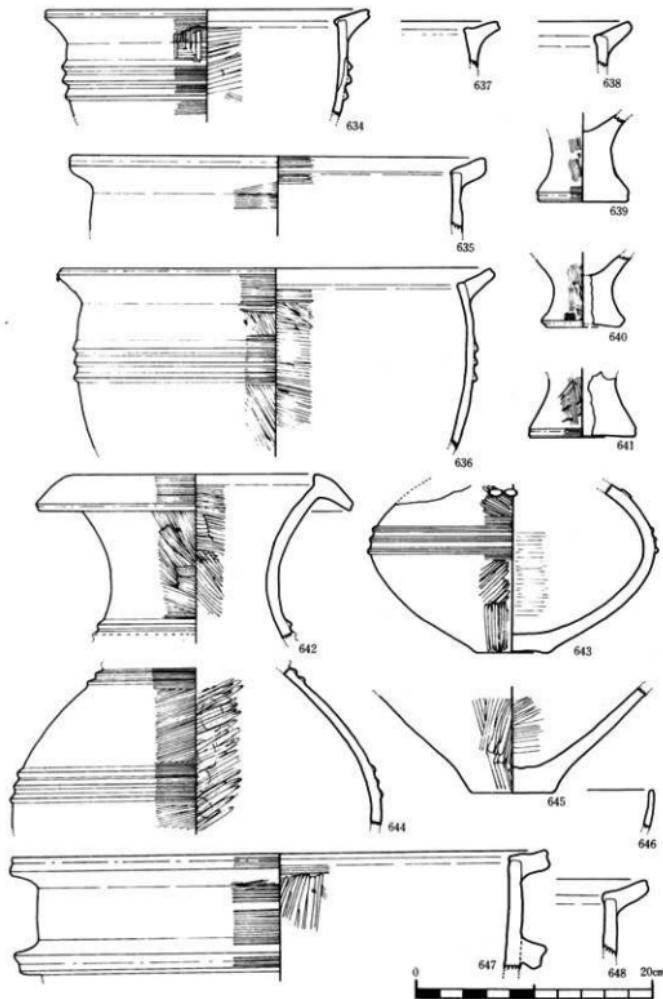


Fig. 122 2号土坑内出土土器实测图(1)

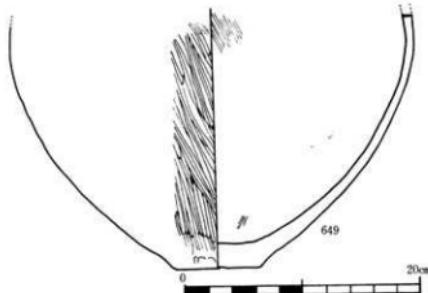


Fig. 123 2号土塙内出土土器実測図(2)

#### 石器 (Fig. 120, PL. 36)

本土塙内出土の石器には、砂岩を石器の素材として用いた砥石である。650は最大長4.7cm、最大幅5.3cm、最大厚4.5cm、重さ129gを測り、欠損しているが、四角錐状を呈し、3面は砥石として使用し、一部は大きく凹んでいる。

番号	因数 番号	器種・部品	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
643		壺 肩部   底部	③(24.1) ④(6.4)	暗茶褐色	Q P L M H	算盤珠形に近い器体で、底部は平底である。 側面部には、三条の断面三角形貼付突起を握らす。 側面部上位には、現存で2か所に2個づつ の円形浮文を施す。この円形浮文は、おそらく 3か所に施したものと考えられる。	外側は横位の崩毛などで、斜 位及び斜位の裏書きを認める が、崩毛が美しい。内面は横 位の崩毛などで、底部底面に は指添圧痕が残る。
644		壺 肩部   胴部	③(36.4)	暗茶褐色	Q P L M	おそらく球形に近い器体になると思われる 肩部に、三条の断面三角形貼付突起を握らす。	外側は横位及び斜位の崩毛 などで調整で、内面は指添圧 痕を残し斜位の崩毛などで調整 である。
645		壺 底部	③7.0	暗茶褐色	Q P L M	平底の底部である。底部より外方へ立ち上 がる器形と考えられる。	外側は斜位の崩毛などで調整 で、内面は横位及び斜位のな で調整である。
646		鉢 口縁部		褐色	Q P L	直口気味の口縁部で、口縁部は丸味を帯び る。	内・外面とともに横位の崩毛 などで調整である。
647		大甌 口縁部	①(45.8)	茶褐色	Q P L M	直線的に立ち上がる口縁部で、底し字状に 外反する。口縁部は凹む。口縁内部には、 わざかに張り出しへ作り出す。口縁部は薄く、 口縁部外側には、やや下方気味の短い突帯を 握る。突帯端面は凹む。	内・外面ともに崩毛が著し いが、外側は横位などで調整で、 一部崩毛りを認める。内面は 横位などで、一部崩毛りがみ られるが、解明さに欠ける。
648	*			茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面 はわずかに凹む。口縁部内側にはわずかな張 り出しを作り出す。	内・外面とも横位崩毛などで 調整で、一部内側には指添圧 痕を残す。
649		壺 肩部   底部	③(34.2) ④7.2	暗茶褐色	Q P L M	おそらく球形に近い器体になると思われる 平底である。	外側は崩毛りを認める。内面 は崩毛しているが、部分的に 斜位の崩毛などで調整である。

3号土塁 (Fig. 124)

27号住居跡との最短距離まで、略南2.3mで、24号住居跡まで、略南西7.3m、14号掘立柱建物跡まで、略9.7mを測り、D—21区のⅡ層中から検出された。

本土塁は、主軸N—103°—Eをとる。長軸長124cm、短軸長115cm、深さ43cmを測る。その形状は略円形を呈し、略南西部の柱穴状の掘込が土塁を切った状態で検出された。

本土塁内の出土遺物は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高環形土器などの破片が埋土中より出土した。壺形土器は口縁部上面に鋸歯を施したものや瀬戸内系の影響を受けたものと思われる口縁部が出土した。

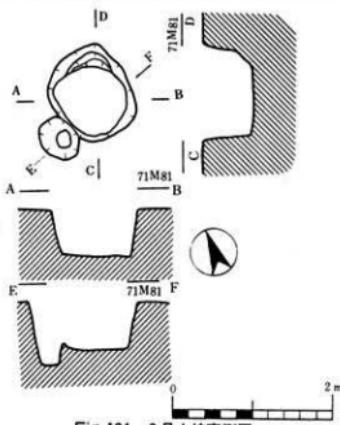


Fig. 124 3号土塁実測図

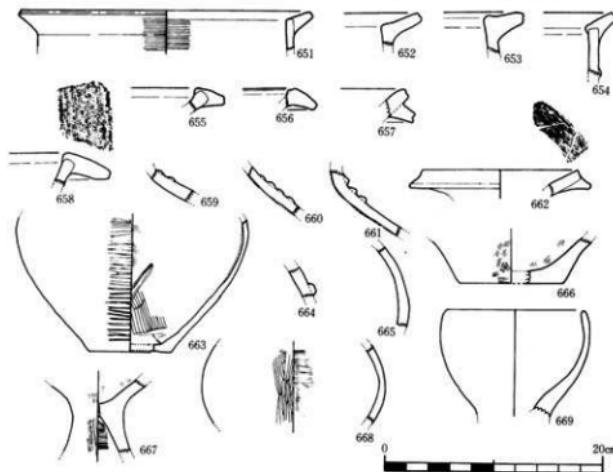


Fig. 125 3号土塁内出土土器実測図

土器 (Fig. 125)

Tab. 43 3号土塙内出土遺物一覧表

注) 法量の単位cm ①高径②器高③胴部最大径④底部 ( ) 傷痕

番号	因版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
651		壺 口縁部	①(27.0)	黄茶褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部はわずかに凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整が認められる。
652		壺 口縁部		暗褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部前面はわずかに凹み、口縁上面は幅広い、裏の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整が認められる。
653		壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L M H	透し字状に外反する口縁部である。口縁前面は凹む。口縁内側にはわずかな張り出しを作る。口縁上面は幅広く、内側寄りが凹む。底の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整が認められる。
654		壺 口縁部		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁前面は凹む。口縁内側には張り出しを作る。現存で二条の断面三角貼付突帯を施らす。底の付着を認める。	内・外面は横位の刷毛などで調整が認められる。内面は指面は調整痕を残す。
655		壺 口縁部		暗褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁前面は凹む。口縁内側には張り出しを作る。底の付着を認める。	内・外面とも横位などで調整である。
656		壺 口縁部		茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁前面はほとんど欠損するが、わずかに凹む。口縁内側には断面三角形貼付突帯を施らす。	内・外面とも横位刷毛などで調整である。
657		壺 口縁部		明褐色	Q P L M	口縁部前面は凹む。口縁前面外側直下に突帯を施し二段式の口縁部で突帯前面は凹む。	内・外面とも横位の刷毛などで調整である。
658		壺 口縁部		明褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反(への字状)する。口縁部である。口縁前面は凹む。口縁内側には張り出しを作る。口縁上面は幅広く、削画文を施している。	内・外面とも横位の刷毛などで調整である。
659		壺 肩部		暗茶褐色	Q P L M	背面に現存で二条の断面三角形貼付突帯を施らす。	背面は横位の刷毛などで調整で、内面は剥落しており不明である。
660		壺 肩部		暗茶褐色	Q P L M	背面に現存で四条の断面三角形貼付突帯を施らす。657と同一個体か?	背面は横位の刷毛などで、内面は剥落しており不明である。

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
661		壺 肩部		暗褐色	Q P L H	肩部に複数で三条の断面三角形貼付突帯を施す。	外面は磨滅しているが、うすい横位の刷毛などで調整で、内面は剥落して不明である。
662		壺 口縁部	①(16.6)	明灰褐色	Q P L	口縁部は大きく外反し、垂れ下り気味で口縁上端は大きく凹み、現存で二か所に比較を施す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。沿枝の付着を認める。
663		壺 底部 ↓ 胴部	③(21.2)	赤茶褐色	Q P L	平底で、薄手の器体である。	外面は横位は荒削りで、内面は一部剥落や磨滅を認めるが、指添圧調整痕が斜位のナチュラル調整痕を認める。
664		壺 胴部		暗茶褐色	Q P L M	台形状の貼付突帯を施し、突帯端面は凹む。	外面は横位の刷毛などで内面、磨滅しており不明
665		壺 胴部		暗茶褐色	Q P L M	胴部付近と思われる。	内・外面ともに斜位の刷毛などで調整である。
666		壺 底部		暗茶褐色	Q P L H M	平底の底部である。	外面は横位及び斜位の刷毛などで、内面は剥落や磨滅を認めるが、一部に斜位のなで調整を認める。
667		高环 脚部		茶褐色	Q P L H	脚部と环部との接合部位である。	外面は、環位の刷毛などで、内面は、横位及び斜位などで調整である。
668		壺 胴部	③(16.8)	明褐色	Q P L H	球形状を呈すると思われる壺の胴部付近で、薄手な器壁である。	外面は荒削りを認め、内面は指添圧調整を残す。横位及び斜位の刷毛などで調整である。
669		鉢 口縁部 ↓ 胴部	①(12.6) ③(13.6)	明褐色	Q P L H	脚台付の鉢と思われ半球形状を呈する器形で、口縁部端面は丸味を帯びる。	外面は剥落や磨滅が激しくその一部に環位及び斜位のなで、内面は磨滅が激しいが、指添圧調整痕を認める。

④ 4号土塙 (Fig. 126)

1号掘立柱建物跡との最短距離は、略南東約10.0mで、1号住居跡まで、略西14.6mを測り、C-5区の南西隅のⅢ層上面で検出された。

本土塙は、主軸N-84.5°-Eをとる。長軸長89.0cm、短軸長54.0cm、検出面での深さ12.0cmを測り略円形状を呈する。

なお、本土塙内には、大きさが約10~27cm大的軽石18個が埋土中より出土した。

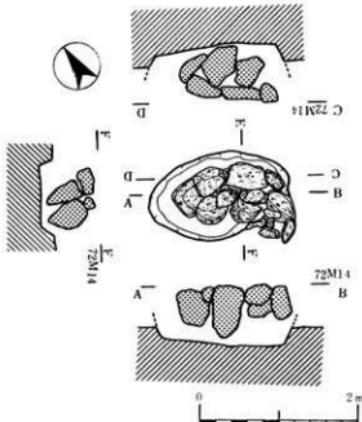


Fig. 126 4号実測図

以上、1号土塙から4号土塙まで概略を述べたが、土塙内出土の遺物は、住居跡内出土と同様なもので、2号土塙より多く出土した。4号土塙よりは、軽石の集石のみで、他遺物はみられない。3号土塙出土の土器のうち、27号住居跡出土の土器との接合がみられた。

壺形土器は、口縁部破片が多く、充実した脚台をもつ底部である。1号土塙の中で、623・624は充実した脚台である。2号土塙の中で、634・635は、直口する口縁部で、くの字状に外反する。639~641は、充実した脚台である。3号土塙の中で、639~641は、口縁部破片である。大型壺形土器は、2号土塙にみられ、647は直口気味の口縁部で逆L字状に外反し、断面台形状突帯をもつ。壺形土器は、1号土塙の中で、625~630は、口縁部破片や口縁部から頭部までの破片で、629は鋸歯文をもつ。632は肩部付近である。2号土塙の中で、624~645は、口縁部から頭部、頭部から胴部、胴部から底部までのもので、643は円形浮文をもつものである。3号土塙の中で、655~658、622は口縁部破片で、656は口縁部内面に突帯をもち、657は二叉状口縁である。658は鋸歯文をもつ口縁部破片で、622は口縁部破片で、移入土器である。659~666は、肩部、胴部破片、底部である。664は、断面台形状貼付突帯をもつ。鉢形土器は、1号土塙の中で、631はくの字状に外反する口縁部である。2号土塙の中で、646は口縁部破片で、口縁部は丸味をもつ。3号土塙の中で、669は脚台をもつものと思われる。高環形土器は、3号土塙の中で、667は手部と脚部との接合部である。

石器の中で、663は、1号土塙内埋土上位より出土した樹皮布叩石で、650は2号土塙内より出土した砥石である。

## 第5節 溝状遺構 (Fig. 127, PL. 28)

溝状遺構は、西区と中央区に検出した。西区溝状遺構はU字形を呈し、上面は削平され、上幅はのびるものと思われる。中央区溝状遺構は、本遺跡の遺構検出面のはば中央部付近で、検出遺構を相分する格好を呈する。溝は不定形で、包含層及び埋土が黒色のため土層観察の畦を残して掘り下げを実施した。その結果、溝Ⅰと溝Ⅱが認められ重複していた。溝Ⅰは底面が硬く踏みしめられたような痕跡を確認した。その遺存する形状は不定形で浅い溝である。

### 1. 西区溝状遺構 (Fig. 127, PL. 28)

本溝状遺構は、発掘調査の西区で、台地縁辺部の北端部北側に位置する。E-1区からE-2区、E-F-3区、F-5区を略東西に走る溝で、略N-20.5°-Eをとる。Ⅲ層上面の検出で路線外へのび、E-2区北東部付近で西と東へ流下する。東側の上幅は90~140cm、下幅は27~55cm、深さ40~47cmで、底面は東へ約35cmの比高差で緩傾斜し、E-3区からは西側端部へ急傾斜する。西側は上幅130~260cm、下幅30~70cmを測り、深さは雜木、古木の樹根、竹やぶ化しているため攪乱を受け、傾斜がかなりあるためにⅣ層付近に底面をもち、場所により若干の相違をみたが約100~160cmを測り、E-2区北東部付近との比高差は約170cmを数え、急傾斜しながら崖端部へと続き、現在はシラス採取地のため懸崖となっている。全長24mを測る。E-2・3区は台地縁辺部を通る基盤整備以前の農道敷により切られ、農道面は硬く締まり、溝埋土中にもその痕跡を認めた。埋土は土層断面図に示す如く、底面はⅤ<sub>a</sub>層赤褐色バミヌ層（アカホヤ）付近まで掘り込まれ、黒褐色土にアカホヤの混入を多く認め、上位つれアカホヤのブロックの大小の変化で識別した（③④⑤）。その上に黒色土があり、その硬さの度合で識別し、若干、黄白色の軽石を若干包んでいる（①②）。埋土中には弥生式土器小破片が数点出土したが、固化は困難であった。

### 2. 中央区溝状遺構 (Fig. 127, PL. 28)

本溝状遺構は、発掘調査区の検出遺構のはば中央部付近に検出され、遺構を相分するような格好を呈する。E-13区、C-12・13区、D-E-12区を略南北に南へ流下し、N-112°-Eをとる。中央区溝状遺構の上幅は約170~260cm、下幅は若干狭くなり不定形で、深さ約20~30cmを測り、南北の土層断面より見れば約50cm前後で、二つの溝が重複する。溝Ⅰの底面は、非常に硬く踏みしめたような状況である。埋土はⅡa層と同じ黒色土で、平面での識別は困難であった。土層断面に示す如く、溝Ⅰのあとに溝Ⅱが造られている。溝Ⅰの埋土は黒色土で、硬さで①・②に識別し、①は若干硬質で、溝Ⅱも黒色土で、色の濃淡や硬さで識別した。①は若干硬質で、②は普通、③はさらさらし、④は少量のアカホヤを含む。溝Ⅰは幅135~145cm、深さ30~43cm、溝Ⅱは幅183~280cm、深30~38cmを測る。溝Ⅰはアカホヤ層に掘込を認め、底面の硬い部分は、黒褐色を呈し、厚さは約4~8cmで、北側付近では二条、中央部は一条、南側付近では段違いで数条に分かれ、剥落している所もあり、南側壁付近はわずかに残存する。埋土中には土器破片を小量認めたが、固化は困難である。

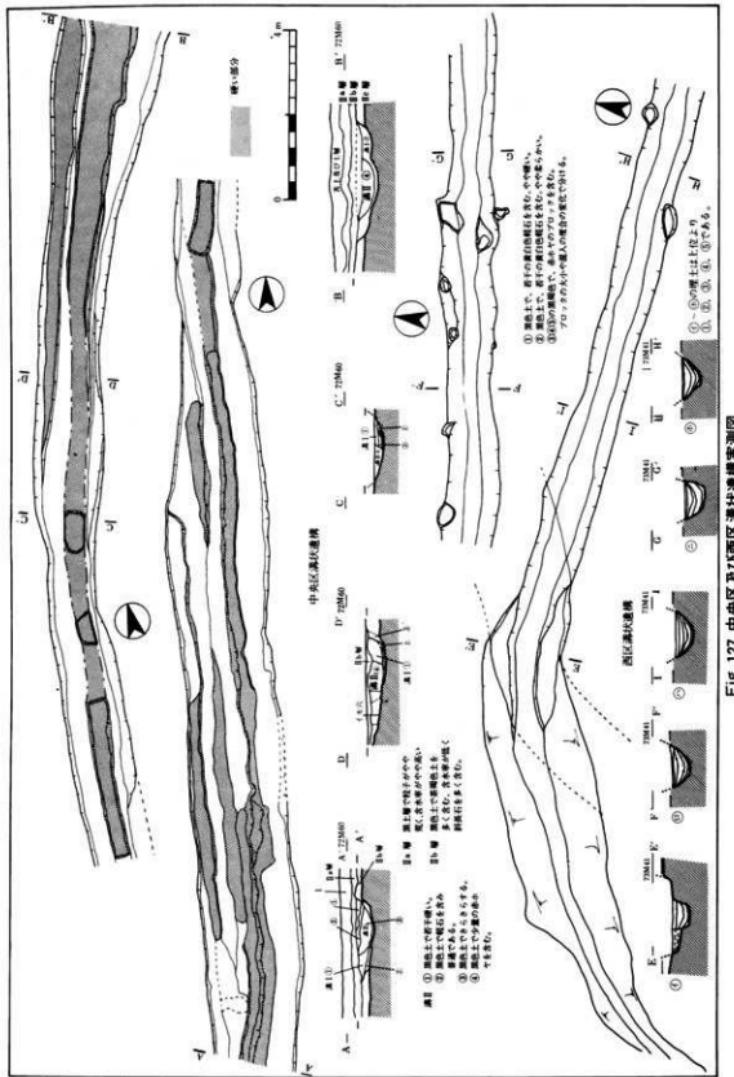


Fig. 127 中央区及び西区溝状遺構案測図

## 第6章 弥生時代の遺物

### 第1節 土器 (Fig. 131~158, PL. 34~37)

本遺跡の弥生時代の土器には、壺形土器、大型壺形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、瀬戸内系の土器などがⅡa・b層より出土し、Ⅱa層よりは小破片が多く広範囲に出土した。特に、A・B-7区、D・E-8区、B・C-9・10区、B・C-15-18区、C・D-23-25区を中心にⅡb層より集中的に出土した。

#### 1. 壺形土器 (Fig. 128~137, PL. 34)

壺形土器には、口縁部の形状が直口するもの、内湾するもの、外傾するものなどがある。口縁部は逆L字状やくの字状に外反するもの、口縁部端面は凹んで凹線状を呈するもの、丸味を帯びるもの、口縁部内側には張り出しへ作るもの、棱を作り出すものがある。胴部は丸味を帯びて張るもの、張りのないものとがあり、胴部もしくは上位に断面三角形貼付突帯をもたないもの、一条のものから四条のものまである。底部は充実した脚台で、裾は長いもの、短かいもの、裾が鋭角的に広がるもの、広がりのないものなどがあり、裾端面は凹んで凹線状を呈するもの、丸味を帯びるものがある。これらの土器は完形品が少なく、全体の器形を知り得るものは少ない。以下、土器の一覧表で説明を加える。

Tab. 44 壺形土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径( )復原径

Fig.	器種 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig.	670	口縁部 胴部	C-17	①(23.4) ③(21.7)	暗褐色	Q.P1.M	670-内湾する口縁部で逆L字状に外反する。口縁部端面は凹んで凹線状を呈する。丸味を帯びる。内側に張り出しへ作る。口縁部上部はわずかに内む。三条の断面三角形貼付突帯をもつ。底は丸味を帯びる。底の付着が認められる。以下、各遺跡について述べる。	670-内・外外面には刷毛なで調整が生じる。体部に認める。椎骨・斜位・縱位など的方向に調整を認める。以下、上記表現のないものについて、特徴を付記する。
128	671	口縁部	A-7	①(28.0)	黒褐色	Q.P1.	671-逆L字状に外反する。	671-指添は調査直ぐに削る。
	672	*	B-10	①(29.0)	明褐色	Q.P1.H	672-口縁部上部は凹む。二条の突帯を認める。底の付着が認められる。	672-外表面は削減のため不明である。
	673	*	C-25	①(25.4)	*	Q.P1.M	673-調査直ぐに削る。	673-指添は削減のため不明である。
	674	口縁部 胴部	E-8	①(28.6) ③(26.8)	暗茶褐色	Q.P1.H	674-逆L字状に近く外反する。	674-鮮明さに欠けるが、なで調整である。
	675	*	E-11	①(27.6) ③(25.6)	黒褐色	Q.P1.H	675-くの字状に外反する。二条の突帯を認める。	675-指添は削減のため部分的に、指添は調整直ぐで削る。
	676	*	C-5	①(24.0)	明褐色	Q.P1.H	676-口縁部上面は凹む。二条の突帯を認める。底の付着は認めない。	676-外表面は削るため解説を残す。
	677	*	E-8	①(28.6)	黄褐色	Q.P1.H	677-くの字状に外反する。棱を作り出す。	677-指添は調整直ぐで削る。大半は不鮮明。輪積み手法をする。
	678	完形	B-11	①(26.6) ②(25.6) ③(23.4) ④(7.6)	茶褐色	Q.P1.H	678-口縁部上面に凹む。底の付着は認めない。	678-内面はなで調整である。
	679	*	C-6	①26.2 ②27.8 ③24.4 ④7.8	暗褐色	Q.P1.H	679-くの字状に外反する。二条の突帯を認める。	679-683-逆L字状に近く外反する。二条の突帯を認める。
Fig.	680	口縁部	E-6	①(26.7)	*	Q.P1.M	680-682-くの字状に外反する。二条の突帯を認める。	680-内面は削減しているため不明で、指添は調整直ぐで削る。
129	681	*	B-10	①(27.2)	*	Q.P1.M	683-逆L字状に近く外反する。上部は凹む。二条の突帯を認める。	681-内面は削減のため不明である。
	682	口縁部 胴部	E-8	①(24.3) ③(22.0)	灰褐色	Q.P1.H	684-逆L字状に近く外反する。	682-内・外並ともに指添は削る。

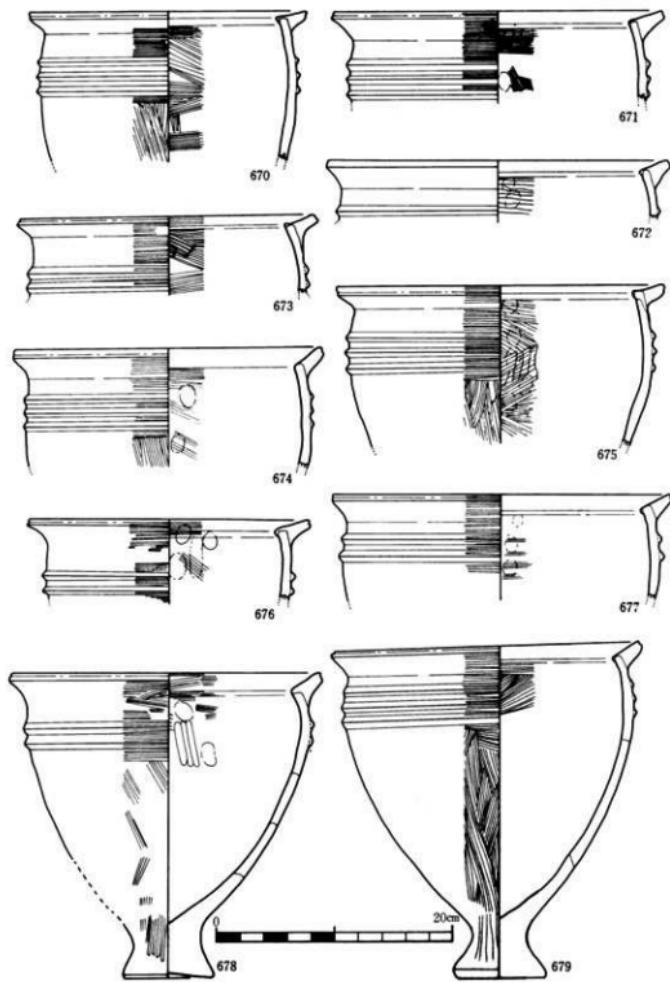


Fig.128 王子遺跡出土土器実測図 (1)

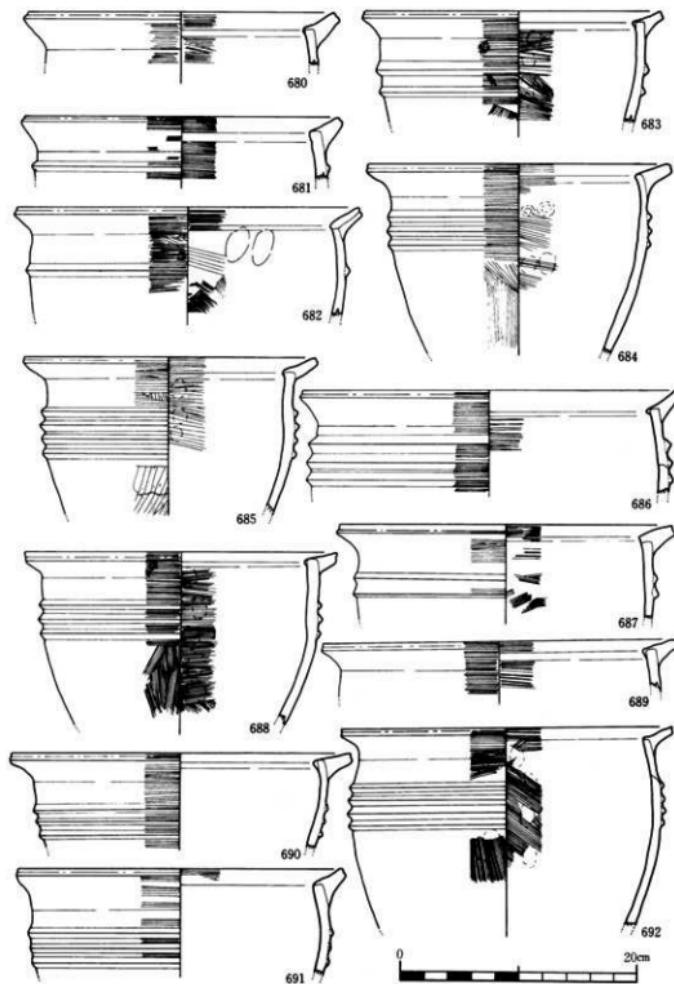


Fig. 129 王子遺跡出土土器実測図 (2)

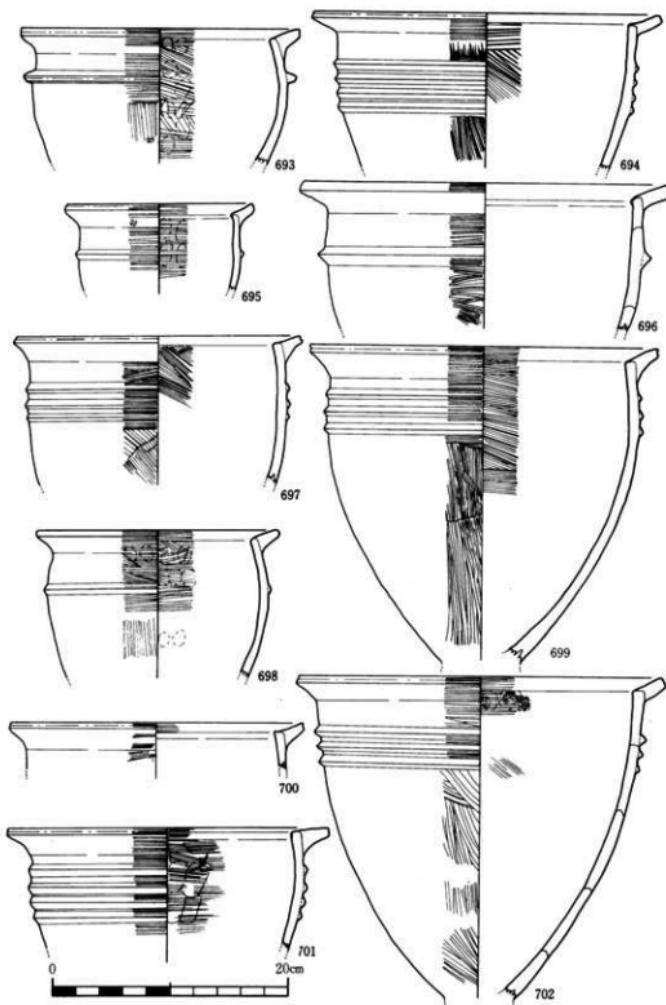


Fig. 130 王子遺跡出土土器実測図 (3)

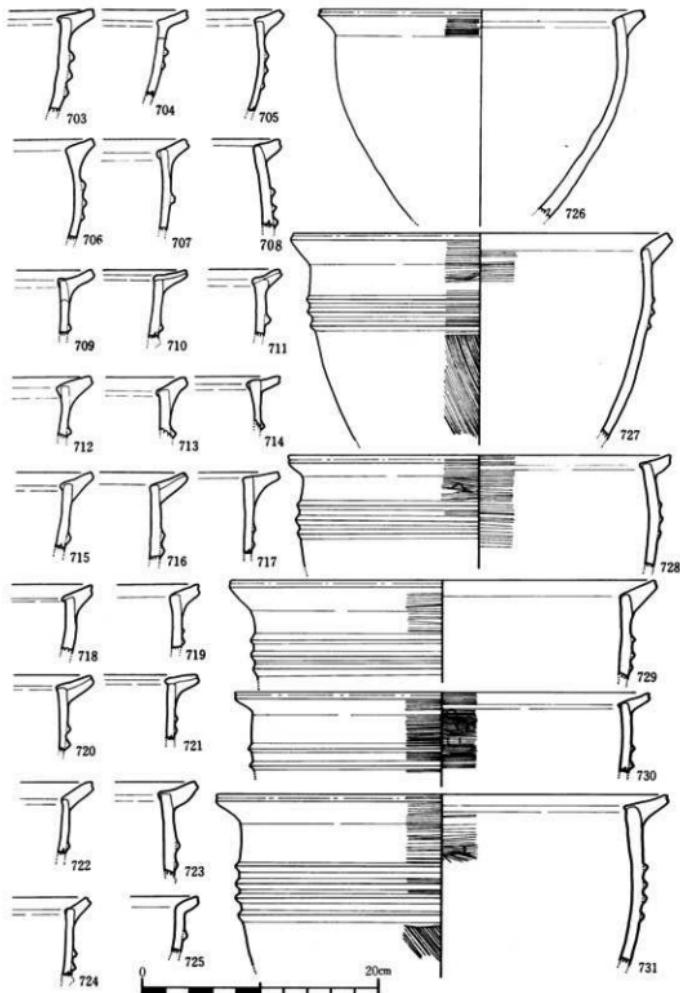


Fig. 131 王子遺跡出土土器実測図 (4)

Fig 番号	部 分	器 部	出上区	法 量	色 調	鉛 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 683	口縁部 胴部	B-10	①(29.4) ③(26.5)	褐色	Q.P1.M0y	685-直口気味の口縁部である。上面 は同じく四条の突帯を施す。	697-内面は審査しているため不明で ある。	
129 684	※	D-8	①(25.7) ③(24.8)	黄褐色	Q.R.H	686-多くの字状に外反する。	698-一部指標は調整値が残る (内・ 外削と6)。	
685	※	D-5	①(24.9) ③(25.0)	暗茶褐色	Q.R.M	687-直し字状に近く外反する。二条 の突帯を施す。	699-内面の胴部下位附近は削減のた め不明である。	
686	※	C-4	①(32.0) ③(30.2)	明茶褐色	Q.P1.M0y	690-多くの字状に外反する。内側に接 を作り出す。	700-内・外面ともに削減のため、部 分的なまで調整である。	
687	※	B-10	①(28.5) ③(25.0)	茶褐色	Q.P1.M	692-多くの字状に外反する。上面は凹 む。四条の突帯を施す。煤の付着 は認めない。	701-指標圧調整後などで調整である。	
688	※	D-17	①(26.4) ③(23.2)	暗茶褐色	*	693-多くの字状に外反する。内側に接 を作り出す。一絆の台形状粘付突帯 を施す。	702-内面は指標圧調整値を残す。指 紋の付着、塵や削落が見しい。	
689	口縁部	B-10	①(30.0)	明茶褐色	*	694-多くの字状に外反する。上面は凹 む。内側に接する。四条の突帯を 施す。	703, 704, 706-内面に指標圧調整値を 残す。	
700	口縁部 胴部	B-6	①(29.0) ③(23.8)	灰褐色	Q.P1.H	695-多くの字状に外反する。上面は凹 む。内側に接する。四条の突帯を 施す。	705, 707-内・外面ともに削減を認める 指標圧調整値を残す。	
691	※	B-10	①(27.9) ③(25.0)	暗茶褐色	Q.P1.M	696-多くの字状に外反する。上面は凹 む。内側に接する。四条の突帯を 施す。	708-削減を認める。	
692	※	B-11	①(28.0) ③(26.0)	*	*	698-直口気味の口縁部で、小型であ る。多くの字状に外反する。上面は凹 む。内側に接する。四条の突帯を 施す。	709-削減や削落を内面に認める。	
Fig 693	※	D-9	①(23.6) ③(21.5)	*	*	700-外接する口縁部で、多くの字状 に外反する。一絆の突帯を施す。	710-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
130 694	※	C-13	①(29.6) ③(24.8)	茶褐色	*	701-多くの字状に外反する。内側に接 を作り出す。	711-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
695	※	C-17	①(16.0) ③(13.6)	明茶褐色	Q.P1.H	702-外接する口縁部で、多くの字状に 外反する。内側に接する。四条の突 帯を施す。	712-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
696	※	B-18	①(31.6) ③(26.4)	黄褐色	*	703-外接する口縁部で、多くの字状に 外反する。内側に接する。四条の突 帯を施す。	713-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
697	※	D-5	①(24.6) ③(22.0)	暗茶褐色	Q.P1.M	704-外接する口縁部である。速さの鉛 型を呈する器形である。内側に接 を作り出す。	714-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
698	下位	D-16	①(20.6) ③(18.7)	暗茶褐色	*	705-多くの字状に外反する。	715-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
699	※	D-8	①(29.4) ③(26.2)	暗茶褐色	*	706-直口気味の口縁部である。内側 に接を作り出す。	716-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
700	口縁部	B-15	①(25.0)	明茶褐色	Q.P1.H	707-多くの字状に外反する。上面は凹 む。内側に接する。四条の突帯を施す。	717-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
701	口縁部 胴部	C-10	①(27.4) ③(23.2)	暗茶褐色	Q.P1.M	708-直し字状に近く外反する。	718-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
702	口縁部 底部付近	B-15	①(31.2) ③(26.4)	*	Q.P1.H	709-内側に接を作り出す。	719-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
Fig 703	口縁部 胴部	C-4	*	明茶褐色	*	710-内側に接を作り出す。上面は凹 む。煤の付着は認めない。	720-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
131 704	※	B-17	*	黒褐色	*	709-多くの字状に外反する。一絆の突 帯を施す。上面は凹む。	721-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
705	※	A-7	*	Q.P1.M	710-直し字状に近く外反する。一絆の突 帯を施す。	722-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。		
706	※	B-10	*	褐色	Q.P1.H	711-内側に接を作り出す。二条の突 帯を施す。	723-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見しい。	
707	※	E-18	*	明茶褐色	*	712-内側に接を作り出す。二条の突 帯を施す。	724-内面はなで調整で、不鮮明であ る。	
708	※	E-8	*	明茶褐色	*	713-内側に接を作り出す。二条の突 帯を施す。	725-指標圧調整値を残す。	
709	※	D-25	*	黒褐色	*	714-内側に接を作り出す。二条の突 帯を施す。	726-内・外面ともに削減しているた め不明である。口縁部外側はなで調 整である。	
710	※	E-8	*	明茶褐色	Q.P1.M	715-内側に接を作り出す。二条の突 帯を施す。	727-内面は削落や削減を認めている。指 標圧調整値を残す。	
711	※	D-15	*	明茶褐色	Q.P1.H	716-内側に接を作り出す。二条の突 帯を施す。	728-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見ない。	
712	※	D-26	*	暗茶褐色	*	717-内側に接を作り出す。二条の突 帯を施す。	729-内面は削落や削減を認め、内 面は削落が見ない。	
713	※	B-9	*	灰褐色	*	718-内側に接を作り出す。二条の突 帯を施す。	730-内面は全体的に削減している が、指標圧調整値を一部に残す。	
714	※	F-18	*	暗茶褐色	Q.P1.M	719-内側に接を作り出す。二条の突 帯を施す。	731-外側は部分的になで調整で、内 面は削落が見れる。	
715	※	E-8	*	明茶褐色	Q.P1.H	720-内側に接を作り出す。二条の突 帯を施す。	732-内・外面ともに削減を認め、内 面は削落が見れる。	
716	※	*	*	暗茶褐色	Q.P1.M	721-内側に接を作り出す。二条の突 帯を施す。	733-削落や削落が見ない。	

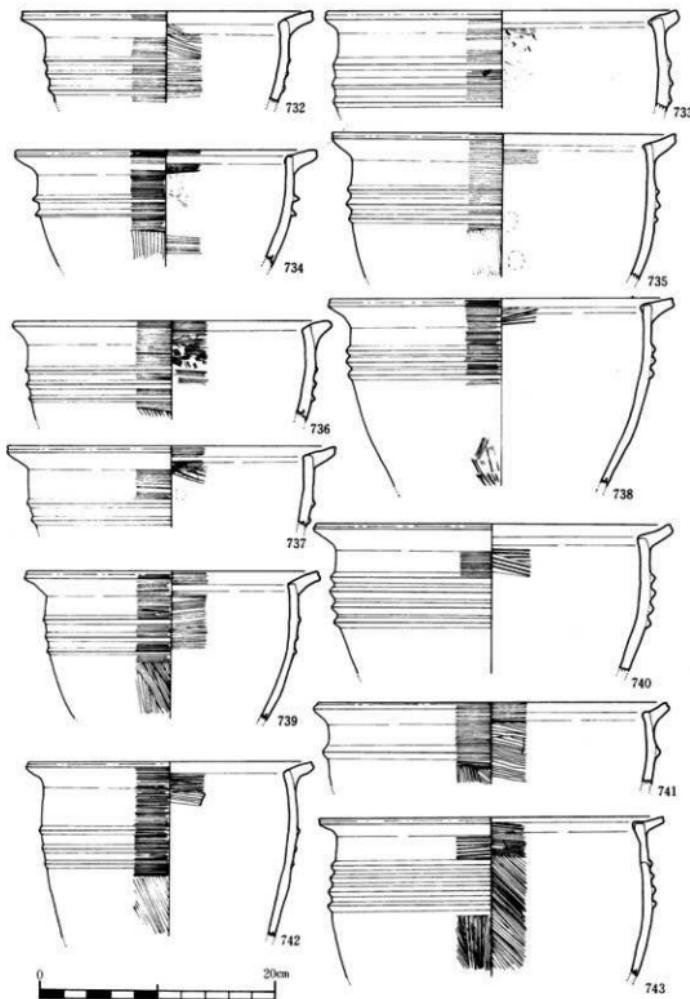


Fig. 132 王子遺跡出土土器実測図 (5)

Fig	器 部	出土区	法 義	色 調	胎 土	形 塗 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig	口縁部	*		茶褐色	*	す。上面は凹む。 724-外縁気味の口縁部で、くの字状に外反し、上面は凹む。二条の突帯を残る。	め、内面は指頭圧調整後なで調整である。
131	718	*	D - 8	明茶褐色	Q.P.L.H	725-外縁気味の口縁部で、くの字状に外反する。一条の突帯を残る。	746-内面に指頭圧調整後なで調整で、口縁部上面は削りである。
	719	*	C - 10	墨茶褐色	Q.	726-底部附近より外へ開きながら直す。 727-底部附近より外へ開きながら直す。	747-内面に指頭圧調整後なで調整で、口縁部上面は削りである。
	720	*	B - 10	茶褐色	*	728-底部附近より外へ開きながら直す。 729-底部附近より外へ開きながら直す。	748-149-内面は指頭圧調整痕を残す。
	721	*	E - 8	明茶褐色	*	730-底部附近より外へ開きながら直す。 731-底部附近より外へ開きながら直す。	750-755-指頭圧調整痕を残す。
	722	*	D - 25	暗茶褐色	*	732-くの字状に外反する。 733-底部附近より外へ開きながら直す。	756-762-削減しているため調整痕は不明である。
	723	*	C - 5	明茶褐色	*	734-底部附近より外へ開きながら直す。	757-761-外縁とともに機械的の概毛などを調整する。
	724	*	E - 18	褐色	Q.P.L.H	735-底部附近より外へ開きながら直す。 736-底部附近より外へ開きながら直す。	763-内面は削減しており鮮明に欠ける。
	725	*	D - 19	暗茶褐色	*	737-底部附近より外へ開きながら直す。 738-底部附近より外へ開きながら直す。	765-内・外縁ともに削減を認める。
	726	口縁部 底部付近	A - 7  <small>①(27, 2) ③(23, 6)</small>	明茶褐色	*	739-底部附近より外へ開きながら直す。 740-底部附近より外へ開きながら直す。	766-底の付着が美しい。
	727	*	C - 21  <small>①(32, 3) ③(27, 8)</small>	明茶褐色	Q.P.L.M	741-底部附近より外へ開きながら直す。 742-底部附近より外へ開きながら直す。	767-内面は削減を認める。
	728	口縁部 胴部	B - 9  <small>①(32, 5) ③(30, 1)</small>	暗茶褐色	*	743-底部附近より外へ開きながら直す。 744-底部附近より外へ開きながら直す。	768-内・外縁ともに削減しているが、内面は指頭圧調整痕が残す。外の調整は不明である。
	729	*	E - 8  <small>①(36, 5) ③(31, 4)</small>	明茶褐色	*	745-底部附近より外へ開きながら直す。 746-底部附近より外へ開きながら直す。	769-内・外縁ともに削減を認める。
	730	*	B - 15  <small>①(35, 1) ③(31, 7)</small>	茶褐色	Q.P.L.H	747-底部附近より外へ開きながら直す。 748-底部附近より外へ開きながら直す。	770-内面は削頭圧調整痕が残す。
	731	*	E - 12  <small>①(38, 3) ③(33, 8)</small>	暗茶褐色	Q.P.L.M	749-底部附近より外へ開きながら直す。 750-底部附近より外へ開きながら直す。	771-外縁は鮮明さに欠けるが、なで調整で、内面は指頭圧調整痕を残す。
Fig	732	*	F - 28  <small>①(24, 9) ③(20, 0)</small>	*	*	751-底部附近より外へ開きながら直す。 752-底部附近より外へ開きながら直す。	772-内面は削頭圧調整後なで調整である。
132	733	*	E - 11  <small>①(29, 2) ③(25, 4)</small>	*	Q.P.L.H	753-底部附近より外へ開きながら直す。 754-底部附近より外へ開きながら直す。	773-内・外縁ともに削減が柔しく、外縁は指頭圧調整が残る。内面は不明である。
	734	*	*	明茶褐色	*	755-底部附近より外へ開きながら直す。 756-底部附近より外へ開きながら直す。	774-内・外縁ともに削減や剥落が少し、内面は指頭圧調整が残る。
	735	*	E - 14  <small>①(29, 2) ③(25, 4)</small>	暗茶褐色	Q.P.L.M	757-底部附近より外へ開きながら直す。 758-底部附近より外へ開きながら直す。	775-内面は削頭圧調整後なで調整である。
	736	*	F - 6  <small>①(27, 2) ③(23, 6)</small>	明茶褐色	*	759-くの字状に外反する。上面は凹む。一条の突帯を残す。	776-内面は削減が美しい。
	737	*	D - 25  <small>①(28, 0) ③(22, 9)</small>	暗茶褐色	Q.P.L.H	760-くの字状に外反する。上面は凹む。一条の突帯を残す。	777-外縁は削減の付着が美しい。内面は、鮮明さに欠け、口縁部付近にみに残す。
	738	口縁部 胴部下位	A - 7  <small>①(29, 3) ③(25, 1)</small>	茶褐色	Q.P.L.M	761-くの字状に外反する。上面は凹む。四条の突帯を残す。	778-内・外縁ともに削減を一部に認める。
	739	*	F - 28  <small>①(25, 1) ③(20, 0)</small>	*	*	762-外縁の口縁部で、くの字状に外反する。突帯をもたない。	779-内・外縁ともに削落や削減が美しい。内面は調整痕は不明である。
	740	口縁部 胴部	C - 15  <small>①(30, 5) ③(25, 8)</small>	明茶褐色	Q.P.L.M	763-外縁気味の口縁部で、二条の突帯を残す。	780-内・外縁は削減の付着が美しい。内面は調整痕は不明である。
	741	*	D - 15  <small>①(27, 2) ③(27, 2)</small>	茶褐色	*	764-外縁気味の口縁部で、二条の突帯を残す。	781-外縁は削減の付着が美しいが、なで調整で、内面は削減鮮明さに欠ける。
	742	口縁部 胴部下位	B - 10  <small>①(24, 4) ③(21, 1)</small>	*	Q.P.L.H	765-771-小破片のため突帯をもたない。	782-内面は削頭圧調整後なで調整である。
	743	口縁部 胴部	D - 8  <small>①(29, 2) ③(27, 2)</small>	明茶褐色	Q.P.L.H	766-767-774-小破片のため突帯をもたない。但し、774-775は二条の突帯を残す。	783-内面は指頭の付着を認める。
Fig	744	口縁部	F - 13	茶褐色	Q.P.L.	768-769-770-771-口縁部上面は凹む。	784-外縁は削減の付着を認め、内面は指頭圧調整痕が残る。
133	745	*	B - 15	褐色	*	772-774は小破片のため突帯をもたない。但し、774-775は二条の突帯を残す。	785-内面に指頭圧調整痕を残す。
	746	*	E - 8	明茶褐色	Q.P.L.H	775-782-787-789-790-770-口縁部がくの字状に外反する。	786-内面は削減鮮明さに欠ける。
	747	*	B - 15	明茶褐色	*	776-794-786-788-760-761-766-770-口縁部上面は凹む。	787-外縁は削減の付着を認める。
	748	*	C - 5	*	*	777-795-796-758-780-761-566-571-口縁部がくの字状に外反する。	788-外縁は削減の付着が美しいが、内面は削頭圧調整痕を残す。
	749	*	D - 6	明茶褐色	*	778-795-796-758-780-761-566-571-口縁部内側に縫を作り出す。	789-外縁は削減の付着と削減を認めるが、なで調整である。
	750	*	E - 18	茶褐色	Q.P.L.H.M	780-785-786-787-788-789-790-791-口縁部作り出すと思われる。	790-外縁は削減を認める。内面は削頭圧調整痕を残す。

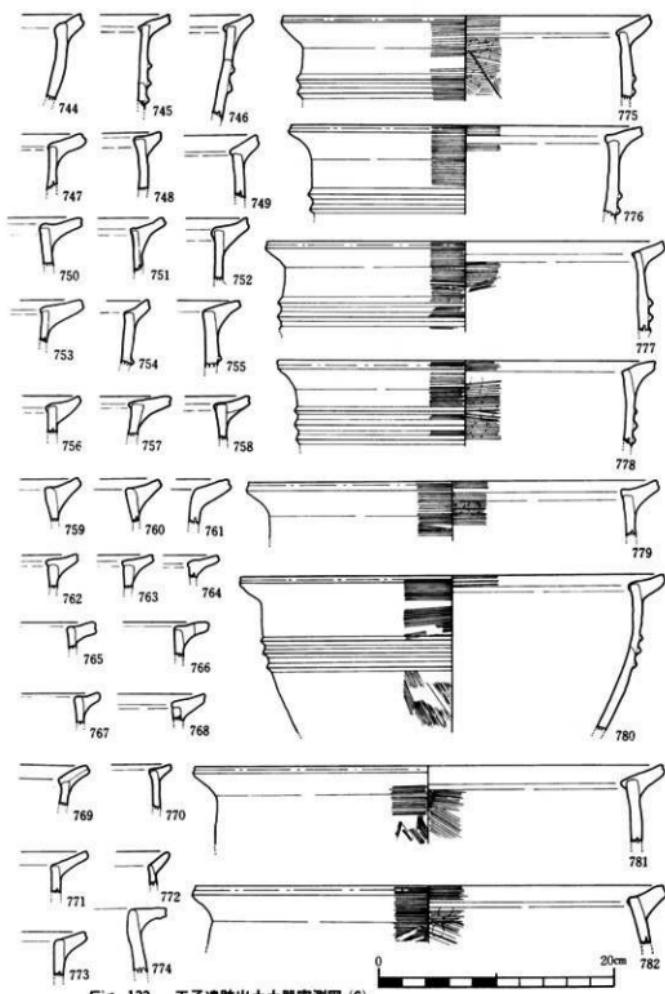


Fig. 133 王子遺跡出土土器実測図 (6)

Fig 番号	器 部	出上区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 751	口縁部	D-25	*	Q.P <sub>L</sub> H	774-外気味の口縁部である。 775-くの字状に外反する口縁部である。二条の突審を施らす。	795-内面は指頭圧調整後などで調整で、指紋の付着を認める。	
133 752	*	C-17		明基褐色	Q.P <sub>L</sub> M	796-指頭圧調整後のことで調整を内面に認める。	
753	*	B-15		茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	797-直口気味の口縁部である。二条の突審を施らす。	
754	*	B-17	*	Q.P <sub>L</sub> H	798-くの字状に外反する口縁部である。	798-内面は明瞭で、わずかに口縁部付近にて調整を認める。	
755	*	B-8		暗褐色	Q.P <sub>L</sub> M	799-進し字状にて外反し、内側に種を作り出す。	799-内面は審減が著しい。 800-外気味の指紋の付着を認め、内面は指頭圧調整後などで調整である。
756	*	B-10		明基色	*	801-上面は凹む。疵片のため突審は認めない。	803-内面に指頭圧調整後などで調整である。
757	*	B-15		茶褐色	*	802-大きく内済すると思われる口縁部で、くの字状にて近く外反する。	804-内面は審減するが、部分的に施反する。口縁部表面は凹む。側部は指頭圧調整せずで認める。
758	*	D-6	*	Q.P <sub>L</sub> H	803-直口気味の口縁部である。	805-内面は審減との調整では不明であるが、指頭圧調整痕を残す。	
759	*	C-10	*	Q.P <sub>L</sub> M	804-口縁部は凹む。	806-内面は鮮明さに欠ける。	
760	*	*	*	*	805-口縁部は凹む。口径は大きい。	807-内面は指頭圧調整後などで調整である。	
761	*	B-14	*	*	808-直口気味の口縁部と思われる。口縁部上面は凹む。口径は大きい。	808-内面は審減が著しいが、口縁部付近にて調整を認める。仕調整痕を残す。	
762	*	C-4		明基色	Q.P <sub>L</sub> M	809-直口気味の口縁部で、くの字状にて外反する口縁部で、口縁部上面は凹む。一条の突審を施らす。	811-外面上は部分的に審減や剥落を認めるが、内面は指頭圧調整痕を残す。
763	*	D-26		茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	810-直口気味の口縁部である。内面には外反する口縁部である。内面には裏条の施具により逆立状の痕跡を認める。一条の突審を施す。	813-内面と外面ともに鮮明なで調整である。
764	*	*		暗褐色	*	811-直口気味の口縁部で、くの字状にて外反し、一条の突審を施す。	814-部分的に剥落を認める。
765	*	D-11		暗褐色	Q.P <sub>L</sub> M	812-直口気味の口縁部である。内面には突審を施す。	815-内面に指頭圧調整痕を残す。
766	*	C-17		茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	816-直口気味の口縁部である。内面には突審を施す。	816-内面には審減を認める。指頭圧調整痕を残す。
767	*	D-23		黒褐色	*	817-外気味の口縁部で、進し字状にて近く外反する。一条の突審を施す。	819-内・外ともに審減や剥落を認めるが、外側は正常調整で、内面は指頭圧調整を残す。
768	*	D-26		暗褐色	Q.P <sub>L</sub> M	818-外気味の口縁部で、くの字状にて外反する。一条の突審を施す。	821-内面は審減を認める。
769	*	D-16		明基褐色	Q.P <sub>L</sub> H	819-くの字状にて外反し、上面は凹む。一条の突審を施す。	822-内面に指頭圧調整痕を残す。
770	*	C-10		暗褐色	*	820-くの字状にて外反する。二条の突審を施す。	825-内面は指頭圧調整痕で、剥削りを認める。
771	*	C-5		茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	821-直口気味の口縁部で、上面は凹む。因縁の突審を施す。	826-内・外ともに鮮明なで調整で、内面は指頭圧調整痕を残す。
772	*	E-20		暗褐色	Q.P <sub>L</sub>	822-外気味の口縁部である。	827-828-内面は審減を認める。
773	*	F-27		黄基褐色	Q.P <sub>L</sub> M	823-くの字にて外反する口縁部で、突審をもたらす。	829-内・外ともに審減しているため、調整痕は不明である。
774	*	C-4		明基褐色	*	824-直口気味の口縁部で、くの字状にて外反する。口縁部上面は凹む。	830-内面の一部は審減や剥落のため不規則。
775	*	C-21	①(31.6)	暗褐色	*	825-直口気味で、進し字状にて外反する。	831-内・外ともに審減や剥落を認める。内面には一部剥削りを認める。
776	*	B-7	①(30.0)	暗褐色	*	826-直口気味の口縁部である。	832-内面には審減が認められ、不規則である。
777	*	E-14	①(34.0)	茶褐色	*	827-直口気味の口縁部で、突審をもたらす。	833-内面には指頭圧調整痕を残す。外側は一部に剥削りを認める。
778	口縁部 胴部	D-9	①(33.9)	明基褐色	Q.P <sub>L</sub> H	828-直口気味の口縁部で、突審をもたらす。	835-836-内面は部位の朝などが主で、内面は機械及び斜面のなで調整である。
779	口縁部	C-19	①(35.2)	明基褐色	Q.P <sub>L</sub> M	829-くの字状にて外反し、上面は凹む。	838-839-内面は不である。
780	口縁部 胴部	B-11	①(36.2)	*	*	830-直口気味の口縁部で、くの字状にて外反する。一条の突審を施す。	840-内・外ともに剥落や審減を認め、なで調整である。
781	口縁部	B-15	①(40.1)	暗褐色	*	831-直口気味の口縁部で、口縁部上面は凹む。一条の突審を施す。	841-内面は指頭圧調整痕を残す。
782	*	C-17	①(40.4)	*	Q.P <sub>L</sub>	832-くの字状にて外反する。突審をもたらす。	842-内面は指頭圧調整痕を残す。調査は不明である。
Fig 783	*	E-8	①(24.6)	明基褐色	Q.P <sub>L</sub> H	833-外気味の口縁部で、くの字状にて近く外反する。二条の突審を施す。	843-指頭圧調整痕を内面に残す。
134 784	口縁部 胴部	D-15	①(23.4) ③(20.5)	黒褐色	Q.P <sub>L</sub> M	834-口縁部上面は扶い。内側に棱を作り出す。二条の突審を施す。	844-内面は指頭圧調整痕を一部に認める。
785	口縁部	B-19	①(23.8)	明基褐色	Q.P <sub>L</sub> H	835-くの字状にて外反し、口縁部上面	845-指頭圧調整痕を残す。鮮明さを欠く。
							847-外側に指紋の付着を認める。
							848-指頭圧調整痕を残す。
							849-指頭圧調整痕を残しているが、

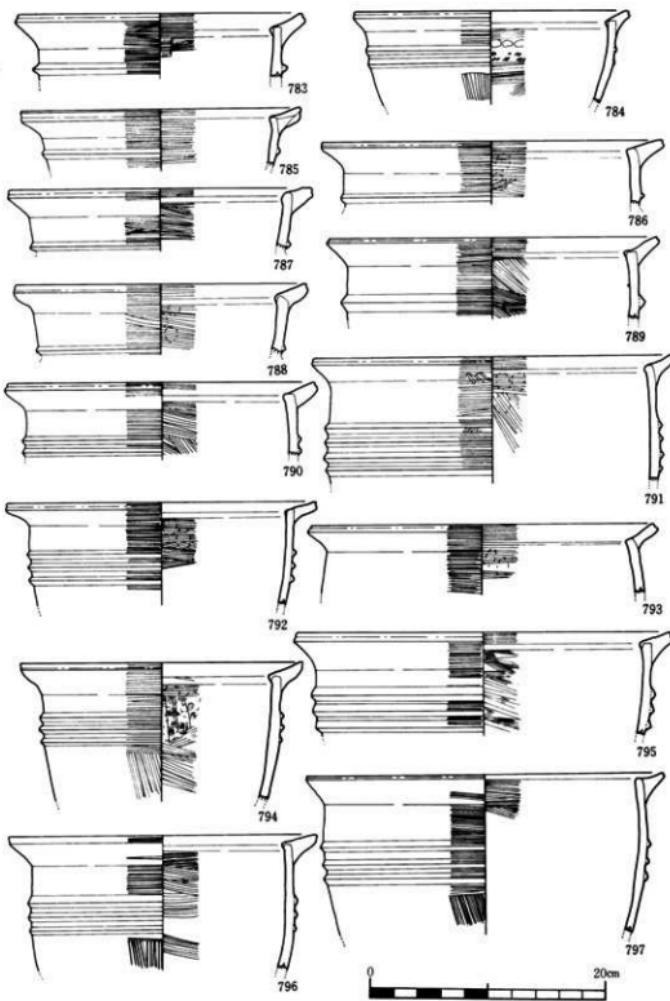


Fig. 134 王子遺跡出土土器実測図 (7)

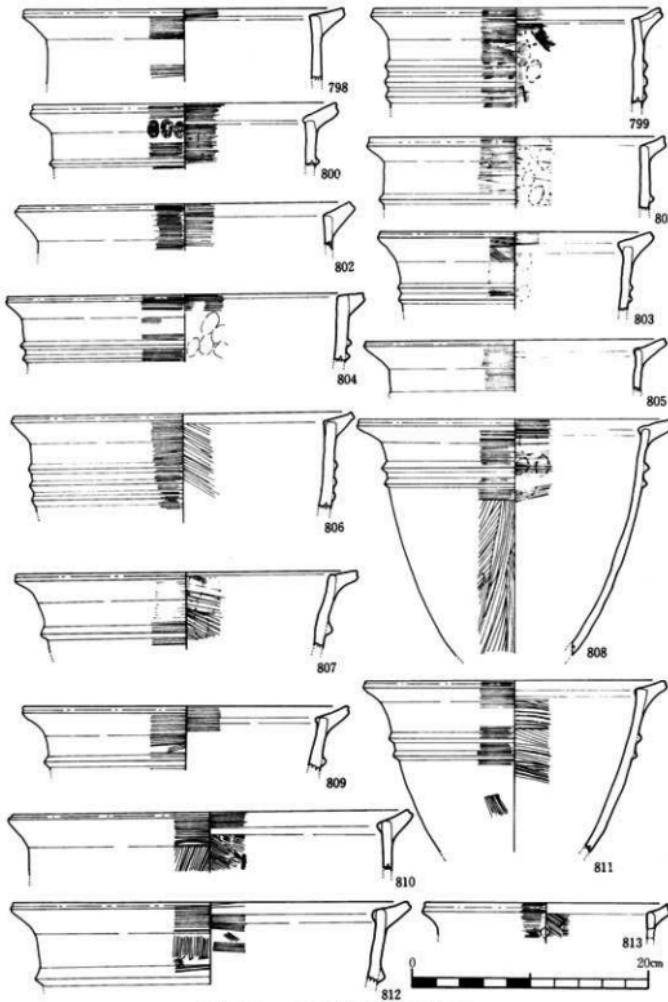


Fig. 135 王子遺跡出土土器実測図 (8)

Fig 番号	器 部	出上区	法 量	色 満	胎 土	形 独 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 786	口縁部	B-10	①(29.1)	茶褐色	Q.P.L.M	は凹む。突帯をもたない。	なで調整は鮮明さを失く。
134 787	*	E-13	①(25.8)	暗褐色	Q.P.L	805-外縁する口縁部で、逆L字状に近く外反する。内側に縦を作り出す。	851-外側は削落しているが、部分的ななで調整である。内面は不明である。
788	*	B-17	①(25.0)	*	Q.P.L.H	807-外縁する口縁部で、一条の突帯を削らす。	852-内面は鮮明さを失く。
789	*	C-21	①(28.2)	暗茶褐色	*	808-側は張らず、外縁する口縁部で、逆L字状に外反する。二条の突帯を削らす。光沢した舞台を欠損する。	853-鋸歯状調整痕を残す。
790	*	D-20	①(26.6)	暗褐色	Q.P.L.M	809-外縁する口縁部で、くの字状に外反し。口縁部上面は凹む。一条の突帯を削らす。	854-内面は種々なで調整である。
791	口縁部 胴部	E- 8	①(30.7) ③(28.2)	暗茶褐色	Q.P.L.M.H	810-くの字状に外反する。口縁部端片面のみ突帯をもたない。	855-860, 863, 864-内面に指振圧調整痕を残す。
792	*	B-15	①(26.4) ③(22.3)	暗褐色	Q.P.L.H	811-外縁する口縁部で、くの字状に外反する。上面は凹む。	861-鮮明ななで調整である。
793	口縁部	C-10	①(29.6)	暗茶褐色	Q.P.L.M	812-外縁する口縁部で、上面は凹む。二条の突帯を削らす。	863-薄いなで調整である。
794	口縁部 胴部	B-15	①(24.0) ③(20.0)	暗褐色	Q.P.L.H	813-くの字状に外反する。口縁部外側に円孔を穿つ。	
795	*	E- 8	①(32.2) ③(28.1)	明褐色	*	814-大きく外反する口縁部で、口縁部上面は凹む。	
796	*	E-26	①(26.0) ③(22.2)	茶褐色	Q.P.L.M	815-外縁する口縁部である。二条の突帯を削らす。	
797	*	F- 7	①(30.3) ③(27.2)	*	*	816-外縁する口縁部で、内側に大きく張出しを作り出す。	
Fig 798	口縁部	D- 8	①(27.2)	暗茶褐色	Q.P.L.O.y	817, 818, 819-外縁する口縁部で、口縫部は削面を作る。口縁部外側下位に削面三角形貼付突帯を削らし、突帯端面には横目を施している。817-口縁部上位を外反する。	
135 799	*	D- 5 D- 6	①(24.6) ③(21.6)	暗茶褐色	Q.P.L.H	819-直口気味の口縁部で、逆L字状に外反する。口縁部上位は張る。	
800	*	B-10	①(26.0)	暗褐色	*	820-口縁部突起は直線的で、内面はくの字状に削る。口縁部上面は凹んで、口縁部内側には縦を作る。	
801	*	E-17	①(25.2)	褐色	Q.P.L.M	821-口縫部外側下位には縦を作らす。	
802	*	D-19	①(28.8)	明茶褐色	*	822-外縁する口縁部で、口縫部は削面を作る。口縁部外側上面には削面三角形貼付突帯を削らし、突帯端面には直線の抜穴により削面を施す。	
803	*	C- 5	①(23.3) ③(19.0)	暗茶褐色	Q.P.L.H	823-二条の突帯を削らす。	
804	*	D- 5	①(30.3)	明茶褐色	*	824-口縁部突起は直線的で、内面はくの字状に削る。上面は凹む。	
805	*	C- 5	①(25.5)	褐色	Q.P.L.M	825-一条の突帯を削らす。	
806	口縁部 胴部	*	①(28.9) ③(25.3)	暗褐色	Q.P.L.H	826-外縁する口縁部である。	
807	*	F- 27	①(29.0) ③(25.4)	*	Q.P.L.M	827-逆L字状に近く外反する口縁部である。	
808	口縁部 底部附近	B- 5	①(26.8) ③(21.2)	*	Q.P.L.H	828-縦を作り出す。一条の突帯を削らす。	
809	口縁部	E- 8	①(27.6)	褐色	Q.P.L.M	829-直口する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部上面は凹む。一条の突帯を削らす。	
810	*	E-20	①(34.2)	茶褐色	*	830-外縁する口縁部である。	
811	口縁部 胴部下位	E- 8	①(25.6) ③(19.4)	赤茶褐色	Q.P.L.H	831-逆L字状に近く外反する口縁部である。	
812	口縁部	D-19	①(33.6)	暗褐色	Q.P.L.M	832-縦を作り出す。一条の突帯を削らす。	
813	*	B-14	①(20.9)	明茶褐色	*	833-直口する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部上面は凹む。一条の突帯を削らす。	
Fig 814	*	*	*	赤茶褐色	Q.P.L.H	834-外縁又底の口縁部で、口縁部上面は凹む。二条の突帯を削らす。	
136 815	*	B- 8	*	黒褐色	Q.P.L	835-小さい直底の底蓋で、直口気味の口縁部である。内側に縦を作り出す。	
816	*	C-10	*	明茶褐色	*	836-小型である。突帯はもたない。	
817	*	C- 9	*	明褐色	Q.P.L.H	837-内縫気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部上面は凹む。一条の突帯を削らす。	
818	*	B- 9	*	*	*	838-光沢した舞台で、根の茎はなし。底面より外方へ開きながら立ち	
819	*	C-18	①(19.0)	明茶褐色	Q.P.L.M		

Fig 番号	器 部	出上区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 820	口縁部	C 10		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	上がり、内汚気味の口縁部で、くの字に外反する。突唇をもたない。小型である。	
136 821	*	B - 10	①(18.3)	*	Q.P <sub>L</sub> H	824-例には張りは認めない。縁の付帯を認める。	
822	*	B - 8	①(35.4)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	835-853-逆し字もしくは逆し字に近く外反する口縁部である。	
823	*	A - 7	①(30.5)	明茶褐色	*	836-839-842, 846-850-口縁部上面が凹む。	
824	*	C - 11	①(26.8)	明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	837-844, 850-外縁付味の口縁部である。底は小継ぎのため不明である。	
825	*	B - 8	①(33.6)	*	*	840, 841, 845, 847, 851, 852-口縁部内側には縦を作り出す。	
826	*	*	①(23.2)	黒茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	841, 843, 844, 847-二条の突唇を認らす。	
827	*	C - 11	①(30.6)	黒褐色	*	842, 849-一条の突唇を認らす。	
828	*	E - 7	①(28.0)	茶褐色	*	855-858, 848, 850, 851-853-口縁部だけの被片のため突唇の有無は不明である。	
829	*	*	①(29.8)	明褐色		857-口縁部外側は直線的に、内側は逆L字に凹する口縁部である。	
830	*	B - 5	①(25.6) ③(21.0)	黒茶褐色		854-860-口縁部が逆し字状もしくは逆L字状に近くに外反する口縁部である。	
831	*	A - 7	①(16.2) ②(14.1) ③(13.0) ④(4.9)	明褐色		854-856, 858-862-口縁部上面が凹む。	
832	*	C - 10	①(34.4) ③(30.6)	茶褐色		854-856, 858-864-大きく内縮する口縁部である。	
833	*	C - 6	①(13.0) ②(16.6) ③(14.6) ④(6.2)	明茶褐色		859-862-口縁部内側に縦を作り出す。	
834	*	C - 6	③(29.0)	褐色		862-一条の突唇を認らし、853-859, 863, 864は口縁部の被片のため突唇は認めない。	
Fig 835	*	E - 7		灰褐色	Q.P <sub>L</sub>	867-口縁部上面には巻状の施文界に	
137 836	*	B - 8		黒褐色	Q.P <sub>L</sub> M	より施文を施す。	
837	*	C - 25		明茶褐色			
838	*	B - 16		茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H		
839	*	C - 26		明茶褐色	*		
840	*	D - 8		明褐色	*		
841	*	B - 10		明茶褐色	*		
842	*	C - 23		灰茶褐色	*		
843	*	E - 8		茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M		
844	*	D - 8		黒茶褐色	*		
845	*	*		茶褐色	*		
846	*	C - 5		明茶褐色	*		
847	*	F - 6		暗茶褐色	*		
848	*	E - 13		灰褐色	Q.P <sub>L</sub>		
849	*	F - 16		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H		
850	*	D - 9		黒茶褐色	*		
851	*	F - 3		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> , E, M		

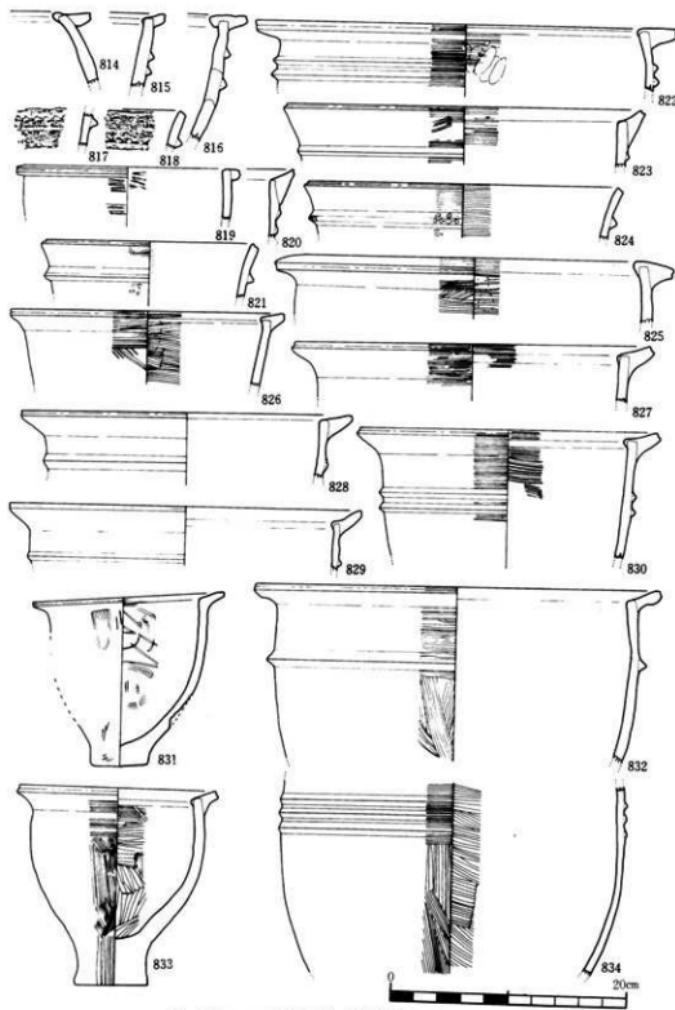


Fig. 136 王子遺跡出土土器実測図 (9)

Fig 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 852	口縁部	B - 8		灰黒褐色	Q.P <sub>1</sub> .M		
137 853	々	D - 14		茶褐色	*		
854	々	D - 13		暗褐色	Q.P <sub>1</sub> .M		
855	々	D - 25		暗茶褐色	Q.P <sub>1</sub> .M		
856	々	D - 19		*	*		
857	々	F - 21		灰黒色	Q.P <sub>1</sub> .H		
858	々	B - 11		明茶褐色	*		
859	々	D - 25		赤茶褐色	Q.P <sub>1</sub> .M		
860	々	E - 13		明褐色	Q.P <sub>1</sub>		
861	々	D - 6 ①(25.7)		暗褐色	Q.P <sub>1</sub> .M		
862	々	B - 11 ①(30.1)		暗茶褐色	*		
863	々	E - 8 ①(31.4)		*	*		
864	々	C - 18 ①(33.2)		*	*		

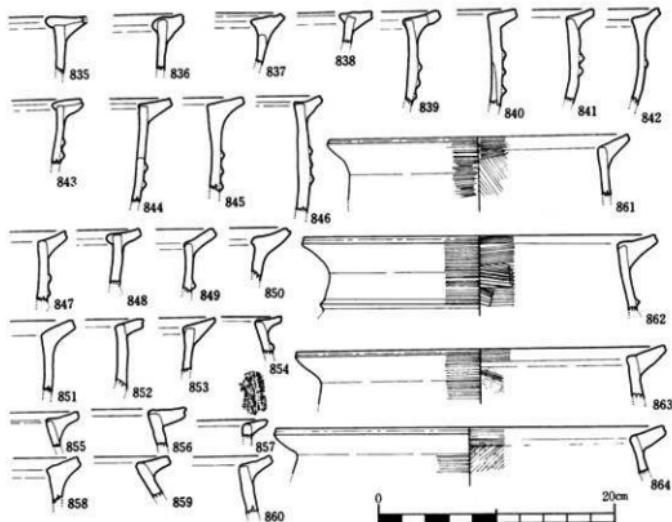


Fig. 137 王子跡出土土器実測図 (10)

## 2. 大型變形土器 (Fig. 138~140, PL. 34)

大型變形土器は、B・C-4・5区、E-8区、D・B-15・16区、C-18・20・21区、C・D-20・21区、C・D-23・24区のII層より出土を多く認めた。口縁部の形状が直口するものや内湾するものがあり、逆L字状もしくは逆L字状に近く外反するもの、くの字状に外反するものがある。口縁部端面は凹むもので、口縁部内側には張り出しを作り出すものと後を作り出すものとがある。口縁部上面は、凹みのものと坦面を作るものとある。内・外面の調整は、横位、斜位及び縱位の刷毛などで調整であるが、一部施削りや指頭圧調整痕が観察されるものもある。これらの土器には輪積みの手法の痕跡を残すものもある。

以下、土器の一覧表で説明を加える。

Tab. 45 大型變形土器一覧表

法量の単位:cm ①口径②器高③胸部最大径④底径( )復原径

図 号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig. 865	口縁部	D-15		明茶褐色	Q.P.L.M	内湾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しが作り出される。	内・外面ともに横位、斜位及び縱位の刷毛などで調整痕や指頭圧調整痕を残すものもある。一部施削りも認められる。以下、上記の外現のないものについて特徴を付記する。
138 866	*	C-24		暗茶褐色	Q.P.L.M.H	口縁部上面は円形。口縁部外側の部位には削出された跡がある。	865: 内・外面ともに施削りを認め、調整は不明である。
867	*	D-16		茶褐色	Q.P.L.H	口縁部上面は圓形状態で削出された跡がある。表面形状を付記する。	867: 内面に指頭圧調整痕を残す。
868	*	C-23		暗茶褐色	Q.P.L.M.H	865-逆L字状に外反する口縁部である。	870: 外面には施削りはほとんどある。内面は指頭圧調整痕が施されている。
869	*	C-4		明褐色	Q.P.L.H	866-逆L字状に外反する口縁部である。	872: 外面に施削りを認める。
870	*	C-20	*	Q.P.L		867-869-逆L字状に外反する口縁部で、突審を付ける。	873: 内・外面は施削りを認める。輪積みの手法を残す。
871	*	C-21		赤茶褐色	Q.P.L.H	865-869-逆L字状に外反する口縁部で、突審を付ける。	874: 内面は全体に施削りを認める。
872	口縁部 胸部	B-15	①(44.9)	茶褐色	*	865-869-逆L字状に外反する口縁部で、突審を付ける。	875: 内面は部分的に施削りを認める。
873	*	E-8	①(35.0)	褐色	*	870-逆L字状に外反する。	876: 内面に施削りを認める。
874	*	C-5	①(44.0) ③(40.6)	暗褐色	*	872-逆L字状に外反する口縁部上面は内側に凹む。内側に施削りを認める。	878: 指頭圧調整痕を残す。
Fig. 875	*	D-24	③(41.6)	褐色	*	873-逆L字状に外反する口縁部で、突審を付ける。	880: 内・外面ともに刷毛などで調整痕を認める。部分的に施削りである。輪積みの手法を残す。
139 876	口縁部 胸部	C-24	①(49.5) ③(50.3)	暗茶褐色	Q.P.L.M	874-突審は、一般に残存を認めがち。ほとんどの部位は指頭圧によって形成される。	
877	*	*	①(40.9) ③(48.9)	*	*	875-突審以下の部位は指頭圧により形成され、内側に施削りを認める。	
Fig. 878	胸部	*	③(41.0)	暗茶褐色	*	876-877-大きめに内湾する口縁部である。	
140 879	口縁部	B-5	①(54.3)	暗褐色	Q.P.L.H	877-突審は若干上位に貼付である。	
880	胸部	C-18	③(48.2)	茶褐色	Q.P.L	878-突審附近から一部胸部にかけての部位である。	
881	口縁部	B-15	①(61.8) ③(57.8)	明褐色	*	879-逆L字状に外反する口縁部である。上面は若干板らむ。内側に施削りを認める。	
882	口縁部 胸部	C-23	①(55.4) ③(54.4)	明茶褐色	Q.P.L.M	880-突審付近より底部付近にかけての部位である。	
883	*	C-24	①(60.0) ③(59.8)	暗茶褐色	Q.P.L.M.H	881-逆L字状に外反する口縁部である。口縁部上面はわずかに凹む。	
884	底部	D-21	④(9.0)	茶褐色	*	882-大きめに内湾する口縁部で、口縁部上面は坦面を作る。	
						883-口縁部上面はわずかに凹む。	
						884-底部の底部で、外方へ傾きながら立ち上がる器形である。	

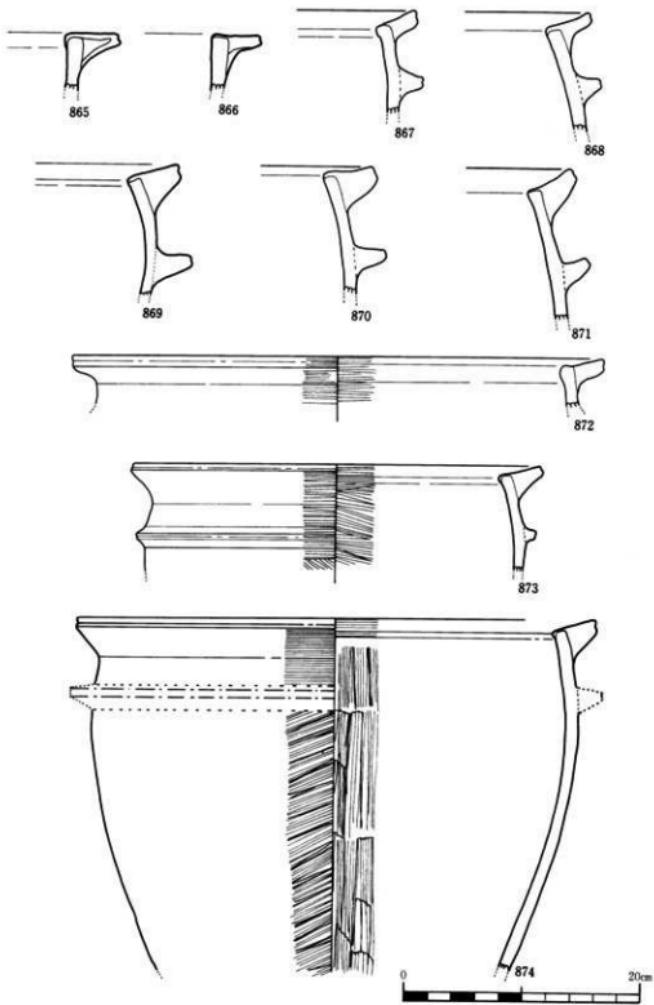


Fig. 138 王子遺跡出土土器実測図(1)

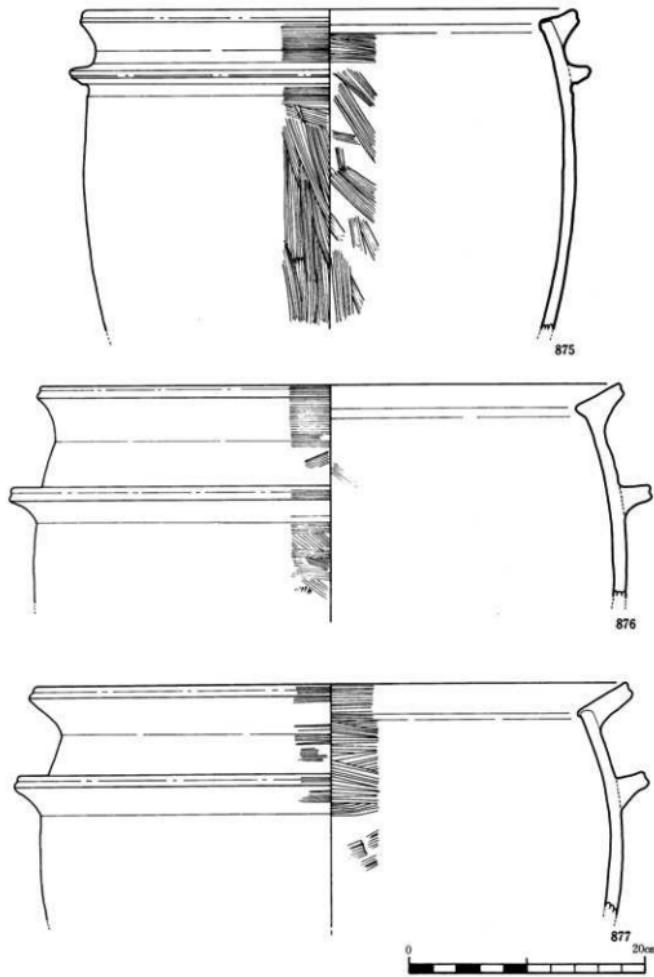
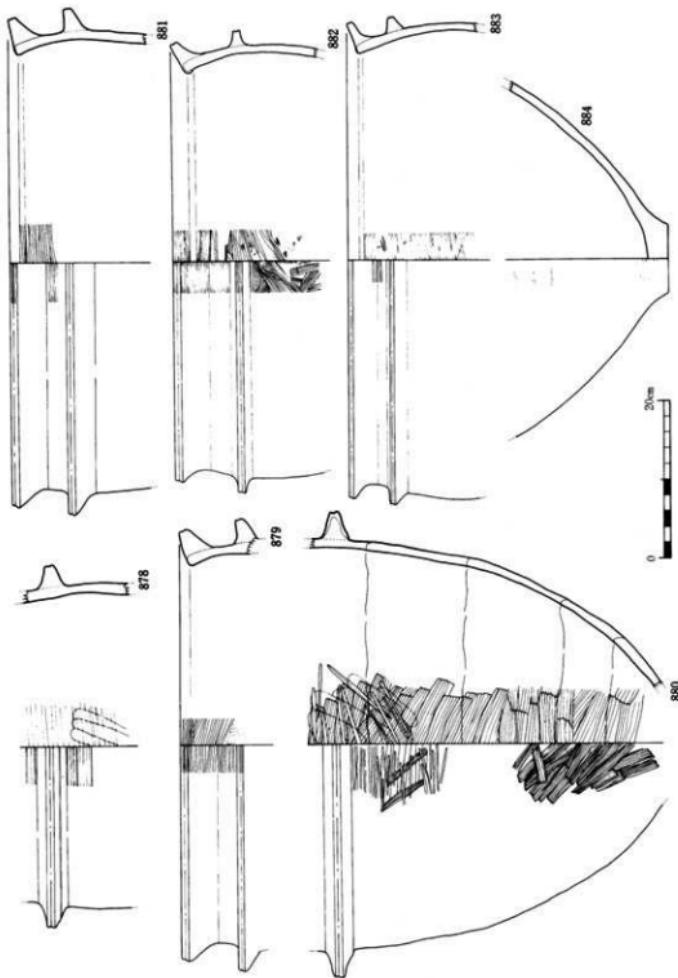


Fig. 139 王子遺跡出土土器実測図12

Fig. 140 王子遺跡出土土器圖 13



### 3. 壺形土器 (Fig. 141~144, PL. 34)

壺形土器には、口縁部の形状が直線的に立ち上がるもの、直線的に立ち上がりながらわずかに外反するもの、大きく外反するもの、口縁部内側に張り出しを作るもの、口縁部内面に貼付突帯を廻らすもの、口縁部の外面直下に突帯を廻らし、口縁部が二叉状を呈するものがある。これら形状のほか、口縁部端面が肥厚拡張され、その拡張部に凹線文が施されたもの、立ち上がりながら大きく外反し口唇部の凹むもの、無頭を呈するもの等、多種にわたる。肩部は張るもの、張りのないもの、胴部は丸味を帯びながら張るもの、張りのないものがある。これらの土器は、完形品が少なく、全体の器形を知り得るものは少ない。以下、土器の一覧表で説明を加える。

Tab. 46 壺形土器一覧表

法量の単位cm. ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

Fig. 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
141	口縁部	D-19	①(13.1)	明茶褐色	Q.P.L.H	口縁部が直線的に立ち上がり、逆T字状に外反するものや、直線的に立ち上がりながらわずかに外反し、口縁部が二叉状を呈するものがある。	内・外面には刷毛など調整が主体的認め、横位・斜位・縱位などの方向の調査である。上記長短のないものについて、特徴を付記する。
	*	E-6	①(13.6)	赤茶褐色	Q.P.L.M		886-内・外面ともに直削りを認め。
	*	D-26	①(15.4)	暗褐色	Q.P.L.M		887-外削りに直削りを認める。
	*	C-5	①(12.6)	明茶褐色	Q.P.L.H		888-内・外面ともなで及び直削り認める。
	*	C-4	①(16.9)	明褐色	Q.P.L.H		889-内・外面ともに直削り認める。
	*	C-4	①(15.6)	*	Q.P.L		890-丸味を帯びたものを認める。
	*	E-7	①(17.8)	明茶褐色	Q.P.L.M	上記表面のないものについて、特徴を付記する。	891-丸味を帯びたものを認める。
	*	E-17	①(21.2)	黒褐色	Q.P.L.M	892-直縁の立ち上がり逆L字状に外反し、内側はなでて張り出す。	893-一部外面に磨滅を認める。
	*	B-11	①(23.8)	明茶褐色	Q.P.L.H.O.	894-丸味を帯びる。	895-内削りはなでて張り出す。
	*	D-24	①(23.2)	茶褐色	Q.P.L.M	896-口縁部内側に貼付突帯を廻らせるものである。	897-内削りはなでて張り出す。
142	*	C-7	①(18.2)	明茶褐色	Q.P.L.M	898-口縁部内側に丸味を帯びる。	899-内削りはなでて張り出す。
	*	A-7	①(23.6)	明茶褐色	Q.P.L.H	900-口縁部で垂れ下り気味に外反する。	901-内削りはなでて張り出す。
	*	B-15	*	黒褐色	Q.P.L.M	902-口縁部内側に貼付突帯を廻らせる。	903-内削りはなでて張り出す。
	*	D-26	*	明茶褐色	Q.P.L.M	904-口縁部に張り出しがある。	905-内削りはなでて張り出す。
	*	*	*	暗褐色	Q.P.L.M	906-口縁部に張り出しがある。	907-内削りはなでて張り出す。
	*	D-19	*	*	Q.P.L.H	908-口縁部に張り出しがある。	909-内削りはなでて張り出す。
	*	C-10	①(20.2)	*	Q.P.L.M	910-口縁部に張り出しがある。	911-内削りはなでて張り出す。
	*	C-19	*	明褐色	Q.P.L.H	912-口縁部に張り出しがある。	913-内削りはなでて張り出す。
	*	D-9	①(20.3)	明茶褐色	Q.P.L.H	914-口縁部に張り出しがある。	915-内削りはなでて張り出す。
	*	B-11	①(21.8)	暗茶褐色	Q.P.L.H	916-口縁部に張り出しがある。	917-内削りはなでて張り出す。
	*	A-7	①(23.6)	明褐色	Q.P.L.H	918-口縁部に張り出しがある。	919-内削りはなでて張り出す。
	*	C-20	①(24.2)	茶褐色	Q.P.L.H	920-内削りはなでて張り出す。	921-内削りはなでて張り出す。
	*	C-10	①(24.2)	褐色	Q.P.L.M	922-口縁部端面凹んで、円錐状を呈する。	923-内・外面ともに磨滅のため不明である。

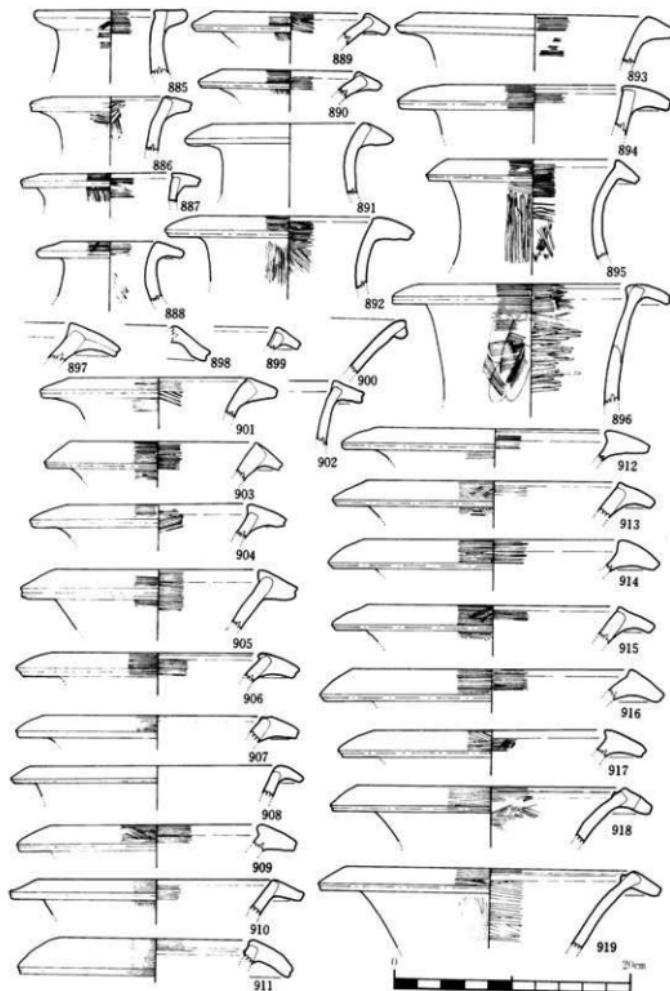


Fig. 141 王子遺跡出土土器実測図14

Fig 番号	部品 名	器 部	出上区	法 量	色 調	胎 土	形 型 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 908	LJ端部	D-17	①(20.5)	明褐色	Q.P.L.H	920・口縁部上面には裏呑支具により口縁部両面をさらに内側にかけて、平行腹面内に新画面を差させ、さらに、二重の大小の新画面を連続した状態である。	927・内・外ともも削減のため調整があるが、口縁部付近にて調整がある。口縁部上面は削減のため、内面は半が削落のため不正確であるが、口縁部付近にて調整を認める。	
141 909	*	C - 6	①(23.8)	暗褐色	Q.P.L.H	921・口縁部上面には裏呑支具により、新画面を施している被削部である。一部丸削りを施している所等を認める。	936・外はなでて、内面は人半が削落のため不正確であるが、口縁部付近にて調整を認める。	
910	*	D - 20	①(25.2)	明褐色	Q.P.L.H	922・口縁部上面には、裏呑支具を施している被削部で、内側にはわずかな張り出しを作り出す。	937・内・外ともとにもなで調整で、外の一部にて削削を認める。	
911	*	C - 4	①(23.4)	暗茶褐色	Q.P.L.M	923・口縁部上面には、裏呑支具を施している被削部である。	938・内・外ともとにも、外側に一部削削を認める。	
912	*	C - 4	①(26.2)	明茶褐色	Q.P.L.H	924・口縁部上面には、裏呑支具を施している被削部で、内側には人半が削落のため不正確である。	939・内・外ともとにもなで調整である。	
913	*	B - 1	①(27.6)	暗茶褐色	Q.P.L.M	925・口縁部上面には、円削り又は張り出しを作り出す。	940・内・外はなでて調整で、内面は削落を認める。一部削削は削落を残す。	
914	*	C - 5	①(28.2)	暗褐色	Q.P.L.H	926・内側には前歯三角貼付突起を作り出す。	941・内・外ともとにもなで調整である。	
915	*	F - 11	①(27.5)	*	Q.P.L.M.O.	927・口縁部下面には、円削り又は張り出ししているが、一か所は貼付部分より削削している。	942・内・外ともとにもなで調整である。	
916	*	E - 21	①(29.2)	明褐色	Q.P.L.M	928・口縁部下面には、裏呑支具により前歯三面貼付突起を作り出す。	943・内・外ともとにもなで調整である。	
917	*	A - 7	①(26.2)	*	Q.P.L.	929・口縁部下面には、裏呑支具により前歯三面貼付突起を作り出す。	944・内・外ともとにもなで削減しているため不正確である。	
918	*	C - 4	①(27.4)	暗茶褐色	Q.P.L.M	930・947, 946, 964・口縁部の内側面下に裏呑支具があり、口縫部が人気を呈する。これらの突起については、口縫部が外が付する状態で下部が丸味のある、斜底部のものがある。口縫部よりも外側へ突出したような部位を認める。これらは突起が見られる。これらの突起は、口縫部が内側へ凹む状態で、裏呑支具は認める。	945・内・外ともとにもなで削減しているため不正確である。	
919	*	*	①(29.2)	*	Q.P.L.M	931・947, 946, 964・口縫部の内側面下に裏呑支具があり、口縫部が人気を呈する。これらの突起については、口縫部が外が付する状態で下部が丸味のある、斜底部のものがある。口縫部よりも外側へ突出したような部位を認める。これらは突起が見られる。これらの突起は、口縫部が内側へ凹む状態で、裏呑支具は認める。	946・内・外ともとにもなで調整である。	
Fig 920	*	C - 6	*	明褐色	Q.P.L.M	932・947, 946, 964・口縫部の内側面下に裏呑支具があり、口縫部が人気を呈する。これらの突起は、口縫部よりも外側へ突出したような部位を認める。これらは突起が見られる。これらの突起は、口縫部が内側へ凹む状態で、裏呑支具は認める。	947・外はなでて調整及び縮縫の削落である。内面は削落が残り、わずかに削削を認める。	
142 921	*	D-E-18	*	*	Q.P.L.M	933・947, 946, 964・口縫部は丸削りで、口縫部よりも外側へ突出したような部位を認める。斜底部のものがある。口縫部よりも外側へ突出したような部位を認める。	948・内・外ともとにもなで調整である。	
922	*	B - 10	*	黒褐色	Q.P.L.M	934・947, 946, 964・口縫部は丸削りで、口縫部よりも外側へ突出したような部位を認める。	949・外は削減を認めるが、薄いなでて調整で、内面は削落を認めるが、厚いなでて削削を認める。斜底部は削削を認める。	
923	*	D - 20	*	暗茶褐色	Q.P.L.	935・947, 946, 964・口縫部下面に前歯三面貼付突起を作り出す。	950・内・外ともとにもなで調整である。	
924	*	B - 5	①(22.8)	明褐色	Q.P.L.M	936・952・口縫部は円形で、凹窪状を呈する。奥歯は前歯三面貼付突起を作り出し、裏呑支具は円みを認める。	951・内・外ともとにもなで調整で、外側は削削し、内面には前歯三面貼付突起を作り出す。	
925	*	E - 20	①(21.1)	黄褐色	Q.P.L.H	937・953・口縫部は円形で、凹窪状を呈する。奥歯は前歯三面貼付突起を作り出し、裏呑支具は円みを認める。	952・953・内・外ともとにもなで調整で、外側は削削し、内面には前歯三面貼付突起を作り出す。	
926	*	D - 9	①(34.2)	暗褐色	Q.P.L.M	938・957・958・口縫部は円形で、凹窪状を作り出し、裏呑支具は丸みを認める。	953・954・内・外ともとにもなで調整で、外側は削削し、内面には前歯三面貼付突起を作り出す。	
927	*	E - 11	①(35.2)	暗茶褐色	Q.P.L.M	939・957・958・口縫部は丸形で、凹窪状を作り出し、裏呑支具は丸みを認める。	955・956・内・外ともとにもなで調整で、外側は削削し、内面には前歯三面貼付突起を作り出す。	
928	*	H - 15	①(36.2)	暗褐色	Q.P.L.M	940・959・口縫部上面に現存する前歯三面貼付突起を作り出す。	957・内・外ともとにもなで調整で、外側は削削し、内面には前歯三面貼付突起を作り出す。	
929	*	D - 17	①(38.0)	*	Q.P.L.M	941・960・前歯三面貼付突起を作り出す。	958・内・外ともとにもなで調整で、外側の一部にて削削を認める。	
930	*	C - 11	①(25.4)	*	Q.P.L.M	942・961・前歯三面貼付突起を作り出す。	959・961・内・外ともとにもなで調整である。	
931	*	D - 9	①(26.9)	茶褐色	Q.P.L.M	943・962・前歯三面貼付突起を作り出す。	960・内・外ともとにもなで調整である。	
932	*	D - 17	①(26.4)	*	Q.P.L.M	944・963・前歯三面貼付突起を作り出す。	962・内・外ともとにもなで調整で、外側は一部削削を認める。	
933	*	D - 18	①(28.6)	黒褐色	Q.P.L.M	945・964・前歯三面貼付突起を作り出す。	963・965・内・外ともとにもなで調整である。	
934	*	D - 25	①(14.6)	暗茶褐色	Q.P.L.M	946・965・前歯三面貼付突起を作り出す。	965・内・外ともとにもなで調整である。	
935	*	C - 5	①(14.4)	*	Q.P.L.H	947・966・前歯三面貼付突起を作り出す。	966・内・外ともとにもなで削減しているため削削は不明である。	
936	*	D - 8	①(12.9)	茶褐色	Q.P.L.M	948・967・前歯三面貼付突起を作り出す。	967・内・外ともとにもなで削減しているため削削は不明である。	
937	*	E - 7	①(12.6)	暗茶褐色	Q.P.L.M	949・968・前歯三面貼付突起を作り出す。	968・内・外ともとにもなで削減しているため削削は不明である。	
938	*	D - 16	①(16.9)	*	Q.P.L.H	950・969・前歯三面貼付突起を作り出す。	969・内・外ともとにもなで削減しているため削削は不明である。	
939	*	C - 16	①(16.2)	明褐色	Q.P.L.H	951・970・前歯三面貼付突起を作り出す。	970・971・内・外ともとにもなで削削を認める。	
940	*	D - 5	①(21.0)	明茶褐色	Q.P.L.M.O.	952・972・前歯三面貼付突起を作り出す。	972・内・外ともとにもなで削削を認める。	
941	*	C - 20	①(20.8)	明灰褐色	Q.P.L.M	953・973・前歯三面貼付突起を作り出す。	973・内・外ともとにもなで削削を認める。	

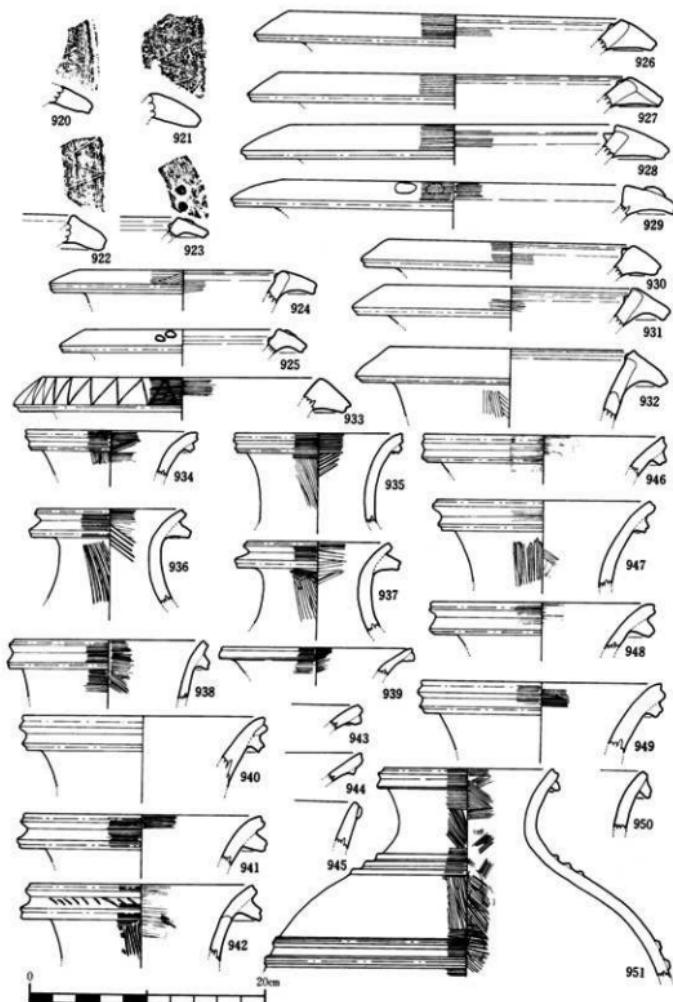


Fig. 142 王子遺跡出土土器実測図15

品番	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig 942	口縁部	B-15	①(19.8)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M.H	新面台形状突部を巡らし、端面は凹む。	る。外表面は荒書きを認める。 973-内・外表面とも審査を認め、外表面とともに審査を認め、外表面の一部になで調査を認める。
142 943	*	D-17		褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	993-肩部付近と思われ、三条の新面台形状突部付突起を巡らす。	994-外表面はなで調査を認め、内面は斜落が大きいが、一部などで調整である。
944	*	*		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	996-新面台形状突部を巡らし、突起端面は凹む、突起部は斜落が大きいが、一部などで調整である。	977-内・外表面とも調整痕不明である。
945	*	C-18		明褐色	Q.P <sub>L</sub> .M.H	997-新面台形状突部を認める。	997-新面台形状突部を巡らし、端面は凹む。
946	*	E-23	①(20.7)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	998-既存の器部で、上位に約5~7mm程度の大きさの暗褐色文があると下位にわずかに認め、器壁は非常に高い。	978-内・外表面ともに調査で、外表面は一部に擦及び擦脱のなで、内面には指頭は調査痕を認める。
947	*	E-11	①(18.8)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M	999-既存の器部で、新面台形状突部付近は丸味を帯びて張る。	979-外表面はなで荒書き、内面斜落して不平である。
948	*	B-20	①(19.1)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> .M	980-新面台形状突部をもつ。	980-内・外表面となでで、内面に指頭調査痕を残す。
949	*	C-5	①(21.0)	*	Q.P <sub>L</sub> .M.H	978-新面台形状突部を巡らし、端面は凹む。	981-内・外表面はなで調査である。
950	*	E-18		暗褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	982-新面台形状突部を巡らし、端面は凹む。	982-外表面はなで調整で、内面は斜落が大きい。
951	口縁部 肩部	F-7	①(15.3)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub>	983-既存の器部で、内面に新面台形状突部は丸味を帯び、内面に新面台形状突部付突起を巡らす。	983-外表面の調査痕は不明である。内面は薄い部位でのなで調査である。
Fig 952	口縁部	*		褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	984-内面とともに審査を認められる。	984-内・外表面ともに審査を認め、内面は指頭は調査痕のなで、指頭を認める。
143 953	*	E-16		明褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	985-新面台形状突部は付近で、斜落を認める。	985-内・外表面とも指頭のなで調整で、斜落を認める。
954	*	A-7		暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M	986-新面台形状突部付近で、斜落を認める。	986-内・外表面とも指頭のなで調整で、斜落を認める。
955	*	E-18	*	*	Q.P <sub>L</sub>	987-新面台形状突部を巡らし、端面は凹む。	987-内面は斜落して不平である。
956	*	C-20		褐色	Q.P <sub>L</sub> .M	988-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯びて張り、追字し字跡は外反する。	988-内・外表面とも指頭調査痕を残す。外表面は斜落して調整で、端面を認める。
957	*	B-10		暗褐色		989-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、器壁が細かい。	989-外表面はなで調整で、横位・斜位及び傾位の一部に斜落を認め、内面は斜落して不平である。
958	*	B-8		茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M.O.H	990-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	990-外表面はなで調整で、内面は斜落して不平である。
959	*	F-22	*	*	Q.P <sub>L</sub> .M	991-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	991-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
960	*	E-7	①(19.9)	黄茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M	992-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	992-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
961	*	B-15	①(24.2)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> .M.H	993-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	993-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
962	*	E-19	①(22.8)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	994-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	994-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
963	*	B-11	①(24.6)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .H.M	995-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	995-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
964	*	D-21	①(28.0)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .H.M	996-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	996-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
965	頸部・肩部	F-12		*	Q.P <sub>L</sub> .H.M	997-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	997-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
966	口縁部	B-8		暗褐色	Q.P <sub>L</sub> .H.M	998-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	998-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
967	*	*		茶褐色	H.M	999-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	999-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
968	*	B-9		*	Q.P <sub>L</sub> .M	1000-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	1000-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
969	*	B-11		暗褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	1001-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	1001-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
970	完形	E-20	①(15.4) ②(25.0) ③(25.4) ④(6.0)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M	1002-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	1002-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
971	肩部	B-11	③(24.3)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub>	1003-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	1003-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
972	*	B-10	③(29.0)	*	Q.P <sub>L</sub> .H.M	1004-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	1004-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
973	肩部・肩部	E-8	③(29.9)	赤茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	1005-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	1005-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。
974	*	F-23	③(34.8)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> .O <sub>2</sub>	1006-既存の器部で、新面台形状突部は丸味を帯び、斜落がある。	1006-外表面は斜位のなで調整で、内面は斜落して不平である。

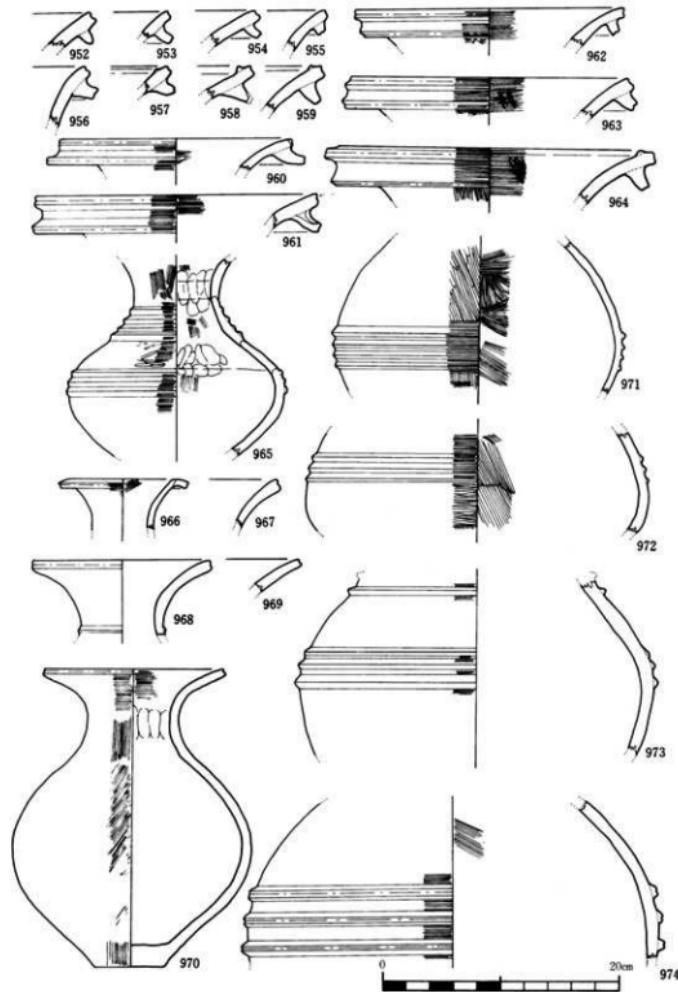


Fig. 143 王子遺跡出土土器実測図16

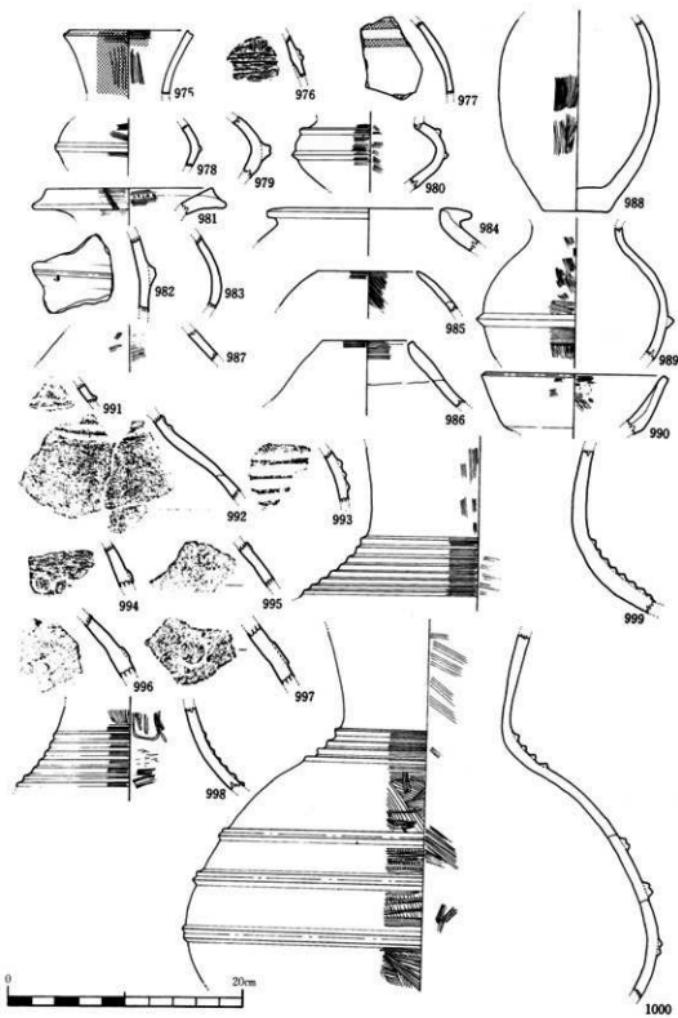


Fig. 144 王子遺跡出土土器実測図(17)

Fig. 器物 番号	器 部	出土区	法 量	色 満	胎 土	形 態 の 特 徵	手 法 の 特 徵
Fig. 975	口縁部	F-23		赤褐色	Q.Pt.I	口縁部が直口し、逆L字状に外反するもの。丸味を帯びるもの。これらは形状のほか内側を有するもの、外傾するものの内径である。等もある。	1001-内・外面ともに横位なで調整である。
144 976	胴部	D-22		赤基褐色	Q.Pt.M	口縁部端面は凹んで、円線状を呈するもの、丸味を帯びるもの。これらは形状のほか内側を有するもの、外傾するものの内径である。等もある。	1002-内・外はなで調整で、内面は指屈調整を残す。
977 ＊	F-11			明褐色	Q.Pt.H	口縁部端面は凹んで、円線状を呈するもの、丸味を帯びるもの。これらは形状のほか内側を有するもの、外傾するものの内径である。等もある。	1003-内・外面ともに横位なで調整で、外面上には指紋の付着を認める。
978 ＊	D-19			明褐色	Q.Pt.M	口縁部端面は凹んで、円線状を呈するもの、丸味を帯びるもの。これらは形状のほか内側を有するもの、外傾するものの内径である。等もある。	1004-内面は指屈調整は横位のなで調整である。
979 ＊	B-11			黒褐色	Q.Pt.M	口縁部上面は凹むものである。口縁部上面は、丸味を帯びるもの、内面を作ることもあるのがある。斜屈は張り丸味を帯びるものや張りのないものがある。	1005-外面は張る付着のため解明さを欠くが、横位、斜位のなで調整である。内面は指屈調整を残す。
980	肩部、胴部	B-8 ③(12.7)	*	Q.Pt.M		1006-1008.1011-1017.1024-1027.	1006-内・外面は横位、斜位のなで調整で、内面は指屈調整を残す。
981	口縁部	C-21 ①(16.6)		灰褐色	Q.Pt.I	1028-1030.1031-1037.1047-1050.1052.1054-1056.	1007-外面は横位のなで調整である。
982	胴部	B-16		茶褐色	Q.Pt.M	1057-内側する口縁部である。	1008-1012.1015.1017.1042.1069-灰口もしくは、底口気味の口縁部である。
983 ＊	G-21			赤褐色	Q.Pt.I	1010.1012.1014.1016.1019.	1009-内・外面ともに肩減のため調整は不明である。内面は指屈調整を残す。
984	口縁部	D-18 ①(17.4)		茶褐色	Q.Pt.H	1023.1027.1034.1037.1041.1043.	1010-外面は張る付着を認めるが、指屈のなで、内面は指屈調整後横位である。
985 ＊	H-22 ①(8.5)			暗基褐色	Q.Pt.M	1044.1049.1053.1074.1075-外側5cm. 6.7cm.は、外傾する口縁部である。	1011-内・外面ともに横位のなで調整である。
986 ＊	D-15 ①(7.7)			茶褐色	Q.Pt.H	1022.1027.1029.1010.1012.1014.	1012-内・外面ともに横位のなで調整である。
987	肩部	G-21		赤褐色	Q.Pt.I	1016.1026.1039-1037.1044-1050.	1013-1053.1057.1059.1061.1066.
988	肩部、底部	E-8		明基褐色	Q.Pt.H	1067.1068.1070.1071-底L字状もしくは、逆L字状に外反する。1058.	1014-外面は張る付着を認めるが、指屈のなで、内面は指屈調整後横位である。
989	肩部、胴部	C-8		暗基褐色	Q.Pt.H	1067.1070.1071-大さく内傾もしくは、大きくなる内傾する口縁部である。	1015-内・外面ともに横位のなで、内面は指屈調整を残す。一部に斜位調整を残す。
991	胴部	B-9		褐色	Q.Pt.M	1026.1027.1036.1037.1045.1046.	1016-外面は横位のなで、内面は指屈のなで調整を認める。
992	肩部	E-20		暗基褐色	Q.Pt.H	1048.1049.1051.1053.1054.1056.	1017-1058-1068-口縁部端面から凹んで、円錐部を呈する。
993	胴部	F-23		茶褐色	Q.Pt.H	1063.1064.1069-1017.1020.1021.	1018-外面は横位のなで、内面は指屈のなで、内面は指屈調整を認める。
994	肩部	F-20		暗褐色	Q.Pt.I	1024.1025.1044.1047.1050.1052.	1019-外面は横位のなで、内面は指屈のなで、内面は指屈調整を認める。
995 ＊	D-19			茶褐色	Q.Pt.M	1055.1059-1071-口縁部端面が丸味を帯びる。	1020-1028.1034.1038-1043-口神部が丸味を帯びる。
996 ＊	E-14			暗褐色	Q.Pt.M	1002.1005.1010.1012.1015.1017.	1021-1027.1044.1046-1052.1054-1055.
997	肩部	E-17		明基褐色	Q.Pt.M.H	1058.1064.1065-口縁部内側に張りり出でる。	1022-1027.1044.1046-1052.1054-1055.
998 ＊	B-15			明褐色	Q.Pt.H	1063.1064.1066.1007.1011.1014.101.	1023-1028.1034.1038-1043-口神部が丸味を帯びる。
999	腰部、肩部	B-14		黄褐色	Q.Pt.M.O	6.1018.1045.1050.1056.1059.1061.1	1024-1027.1044.1046-1052.1054-1055.
1000	腰部、肩部	E-10 ③(40.4)		暗基褐色	Q.Pt.M.H	066-1066.1070.1071-口縁部内側に張りり出でる。	1025-1027.1044.1046-1052.1054-1055.
						1001-1006-口縁部内側は丸味を帯びる。	1026-1027.1044.1046-1052.1054-1055.
							1007-内・外面ともに横位、斜位のなで調整である。

#### 4. 鉢形土器 (Fig. 145~147, PL. 34)

鉢形土器には、口縁部の形状が、直口するもの、内済するもの、外傾するもの、逆L字状に外反するもの、くの字状に外反するもの、垂れ下りのもの、丸味を帯びるものがある。なお、口縁部の二か所に耳状突起をもつものも認める。口縁部端面は凹んで、凹線状を呈するもの、丸味を帯びるもの、口縁部内側には張り出しを作り出すもの、稜を作り出すものとがある。口縁部上面は凹むもの、坦面を作るものなどがある。胴部は張り丸味を帯びるもの、張りのないものがあり、中には充実した脚台をもつ鉢もある。これらの土器は、完形品が少なく、全体の器形を知り得るものは少ない。以下の一覧表で説明を加える。

Tab. 47 鉢形土器実測図一覧表

法量の単位cm ①口径②高さ③胸部最大径④底径 ( ) 備考

Fig 番号	器 部	出 土 区	法 量	色 調	胎 土	形 狽 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 1001	口縁部	D - 5	①(15.4)	明褐色	Q.P.L	1003- 小さな口縁部である。 1004- 滑部から唇部して、口縁部を作り出す。	なで磨滅である。
145 1002	*	E - 17	①(16.8)	黒褐色	*	1005- 上面が短かい縦片である。 1012- 手早い容器である。	1018- 内・外面ともに磨滅しており不明である。
1003	*	E - 20	①(15.2)	明褐色	Q.P.L,H	1013, 1016- 小さい縦片である。	1019- 内・外面ともに唇位、斜位のなどで、外面部の一部に唇位のなで調整である。
1004	*	C - 6		明茶褐色	Q.P.L,M	1018- 垂れ下り気味に外反する。口縁部である。	1020- 内・外面ともに唇位及び斜位のなどで、内面は鮮明さを欠くで調整である。
1005	*	B - 10		黒褐色	*	1017- 順の可能性もある。 1019- 1022- 斜面の大きく外反する口縁部である。	1021- 内・外面ともに前進しているため不明である。外面部の一部に唇位で調整を認める。
1006	*	D - 9		*	Q.P.L	1022- 1026, 1028- 1037- 小縦片である。	1022- 外面は唇位、斜位、傾位のなどで、内面は唇位のなで調整である。
1007	*	B - 8		明褐色	*	1032- 斜面の大きく外反し、口縁部付近で若干立ち上がる口縁部である。 1035- 1036- 上面が短かい口縁部である。	1023- 内・外面ともに唇なで調整である。
1008	*	A - 7		*	*	1036- 斜面付近を欠損する。丸味を帯びて大きくなる唇部である。	1024- 外面は保た付着や剥落しているため不明である。内面は指頭圧調整を残し、横位のなで調整である。
1009	*	B - 16		黒褐色	*	1038- 1043- 器壁が厚い。 1044, 1047, 1049- 1053- 短い口縁部である。	1025- 外面は横位、内面は鮮明さを欠くが斜位のなで調整である。
1010	*	D - 21		明褐色	Q.P.L,H	1064- 内側に大きく内湾する。口縁部である。	1026- 外面は鮮明さを欠くが横位で、内面は横位、斜位のなで調整である。
1011	*	D - 17		明茶褐色	P.L	1068- 斜面付近を欠損する。	1027- 内・外面ともに磨滅や削落のため鮮明さを欠くが横位及び斜位のなどで、内面に指頭圧調整痕を残す。
1012	*	E - 27		明茶褐色	Q.P.L,H	1069- 光沢した脚台の底面より、外方へ凹ながる。気孔気味に立ち上がる口縁部である。底部の底端面は丸味を帯びている。	1028- 内・外面は横位、外面部の一部に斜位のなで調整である。
1013	*	B - 10	①(18.7)	明褐色	*	1070- 口縁部直下に断面三角形貼付を認める。	1029- 内・外面ともに指頭圧の調整である。
1014	口縁部 胸部	*	①(21.8) ③(17.0)	茶褐色	Q.P.L,M	1071- 上部が短かい口縁部である。	1030- 内・外面は横位のなで、外面部の一部斜位で調整である。
1015	口縁部	F - 21	①(18.6)	明褐色	Q.P.L,H	1072- 口縁部から口縁部にかけて、小さく突起状の貼付を認める。	1031- 内・外面ともに指頭圧調整が残る。
1016	*	B - 10	①(21.7)	黒褐色	Q.P.L	1073- 4.5cmへ開きながら立ち上がる口縁部である。	1032- 外面磨滅しているため調整は不明である。内面は鮮明さを欠くが、斜位のなで調整である。
1017	口縁部 胸部		①(20.6) ③(18.5)	明褐色	Q.P.L,M	1074- 口縁部から口縁部外縁にかけて、二ヶ所に耳状突起の貼付を認める。	1033- 内・外面ともに指頭圧調整が残る。内・外面ともに斜位のなで、外面部の一部は横位のなで調整を認める。
1018	口縁部	C - 21	①(23.0)	明褐色	Q.P.L	1075- 光沢した脚台をもつ丸形の跡である。	1034- 外面は鮮明さに欠けるが、横位のなで、内面は横位。斜位のなでで調整で、指頭の付着を認める。
1019	口縁部 胸部	B - 14	①(28.6) ③(22.4)	明茶褐色	Q.P.L	1076- 口縁部から口縁部外縁にかけて、二ヶ所に耳状突起の貼付を認める。	1035- 内・外面ともに指頭圧による調整を認め、内面は斜位のなで調整である。
1020	*	B - 15	①(29.4) ③(21.0)	明褐色	Q.P.L,H	1077- 口縁部から口縁部にかけて、二ヶ所に耳状突起の貼付を認める。	1036- 外面は磨滅しているが、横位のなで、内面は指頭圧調整痕を残し、横位、斜位のなで調整である。
1021	口縁部	*	①(27.2)	*	*	1078- 斜面より外方へ開きながら立ち上がり、外縁部の口縁部である。	1037- 外面は部分的に削落しているが横位で、内面は斜位のなで調整である。
1022	口縁部 胸部	A - 7	①(28.7) ③(22.3)	茶褐色	Q.P.L,M	1079- 口縁部にかけて、二ヶ所に耳状突起の貼付を認める。	1038- 外面は鮮明なまで、内面は指頭圧調整痕を残す。横位、斜位のなで調整である。
1023	*	E - 23		明茶褐色	Q.P.L,H	1080, 1081- 1004, 1006, 1009- 1017, 1020, 1021, 1024, 1025, 1029, 1031- 1034- 1041, 1043, 1044, 1048, 1049, 1053- 1054, 1056, 1067, 1071, 1073- 1075-についての外縁器面には僅の付着を認める。	1039- 外面は部分的に削落が認めら
1024	*	C - 6		茶褐色	Q.P.L,M		
1025	*	D - 17		暗褐色	Q.P.L,H		
1026	*	D - 5		褐色	Q.P.L,M		
1027	*	E - 5		黒褐色	*		
1028	*	E - 23		茶褐色	Q.P.L,H		
1029	*	D - 14		黒褐色	*		
1030	*	E - 22		*	Q.P.L		
1031	*	D - 16		*	*		

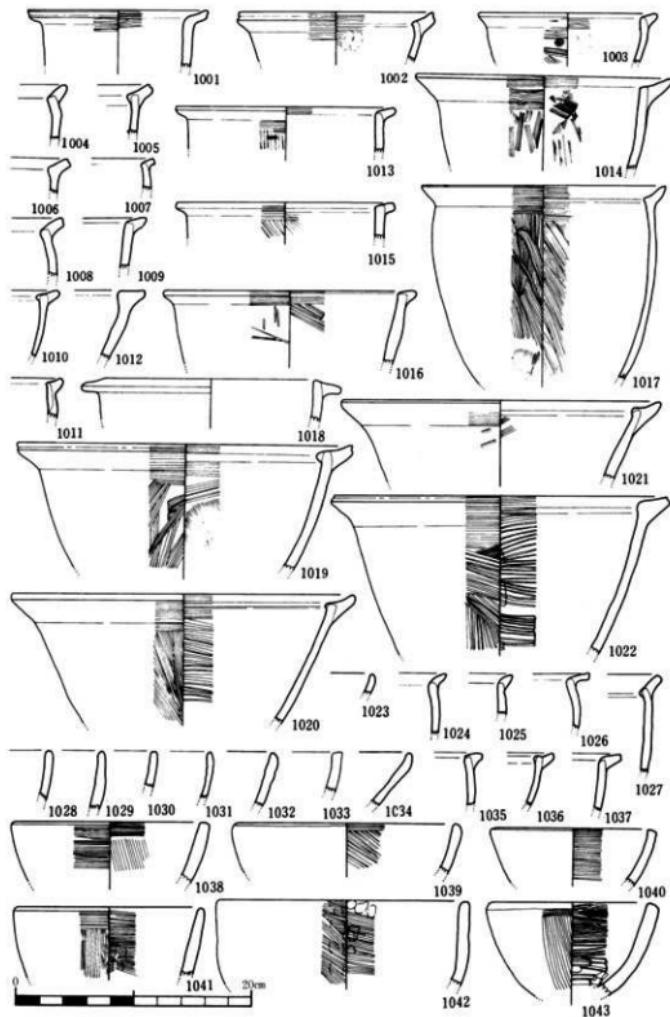


Fig. 145 王子遺跡出土土器実測図18

図 番 号	遺 物 名	器 部	出 土 区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig. 1032		LII 横部	B - 5		褐色	Q.P <sub>L</sub> H		れ不同である。内面は横化。斜位のなで調整である。
145	1033	*	E - 20		灰褐色	*	1040-外面は底の付着と刺溝のために調整痕は不明である。	
	1034	*	C - 5		墨茶褐色	Q.P <sub>L</sub>	1041-内・外面ともに鮮明な横位、縱位のなで調整である。	
	1035	*	D - 16		黒褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1042-内・外面ともに指頭圧調整痕が残る。	
	1036	*	B - 9		灰褐色	*	1043-内・外面ともに審美を認めるが、内面の一部に斜位及び横位のなで調整である。	
	1037	*	C - 10		墨茶褐色	*	1044-1075, 1046-内・外面ともに刺溝している。	
	1038	*	B - 10	①(16.9)	墨茶褐色	Q.P <sub>L</sub>	1047-内・外面ともに斜位のなで、内面には横位のなで調整である。	
	1039	*	E - 27	①(19.5)	黒褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1048-外者は底の付着のため、鮮明さに欠けるが、横位・斜位、縦位のなで、指紋の付着を認め。内面は指頭圧調整痕を残す。横位及び斜位のなで調整である。	
	1040	*	F - 11		*	*	1049-内・外面ともに底の付着や刺溝しているが、横位や斜位のなで調整で、内面には指頭圧調整痕を残す。	
	1041	*	C - 21	①(16.2)	*	Q.P <sub>L</sub>	1050-外者は、横位、斜位、縦位のなで、内面は指頭圧調整をなし横位のなで調整である。	
	1042	*	D - 11	①(21.6)	墨茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1051-外者は底の付着を認めた、一般に横位のなで、内面は指頭圧調整痕を残し、縦位のなで調整である。	
	1043	*	B - 8	①(14.5)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1052-外者は審美と底の付着のため人差しは不明である。一部横位のなで調整を認める。	
Fig. 1044		口縁部 側部	F - 28	①(16.2)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1053-内・外面ともに底位及び斜位のなで、外面は刺溝が内面は指頭圧調整痕を認める。	
146	1045	*	E - 8	①(19.0) ③(16.2)	茶褐色	*	1054-内・外面ともに縦位、斜位のなで調整で、外面は落し、内面は指頭圧調整痕を認める。	
	1046	*	C - 7	①(17.2) ③(15.2)	*	*	1055-内・外面ともに底位及び斜位のなで調整で、内面は指頭圧調整痕を残す。	
	1047	*	A - 7	①(14.0) ③(12.6)	*	Q.P <sub>L</sub> M	1056-内・外表面ともに鮮明な横位のなで調整である。	
	1048	*	D - 11	①(19.0) ③(15.1)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1057-外者は横位及び縦位のなで、内面は指頭圧調整痕を残す。	
	1049	*	E - 9	①(21.4) ③(18.0)	墨茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1058-外者は横位及び縦位のなで、内面は指頭圧調整痕を残す。	
	1050	*	C - 6	①(23.0) ③(19.4)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1059-外者は横位及び縦位のなで、内面は指頭圧調整痕を残す。	
	1051	*	E - 26	①(25.2)	暗褐色	*	1060-外者は横位及び縦位のなで、内面は指頭圧調整痕を残す。	
	1052	*	C - 20	①(20.2) ③(17.9)	*	*	1061-外者は横位及び縦位のなで、内面は指頭圧調整痕を残す。	
	1053	*	D - 11	①(28.6) ③(24.9)	墨茶褐色	*	1062-外者は横位及び縦位のなで、内面は指頭圧調整痕を残す。	
	1054	*	D - 25	①(22.0) ③(18.8)	暗褐色	*	1063-外者は横位及び縦位のなで、内面は指頭圧調整痕を残す。	
	1055	*	C - 25	①(25.8)	墨茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1064-外者は横位及び縦位のなで、内面は指頭圧調整痕を残す。	
	1056	*	口縁部 側部	E - 18	①(19.9) ③(18.6)	黒褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1065-外者は横位及び縦位のなで、内面は指頭圧調整痕を残す。
	1057	*	口縁部	B - 5	①(30.2)	明褐色	*	1066-外者は横位及び縦位のなで、内面は指頭圧調整後横位、斜位などのなで調整である。
	1058	*	C - 4	①(14.0)	*	*	1067-外者は横位のなで、内面は指頭圧調整後横位、斜位などのなで調整である。	
	1059	*	E - 8	①(13.0)	*	Q.P <sub>L</sub>	1068-外者は横位のなで、内面の指頭圧調整後横位、横位のなで調整である。	
	1060	*	*	①(13.6)	*	Q.P <sub>L</sub> H	1069-外者は鮮明な横位のなでで、内面は指頭圧調整後横位なで調整である。	
	1061	*	C - 2	①(15.0)	墨茶褐色	*	1070-外者は横位で、内面は指頭圧調整痕、横位のなで調整である。	
	1062	*	B - 5	①(17.0)	褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1071-外者は横位のなで、内面は一部横位しているため、鮮明さに欠けるが、横位のなで調整である。	
	1063	*	C - 3	①(13.21)	*	Q.P <sub>L</sub> H	1072-外者は鮮明な横位のなでで、内面は指頭圧調整後横位のなで調整である。	
	1064	*	B - 10	①(15.1)	墨茶褐色	Q.P <sub>L</sub>	1073-外者は鮮明な横位のなでで、内面は指頭圧調整後横位のなで調整である。	
	1065	*	C - 3	①(14.0)	墨茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M		

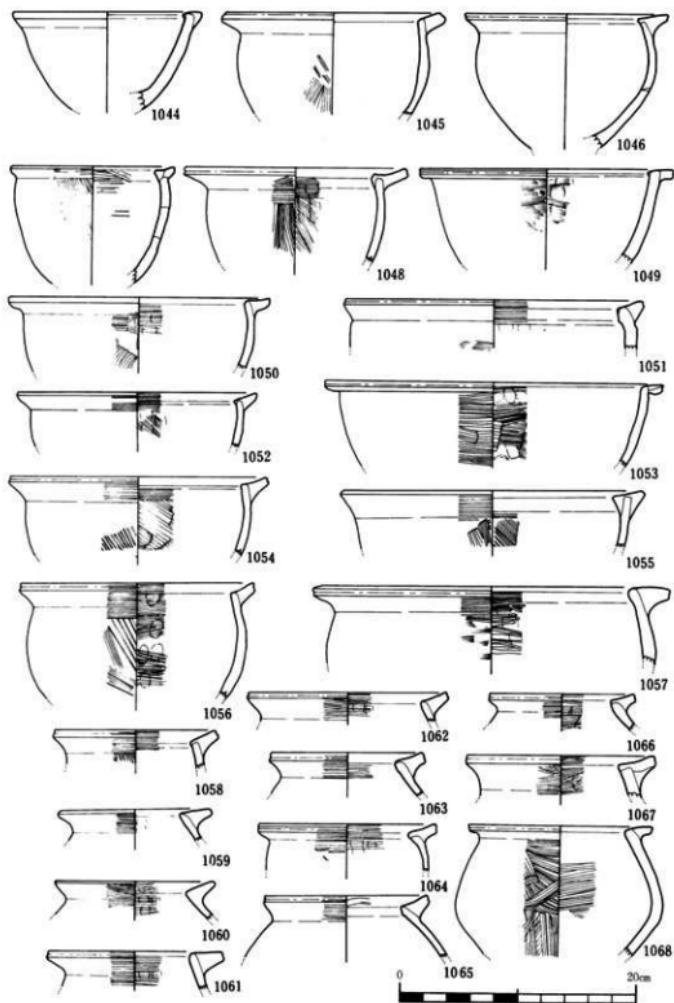


Fig. 146 王子遺跡出土土器実測図⑨

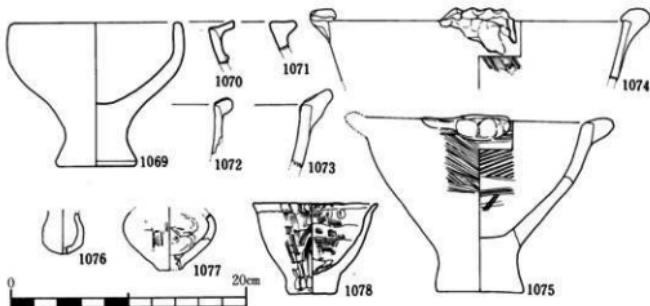


Fig. 147 王子遺跡出土土器実測図 20

器部 番号	器部 番号	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig. 1066	口縁部	E-10	①(12.4)	暗茶褐色	*	1063-外面は一部に焼位のなでで、内面は剥落を著しく、調整痕は不明である。	
146	1067	*	C-13	①(16.0)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M	1064-内、外面ともに焼位のなで調整で、内面は一部剥落を示す。
	1068	口縁部 胴部	D-9	①(15.4) ③(17.5)	*	Q.P <sub>L</sub> .H	1065-内、外面ともに焼位及び一部斜位のなで調整である。
147	1069	完形	E-14	①(14.6) ②(13.0) ③(14.4) ④(6.9)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .H.M	1066-外面とともに着滅しており、調整痕は不明。
	1070	口縁部	D-23		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	1070-外、外面ともに着滅しているため調整痕は不明。
	1071	*	D-25	*	*	*	1071-外面、解明さに欠けるが焼位のなでで、内面は剥落は調整後斜位のなで調整である。
	1072	*	F-14	*	*	*	1072-外面は焼位及び継位のなで調整である。
	1073	*	B-8		暗褐色	*	1073-外面は暗褐色や剥落から底の付着のために人手は不明であるが、一部に焼位などで調整を認めめる。内面は剥落は調整後焼位のなで調整で、耳状突起は指頭圧調整がなされている。
	1074	*	E-13	①(28.7)	*	*	1074-内面は削落や底の付着により調整痕は不明である。内面は焼位のなで調整である。
	1075	完形	C-6	①(22.7) ②(14.9) ③(18.4) ④(7.4)	明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M	1075-削落している。

#### 4. 底部 (Fig. 148~153)

底部には、壺形土器、大型壺形土器、壺形土器、壺形土器、鉢形土器などがある。

##### ①壺形土器 (Fig. 148~150)

壺形土器は充実した脚台で、裾が長いもの、短かいもの、鋭角的に広がるもの、広がりがないものの、裾の端面は凹んで、凹線状を呈するもの、丸味を帯びるもののがみられる。脚台は高いものや低いもののが認められ、底面は平底のもの、若干凹むものがある。なお、底面や裾の一部に木の葉や種粒の圧痕が観察されるものがある。以下、一覧表で説明を加える。

Tab. 48 変形土器（底部）一覧表

法量の単位cm ①底径②底厚

Fig 番号	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 滴	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 1079		底部	B-15	①(8.2) ②(6.7)	褐色	Q.P.L.M	丸薬した左右である。幅は長いもの、広いものの角部に広がるもの、広がりのないもの。胎の端面は円んで、凹縫状を呈するもの、丸足を帶びるもののがみられる。胎は平底のもの若干むらもある。	外皮は継続。横位で削毛などを調整が見られ、斜位で削毛もなされている。中には削減や削落したものも認める。内面は欠損しているものが多く、また削落や削減しているもの多い。
148	1080	*	D-8	①(9.4) ②(6.3)	*	*		
	1081	*	B-15	①(8.2) ②(5.9)	明褐色	Q.P.L		
	1082	*	D-8	①(8.8) ②(6.2)	*	Q.P.L.H	1079, 1084, 1086, 1087, 1089, 1090, 1091, 4, 1096, 1100, 1102, 1104, 1111, 1112, 1120, 1121, 1136, 1139, 1146, 1150, 1151, 1154, 1157, 1156, 1162, 1164, 1184, 1185, 1191-瓶が長く、瓶身に広がり、瓶の端面はわずかに凹んで、凹縫状を呈する。	1079, 1082-1084, 1086, 1087, 1090-外皮は継続。横位で削毛などを調整が見られる。斜位で削毛もなされている。中には削減や削落したものも認める。内面は削落や削減しているもの多く、また削落や削減しているもの多い。
	1083	*	*	①(8.7) ②(6.2)	*	Q.P.L.M		
	1084	*	D-18	①(8.2) ②(5.6)	*	*	85, 1191-瓶が長く、瓶身に広がり、瓶の端面はわずかに凹んで、凹縫状を呈する。	1085-内面は削落及び削減しているため、調整痕は不鮮明である。
	1085	*	D-8	①(8.5) ②(6.3)	*	*		1086, 1096, 1097, 1107, 1108, 1112, 1113
	1086	*	E-19	①(7.2) ②(5.3)	*	Q.P.L.H	1075, 1082, 1091, 1095, 1109, 1111, 1113, 7, 1138, 1140, 1146, 1149, 1187-瓶は長く、あまり広がりがなく、瓶の端面は円んで、凹縫状を呈する。	13, 1147, 1156, 1153, 1183-内面に削落や削減を認めるが、削毛などで調整をみる。
	1087	*	C-14	①(8.5) ②(6.1)	褐色	Q.P.L.M		106, 1109, 1115, 1117-1128, 1109, 1130-1137, 1141, 1142, 1148, 1149,
	1088	*	E-8	①(7.8) ②(5.7)	*	*	1098, 1101, 1106, 1109, 1114, 1119, 112, 4, 1125, 1129, 1131, 1134, 1135, 1142, 1144, 1145, 1147, 1148, 1151, 1155, 1161, 1165, 1166, 1168, 1177, 1179, 1183-瓶は短く、やや弧形的に広がり、瓶の端面は円込んで、凹縫状を呈するが丸味を帯びるのである。	1160, 1161, 1163, 1178-内面が欠損し、不明である。
	1089	*	*	①(8.0) ②(5.5)	*	*		1088, 1099, 1110, 1129, 1139, 1152, 1153-内面に削落するが、その残存部に削減を認め、斜位で削毛や削毛などで調整を残す。
	1090	*	B-15	①(7.8) ②(5.8)	茶褐色	*		1090-瓶は短く、やや弧形的に広がり、瓶の端面は丸んで、凹縫状を呈するが丸味を帯びるのである。
	1091	*	B-10	①(9.0) ②(7.0)	褐色	*	1098, 1099, 1109, 1104, 1110, 1122, 102, 3, 1026, 1024, 1028, 1032, 1056, 1059, 1063, 1067, 1080-1082, 1086-瓶は短かく、あまり広がりがなく、瓶の端面は円んで、凹縫状を呈するが丸味を帯びるのである。	1081, 1085, 1089, 1114-内面ともに削減や削落を認め、調整痕は不明である。内面は削毛などで削位圧満を認め、斜位で削毛や削毛などで調整を残す。
	1092	*	E-17	①(9.0)	*	*		1079-明瞭な継続の丸なで調整である。
	1093	*	B-10	②(5.6)	茶褐色	*		1080-瓶は短く、やや弧形的に広がり、瓶の端面は円んで、凹縫状を呈するが丸味を帯びるのである。
	1094	*	E-18	①(8.0) ②(6.3)	暗褐色	*	1083, 1084-瓶の端面はわずかに凹んで、	1080-一部削減しているが、継位及び斜位の丸なで調整を認め。
	1095	*	E-24	①(7.7) ②(5.7)	褐色	Q.P.L	1089-削減や削落のために、瓶の端面は一部のみに凹んで認めめる。	1089-斜位及び斜位の丸なで調整である。
	1096	*	B-15	②(6.0)	暗褐色	Q.P.L.H	1092, 1195-大半が欠損している。	1083-瓶位のなで調整である。
							1096-瓶の端面が丸く凹む。	1084-斜位及び斜位のなで、底面に丸みの構造の痕を認める。
	1097	*	F-28	①(7.2) ②(6.5)	褐色	Q.P.L.M	1107-胎の底部より外方へ開きながらのびる唇形である。瓶の付着を認める。	1085-斜位のなで調整である。
	1098	*	B-10	①(7.6) ②(6.6)	明褐色	*	1108-瓶の端面はわずかに凹む。	1086-はとみ削減しておらず、一部削位の丸なで調整を認め。
	1099	*	F-20	①(8.4) ②(4.8)	茶褐色	*	1109-約半分を欠損する。	1087-横位及び斜位のなで調整である。
	1100	*	E-24	①(7.0) ②(5.4)	明褐色	*	1113-底面が右円孔。	1091-削減や削落を認められるが継位、斜位及び斜位のなで調整を認め。
	1101	*	B-20	①(8.2)	褐色	Q.P.L.H	1114, 1115, 1118, 1127-一部を欠損する。	1092-斜位のなで調整を認め。
	1102	*	B-14	①(8.6) ②(5.6)	茶褐色	Q.P.L.M	1123-欠損しているため、器形ははっきりしないが、瓶は短く、広がりがない。	1093-斜位が美しいが斜位のなで調整を認め。
	1103	*	B-10	①(8.0) ②(5.6)	*	*	瓶の端面は削落を認めると、一部のみ凹縫状を呈するものである。	1094-削減及び削落しておらず部分的に斜位のなで調整がある。
	1104	*	A-7	①(6.4) ②(5.4)	*	Q.P.L.H	1124-瓶の端面は削減が著しく、欠損部位を多く認め、一部が凹み凹縫状を呈している。	1095-横位及び斜位のなで調整である。
	1105	*	D-18	①(8.1) ③(5.6)	明褐色	Q.P.L.M	1127-端面は浅く凹む。	1096-横位、斜位及び斜位のなで調整である。
	1106	*	E-8	①(7.3) ②(5.2)	明褐色	Q.P.L.M	1128-1140, 1146, 1149, 1151, 1153-瓶の端面が若干凹んでいる。	1097-横位及び斜位のなで調整である。
	1107	*	B-10	①(7.1)	褐色	*	1134-瓶端面は削落や削減のため不明である。	1098-削減及び削落が認められるが、斜位のなで調整である。
	1108	*	B-11	①(7.2) ②(4.8)	茶褐色	Q.P.L.H	1137-底面が若干凹んでいる。	1099-削減や削落が認められるが、横位及び斜位のなで調整である。
	1109	*	F-10	①(7.4)	明褐色	Q.P.L.M	1157, 1160, 1162, 1177, 1178, 1185-瓶の端面は浅く凹んでいる。	1100-斜位及び斜位のなで調整である。
	1110	*	B-20	①(8.3)	*	Q.P.L.H	1142, 1147, 1150, 1152, 1156, 1159, 1184-底面があげ気味に凹んでいる。	1101-解明さを欠きが、横位及び斜位のなで調整である。

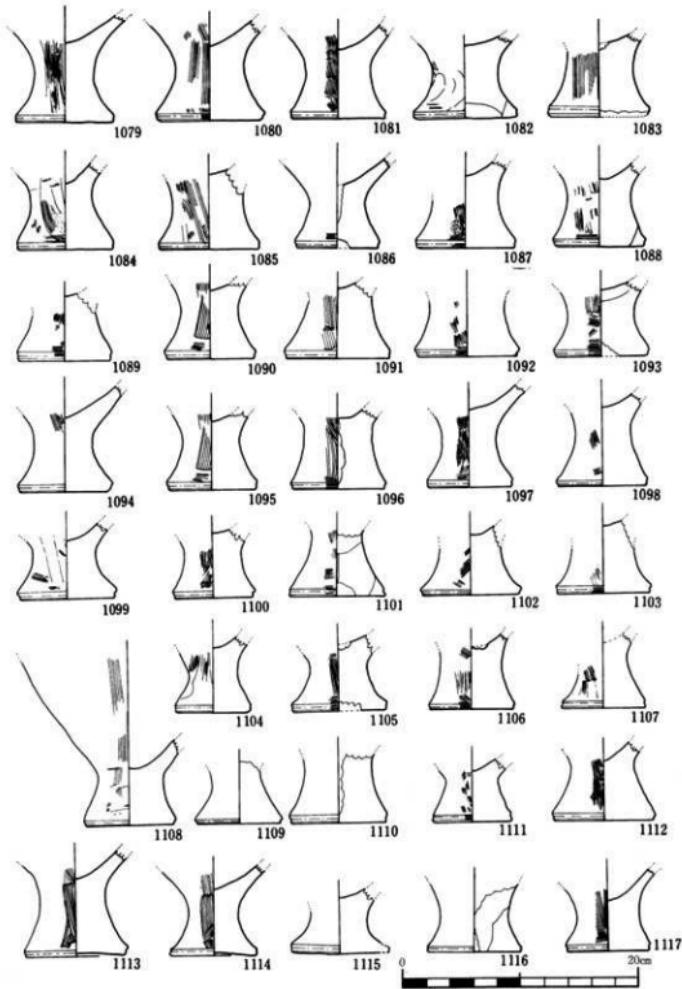


Fig. 148 王子遺跡出土土器実測図(2)

Fig 番号	測定 部位	器部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 148	1111	底部	B-17	①(6.8) ②(4.2)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	中空にはならない。	1102-斜位のなで調整である。
	1112	*	B-10	①(8.8) ②(5.0)	褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1145, 1149-削減や剃落が著しいが、一部に斜位のなで調整である。	
	1113	*	F-18	①(8.8) ②(6.5)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	底端面は一部に凹みが認められ、凹底端面を呈するものと思われる。	1104-鮮明さを欠くが、縦位のなで調整である。
	1114	*	B-10	①(7.4) ②(6.5)	暗褐色	*	1157-彫刻が浅く凹んでいる。	1105-削減を認めるが、横位及び縦位のなで調整である。
	1115	*	E-8	②(4.6)	暗茶褐色	*	1160, 1161, 1169, 1171, 1176-1187-彫刻が丸味を帯びている。	1107-削減及び剃落を認めるが、横位及び縦位のなで調整である。
	1116	*	D-17	①(8.0)	*	*	1131, 1134, 1138, 1142, 1144, 1151, 1169, 1177, 1179-1181-小さい底盤である。	1108-削減及び剃落を認めるが、縦位の毛毛など削除である。
	1117	*	E-29	②(4.2)	*	Q.P <sub>L</sub> H	1171-輪は短く、広がりのない輪の端面は丸味を帯びる。	1109-削減及び剃落を認めるが、調整痕は不明である。
Fig 149	1118	*	B-10	①(9.1)	褐色	*	1176, 1181-輪は短く、あまり広がらない。丸味を帯びる。	1110-削減及び剃落をしており、調整痕は不明である。
	1119	*	B-15	①(7.4)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1187-底盤厚の薄いもので6mmを数える。	1111-剃落を部分的に認めるが、横位及び斜位のなで調整である。
	1120	*	C-4	①(8.0)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1112-縦位及び斜位のなで調整である。	
	1121	*	B-8	①(9.0)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1113, 1114-縦位及び斜位のなで調整である。	
	1122	*	E-8	①(8.0)	褐色	*	1115-削減しておらず調整痕は不明である。	
	1123	*	E-20	①(7.8)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1117-1120-鮮明な縦位及び斜位のなで調整である。	
	1124	*	D-21	①(8.2)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1121-ほんどうが削落し、調整痕は不明である。	
	1125	*	C-12	①(9.2)	褐色	*	1122-一部は剃落しているが、斜位の削毛などで調整である。	
	1126	*	E-20	①(7.8)	*	1123-横位、斜位及び縦位の削毛などで調整である。		
	1127	*	B-10	①(7.4)	明褐色	*	1124-剃落しており調整痕は不明である。	
	1128	*	B-5	①(7.2)	*	*	1125-横位、斜位及び縦位のなで調整である。	
	1129	*	A-7	①(6.4)	褐色	*	1126-一部は剃落を認めるが、横位及び縦位のなで調整である。	
	1130	*	A-6	①(6.2) ②(4.6)	暗茶褐色	*	1127-削減や剃落が著しく削落痕は不明である。	
	1131	*	E-8	①(8.0)	褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1128-横位、斜位及び縦位のなで調整である。	
	1132	*	B-10	①(6.3)	明褐色	*	1129-底盤調整後縦位及び横位の削毛などで調整である。	
	1133	*	B-5	①(6.8) ②(4.8)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1130-横位及び縦位の削毛などで調整を鮮明に認める。	
	1134	*	E-16	①(7.8)	明褐色	Q.P <sub>L</sub>	1131-縦位の削毛などで底面には植物の根状様の根を認める。	
	1135	*	E-20	①(6.0)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1132-鮮明な縦位の削毛などで調整である。	
	1136	*	D-5	①(7.0)	明褐色	*	1133-剃落や削減を認めるが、横位の削毛などで調整を鮮明に認める。	
	1137	*	B-10	①(10.0)	黒褐色	*	1134-縦位の削毛などで調整である。	
	1138	*	E-21	①(7.2) ②(4.8)	暗茶褐色	*	1135-横位及び削落をしているため調整痕は不明である。	
	1139	*	D-23	①(7.4) ②(6.6)	褐色	Q.R.M	1136-削落しているため調整痕は不明である。	
	1140	*	A-7	①(7.8) ②(5.6)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1137-横位及び斜位の削毛などで調整である。	
	1141	*	D-24	①(7.8) ②(5.8)	褐色	*	1138-削減しているため調整痕は不明である。	
	1142	*	B-10	①(7.0)	茶褐色	*	1139-横位及び縦位の削毛などで調整である。	
	1143	*	C-25	①(7.6)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1140-削減しているが、横位の削毛などで調整である。	
	1144	*	A-7	①(6.0)	茶褐色	*	1141-鮮明さに欠けるが、横位、斜位及び縦位の削毛などで調整である。	

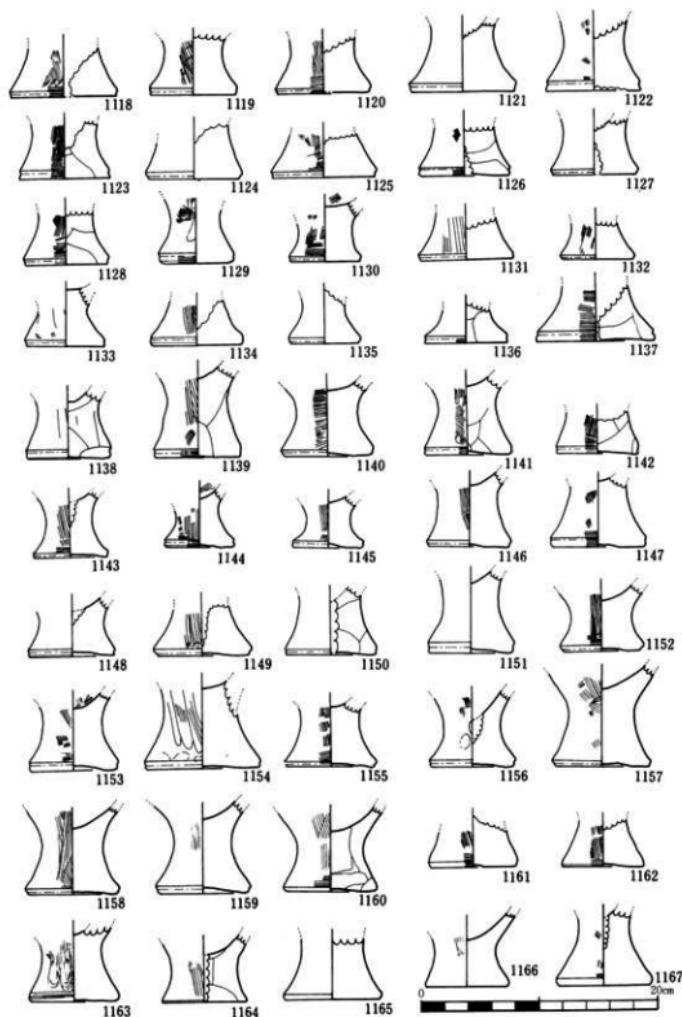


Fig. 149 王子遺跡出土土器実測図22

Fig 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	
Fig 116	底部	D - 17	①(6.0)	褐色	Q.P <sub>L</sub> M		1142~1144-傾位及び斜位の刷毛などで調整である。	
149	*	D - 15	①(7.1) ②(5.2)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> M		1145-削落及び磨滅しているが、斜位の刷毛などで調整である。	
116	*	B - 7	①(8.0) ②(5.6)	褐色	Q.P <sub>L</sub> H		1146-着色及び削落しているが、傾位及び斜位の刷毛などで調整である。	
118	*	B - 17	①(7.4)	*	*		1147-傾位及び傾位の刷毛などで調整である。	
119	*	B - 7	①(8.4)	*	Q.P <sub>L</sub> M		1148-磨滅しており不明である。	
1150	*	D - 24	①(7.8)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> H		1149-傾位及び斜位の刷毛などで調整である。	
1151	*	D - 20	①(7.4) ②(5.8)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M		1150-磨滅しており不明である。	
1152	*	D - 23	①(7.0) ②(4.2)	*	Q.P <sub>L</sub> H		1151-磨滅や削落しており、不明である。	
1153	*	B - 10	①(7.6) ②(5.6)	褐色	*		1152,1153-傾位及び傾位の刷毛などで調整である。	
1154	*	E - 18	①(9.8) ②(6.7)	*	Q.P <sub>L</sub> M		1154-削落を認めるが、傾位及び斜位の刷毛などで調整である。	
1155	*	B - 15	①(7.8) ②(5.0)	茶褐色	*		1155-磨滅しているが、胎頭に調整痕を残し、斜位の裏削りである。	
1156	*	C - 17	①(7.2)	褐色	Q.P <sub>L</sub> H		1156-傾位及び傾位の刷毛などで調整である。	
1157	*	B - 11	①(8.4) ②(6.6)	*	Q.P <sub>L</sub> M		1157-傾位及び斜位の刷毛などで調整である。	
1158	*	D - 25	①(8.0) ②(5.5)	*	*		1158-傾位及び、斜位の刷毛などで調整である。	
1159	*	E - 24	①(8.0) ②(6.3)	*	*		1159-磨滅及び削落しており、傾位の裏削りである。	
1160	*	B - 11	①(8.0) ②(5.0)	明褐色	Q.P <sub>L</sub>		1160-軽明さに欠けるが、傾位、斜位及び傾位の刷毛などで調整である。	
1161	*	B - 15	①(7.5)	褐色	*		1161-軽明さに欠けるが、傾位及び斜位の刷毛などで調整である。	
1162	*	D - 16	①(7.0)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> H		1162-傾位、傾位の刷毛などで調整である。	
1163	*	E - 8	①(7.6) ②(5.6)	褐色	Q.P <sub>L</sub> M		1163-胎頭に調整後傾位、傾位の刷毛などで調整である。	
1164	*	E - 15	①(7.2)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> H		1164-磨滅しているが、斜位の刷毛などで調整である。	
1165	*	B - 11	①(8.2)	赤茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M		1165-磨滅や削落しており、調整痕は不明である。	
1166	*	B - 15	①(7.0) ②(4.0)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> H		1166-削落したり、一部に斜位の刷毛などで調整である。	
1167	*	C - 5	①(8.2)	明褐色	*		1167-磨滅や削落しており、一部に傾位、斜位、傾位の刷毛などで調整である。	
Fig 1168	*	D - 12	①(3.2) ②(2.2)	褐色	*		1168-傾位の裏削りで、指紋の付着を認める。	
150	1169	*	B - 16	①(3.6) ②(3.4)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> M		1169-磨滅や削落しており、調整痕は不明である。
1170	*	D - 18	①(4.4) ②(2.2)	褐色	*		1170-傾位及び傾位の刷毛などで調整である。	
1172	*	C - 2	①(6.0) ②(2.2)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> H		1172-軽明さに欠けているが、傾位、傾位の裏削りである。	
1177	*	C - 4	①(6.5) ②(3.4)	茶褐色	*		1177-傾位、斜位の刷毛などで調整である。	
1178	*	D - 5	①(7.8) ②(5.4)	褐色	*		1178-傾位、斜位、傾位の刷毛などで調整である。	
1179	*	E - 8	①(6.6) ②(4.8)	明褐色	*		1179-軽明さは欠けているが、斜位、傾位の刷毛などで調整である。底面、裏削りを認める。	
1180	*	B - 14	①(5.0) ②(2.5)	暗褐色	*		1180-軽明さに欠けるが、斜位の刷毛などで調整である。	
1181	*	B - 15	①(5.8) ②(2.6)	明褐色	*		1181,1182,1184-磨滅のため調整痕は不明で、1182は胎頭に調整痕が残る。	
1182	*	*	①(6.0) ②(4.0)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> H,M		1183-削落や磨滅しているが、傾位	
1183	*	E - 18	①(6.0) ②(3.0)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> H			

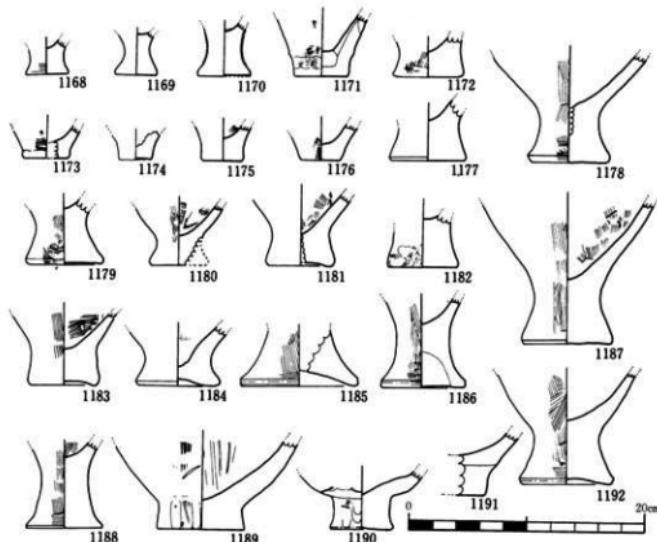


Fig. 150 王子遺跡出土土器実測図23

Fig.	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig.	II-4	底部	D-18	①(7.2) ②1.6	明茶褐色	Q.P.L.H		の刷毛なで調整である。
150	II-5	*	D-9	①(10.0)	黒褐色	Q.P.L.M		II-5-底位及び斜位の刷毛なで調整である。
	II-6	*	C-19	①(7.2) ②5.4	褐色	Q.P.L.H		II-6, II-9-横位、斜位及び底位の刷毛なで調整である。II-9は底の付着を認める。
	II-7	*	C-5	①(7.8) ②5.4	明褐色	*		II-7-輪郭に欠けるが、底位の刷毛なで調整ある。
	II-8	*	E-16	①(6.4) ②6.0	褐色	Q.P.L.M		II-8-横位及び底位の刷毛なで調整である。
	II-9	*	C-12	①(8.0) ②(5.4)	黒褐色	*		

#### ◎鉢形土器 (Fig. 150)

鉢形土器は、充実した脚台や小さい平底がある。これらの底部より外へ若干開きながら立ち上がる器形と外方へ大きく開きながら立ち上がる器形がある。以下土器一覧表で説明を加える。

Tab. 49 鉢形土器（底部）一覧表

注) 法量の単位cm ①底径②底厚

Fig 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 1171	底部	C-21	①(4.4) ②3.8	明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1171-小さい平底で、底部厚は若干厚く、外方に若干ひらいて立ちあがる器形とと思われる。	1171-内・外に表面に施剥調査痕が残り、それぞれ剥紋の跡を認める。
150 1173	*	C-2	①6.0 ②2.2	*	Q.P <sub>L</sub> H	1173-小破片であるが、底部の底部である。外方に開きながら立ちあがる器形である。	1173-機伐や斜位の刷毛なで調整である。内面に刷毛なで調整である。
1174	*	D-18		暗褐色	*	1174-外方に開きながら立ちあがる器形である。	1174-内・外ともに剥落や削減のため不規則である。1175, 1189, 1190-剥削や削減を認めるが、一部に滑溜な調査痕を残す。
1175	*	D-9	①3.8	*	*	1175-1176-平底の底部である。	1175, 1176-内面は鮮明さを欠くが、削毛で調整である。
1176	*	E-20	①(3.6) ②2.0	明茶褐色	*	1176-平底の底部で1189-人きいぐが、底部は頗る外方に立ちあがりながら開き器形である。1190-光美した底部で、底部の厚は厚く、外方へ大きなく開きながら立ちあがる器形である。	1176-内面は鮮明さを欠くが、斜位の削毛なで調整である。
1189	*	E-16	①16.4 ②6.0	褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1189-1190-褐色や削除を認めるが、滑溜な調査痕を認める。	1189, 1190-褐色や削除を認めるが、滑溜な調査痕を認める。
1190	*	E-3	①7.4 ②2.5	明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1190-内面に表面に施剥調査痕が残る。	1190-内面は鮮明さを欠くが、削毛で調整である。

## (a) 大型壺形土器 (Fig. 151)

大型壺形土器の底部は、平底で厚さの差異は認められるが、底部より外方へ大きく開きながら立ちあがる器形を呈するもの、外方へ開きながら立ちあがるものとがみられる。壺形土器の底部との共通性をもったために区別が困難なものもある。以下、一覧表で説明を加える。

Tab. 50 大型壺型土器（底部）一覧表

注) 法量の単位cm ①底径②底厚

Fig 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 1191	底部	E-10		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	外方へ大きく開きながら立ちあがると思われる器形で、平底の底部である。	1191-1195, 1197, 1201, 1201, 1204, 1205, 1208, 1209-内面は落や削減のため調整痕は不明である。
150 1193	*	D-26	②(1.8)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M,H	厚さの着目を認める。	1193-内面は若干あげ底気味の底部がある。
151 1194	*	D-18	①(6.4)	*	*	1194-若干あげ底気味の底部がある。	1194-1195, 1197, 1198-若干あげ底気味である。
1195	*	B-10	①(7.4)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1195-若干厚めの底部である。	1195-1196, 1200-1202-~1204, 1206-~1211-若干厚めの底部である。
1196	*	D-8	①5.8 ②2.8	赤茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1196-若干厚めの底部である。	1200-底の付着を認める。
1197	*	D-18	①7.0	明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1197-若干厚めの底部である。	1197-削除しているため調査痕は不明である。
1198	*	D-24	①7.4 ②2.0	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1198-外側は底盤のなで後剥離を認める。	1198-外側は底盤のなで後剥離を認める。
1199	*	E-18	①7.7 ②2.6	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M,H	1199-若干厚めの底部である。	1199-内面全体が削減し、調査痕は不明である。
1200	*	F-19	①6.4 ②2.5	明褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1200-若干厚めの底部である。	1200-内面全体が削減し、調査痕は不明である。
1201	*	D-25		褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1201-若干厚めの底部である。	1201-若干厚めの底部である。
1202	*	B-22	②3.0	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M,R	1202-若干厚めの底部である。	1202-若干厚めの底部である。
1203	*	B-17	①6.5 ②2.6	灰褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1203-若干厚めの底部である。	1203-若干厚めの底部である。
1204	*	F-19	①7.2 ②(2.2)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1204-若干厚めの底部である。	1204-若干厚めの底部である。
1205	*	B-15	①7.0 ②1.7	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1205-若干厚めの底部である。	1205-若干厚めの底部である。
1206	*	B-7		*	Q.P <sub>L</sub> M	1206-若干厚めの底部である。	1206-若干厚めの底部である。
1207	*	C-6	①(8.8) ②2.5	黄茶褐色	Q.P <sub>L</sub>	1207-若干厚めの底部である。	1207-若干厚めの底部である。

Figs 番号	器部 部位	出土区 出土地	法量 寸法	色調 色	胎土 胎土	形態の特徴 特徴	手法の特徴 特徴
F14 151	底部 底部	D - 8	①5.8 ②3.2	明茶褐色 茶褐色	Q.P1.H Q.P1.M		
1288	*	E - 17	①7.3 ②1.5	茶褐色	Q.P1.M		
1289	*	A - 7	①9.0 ②2.2	茶褐色	*		
1290	*	B - 11	②(3.0)	*	Q.P1.H		

### ⑤ 壺形土器 (Fig. 151~153)

壺形土器の底部は、平底で厚さの差異を認め、中には丸味を帯びた平底もある。底部よりの立ち上がりは、大型壺形土器の底部との共通も一部あり、壺の底部とした中には、大型壺の底部の可能性の強いものもある。なお、底面は若干凹むものや木の葉の圧痕を認めるものもある。以下、一覧表で説明を加える。

Tab. 51 壺形土器（底部）一覧表

注) 法量の単位cm ①底径②底厚

Figs 番号	器部 部位	出土区 出土地	法量 寸法	色調 色	胎土 胎土	形態の特徴 特徴	手法の特徴 特徴
F14 151	底部 底部	D - 8	①8.0 ②3.6	褐色	Q.P1.H	外方へ大きく開きながら立ち上がるものと外方へ開きながら立ち上がる器形がある。厚さの差異を認めると、壺の底部とし、立上がりの強さが認められる。	1213-外側は削減し、縦位及び斜位。内面は斜位のなで調整である。 1215-内、外側ともに削減して不明である。
F14 152	*	D - 18	①5.4 ②1.3	*	Q.P1.M		1213-内、外側ともに削減して不明である。
1222	*	E - 8	①6.2 ②2.2	明茶褐色	Q.P1.M	1212-1214、1217、1221～1223、1241～1243、1246、1352-厚さの差異があるが、底面は若干凹むものもある。	1214-外側は削位、横位のなで調整である。内面は削薄して不明である。 1215-内、外側ともに削減して調査痕は不明である。
1223	*	E - 8	①7.7 ②2.9	明茶褐色	Q.P1.M	1227-1237、1243、1246、1352-厚さの差異があるが、底面は若干凹むものもある。	1216-外側は削位、斜位。底面には指紋の付着を認め、また植物の繊維状の痕跡もみられる。
1224	*	C - 25	①7.3 ②2.3	茶褐色	Q.P1.M	1228-1230、1232～1234、1236、1239～1240、1244、1246～1251、1253～1258-厚さの差異があるが、底面は若干凹むものもある。	1217-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。
1225	*	E - 19	①(6.0)	*	Q.P1.H	1215、1218、1219、1222、1225、1226、1227-厚さの差異はあるが、外方へ開きながら立ち上がる器形である。	1218-外側は削位のなで、指頭圧痕の痕跡もみられる。
1226	*	E - 8	①5.6 ②1.8	明茶褐色	Q.P1.M	1229-1231、1233、1235、1237～1239-厚さの差異があるが、底面より外方へ開きながら立ち上がる器形であると思われる。	1219-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。
1227	*	D - 18	①(5.7) ②1.1	明褐色	Q.P1.M	1240-1244、1246～1251、1253～1258-厚さの差異はあるが、底面より立ち上がる開きながら立ち上がる器形である。	1220-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。
1228	*	A - 7	①(6.0) ②2.0	暗褐色	Q.P1.H	1250-1254、1256-厚手の底部である。	1221-外側は削位のなで、一部指頭の付着を認められる。
1229	*	B - 18	①(5.3) ②(3.8)	明茶褐色	Q.P1.H	1255-1257-厚手の平底である。1233-ごく薄い平底である。	1222-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。
1230	*	E - 18	①(7.4) ②1.7	黃褐色	Q.P1.H	1258-1261、1218、1219、1221、1233、1234、1236～1239-厚手の底部である。	1223-外側は削位のなで、一部指頭の付着を認められる。
1231	*	B - 16	②(1.3)	暗褐色	Q.P1.H	1262-1264、1266～1269-厚手の底部である。	1224-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。
1232	*	B - 12	①(5.8) ②(3.4)	明褐色	Q.P1.H	1270-1274、1276-厚手の底部である。	1225-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。
1233	*	E - 4	①6.4 ②1.5	*	*	1275-1277、1217、1221、1224～1226-これらの厚さをもつ底部で、壺形土器の底部の可能性を考慮する。	1226-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。
1234	*	C - 25	②(2.0)	赤茶褐色	Q.P1.H	1278-1280、1282-厚手の底部である。	1227-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。
1235	*	C - 8	①6.1 ②1.4	茶褐色	Q.P1.H	1281-1283、1285-厚手の底部である。	1228-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。
1236	*	B - 10	②(2.3)	明褐色	Q.P1.H	1284-1286、1288-厚手の底部である。	1229-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。
1237	*	B - 14	①(7.2) ②1.9	茶褐色	Q.P1.H	1287-1289、1291-厚手の底部である。	1230-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。
1238	*	C - 15	①(8.6) ②1.6	明茶褐色	Q.P1.H	1292-1294、1296-厚手の底部である。	1231-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。
1239	*	E - 8	①3.0 ②2.0	褐色	Q.P1.H	1295-1297、1299-厚手の木の葉の圧痕を認める。	1232-外側は削位のなで、内面は削減し削痕は不明である。

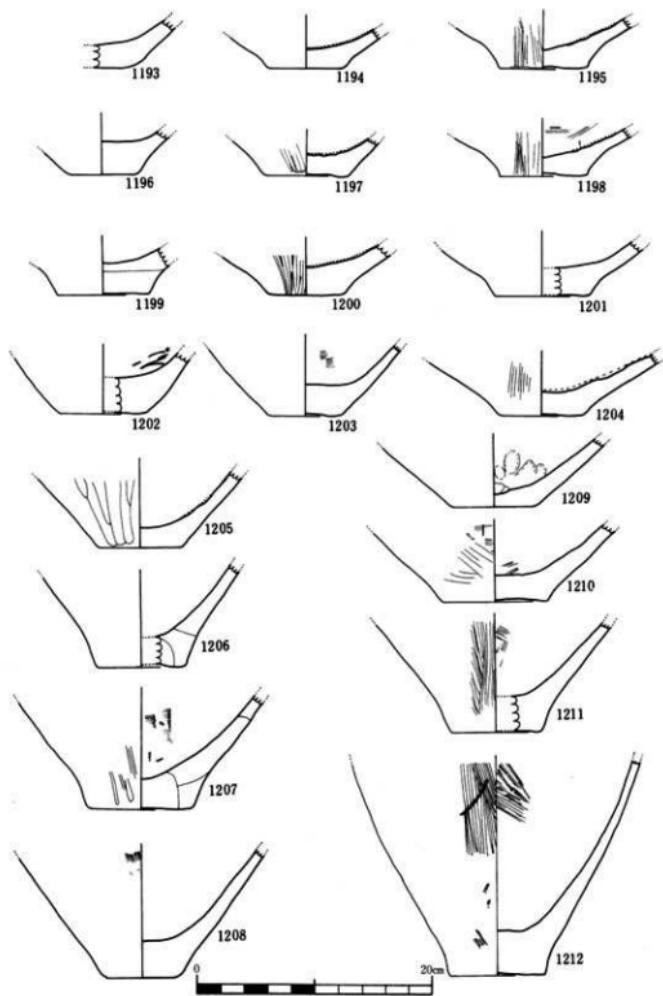


Fig. 151 王子遺跡出土土器実測図24

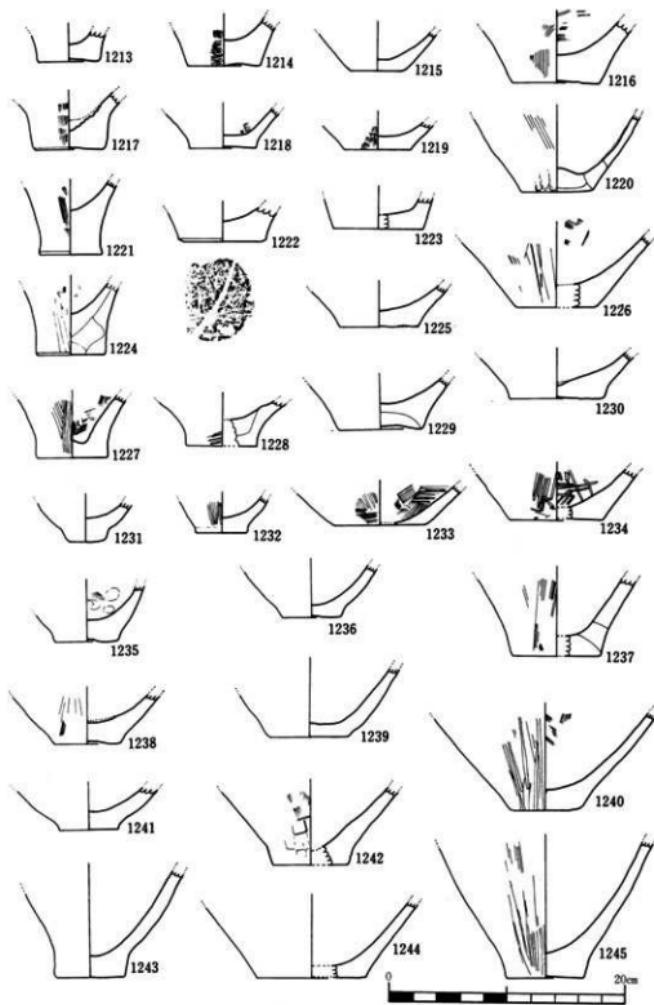


Fig. 152 王子遺跡出土土器実測図25

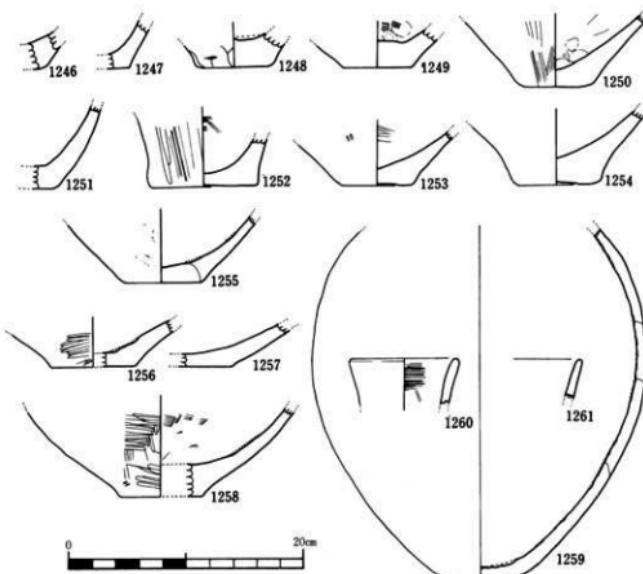


Fig. 153 王子遺跡出土土器実測図26

品番 器物 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	動 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
152	底部	B-15	①4.8 ②1.3	黒褐色	Q.	めら。	1229～1231・内・外面とも不明である。
	*	D-8	②(0.3)	褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1231-底面付近には、指頭圧調整痕を残す。	
	*	B-5	②(1.0)	基基褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1232-外面は継位の刷毛なで、継位の範囲も認める。	
	*	D-8	①5.4 ②1.9	明褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1233-外面は斜位のなで、内面は横位か斜位のなで調整である。	
	*	F-15	①(5.2) ②1.1	*	Q.P <sub>L</sub> H	1234-内・外面ともに削毛などで調整で、一部に磨耗しがみられる。	
	*	D-5	②(1.7)	基基褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1235～1237-内・外面ともに磨滅し、調整痕は不明である。1235-指頭圧調整痕が残存し、斜位のなで調整である。	
	*	C-25	①5.6	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M,H		
	*	D-16	①6.6 ②1.1	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1237-外面は継位のなで調整で、内	

Fig 番号	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 満	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig	1240	底部	F - 28	①(6.0) ②(1.7)	褐茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H		外側に指頭圧調整痕を残す。
152	1241	*	B - 15	①6.0 ②1.5	褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1239-外側は縦位のなで調整で、内側は剥落して不明である。	
	1242	*	B - 12		明褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1239-内・外側は削減及び剥落のため不明である。	
	1243	*	B - 15	①6.1 ②1.8	黄褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1240-外側は縦位の刷毛などで、内側は部分的に斜位の刷毛などで調整である。	
	1244	*	A - 7		茶茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1241～1244-内・外ともに削減が見しく、調整痕は不明である。	
	1245	*	D - 20		褐茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1245-外側は斜位なので一部に削減を認め、内側は不明である。	
Fig	1246	*	D - 19		茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1246-外側は削減し不明である。内側は指頭圧調整後刷毛などで調整である。	
153	1247	*	B - 8		明褐色	Q.P <sub>L</sub>	1247-外側は横位及び斜位のなで、内側は指頭圧調整後横位のなで調整で、指紋の付着を認める。	
	1248	*	B - 8	①6.6	黒褐色	Q.P <sub>L</sub> H,H	1248-内・外側は削減し、不明である。	
	1249	*	F - 10	①5.9 ②2.3	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1249-外側は削減や剥落のため不明であり、内側は指頭圧調整痕を残す。	
	1250	*	B - 15	①6.0 ②1.4	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> M	指紋の付着を認め。	
	1251	*	D - 7	②(1.9)	褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1250-外側は削減や削落しているが、斜位の刷毛などで、内側は指頭圧調整後刷毛などで調整である。	
	1252	*	D - 8	①6.2 ③1.0	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	1251-外側は削減し不明である。内側は指頭圧調整痕を残す。1252-内・外側は削減や削落しているが、斜位	
	1253	*	D - 9	①6.0 ②1.3	明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1253-内側は削減して、不明である。	
	1254	*	D - 21	②7.2 ③2.1	*	Q.P <sub>L</sub> M	1254-外側は削減して、不明である。	
	1255	*	D - 16	①6.4 ②1.3	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1255-外側は縦位の先端まで、内側の刷毛などで、内側は不明である。	
	1256	*	B - 15	②(1.2)	黑茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1256-内側は削減し、縦位、斜位の1257-外側は縦位のなで調整で、内側を削減して、不明である。	
	1257	*	E - 13	②(1.1)	赤茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1257-外側は削減して、不明である。	
	1258	*	E - 18	③(2.7)	灰褐色	Q.P <sub>L</sub> M	1258-外側は削減して、内側を削減して、斜位のなで調整である。	

5. 蓋形土器及びその他の土器 (Fig. 154)

蓋形土器には、つまみ部の基端面が凹んで、凹線状を呈するもの、丸味の帯びるもの、平底状のもの、あげ底ふうにつくられたものがある。つまみ部付近はくびれ、そりを認めるものやくびれず直線的に広がり、口縁部を作るものもある。口縁部端面上位には、貼付突帯を廻らし、周辺部は煤の付着を認める。その他の土器には、高环形土器や手捏ね土器などがある。なお、この項で成川式土器3点についても説明を加えた。以下、土器一覧表で説明を加える。

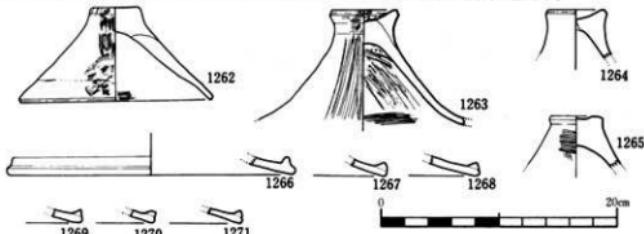


Fig. 154 王子遺跡出土土器実測図27

Tab. 52 薩形土器及びその他の土器一覽表

法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 複原径⑤つまみ部

図 番 号	物 語 部	器 部	出 土 区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	
								内 部	外 部
154	つまみ部	B-19	①⑥(16.5 ④4.2)	墨系褐色	Q,P,L,M	1262-1271-墨彩土器である。1262- 定形で、つまみ部は平底状のもの。 墨系で口縁部の広さには見られる い。口部は凹む。1263-1265-つま み部は上部を丸くうねらせる。 1266-1268-円筒形で、口縁部は 丸く張り出る。1269-1271-口部 は丸く張り出る。	1262-1271-墨彩土器である。1262- 定形で、つまみ部は平底状のもの。 墨系で口縁部の広さには見られる い。口部は凹む。1263-1265-つま み部は上部を丸くうねらせる。 1266-1268-円筒形で、口縁部は 丸く張り出る。1269-1271-口部 は丸く張り出る。	1262-朝毛なで調整を認める。内 部削りに薄く。1263-内・外部 ともに削りを認める。調査は不明で ある。1264-削減しているため調査 は不明である。焼成はよくない。胎 土が粗粒で黒褐色である。	
	完形	B-8	⑥(5.8)	暗褐色	Q,P,L			1265-斜めの削毛をでて調整する。 1266-斜めの削毛をでて調整する。 1267-斜めの削毛をでて調整する。	
	つまみ部	D-18	⑥(5.2)	茶褐色	Q,P,L,M			1268-斜めの削毛をでて調整する。 1269-丸く張り出る。1270-1271-口 部は丸く張り出る。	
	*	C-23	⑥(4.4)	墨系褐色	Q,P,L			1269-斜めの削毛をでて調整する。	
	口縁部	D-20	①(24.5)	明褐色	Q,P,L			1270-1271-口部は丸く張り出る。 1272-斜めの削毛をでて調整する。	
	*	B-19		墨系褐色	Q,P,L,H,M			1272-斜めの削毛をでて調整する。	
	*	E-19		黄褐色	*			1267-外側は垂直の削毛なで、内側 は斜めなで削毛である。1268-内 部の削毛をでて調整する。	
990	高环 环部	C-17		灰褐色	Q,P,L,H			1269-1271-口部は丸く張り出る。 1270-斜めの削毛をでて調整する。 1271-斜めの削毛をでて調整する。 1272-斜めの削毛をでて調整する。	
	底部	C-4		茶褐色	Q,P,L,M			1273-外側は垂直の削毛なで、内側 は斜めなで削毛である。	
	口縁部	E-7		黄褐色	Q,P,L	1299-1301-成川式土器の口縁部破片 及び其の底部から胴部にかけての 部位である。		1274-外側は垂直の削毛なで、内側 は斜めなで削毛である。	
	*	B-5		墨系褐色	Q,P,L	1302-1304-成川式土器の口縁部破片 及び其の底部から胴部にかけての 部位である。		1275-外側は垂直の削毛なで、内側 は斜めなで削毛である。	
	手捏 柄部-底部	B-7		褐色	Q,P,L,H			1276-1281-内・外側は削毛して削 除する。削除は内側の削毛が多 い。	
1076	*	A-7		暗褐色	Q,P,L,M			1282-内・外側とともに削減して いる。削除は内側の削毛が多 い。	
	伞形	D-17		明褐色	*			1283-内・外側とともに削減して いる。削除は内側の削毛が多 い。	

### b 移入土器 (Fig. 137, 144, 155, Pl. 35)

移入土器には、北部九州系、東九州系、瀬戸内系のものを見る。これらの土器には、壺形土器、壺形土器、高环形土器などがあり、壺形土器は、東九州系のもので下条式系の口縁部が検出された。壺形土器には、四線文をもつもの（四線文をもつものは、壺形土器として復元したが、細片のため壺形土器になる可能性も考えられる。）や矢羽根透しをもつ高环形土器などが検出された。

また、一部については、Fig. 140, 147に掲載し、説明を加えた。以下、土器一覧表で説明を加える。

Tab. 53 移入土器—實害

計量の単位= ①口径②器高③腹部量士径④底径 ( ) 頭頂径

図 番 号	遺 物 番 号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態	特 徴	手 法 の 特 徴
Fig	1272	口縁部	C-2		暗茶褐色	Q.P.	1272.1273.230.1274.606.1275-1 墨文字も二つ前の凹縫部にある。糸かい 口縫部が大きく外反し、口縫部端面が 肥厚強漏され、その肥厚部に三条 及び二条の凹縫文を施している。	1272-内・外面ともに横匂のな いのである。	
155	1273	+	C-9		明褐色	Q.P.	1274-内・外面ともに横匂のな いのである。		
	1274	+	B-11		明茶褐色	Q.P.		1274-内・外面ともに横匂のな いのである。	

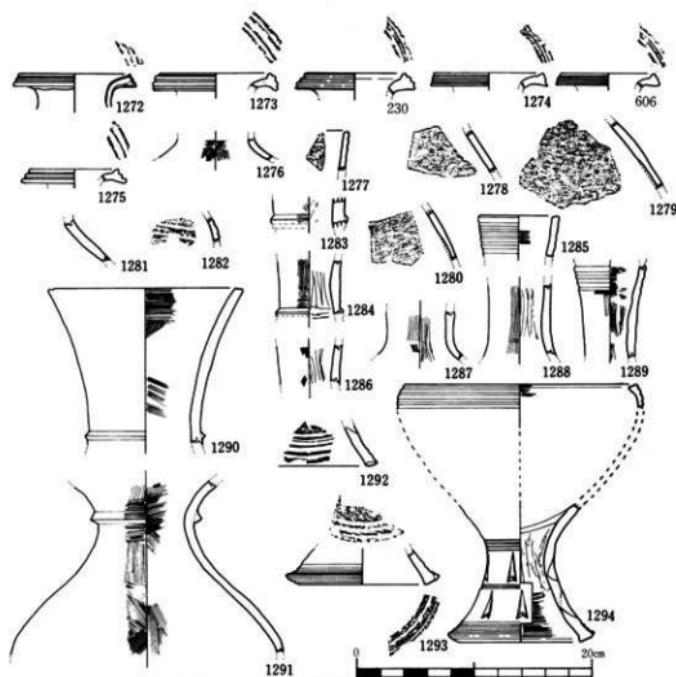


Fig. 155 王子遺跡出土土器実測図28

品番 測定番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig. 155 1275	*	B - 9		*	Q.P.	1278~1280- 省の脛部付近と思われる。 小破片のため全容は不明であるが、一列ないし二列の列点文が見られる。	調査である。
1276	肩 部	B - 10		*	Q.R.M	1277, 1285, 1289- 長縦造の口縁部、腹部、肩部付近の脛部と思われる。	1275-外側は横位及び縦位のなで、内面は横位のなで調査である。
1277	口縁部	D - 23		褐色	Q.P.	1277, 1285, 1289- 口縁部から脛部にかけての器部で、口縁部外側腹下に二重及び五重の列点文を施らしている。	1276-外側は横位及び縦位のなで調査である。
1278	肩 部	A - 7		明褐色	Q.P.	1277, 1285, 1289- 口縁部から脛部にかけての器部で、口縁部外側腹下に二重及び五重の列点文を施らしている。	1277-外側は横位及び縦位のなで後退書き、内面は縦位及び斜位のなで調査である。
1279	*	E - 8		*	Q.P.	1283, 1286~1288- 腹部及び脛部付近の器部と思われる。(1283, 1284- 腹部下半付近に一条の断面三角形點付突)	1278-外側は斜位のなで、内面は斜書きしており不明である。
1280	*	B - 10		明茶褐色	Q.P.	1283, 1286~1288- 腹部及び脛部付近の器部と思われる。(1283, 1284- 腹部下半付近に一条の断面三角形點付突)	1279-外側は斜位のなで、内面は斜書きしており不明である。

Fig 号	遺物 分類	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 121	*	E - 20			明茶褐色	Q.P.L	帶を施している。1282-小被部のため形状は不明であるが、側部付近と思われ、現在で三条の凹線文を施らし、凹線文の上位には、施工工具による削刮跡が残る。1283-側部下手でしまり、直線的に外反し口縁部を作り、口縁部は凹む。頭部下半に面三角形貼付突帯を施す。	溝しており不明である。 1280-外側は横位及び縦位のなで、内側は剥落しており不明である。 1281-外側・横位・縦位の削除的な削毛などで調整はある。 1282-内・外側ともに横位の薄いなで調整である。
155	I282	胴部	D - 25		褐色	Q.P.L		1283-削除しているが部分的に横位、縦位の削毛などで調整を認める。
I283	頭部	C - 17			明茶褐色	Q.P.L		1284-外側・縦位及び横位の削毛などで、内側はしづきを認める。
I284	*	B - 9			褐色	Q.P.L		1285-内・外側ともに横位の削毛などで調整である。
I285	口縁部	D - 20			明茶褐色	Q.P.L,M	1286-頭部から頭部下半にかけての器部である。頭部下部に一巻の断面三角形貼付突帯を施している。	1286-削除しているが部分的に横位、縦位の削毛で調整を認める。
I286	頭部	D - 19			茶褐色	Q.P.L	1287-1292-1294-高6形土器である。角形貼付突帯を施している。	1287-外側は削除し、部分的に斜位のなで、内側はしづきを認める。
I287	*	C - 19			明茶褐色	Q.P.L	1288-1293-脚部で、下部は解開巻になっている。1292-脚外側には四条の沈線文を施すし、裏片ではさきりしないが、尖羽状紋の透しがあり込込まれている。1293-脚端部には二条、脚外側には三条の凹線文を施らしている。	1288-外側は薄く、部分的に斜位のなで、内側はしづきを認める。
I288	*	C - 27			明茶褐色	Q.P.L,M	1294-脚部の口縁付近と脚部である。口縁は大きいく内外した形状をするものと思われる。口縁部から腹部にかけて、四条の凹線文が施され、脚部は内側に接する所に四条の細い縫があり、中ほど矢羽根通し窓には、二条の細い縫を有し、脚部外側に三条の細い縫を施らしている。中ほど	1289-外側・横位は削減し、部分的に斜位のなで、内側はしづきを認める。
I289	頭部	E - 21			黒茶褐色	Q.P.L,M	の沈線ははさんで尖羽根透しが施されている。口縁部は粘土片のため、口縁部の性質等複元形に若干の差異も考えられる。	1290-外側は不明で、内側は横位及び斜位の削毛などである。
I290	口縁部-脚部	E - 18			暗茶褐色	Q.P.L		1291-内・外側ともに削減や剥落を認めるが、外側は横位、斜位、縦位のなで、内側は縦位及び斜位のなで調整である。1292-削毛などで調整を認める。
I291	頭部-肩部	D - 25			明茶褐色	Q.P.L		1293-削毛や削減のため調整痕は不明である。
I292	脚部	B - 16			暗茶褐色	Q.P.L		1294-剥落して不明で、内側にしづきを認める。口縁部内側は横位のなで調整である。
I293	*	E - 8			明茶褐色	Q.P.L		
I294	*	E - 28	D - 26		明茶褐色	Q.P.L		

## 第2節 遺物出土状況及び出土遺物について

本遺跡の遺物包含層は、Ⅱ層である。Ⅱ層はⅡa・Ⅱb・Ⅱc層とに3分層され、Ⅱb層は部分的にみられる。Ⅱa層は黒色土で軟質気味、Ⅱb層は黒色土に、多くの黄褐色土を含み砂壟状を呈し、Ⅱc層は暗黒色で硬質である。このⅡ層は分析の結果、開闢岳降下火山灰層と呼称され、黒ニガ、黒ボクとも呼ばれ、微粒である。Ⅱc層よりは遺物の出土は認められず、Ⅱc層上面が当時の生活面と類堆される。

遺物の出土状態は、Ⅱa・Ⅱb層にみられ、ともに細片が多く、一面に土器破片が散布されたような状態で出土し、集中した箇所もみられた。

出土遺物は、Ⅱa・Ⅱb層中のものは、平板実測及び平面実測で取り上げた。細片及び擾乱層中からの出土遺物は、各区ごとに一括して取り上げた。平板実測では、口縁部・胴部・底部・石器、土製品などの部位の判明するものについて取り扱った。

遺物包含層中の遺物は、住居跡内出土遺物と同様に、破片が多く、集中的にみられる以外の接合は困難である。特に、集中の度合いが大きい調査区は、D-E-8区、A-B-7・8区、B-C-9・10区、B-C-15-18区、C-D-24-25区である。これらの出土区の中でD-E-8区、B-C-15区は密度が高く集中していた。大型彫形土器は、B-C-4・5区、E-8区、D-15・16区、C-18・20・21区、C-18区、C-D-20・21・23・24区に大きい破片が散らばった状態で出土し、個体数は多くはない。西区台地縁辺付近などについては、工作物（建物・道路敷など）、花木の植樹、遺物包含層が薄い所を含めて、擾乱や土地造成による削平のために、遺物の出土量は少ない。

出土遺物には、彫形土器、大型彫形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、手捏ね形土器などや磨製石鎌、打製石鎌、砥石、石錐、石斧、凹石、樹皮布叩石、石錐、研磨のみられる標、土製勾玉、刀子、鉄滓などが出土した。

彫形土器は、住居跡内埋土中から出土の土器と同様で、完形品は678、679、831、833の4点で、充実した脚台のみ欠損しているものは699、702、726、808がみられた。他の遺物は口縁部破片や底部が多くみられるが、中には口縁部から胴部下位までのものや、移入土器と思われる口縁部破片がみられた。670-684、686、687-693、697、698、701、722、727、728、730、731、741-743は口縁部の形状が内湾気味のものから大きく内湾するものである。685、687、694-696、699、726、729、732-735、737-740は直口もしくは直口気味の口縁部である。702、806-809、811、812、813、826は口縁部が外傾するものである。814-821、824は移入土器と思われ、817、818、821、824は下条式系の土器口縁部である。これら以外の土器は口縁部破片である。Fig. 149-150の中で、1079-1117、1172、1177-1188、1192は充実した脚台である。1185はあげ底気味で、1180、1184はこれまでの山ノ口式土器にはみられないタイプである。これらの中には鉢形土器及び手捏ね形の底部を思わせるようなものもみられた。

壺形土器は、変形土器同様、住居内埋土中から出土の土器と同様で、完形品は970の1点で、大半が口縁部と底部破片である。Fig. 141～144の885～895については、頸部より直線的に立ち上がりながらわずかに外反する口縁部で、口径が小さく892, 896は口径が大きい。897～932は口縁部破片で、901～904は口径が小さい。911, 918, 919, 923～928は口縁部内側に、断面三角形貼付突帯を廻らし、926～929, 933は口径が大きい。920～923, 925, 929, 933は瀬戸内系か東九州系の影響を受けている。934～964は口縁部が二叉状を呈する。934～937, 947, 951は頸部上位より直線的に立ち上がりながら、わずかに外反する口縁部である。938～946, 948～950, 952～963は口縁部破片である。942は口唇部と突帯間に範状による列点文がみられる。951は北九州系の影響がみられ、958, 959, 964は内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。960～964は口径が大きい。966～970は大きく外反する口縁部で、967～970, 975は口唇部は凹む。971～974, 978～1000は頸部から胴部にかけての部位で、974, 1000は北九州の影響を受けている。975～982, 984～989は在地にみられないタイプが考えられる。975, 976は丹塗り土器で、977は暗文が施される。991～993は範状工具による鋸歯文が施され、992は魚形線刻、994～997は円形浮文がみられ、東九州系の影響を受けている。Fig. 151～153の1212～1258は平底の底部で、中には大型壺形土器の可能性をも考える。Fig. 155の1272～1273, 1274～1276, 1278～1281は瀬戸内系の凹線文をもつ口縁部及び肩部の部位である。しかし、1272, 1273, 230, 1274, 606, 1275は、壺の可能性も考えられる。1282も瀬戸内系の可能性が考えられる。1277, 1283～1289, 1290は長頭柵の口縁部から肩部にかけての部位で瀬戸内系の影響が認められる。1289は高环の可能性も考えられる。1277, 1285は凹線文を廻らしている。

大型壺形土器は、住居跡内埋土中からの出土は小破片のみで、その形状は知り得ない。Tab. 45のとおりで、口縁部の形状が内湾するものと大きく内湾するものがある。底部は、Tab. 50のとおりである。これらの土器は居住環境から水壺の用途が考えられる。

鉢形土器は住居跡内埋土中から出土のものと同様で、完形は1069, 1075である。口縁部の形状は、Tab. 47のとおりで、底部は Tab. 49に示した。1013～1015, 1017, 1019～1022は鉢形土器の範疇に入れたが、変形土器の可能性も強いものと考えられる。1072～1075はこれまでの山ノ口式土器にはみられなかったタイプで二か所に耳状突起が施されている。Fig. 149の1171, 1173～1176, 1189, 1190は、平底及び充実した脚台で、Fig. 152の1221, 1224, 1227は鉢の可能性が考えられ、充実した脚台である。

これらの土器のほか、高環形土器、蓋形土器などがみられる。高環形土器は、Fig. 144の990と Fig. 155の1292～1294であり、990は环部で、1292～1294は矢羽根透しをもつ瀬戸内系のもので、1289は高环の脚部の可能性が強い。蓋形土器は、Fig. 154の1262～1271で、1262は完形である。1263は口縁部が欠損し、1264, 1265はつまみ部である。1266～1271は、口縁部で外側に突帯を廻らし、煤の付着もみられるものもある。その他の土器に手捏ね土器がある。手捏ね土器は、Tab. 52で説明を加えた。

石器及び土製品、鉄製品及び鍛冶済について、第3・4・5節で説明を加える。

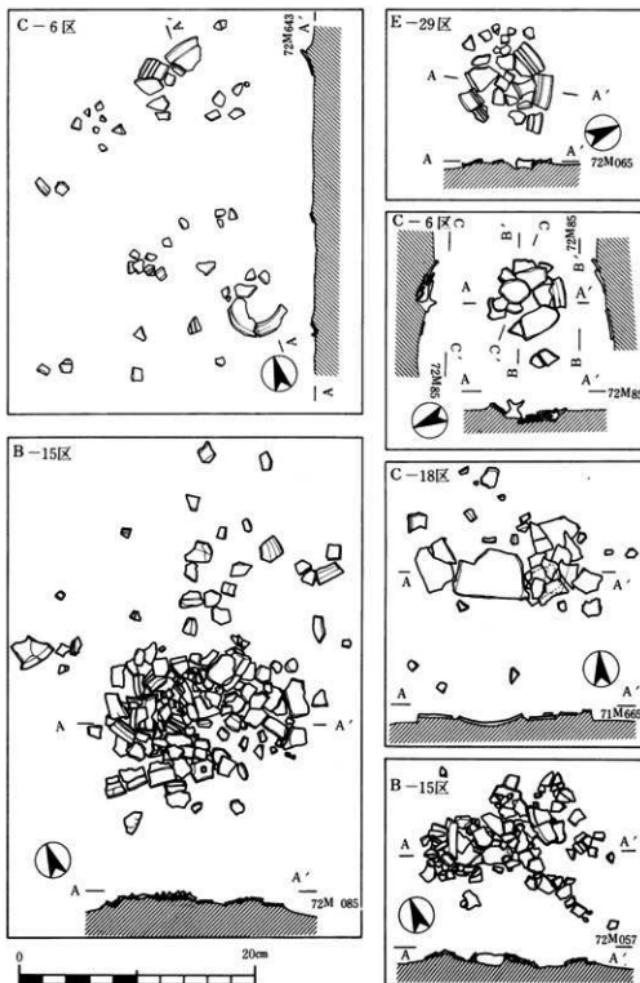


Fig. 156 王子遺跡遺物出土状態 (1)

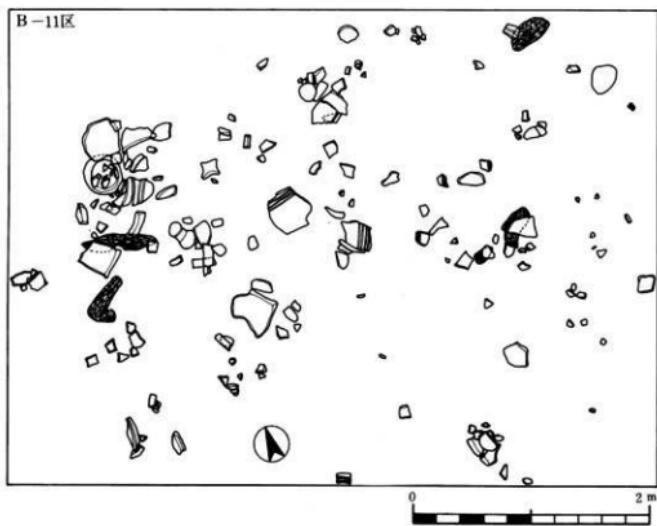
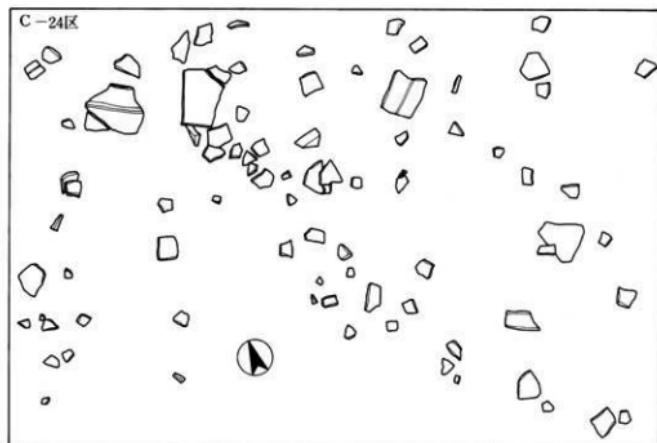


Fig. 157 王子遺跡遺物出土状態 (2)

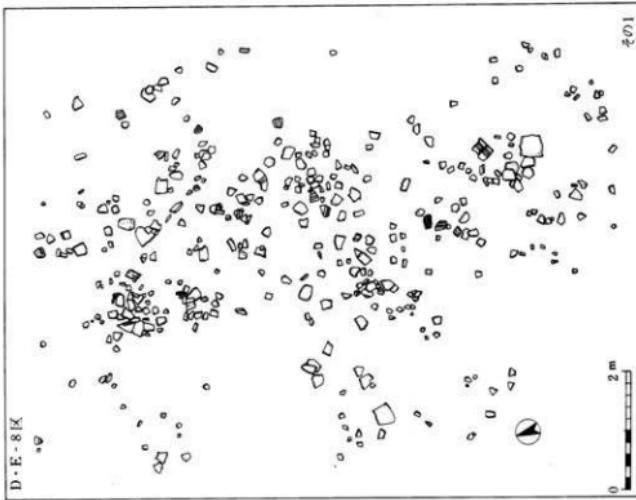
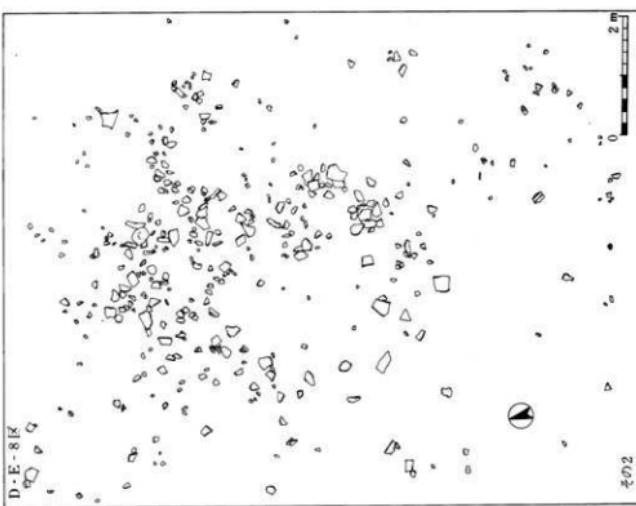


Fig. 158 王子墓跡遺物出土狀態 (3)

### 第3節 石器 (Fig. 159~161, PL. 35~37)

王子遺跡の出土の石器は、住居跡・掘立柱建物跡（土塀をもつもの）、土塀などの床面や埋土中にもみられた。これらの遺構以外のⅡ層遺物包層中より磨製石器（未製品を含む）、打製石器、砥石、石錐、石錘、凹石、樹皮布叩石などが出土した。

#### 1. 磨製石器 (Fig. 159, PL. 35, 37)

本遺跡での磨製石器の出土総数は、44点で、Ⅱ層遺物包層中よりは10点である。頁岩・千枚岩・フォルンフェルスを石器の素材とし用いた磨製石器で、未製品を含んでいる。1295~1300は扁平無茎で、1298以外はすべて茎部に抉りを認める。石器は製作途中のものや破損品の一部を除いて、鎌が両面ともにはっきりと認められ、先端部付近から両側辺部寄りから基部まで統一している。1295は長身錐である。1298, 1300は先端部及び茎部に欠損を認める。1299は正三角形状に近い形状で、他の石器については、1295~1297は先端部がわずかに欠損し、1298は両側辺部が多く欠け、1298, 1300は先端部及び両端部に欠損を認め、使用による欠損の可能性が強い。1295~1300については研磨を認め、研磨痕が観察される。1301~1304は製作途中のものと思われ、自然面や剥離痕を残している。

#### 2. 打製石器 (Fig. 117, 159, PL. 35)

打製石器は総数4点出土した。掘立柱建物跡の土塀内埋土上位付近より1点出土している。Ⅱb層遺物包層より、1305, 1306の2点が出土した。1307は14号掘立柱建物跡の土塀内の埋土上位に認めた。1305は黒曜石を、1306はチャートを、1307はフォルンフェルスを石器の素材として用いた石器である。1305は五角形状、1306, 1307は二等辺三角形状を呈し、ともに基部に抉りを認め、両面ともに交互剥離により調整されている。

#### 3. 砥石 (Fig. 160, PL. 36)

砥石は総数13点が出土した。Ⅱ層遺物包層中よりは8点である。主に砂岩を石器の素材として用い、1312は頁岩で、1313はフォルンフェルスである。1311は細粒砂岩で、他は粗粒気味の砂岩である。1310, 1313, 1315は手持ち用砥石か、1312は研磨器と思われる。他は置き砥石と思われる。1312と1314は仕上げ用砥石であろう。1303, 1309は中央面がよく使用されたもので、1311は石材がもろく三分割していた。1310は板状の石材を用い、凹状に割り切り、分割し砥石を作り出している。砥石の製作過程を知る痕跡を残す。1312~1314は研磨痕を顕著に認める。

#### 4. 石錐 (Fig. 160, PL. 36)

1316は石錐で、シルト岩を石器の素材として用い、頂部と片側縁中央部から先端にかけて、欠損しているが、先端部には使用によるドリル痕らしい痕跡を顕著に認める。器面全体には磨面を認め、一部に研磨痕が観察できる。

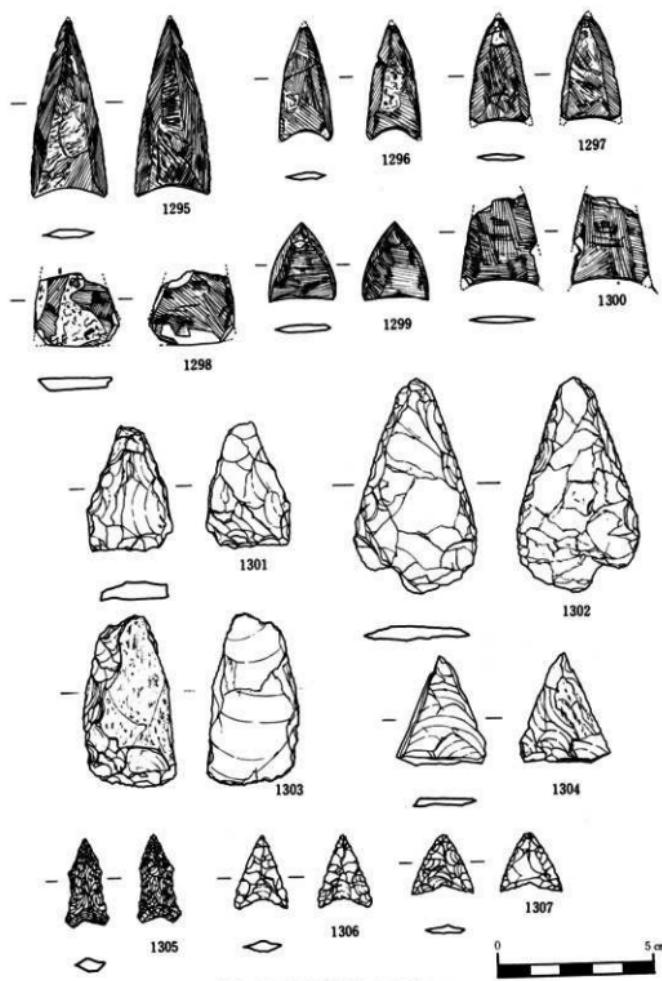


Fig. 159 王子遺跡出土土器実測図(1)

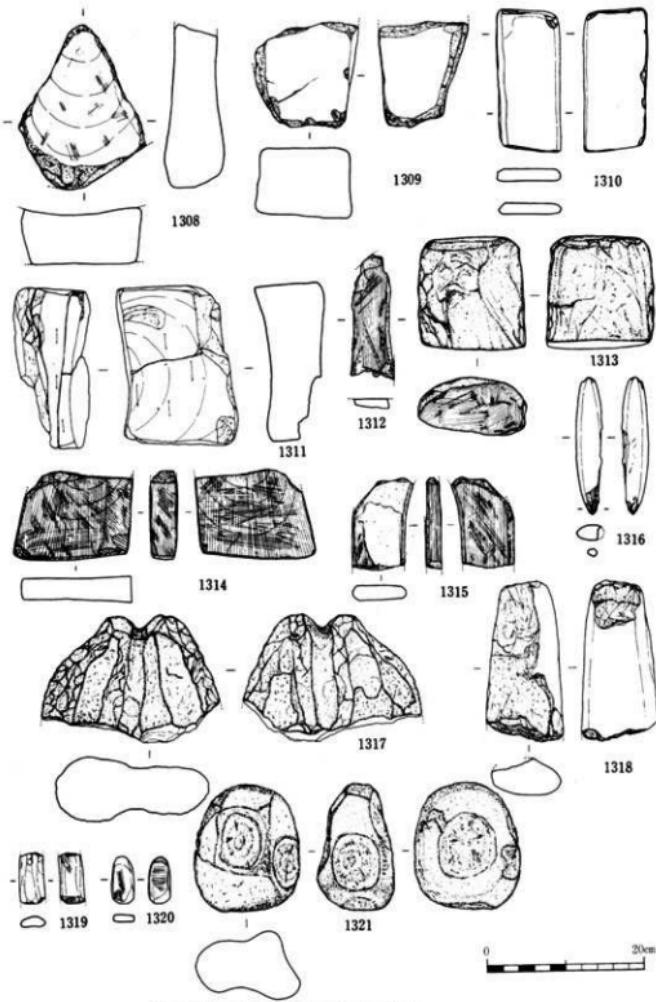


Fig. 160 王子遺跡出土石器実測図(2)

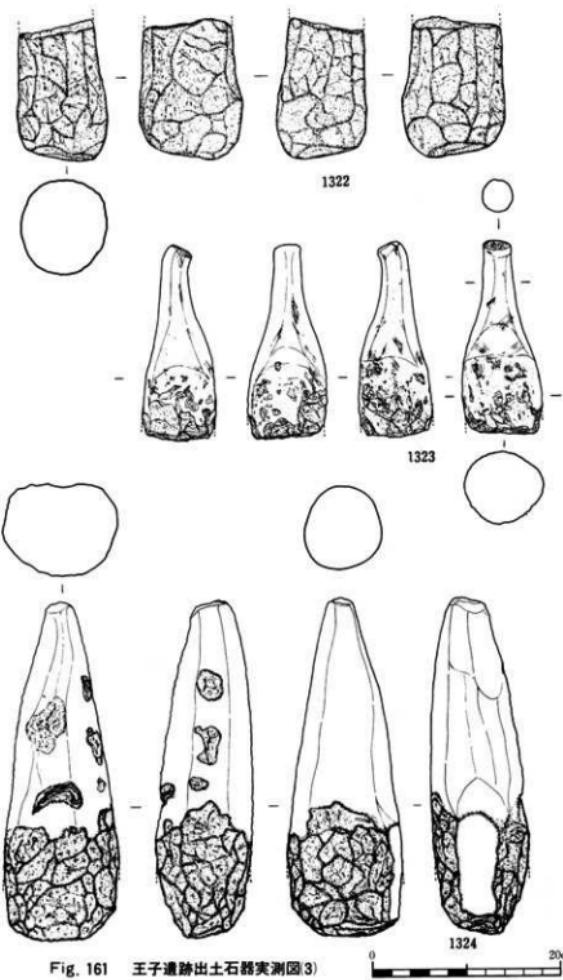


Fig. 161 王子遺跡出土石器実測図(3)

Tab. 54 王子遺跡出土石器一覧表

わざかな欠損、法量cm

遺物番号	器種	出土区	完 欠	最大長	最大幅	厚さ	重さ	石材	備考
1295	磨製石鎌	D-17	○	5.6	2.45	0.3	3.2	頁岩	
1296	タ	D-17		3.1	1.75	0.25	1.8	タ	
1297	タ	D-14		3.35	1.9	0.2	2.1	フォルフェルス	
1298	タ	C-12	○	2.3	2.6	0.4	3.3	タ	
1299	タ	B-15	○	2.5	2.2	0.5	1.5	頁岩	
1300	タ	E-23	○	2.9	2.5	0.2	2.3	千枚岩	
1301	タ	B-8		4.0	2.7	0.6	7.2	フォルフェルス	未完成品
1302	タ	F-24		6.9	3.9	0.5	14.1	頁岩	タ
1303	タ	C-21		5.5	3.9		12.1	フォルフェルス	タ
1304	タ	B-9	○	3.55	2.8	0.25	2.7	千枚岩	タ
1305	打製石鎌	D-10	○	2.8	1.3	0.45	2.3	黒曜石	
1306	タ	D-17	○	2.3	1.7	0.25	2.1	チャート	
1307	タ	C-20	○	1.95	2.0	0.25	2.0	フォルフェルス	
1308	砥石	E-8	○	10.4	8.1	3.5	330	砂岩	
1309	タ	C-20	○	6.7	6.5	3.95	308	タ	
1310	タ	F-21	○	9.1	4.0	0.8	54	タ	
1311	タ	B-11	○	10.1	12.6	4.45		細粒である。	
1312	タ	E-23	○	8.0	2.8	0.6	16	頁岩	
1313	タ	B-14	○	7.1	6.7	3.5	3.25	フォルフェルス	
1314	タ	A-8	○	5.7	7.7	1.6	114	砂岩	
1315	タ	D-16	○	5.8	3.4	0.9	33	タ	
1316	石錐	C-18	○	8.6	1.6	1.0	20	シルト岩	
1317	石錐	B-15	○	8.1	11.3	4.1	450	砂岩	
1318	磨製石斧	C-12	○	10.2	4.9	2.3	132	フォルフェルス	
1319		C-7	○	3.2	1.6	0.7	6	タ	研磨のある礫
1320		C-7	○	2.9	1.4	0.45	4	砂岩	研磨のある礫
1321	凹石	D-20	○	8.0	4.9	4.3	330	シルト岩	
1322	樹皮布叩石	E-8	○	7.35	5.4	4.6	270	頁岩	
1323	タ	E-10	○	10.3	3.7	3.8	150	タ	
1324	タ	E-17	○	17.9	6.0	4.5	580	タ	

#### 5. 石錘 (Fig. 160, PL. 36)

1317は、砂岩を石器の素材として用いている石錘である。上端面は交互剥離により大きい抉り部を作り、両面ともに有溝をもち、一部欠損している。両面ともに一部に自然面を残すが、ほとんど剥離がなされている。

#### 6. 石斧 (Fig. 160, PL. 36)

1318は、フォルフェルスを石器の素材として用いている石斧である。刃部付近は欠損している。片面は一部を残し、もう片面は基部付近に欠損を認める。石材のためか研磨痕は観察されない。

#### 7. 凹石 (Fig. 160, PL. 36)

1321は、砂岩を石器の素材として用いている石斧である。自然縫を用い三か所に大きい凹をもっている。

#### 8. 樹皮布叩石 (Fig. 161, PL. 36)

樹皮布叩石は総数4点が出土した。土堆内の埋土中からは1点である。II b層含層中より3点がみられ、それぞれに形状を異にしている。1322は砧状を呈する叩石と思われ、先端部のみの検出である。敲打によるためか、器面全体に、凹凸を顕著に認め、棒状を呈している。1323は小型の砧状を呈する叩石である。基部付近には握手部分を認める。握手部分には研磨を認め、部分的に研磨痕の残存を観察する。1324は大型の樹皮布叩石である。敲打部の先端付近は欠損し、敲打により凹凸面を認める。a面の一部及びb面の側縁の一部には、平坦面を作り出している。握手部分は研磨され、素材のためか研磨痕は観察できない。C, D面は自然面を残す。1322~1324については使用による欠損であると思われる。

#### 9. その他の石器 (Fig. 160, PL. 36)

1319はフォルフェルスを石器の素材として用いた扁平な棒状を呈する部位で、両端面ともに欠損しているため、用途は不明である。器面は全面に研磨を認め、研磨痕を一部に観察する。1320は扁平で小型である。研磨痕のみられる標で、両端面付近は研磨が強く細身になっている。

#### 第4節 土製品 (Fig. 162, PL. 37)

本遺跡の出土の土製品には、土製勾玉がある。総数13点である。1325は大型の勾玉で、丁字頭をもつ。頭部はやや丸味をおび6条の沈線を認める。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや良好である。色調は赤茶褐色で、丹と思われる赤色顔料で採色している。両側より穿孔され、尾部は少々欠損している。1326は小型の勾玉で、丁字頭をもつ。やや丸味をおび6条の沈線を

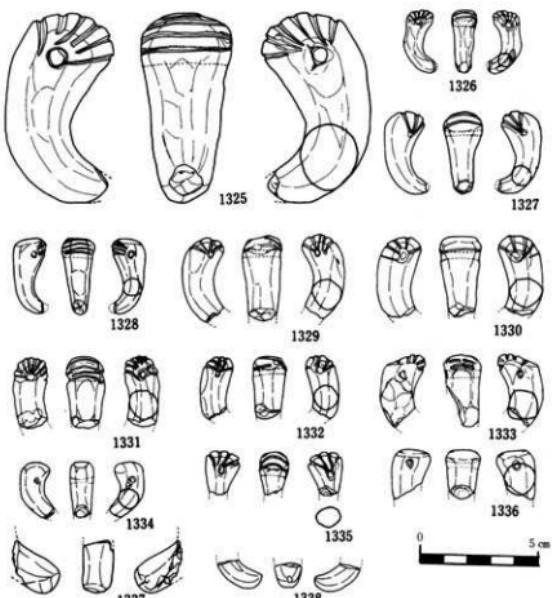


Fig. 162 王子遺跡出土土製品実測図

認める。胎土には砂粒を含み焼成は良くない。色調は灰色で、片側より穿孔され、尾部にはわずかな欠損を認める。1327は丁字頭をもつ。頭部はやや丸味を帯び3条の沈線をもっている。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。色調は明褐色で、両面から穿孔され、尾部は少々欠損している。1328は26号住居跡埋土中より出土した。丁字頭をもつ。頭部は水平であり、4条の沈線を認める。胎土には砂粒を含み、焼成は良好であり、指紋の付着を認める。色調は暗褐色と明茶褐色を呈し、両側より穿孔され、尾部はわずかに欠損している。1329は丁字頭をもつ。頭部は丸味を帯び3条の沈線を認められるが、鮮明さに欠ける。胎土には砂粒を含み、表面にまで金雲母が露呈し、焼成はあまりよくない。指紋を付着する。色調は茶褐色で、片面から穿孔され、尾部が大きく欠損している。1330は丁字頭をもつ。頭部は丸味を帯び5条の沈線をもつが、うち1本は鮮明さに欠ける。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は明茶褐色で両面から穿孔され、尾部は大きく欠損する。1331は丁字頭をもつ。頭部はやや丸味をおび、9条の沈線を認め、これらの勾玉でいちばん多く沈線をもつ。胎土には砂粒を含み、焼成は良好であるが、表面の一部に剥落を認める。色調は暗茶褐色を呈し、片側より穿孔され、尾部は

大きく欠損している。1332は丁字頭をもつ。頭部はやや丸味をおび5条の沈線を認める。胎土には砂粒を含み、表面には金雲母が多くみられ、焼成は良好である。色調は明茶褐色で、片側より穿孔され、尾部は大きく欠損している。1333は丁字頭をもつ。頭部は水平で、5条の沈線を認め、胎土には多量の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は暗褐色で、片側より穿孔され、尾部は大きく欠損している。1334は頭部はやや丸味をおび、丁字頭は認めない。胎土には砂粒を含み、焼成はあまりよくない。表面は磨滅を認め、両面からの穿孔され、尾部を欠損するが、小型の勾玉である。1335は丁字頭をもつ。頭部はやや丸味を帯び4条の沈線をもつ。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は明茶褐色で、両側から穿孔され、大半が欠損している。1336は頭部が水平で、丁字頭をもたない。胎土には砂粒を含み、焼成はあたりよくない。色調に明褐色で、両側から穿孔され、大半が欠損している。1337は他の勾玉と胎土及び焼成が異なり、勾玉のタイプに入れたが可能性は薄く、尾部のみで全体の形状が不明のため詳細については不明である。1338は土製勾玉の尾部で、上位は欠損している。胎土には砂粒を含み、焼成はやや良好である。色調は茶褐色を呈しているが、尾部のみの出土である。

Tab. 55 土製品（土製勾玉）一覧表

遺物番号	出土区	最大長	厚さ		重さ	完	欠
			丁字頭	体部			
1325	B-10	8.0	3.7	3.1	100	○	
1326	E-13	2.6	0.85	0.85	1.9	○	
1327	C-17	3.5	1.6	1.3	3.6	○	
1328	E-20 陶質胎土	3.2	1.3	1.1	6.2	○	
1329	D-21	3.5	1.5	1.4	7.8	○	
1330	B-14	3.4	1.5	1.6	8.2	○	
1331	C-16	3.0	1.4	1.2	1.4	○	

わずかな欠損。単位：cm、重さ g

### 第5節 鉄製品及び鐵冶滓

(Fig. 163, PL. 37)

1340は刀子の中茎付近と思われ、B-11区II b層で出土した。現存で、全長4.5cm、茎長3.3cm、茎幅は背部で、0.3~0.45cmを測る。1339はB-13区II b層で出土し、現存で、全長6.3cm、幅5.2cm、厚さ2.7cm、重さ123gを測り、表皮は茶褐色を呈する。表面は若干の凹凸が認められ、上端部は一部欠損している。表面は灰褐色で湾曲し、青灰色の炉材粘土の付着が観察され、気泡が多く見られる。

遺物番号	出土区	最大長	厚さ	重さ	完	欠
		丁字頭	体部			
1332	D-19	2.7	1.1	1.1	4.0	○
1333	E-21	3.0	1.7	1.4	5.3	○
1334	E-11	2.35	1.2	0.9	2.3	○
1335	C-15	1.8	1.35	0.8?	2.2	○
1336	C-17	2.1	1.5	?	3.6	○
1337	E-20	1.6	1.3	?	4.3	○
1338	E-20	3.2	1.3	?	6.2	○

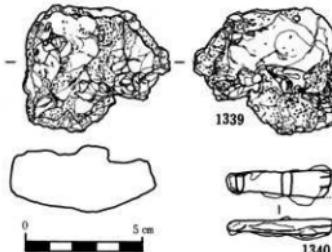


Fig. 163 王子遺跡鉄器及び鐵渣実測図

## 第7章 その他の遺構・遺物

### 第1節 繩文時代の遺構・遺物 (Fig. 164, PL. 37)

王子遺跡において、昭和56年度確認調査、昭和57年度の市道小原線以東の確認調査において、縄文時代早・前期及び細石器文化層は認められるものの、遺構及び遺物の検出はなかった。その後、弥生時代検出遺構の下層部分の確認調査において、C・D-19-21区のⅡb層の上面付近より、縄文時代早期相当の集石遺構及び土器小破片の出土が認められた。その範囲は200m<sup>2</sup>ほどである。以下遺構及び遺物について説明を加える。

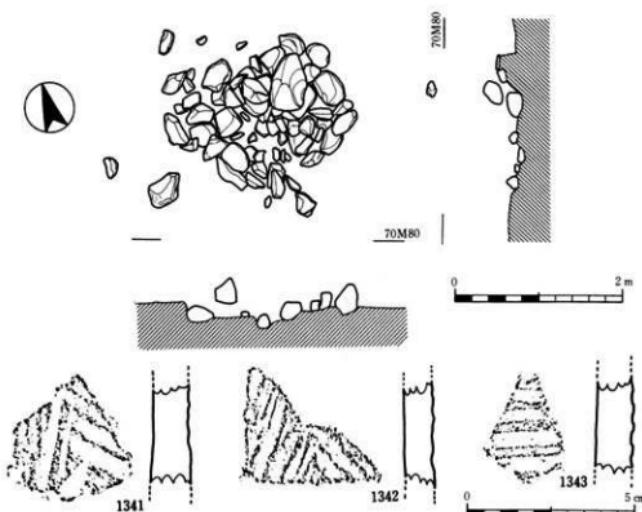


Fig. 164 王子遺跡集石遺構（縄文時代）及び土器実測図

集石遺構がD-20区より1基確認された。長径90cm、短径80cmのほぼ方形状に集石は認められるが、径5-15cm前後の円礫を主体とし、中には25cmほどの大きなものも含まれる。石材は安山岩で、石の表面には炭がタール状に付着し、周辺にも炭化物を多く認めた。

1240・1241は貝殻条痕を練杉状に施し、色調は明褐色を呈し、胎土には長石を含んで、焼成は良好である。1242は横位に貝殻条痕を施し、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には石英・長石を含んで、焼成は良好である。3点ともに小破片で形状は不明であるが、石板系の土器破片と思われる。

## 第8章 まとめ

王子遺跡は、鹿屋市王子町王子の標高約72mの笠野原台地北西縁辺部に所在する。遺跡の西側は約40m以上の懸崖になっている。また、低地は高隈山地に源を発する肝属川の堆積によって形成された沖積地である。このシラス台地は水に乏しく、本遺跡は比較的水の得やすい台地末端を選定している。

本遺跡は、弥生時代中期末の集落を主体とする遺跡であったが、その後の調査により縄文時代早期の土器や集石を検出したが、主体部は認められなかった。しかし、周辺には縄文時代早期相当の遺跡が存在することが類推される。弥生時代中期相当の遺物包含層からは、堅穴住居跡、掘立柱建物跡（棟持柱付のもの、土塀をもつもの）、土塀、溝などの遺構や、壺形土器・大型壺形土器・壺形土器・鉢形土器などがある。土器は山ノ口式土器を中心に北九州や瀬戸内などからの影響を受けたものがある。また、磨製石鎌、砥石、樹皮布叩石などの石器や土製勾玉、鉈・刀子・鉄滓などの遺物が出土した。このように、大規模な遺跡で学術的見地から古代の南九州を知る上で貴重な遺跡ということで、保存が提起されるなど注目を集めた。特に、ベッド状張り出しをもつ住居跡や掘立柱建物跡（棟持柱付）のものや土塀をもつものは、南九州を含めた九州地方の弥生時代の集落構造を知る上で、考古学研究者のみならず建築学研究者にも学問上で多くの指針を与える。また、遺物については、在地の山ノ口式土器と瀬戸内系や北九州の土器などの共伴関係は、弥生時代の文化圏や交流状況を考えるための重要な資料である。

以下、各遺構や遺物について説明を加え、まとめとする。

### 【堅穴式住居跡】

今回の調査により27基（5基は調査区外へのびる）の堅穴住居跡が発見された。これまで南九州では、入来遺跡、吉ヶ崎遺跡、柳遺跡、成川遺跡、一の宮遺跡、上原遺跡、花牛札遺跡などで、弥生時代の住居跡が発見されているが、確認調査などのため集落構造を知り得る遺跡は、ほとんどみられない。吉ヶ崎遺跡、成川遺跡、一の宮遺跡などでは、ベッド遺構がみられ、成川遺跡はベッド状張り出しをもつ住居跡が検出された。

ベッド遺構をもつ県外の住居跡には、中期の例として、東京都の道灌山遺跡、長野県の北原遺跡、兵庫県の名古山遺跡、東溝遺跡、広岡遺跡、福岡県の宝台遺跡などが知られる。後期の例として、東京都の宇津木遺跡、千葉の般台遺跡、埼玉県の吉野原遺跡、霞ヶ関遺跡、神奈川県の三般台遺跡、長野県の酒屋前遺跡、岐平遺跡、座光寺原遺跡、的場遺跡、兵庫県の東溝遺跡、大中遺跡、和歌山県の北田井遺跡、大阪府の東山遺跡、東奈良遺跡、岡山県の岡原遺跡、二宮大成遺跡、山口県の北迫遺跡、福岡県の小郡遺跡、狐塚遺跡、西中ノ沢遺跡、坊野遺跡、野口道添遺跡、野里坂遺跡、宮の前遺跡、弥永原遺跡、久保原遺跡、門田遺跡、裏山遺跡、大分県の二本木遺跡、松木遺跡、熊本県の宮山遺跡、宮崎県の堂地遺跡、祝吉遺跡、熊野原遺跡などがある。

本遺跡の堅穴住居跡は、平面の形状が方形平面と円形平面とがある。方形および隅丸方形を呈するもの（Aグループ）がある。3号・6号・7号・8号・17号・20号・22号住居跡などあり、基本的には、主柱穴2本で、南側壁際に土塙をもつ。主柱穴の柱間間は狭く、比較的に土塙は浅いものである。3号住居跡は、略方形状で、主柱穴を取り囲むように北壁中央部付近から南側壁にかけて、略方形状の掘込を認め、この類の掘込には15号住居跡があるが、土塙はもない。6号住居跡は、主柱穴2本で、土塙の掘込のあと柱穴の掘込を認め、柱痕跡をもつ。

Tab. 56 住居跡一覧表

住居跡名	規 模 cm	主軸の方位	柱 穴	壁 帯 溝	土塙cm	備 考	単位 cm
1号住居跡	300×275		1 + 2			Ⅱ層の上面の検出で円形で小型。	
2号住居跡	205×111		2			Ⅱ層中の検出で大きめが調査外。 ベッド状張り出し。	
3号住居跡	350×258	N-83.5°-E	2 + 7	-一部検出、古墳壁跡。		Ⅱ層中の検出。	
4号住居跡	475×463	N-80°-E	4 + 1°	東側壁以外検出する。	115×110	Ⅱ層中の検出。 ベッド状張り出し。	
5号住居跡	555×430	N-84.5°-E	4 + 1°	北西隅に検出する。	185×133	Ⅱ層中の検出、一部は標準調査時に確認。ベッド状張り出し。	
6号住居跡	290×228	N-79°-E	2 + 1		119×84	Ⅱ層上面で検出。	
7号住居跡	379×297	N-84°-E	2 + 1		124×95	Ⅱ層上面で検出。	
8号住居跡	313×310	N-90°-E	2 + 1	断切により検出する。	120×95	Ⅱ層中で検出。	
9号住居跡	748×694		6 + 1°	-一部検出する。	118×102	Ⅱ層中で検出。 円形でベッド状張り出し。	
10号住居跡	476×529	N-89°-E	2 + 2	南西部張り出し以 外に検出する。	118×84	Ⅱ層中で検出。ベッド状張り出し。 西側ベッド状張り出し。	
11号住居跡	508×497	N-73.5°-E	2 + 1	西壁から東壁へか けで検出する。	122×101	Ⅱ層中の検出。 ベッド状張り出し。	
12号住居跡	793×718		5 + 3	東在が悪く 一部に検出する。	163×141	Ⅱ層中の検出。 内形でベッド状張り出し。	
13号住居跡	440×420	N-65°-E	2 + 6	壁全体に検出する。	81×51	Ⅱ層中で検出。 ベッド状張り出し。	
14号住居跡	670×390		6		100×100	Ⅱ層中で検出。 内形でベッド状張り出し。	
15号住居跡	380×367	N-88°-E	2			Ⅱ層中で検出。 張り合す。	
16号住居跡	597×520	N-90°-E	2 + 4		110×135	Ⅱ層中で検出。 ベッド状張り出し。	
17号住居跡	310×263	N-88°-E	2	南東部以外 壁間に検出する。	73×46	Ⅱ層中で検出。	
18号住居跡	676×295~50		6		(160)X90	Ⅱ層中で検出。 内形。	
19号住居跡	554×405	N-78°-E	2	南西隅に検出する。	98×80	Ⅱ層中で検出。 ベッド状張り出し。	
20号住居跡	306×250	N-107°-E	1 + 3		74×52	Ⅱ層最下面で検出。	
21号住居跡	500×200					Ⅱ層中で検出。 ベッド状張り出し。	
22号住居跡	308×271	N-110°-E	3			Ⅱ層中で検出。	
23号住居跡	475×471		1			Ⅱ層中で検出。住居跡に分離 した特殊遺構。	
24号住居跡	474×396	N-77°-E	2			Ⅱ層中で検出。 ベッド状張り出し。	
25号住居跡	443×22~200	N-88°-E				Ⅱ層中で検出。	
26号住居跡	490×493	N-77.5°-E	2		120×90	Ⅱ層中で検出。 ベッド状張り出し。	
27号住居跡	537×438	N-89.5°-E	2		98×78	Ⅱ層中で検出。 ベッド状張り出し。	

7号住居跡は、土塗は深く、柱穴状の掘込を認める。南西隅に柱穴をもつ。主柱穴には柱痕跡を認めた。8号住居跡は、ほぼ方形状を呈し、土塗内には柱穴状の掘込を認め、7号住居跡と類似する柱穴である。主柱穴には、柱痕跡を認めた。17号住居跡は、特異で主柱穴を南側壁際に認め、床面中央付近に焼土らしい痕跡を残す。壁際には壁帶溝をもつ。22号住居跡は、ほぼ方形状で、柱穴3を認めた。これらの住居跡は遺構検出面からは浅く、20・21号住居跡は、Ⅲ層上面、他住居跡は、Ⅳ層及びⅤa層アカホヤ層を床面とし、部分的に貼り付け調整を認め、17号住居跡は、若干深い。ベッド状張り出しをもつもの（Bグループ）があり、主柱穴2本で、南側に土塗をもつものである。4号・5号・11号・13号・15号・16号・19号・24号・26号・27号住居跡などがある。このほか、2号・21・25号住居跡は、大半が調査区外へのびているため、遺存している遺構より想定できる。これらの住居跡は、ベッド状張り出しの形状や位置、柱穴、土塗、壁帶溝などに相異をみる。ベッド状張り出しを北側にもつものは、4号・10号・13号・15号・16号・19号・26号・27号住居跡で、その位置及び規模に変化があり、4号・13号・16号住居跡は、大半がベッド状遺構で、13号住居跡はわずかに張り出す。西側にもつものは、4号・5号・10号・16号・19号・24号住居跡がある。南西部にもつものは、4号・10号・16号・27号住居跡があり、4号・5号・10号・16号・19号住居跡は、内側に突出状の障壁をもち、19号住居跡は、わずかな突出部をもち、障壁といえるか疑問が残る。南側にもつものは、10号・13号・27号住居跡があり、南側に内側に、突出状の障壁をもち、10号・27号住居跡は、張り出しをもつために、台形状の障壁を作り出す格好である。これらの住居跡のうち、三方のベッド状張り出しをもつものは、4号・10号・16号住居跡で、二方にもつものは、19号・27号住居跡で、5号・13号・15号・24号・26号住居跡は、一方だけのものである。15号住居跡は、張り出しのみであり、3号住居跡と同様に主柱穴を取り囲むように、略長方形状の掘込を認め、26号住居跡は、西側壁は円形、南側及び東側は方形状である。ベッド状遺構には、規模や高さに変化があり、独立して存在するものや連続するものがあり、切り出し及び貼り付け調整による。5号住居跡は、切り出しによるものである。住居跡のベッド状張り出し部のうち南西部及び南側のものは、出入口が想定される。主柱穴は、2本で、柱間間は広くなり、Aグループの柱穴とは、その点で相異をみる。5号住居跡は、主柱穴は3本で、截切りにより床面貼り付け調整部下位より、主柱穴1が検出され、4本が列状に並び、柱穴や土塗の状況より立替えの可能性を考えられる。主柱穴に柱痕跡を認めるものは13号・24号・26号住居跡などがある。土塗については、大半の住居跡に検出され、形状の変化はある。土塗内には、柱穴状の掘込があり、2か所あるものは、10号・16号・25号・27号住居跡で、5か所あるものは5号住居跡、3か所あるものは、26号住居跡、24号住居跡は、擾乱のため消失している。特に、13号住居跡のものは、小規模である。壁帶溝については、住居跡の床面やベッド状遺構上にみられ、4号・10号・11号・13号・19号住居跡に認め、10号・19号住居は、貼り付け調整などにより辛うじて遺存し、貼り付け調整と溝の埋土との色調が同質である。特に、13号住居跡の壁帶溝は遺存が良好である。これらのベッド状張り出し住居跡は、4号住居跡と10号住居跡、11号住居跡と13号住居跡、19号住居跡と27号住居跡は、類似点をもつ住居跡である。

1号・9号・12号・14号・18号住居跡は円形平面を呈するもの（Cグループ）で、1号住居跡は小型で特異なものであり、他は大型である。14号・18号住居跡は、調査区外へのびるが、その形状は知り得る。9号住居跡は、6本の柱穴で、12号住居跡は、5本の柱穴をもつ。14・18号住居跡は、調査地区外へのび不明である。これらの住居跡は、中央付近に土塁をもち、9号住居跡は、二か所に掘込を検出し、12号住居跡は、複数の掘込を認めた。9号住居跡は、周縁にベッド状を廻らし、主柱穴をとり囲むよう状況で、宝台遺跡1号住居跡に類似した形状である。12号住居跡は、南西の周縁にベッド状張り出しをもち、南西部には方形の突出状の障壁をもつ。張り出し部以外の周縁には、ベッド状遺構を廻らしていたものと思われ、遺存状況が悪く、わずかに残存する程度である。一部の壁際に壁帶溝を認めた。14号住居跡は、調査区へのびる住居跡で、周縁から4か所の内側に、突出状の障壁が壁中などから認められ、障壁間は、ベッド状遺構で、北西隅には、土塁状の掘込を認めるが、全容は不明である。この住居跡は、宮崎県の熊野原遺跡、祝吉遺跡<sup>13</sup>に類似する住居跡である。18号住居跡は、南側調査区外へのび、北側は新しい溝により影響を受け、周縁部にベッド状遺構を廻らす。これらの住居跡は、本遺跡で大型の住居跡である。

23号住居跡は、特異な形状で、特殊遺構として扱うべきであるが、現在他に類別がないため、いちおう住居跡（Dグループ）に分類しておいた。この遺構については、分後の課題である。

以上、堅穴住居跡について概略を述べたが、本遺跡の堅穴住居跡は、弥生時代中・後期の西日本における一般的な形態をもつものとされるが、主柱穴2本をもつ小型住居跡を主として、中・大型住居跡の存在するものは少なく、掘立柱建物と共存し、また櫛持柱付の建物跡などが存在することが、本遺跡の集落構成上の特徴の一つである。中・大型住居跡の少ないことは、掘立柱建物が存在していることが要因のひとつであると考えられる。

本遺跡のAグループの住居跡は、主柱穴2本で、南側壁際に土塁をもつものがほとんどで、南九州においては、初めての知見である。北九州においては、弥生中期以後に円形堅穴住居跡に替って、弥生時代後期末近くまで続き、隣県の宮崎県では、若干遅れるが、熊野原遺跡B地区12号住居跡<sup>14</sup>などがあり、弥生時代終末期である。Bグループの住居跡は、基本的にはAグループの住居跡に、ベッド状張り出し遺構をもつものである。ベッド状遺構の設置形態には、三方または四方に、ベッド状張り出しをもつものや壁面に沿って二辺にまたがるもの、三辺にまたがるものがあり、これらの組合せるものもある。ベッド状遺構の設置方法には、切り出しだけによるもの、切り出しと貼り付けによるものとがあり、本遺跡では、一住居で併用しているものがほとんどである。北九州では、八女地方などの遺跡<sup>15</sup>、大分県では二木遺跡<sup>16</sup>、松木遺跡<sup>17</sup>、熊本県では宮山遺跡<sup>18</sup>などがベッド状遺構をもっている。Cグループの住居跡は、円形平面で、ベッド状遺構を全周するもの、障壁間にベッド状遺構を全周するもの、一部を除き全周させ、張り出しベッド状遺構をもち、一か所に障壁をもつものがある。ベッド状遺構を全周させるものには、宝台遺跡（中期中葉）岡山県大中遺跡<sup>19</sup>のもの、円形に対して六角形平面である。障壁間にベッドをもつものには、弥生時代後期末の都城市祝吉遺跡<sup>20</sup>や熊野原遺跡1号・8号、堂地東

遺跡16号住居跡などが知られる。円形で、張り出しベッド造構をもち、一部を除き全周させ、障壁をもつものは、初見である。

住居跡内の屋内施設には、炉、貯蔵穴様土壇（中央ピットを含む）、柱穴、壁帶溝・障壁などがある。炉については、屋内・屋外とも検出していない。甕形土器や鉢形土器の多くは、煤を付着しているものが多く、13号・14号掘立柱建物跡の土壇の掘込は、共同釜屋とする考え方もあり、貯蔵穴様土壇（中央ピット）との関係も含めて検討をするものである。貯蔵穴様土壇については、方形平面がベッド状張り出しをもつ住居跡の大半は、南側中央壁際に、円形平面の場合は、中央ピットと呼ぶものである。本遺跡の貯蔵穴様土壇の掘込は、貼り付け調整され、その上位に、10cm前後の黒色土を認め、床面として生きている。黒色土中及び上位には、甕形土器破片や棒状を含む炭化物を多く検出したが、焼土及び灰は認めない。建築儀礼はどのような用途の可能性を考えるとの見方もある。貯蔵穴については、甘木市所在の下原遺跡の報告例で、「屋内土壤の付設方法及び出土遺物から考慮される用途として作業穴（作業土壤）一主に生産用具・工具の研き場一の可能性が高いことが指摘できる」という考え方もあり、本遺跡においても、8号・19号・27号住居跡では、土壇及びその周辺に作業台？と考えられる石も存在している。炉を含めて、今後の課題であり、資料の増加を待ちたい。柱穴については、方形及び張り出しベッド造構をもつ住居跡の大半は、主柱穴2本で、柱痕跡を認めるものもあり、径15~19cmを測る。円形平面は、路線外へのびるため定かではないが、主柱穴は、5~6本である。壁帶溝については、貼り付け調整土と埋土が同質のため判別しがたく、検出できても遺存が悪い住居跡もあった。機能は、床面の湿気抜とか排水用などの考え方方が一般的で、近年では周壁の土留材の検出された住居跡の報告例もある。障壁については、張り出しベッド状造構をもつ住居跡や円形平面の住居跡において検出され、ベッド状造構をもつ住居跡は、床面までが深いため、70~80cm前後の高さに残る壁面の一部が、その壁面と同じ高さ及び若干下位より内側へ突出したような障壁が削り出されており、円形平面では、四か所（現存で）検出する住居跡もある。機能については、この原始共同体社会でありながらプライベートな空間造をしようとしたようにみえるとの見方もある。祝吉遺跡や熊野遺跡などの遺跡では、花弁型住居跡と呼称されている。立替えについては、5号住居跡が考えられ、住居跡の截切りで、床面の貼り付け調整された下部より主柱穴を検出した。主柱穴や土壇の状態より増築の可能性が考えられる。

#### 〔掘立柱建物跡〕

今回の調査により、14基（2棟は調査区外へのびる）の掘立柱建物跡を検出した。本遺跡の掘立柱建物跡には、桁行・梁行共に掘立柱でさらに、妻側に独立して桟木を支える、棟持柱の掘り方があるもの（Aグルーブ）がある。1号掘立柱建物跡（棟持柱付）は、2間×2間で、四層上面の検出である。柱穴の埋土中より、弥生式土器小破片が出土した。2号掘立柱建物跡（棟持柱付）は、北側桁行4間、南側桁行5間、梁間は共に3間で、桁行で南側の方が1間だけ多く、出入口の可能性が考えられる。柱穴5か所は、立替えのためか二か所の掘込を認めた。

三層上面での検出である。4か所の柱穴埋土中より、弥生式土器小破片が出土した。3号・4号掘立柱建物跡（棟持柱付）は、共に調査区外へのび、一部が重複する。3号掘立柱建物跡（棟持柱付）は、4間×4間が想定され、4号掘立柱建物跡（棟持柱付）は、南側桁行の状況から推定される。ともにⅡ層中で検出され、二か所の柱穴の埋土中より弥生式土器小破片が出土した。5号掘立柱建物跡（棟持柱付）は、8号掘立柱建物跡と重複し、P<sub>11</sub>とP<sub>12</sub>との柱穴の状況により、5号掘立柱建物跡（棟持柱付）が先行する。北側・南側桁行とともに3間で、不規則であり、西側梁間は3間で、東側は2間である。西側棟持柱は、立替が考えられる。6号掘立柱建物跡（棟持柱）は、南北桁行とも4間で、P<sub>4</sub>は立替えが考えられ、梁間は東西ともに3間である。西側棟持柱は、立替が考えられる。5・6号掘立柱建物跡（棟持柱付）とともに歪である。1間×1間と2間×1間の掘立柱建物跡を呈するもの（Bグループ）がある。7号掘立柱建物跡は、1間×1間で、Ⅲ層上面での検出で、柱穴の掘込は、大きく立替えの可能性がある。8号掘立柱建物跡は、5号掘立柱建物跡（棟持柱付）と重複する。8号・9号・10号・

Tab. 57 掘立柱建物一覧表

単位 cm

遺構名	桁行 梁間		柱間寸法		棟持柱回	主軸の方位	備考
	桁行	梁間	柱間	梁間			
1号掘立柱建物跡（棟持柱付）	N 355.5	W 296.5	N 166.5-189.0	W 147.0-151.5	335.0	N-67°-E	2間×2間
	S 327.5	E 313.0	S 147.5-180.0	E 149-164.0			
2号掘立柱建物跡（棟持柱付）	N 449.0	W 371.0	N 109.0-119.0	W 118.0-130.0	681.5	N-82.5°-E	基本的には3間×3間
	S 500.0	E 387.5	S 66.0-120.0	E 124.0-132.5			
3号掘立柱建物跡（棟持柱付）	N 290.0	W 144.0	N 144.0	W 144.0	N 120.0-153.0	N-79°-E	柱間数より用意路筋外
	S 249.0	E 144.0	S 128.0-125.0	E 125.0			
4号掘立柱建物跡（棟持柱付）	N 480.0	W 283.0	N 283.0	W 283.0	N 126.0-136.0	N-91°-E	柱間数より4間×4間路筋外
	S 480.0	E 283.0	S 125.0-136.0	E 126.0			
5号掘立柱建物跡（棟持柱付）	N 291.0	W 266.0	N 186.0-195.0	W 186.0-190.0	373.0	N-79°-E	基本的には3間×3間で歪
	S 300.0	E 266.0	S 198.0-111.0	E 176.0-104.0			
6号掘立柱建物跡（棟持柱付）	N 440.0	W 392.0	N 65.0-134.5	W 114.0-127.0	615.0	N-89.5°-E	基本的には3間×4間
	S 450.0	E 360.0	S 94.0-146.0	E 119.0-143.0			
7号掘立柱建物跡	N 430.0	W 226.0	N 433.0	W 226.0	N 81°-E	1間×1間	立替えの可能性
	S 412.0	E 229.0	S 412.0	E 229.0			
8号掘立柱建物跡	N 386.0(352.0)	W 290.0	N 386.0(352.0)	W 290.0	S 220.0-229.0	N-79.5°-E	1間×1間 立替えの可能性
	S 386.0(352.0)	E 196.0	S 196.0	E 196.0			
9号掘立柱建物跡	N 361.0	W 200.0	N 361.0	W 200.0	S 215.0	N-93.2°-E	1間×1間
	S 350.0	E 215.0	S 350.0	E 215.0			
10号掘立柱建物跡	N 392.0	W 220.0	N 392.0	W 220.0	S 220.0	N-90.5°-E	1間×1間
	S 405.0	E 222.0	S 405.0	E 220.0			
11号掘立柱建物跡	N 370.0	W 192.0	N 370.0	W 192.0	S 220.0	N-92°-E	1間×1間
	S 335.0	E 220.0	S 335.0	E 220.0			
12号掘立柱建物跡	N 630.0	W 290.0	N 290.0	W 290.0	S 220.0	N-89.5°-E	1間×2間
	S 620.0	E 220.0	S 220.0	E 220.0			
13号掘立柱建物跡	N 400.0	W 232.0	N 400.0	W 232.0	S 230.0	N-80°-E	土塀をもつ1間×1間
	S 424.0	E 236.0	S 424.0	E 236.0			
14号掘立柱建物跡	N 484.0	W 265.0	N 484.0	W 265.0	S 273.0	N-87°-E	土塀をもつ1間×1間
	S 484.0	E 273.0	S 484.0	E 273.0			

11号掘立柱建物跡は、1間×1間で、その規模は、梁間約200cm、桁行約400cmである。8号・10号掘立柱建物跡は、Ⅲ層及びⅡ層、9号掘立柱建物跡は、Ⅲ層上面、11号掘立柱建物跡は、2間×1間の建物跡で、Ⅱ層中で検出した。その規模は、平均して352×207cmである。四本の掘立柱の中央に「土塀」を伴なうもの（Cグループ）がある。13号・14号掘立柱建物跡があり、ともにⅡ層中及びⅢ層上面の検出で、13号掘立柱建物跡は、柱穴及び土塀内より弥生式土器小

破片や炭化物（小片）が出土した。14号掘立柱建物跡は、柱穴より土器破片、土塙内より大型壺形土器、打製石鎌、棒状炭化物が出土した。13号掘立柱建物の土塙は、深く、床面はV字層で貼り付け調整され、14号掘立柱建物跡の土塙は、浅くⅢ層上面で、切り出しによるものである。

以上、掘立柱建物跡について概略を述べたが、住居や倉庫などの考え方がある。Aグループには、梁間が3m以上で、桁行の柱間間が対応しなきものがあり、純柱建物でないために高床構造は考えにくいとの意見や高床倉庫とする相違なる二つの見解が提示されていた。この棟持柱付の建物は、和歌山県出土の土器破片や香川県出土の銅鐸、奈良県出土の家屋文鏡等に描かれたものでしかみることのできなかったものであり、権威性の高いものと同様と想定されるとの見方もある。また、古代建築でもある伊勢神宮にみられる神明造りの粗形や棟持柱の遺構例としては、当遺跡は最も古く、他に全く類例のないもので地理的にみて、南方系住居伝来の経緯をさぐる上でも極めて貴重であるとの指導もあった。これらの遺構例は、神戸市松尾遺跡（3×2間で純柱、六C前半）和歌山県鳴鶴遺跡（4×3間で純柱、五C前半）などが知られ、純柱である点が異なっている。Bグループには、掘立柱の中央に「土塙」を伴うものが2基発見されている。この土塙の掘込み、貯藏穴、墓塚、共同の釜屋、祭祀に係るものとする考え方があり、初めての知見で、今後の課題としたい。Cグループには、1間×1間と1間×2間の建物跡が検出され、桁行間が約4mで、中には柱穴の掘込みの大きいものも検出された。これらの掘立柱建物は、中央区から東区にかけ、4基が弧状に配置したような状態で検出された。掘立柱建物跡の検出例として、福岡県の竹並遺跡、下原遺跡、辻田遺跡、久保園遺跡、湯納遺跡、岡山県の百間川遺跡、鳥取県の青木遺跡などが知られる。

#### [土塙]

土塙は、隅丸長方形や梢円形を平面形状とし、掘込み深いものと浅いものを検出した。隅丸長方形の掘込み深いもの（Aグループ）がある。1号・2号・4号があり、掘込み深いものと浅いものがある。1号土塙は、隅丸長方形の掘込みで深く、段状の掘込みを検出し、底面はⅢ層である。埋土中より壺形土器、壺形土器、鉢形土器、樹皮布叩石が出土した。壺形土器には、口縁部上面に櫛状の鋸歯文を施したものがある。2号土塙は、隅丸長方形の掘込みで浅く、底面は、Ⅲ層上面で平坦面を呈する。埋土中より大型壺形土器、壺形土器、壺形土器、鉢形土器、砥石が出土した。壺形土器には、瀬戸内系の影響を受けたものがある。4号土塙は、隅丸長方形の掘込みで、Ⅲ層上面での検出で、実際の掘込みは、深いものと思われる。埋土中より軽石の集石を検出した。梢円形で深いもの（Bグループ）がある。3号土塙で、略南西部の柱穴状の掘込みが土塙を切った状態で検出した。埋土中より、壺形土器、壺形土器、鉢形土器、高杯形土器が出土した。壺形土器には、北九州系や瀬戸内系の影響を受けたものがある。これらの土塙は貯藏穴とする考え方支配的である。

#### [溝状遺構]

溝状遺構は西区と中央区に検出土した。西区溝状遺構は、Ⅲ層上面で検出された。幅90～140cm、深さ、40～47cmである。実際の掘込みは深く、U字形を呈する。中央区溝状遺構は、II

層中で検出した。遺物包含層と埋土は同質であり、幅は、約200cm前後で、深さは、20~30cmの溝である。規模については、南北の土層断面より実際の掘込は、大きいものと考えられる。また2つの溝が重複し、溝Iの底面は、硬く踏みしめられ痕跡を残している。これら溝の埋土中より遺物は少なく、弥生式土器小破片のみで、いずれも弥生時代のものである。

以上、各遺構について概略を述べたが、本遺跡は、標高72cmの笠野原台地西縁に立地し、鹿屋バイパス予定地内、東西約290m、南北平均約40mの範囲内に位置する集落跡で、47の遺構で構成され、さらに道路予定地外への拡張が類推される。

本遺跡の集落跡を概観すれば、堅穴式住居跡は、4グループで構成され、そのうちDグループは特異な形態である。26基にうち、Aグループは26.9%，Bグループは53.8%，Cグループは19.2%で、大半がBグループの占める割り合いが大きい。Aグループのうち、主柱穴2本で、南側壁際に土塙をもつもの42.8%，主柱穴1で、南側壁際に土塙をもつもの0.14%，その他のもの42.8%である。これらの住居群のうち、3号住居跡は、大型壺形土器、甕形土器、鉢形土器など多くの土器をもち、Bグループの15号住居跡と類似性をもつ。他住居跡は、遺物の出土量が少ない。Bグループのうち、4号住居跡と10号住居跡、11号住居跡と13号住居跡、19号住居と27号住居跡などは類似性をもち、15号住居跡は前記のとおり、大型壺形土器などをもつ住居跡である。これらのBグループの住居跡は、類似性をもつものの、それぞれに特徴をもち機能が考えられるが、ベッド状遺構の特殊性を考慮し、集落内における身分制度や家族の構成による年令階級社会が山ノ口式土器文化社会の中に芽ばえていたものであろうか。それぞれの住居跡より言及には及ばなかった。このベッド状遺構のうち、南側や南西部のものは出入口、他は就寝の場とする考え方がある。Cグループのうち、1号住居跡以外は、規模が大きく、ベッド状遺構を廻らし、貯蔵穴様土塙（中央ピット）をもつ点では、類似性をもつが、屋内施設の状況が異なり、12号住居跡のように張り出しベッド状遺構と障壁をもつもの、14号住居跡のように障壁をもつもの、9号住居跡のように石塙などを多くもつことから、石器などの道具を作成した工房跡とする説と集会場とする考え方<sup>註</sup>が示されている。掘立柱建物跡は、3グループで構成され、14基のうち、Aグループは42.8%，Bグループは42.8%，Cグループは0.14%である。Aグループは、棟持柱付のもので、同時代においては、初めての知見である。これらの建物跡は、梁間が2間と、3間、4間（推定を含む）のものがあり、弥生時代の高床式倉庫は、梁間が1間が一般的で、高床倉庫が普及するのは古墳時代以降で、梁間が2間、3間の純柱が一般的となり、本遺跡のように梁間が2間以上の場合は、「純柱であるかが高床式と掘立柱住居の相違判断とする基準となる」との基準をとれば、全て平地式の住居跡である。しかし、小型で、3m以下のものは高床倉庫で、他のものは平地住居で、權威性の高いものと推定されるとの意見もある。Cグループは、「土塙」をもつもので、初めての知見であり、土塙の掘込より貯蔵穴、墓塚、共同釜屋、祭祀に係るものとの意見があり、今後の資料の増加を待ちたい。規模はBグループの1間×1間のものと同じであるが、柱穴の掘込が小さく、7号掘立柱建物は、立替えの可能性がある。また、12号掘立柱建物は、1間×2間の規模である。これらのBグループの建物を

高床倉庫と推定した場合、Aグループを平地住居ととらえる考え方もあるが、Cグループの桁行は約3m以上である。

#### [遺物について]

本遺跡の出土遺物は、第5章の第1節、第2節、第6章の第1節、第2節で概略を述べた。これらのうち土器については、大半が在地の土器で、南九州の編年基準によれば中期後葉の山ノ口式土器である。山ノ口式土器のはか、北部九州のものや影響を受けたもの、東九州の影響を受けたものの、畿内の土器を模形とした瀬戸内系のものや影響を受けたものがあり、これらの土器が共存して出土した。本遺跡の山ノ口式土器は、完形品が少なく全容を知り得るものはわずかな個体であり、口縁部だけのもの、口縁部から胴部だけのもの、底部だけのものなど絶対量が多く、壺形土器・大型壺形土器、壺形土器、鉢形土器などに区分し、それぞれの口縁部の変化による分類を試みたが、細片のために口径や頸きに等復元形に若干の差異も考えられる。これらの土器は、本県の成川遺跡にも酷似したものが多量出土している。住居跡内の土器は、床着が少なく、全容を知り得ないためセッティング関係にまで言及は出来ない。中には、これまでの山ノ口式土器にはみられなかったタイプもあり、認められたとしても、山ノ口式土器は瀬戸内系の土器や北部九州の土器との関係で、再考する余地があるのではなかろうか。北部九州系のものには、小破片であるが須玖式土器などがあり、北部九州の影響を受けたものは、壺形土器に多くみられ、東九州のものには、下条式とみられる口縁部などがある。瀬戸内系の土器には、凹線文をもつ土器、範状工具による列点文を施している土器破片、矢羽根透しをもつ高杯形土器などがある。本遺跡出土の瀬戸内系土器は、宮崎県の新田原6号出土の瀬戸内系高杯及び壺形土器と類似する点が多い。また、愛媛県出土の土器の胎土に含まれる鉱物や焼成が酷似し、形態においても調整や沈線及び凹線の技術も、愛媛県の弥生時代中期末の文京Ⅲ様式や紫雲出Ⅲ様式に類似し、山陽地方においては、高橋護氏の分類では仁伍式に比定できよう。また、石川悦雄氏は、宮崎県平野における弥生式土器編年試案一素描（Mk.II）の中で、「新田原のものと同型式と思われる王子遺跡出土の瀬戸内系土器は山ノ口式と共に存在するとされており、このことは、從来中期後半に比定されている山ノ口式土器の位置づけの再考をうながす要素で、少なくとも山ノ口式の細分の手がかりであり、その一部は、森貞次郎氏が主張されるように、後期初頭におよぶ可能性を示唆している。」と述べている。また、凹線文土器は、成川遺跡の山ノ口土器の壺形土器や、時期は不明であるが、斐刈町の前畠遺跡の壺形土器にもみられる。山ノ口式土器の壺形土器や壺形土器に構造文を施したものがあり、畿内系文化が流入定着したことが知られるとの見方もある。

石器のうち、磨製石鎌が多く出土した。特に、9号住居跡内からは多く出土し、未製品も多く工房跡とする考え方<sup>13)</sup>が示されている。樹皮布叩石は、桑の実の真皮から採った繊維で、ヒマラヤ、華中、華南、南朝鮮、日本などの照葉樹林帯で用いられたとされている。この繊維をつくるための道具で、北九州の戸畠高校学校歴史研究室の採集品や高木恭氏が宇史研究<sup>14)</sup>の中で紹介されている。本遺跡よりは4本出土した。土製勾玉は、総数13個出土した。勾玉は一般に祭祀に関係があるとされている。本遺跡で発見されているものは純て土製品であり、その中に

際って大きく丁字頭をもつものがみられ、小形のものも丁字頭をもつものが多い。ただ、祭礼がみられる場所や遺構は未発見である。これらの土製勾玉は、佐賀県二塚山遺跡などの出土例が知られる。鍔・鉄滓の出土があり、鍔は鏡が出現する前の大工道具の一つであり、小田富士雄氏の同定の結果、吉ケ浦型鍔とされている。鉄滓は、分析の結果、チタンの含有量が1%未満で、朝鮮半島産出の鉄鉱石を半島で製鉄し、インコットで輸入したものが国内で配分されここで鉄の利器が製作された可能性も考えられる。

本遺跡の堅穴住居跡は、AグループからBグループへの移行も考えられるが、それぞれの住居跡の機能から共存したものと考えられ、A・Bグループとともに、それぞれ形状の違いを認める。北部九州においてAタイプ（東西に略長方形で、主柱穴2本で、南壁に土塀をもつもの）は中期後半から弥生時代後期末まで続いている。また、東西の壁側にベッド遺構をもつものは、福岡県の八女地方や熊本県、大分県、宮崎県にもみられ、弥生時代終末にみられる。宮崎県のものは、花弁型住居にベッド遺構をもっており、本遺跡との関係を考えなければならない。また、森貞次郎氏の指導の中で、「とくにベッド遺構をもつものは、東瀬戸内の地域から、備前文土器文化とともに流入したことが推定される」との意見がある。掘立柱建物のA・Cグループは、初めての知見で、今後の課題としている。Bグループは、桁行が約4mあるが、高床式倉庫となり得る可能性が考えられる。このように、堅穴住居跡と掘立柱建物とが共存することは集落構成上の特異性である。また、本遺跡の遺構は、まとまりがあり掘立柱建物跡と溝の一部に切り合いを認めるが、そのほとんどが近隣するものの切り合いがなく短時間であったことが考えられる。土器については、山ノ口式土器と北部九州系の土器、瀬戸内系の土器などの共伴して出土したことは、今後、幾内第Ⅳ様式と九州地域の中期の位置づけや文化の認識の相違により、時間的位置づけに大きな問題を投げかけていると思われる。今後、須玖式土器や瀬戸内系土器と山ノ口土器との組合せを再考する要因をもっていると考える。

本遺跡は、南九州において初めての知見であり、比較的短時間とみられる集落が、どのように成立したか、生産基盤（稻作か畠作）や墓制などを含めて諸問題を多くかかえるが、今後の資料の増加を待ち、検討を加えなければならない。

#### （参考文献）

- ①河口貞徳「入来遺跡」鹿児島考古11（1976）
- ②鹿児島県教育委員会「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（25）（1983）
- ③志布志町教育委員会「柳遺跡」志布志町文化財報告書（1980・3）
- ④鹿児島県教育委員会「成川遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（24）（1983）
- ⑤河口貞徳「一の宮遺跡」考古学雑誌第37巻第4号（1951）
- ⑥鹿児島県教育委員会「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（25）（1982）
- ⑦高山町教育委員会「高山町郷土史」
- ⑧河野眞知郎「初期農耕集落の解明」Cicum-Pacific（1975）より所収
- ⑨⑩大野町教育委員会「大野原の遺跡」大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書（1980）

- ①緒方勉「宮山遺跡」阿蘇町埋蔵文化財調査報告第1集。阿蘇町教育委員会（1972）
- ②宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報」Ⅱ～Ⅲ（1981～1982）
- ③西高哲郎「復吉遺跡」都城市文化財発掘報告書第2集都城市教育委員会（1982）
- ④⑤と同じ
- ⑤宮本長二郎 現地指導による文化財調査報告の中で、可能性が考えるが検討を要する。
- ⑥⑦同じ
- ⑦福岡県教育委員会「下原遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財報告書2。（1983）
- ⑧石野博信「考古学から見た古代日本の住居」社会思想社「家」別刷（1975）
- ⑨河口貞徳 現地指導の中で文化財調査報告による。
- ⑩小田富士雄 現地指導による文化財調査報告の中で、「考え方があろうが、高床構造であれば、外側だけでなく内側も幕蓋目配置の柱穴がみられるのが普通であるから、平地の可能性が高いであろう」との考え方である。
- ⑪宮本長次郎、沢村仁 現地指導の中で、文化財調査報告による。
- ⑫⑬同じ
- ⑬宮本長二郎「住生活」日本考古学を学ぶ(2)有斐閣選書（1979）
- ⑭沢村仁 現地指導の中で文化財調査報告による。
- ⑮⑯同じ
- ⑯友石孝文「竹並遺跡」竹並遺跡調査会（1978）
- ⑰北九州市教育委員会「辻田遺跡」北九州市文化財調査報告（35）（1980）
- ⑱福岡市教育委員会「久保園遺跡」福岡市文化財調査報告「91」（1983）
- ⑲福岡県教育委員会「湯納遺跡」今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書4～5（1976・1977）
- ⑳㉑同じ
- ㉑㉒同じ
- ㉒㉓同じ
- ㉓森貞次郎 現地指導の中で文化財調査報告による。
- ㉔国分直一・河口貞徳・現地指導の中で文化財調査報告による。
- ㉕㉖同じ
- ㉖㉗宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報」IV（1983）
- ㉘㉙岡本健児「弥生土器Ⅰ・四国」ニュー・サイエンス社
- ㉚㉛高橋謙「弥生土器Ⅰ・山陽」ニュー・サイエンス社
- ㉛㉝刈町教育委員会「前畠遺跡」妻刈町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)（1983）
- ㉝国分直一 現地指導の中で文化財調査報告による。
- ㉞高木恭二 「宇土市史研究」No. 4（1983）
- ㉟㉞大澤正己氏の分析による。分析結果、本書所収
- ㉟㉟同じ
- ㉟㉟同じ

## 第9章 王子遺跡の遺構保存事業

王子遺跡は、堅穴式住居跡、掘立柱建物跡（棟持柱付を含む）、土塀、溝状遺構など総計47の遺構が検出された。また、遺物は在地の山ノ口式土器などの土器、北九州系の影響を受けた土器、瀬戸内系の凹線文や矢羽根透しをもつ土器や樹皮布叩石、鉈、鍛冶滓などが出土した。このように大規模な遺跡で、学術的見地から古代の南九州の弥生時代を知る上で、貴重な資料を提供した。このため遺跡の保存が提起され、その取扱いが県文化財保護審議会において協議が重ねられ意見集約がなされた。その結果、県教育委員会は貞申意見の内容について、関係機関と協議し、検出遺構の移設、遺構の型取り及び転写、遺構全体の模型や映像記録、遺構の実測などの事業を実施した。

文化庁及び国立奈良文化財研究所の指導・助言のもと、1. 移設、2. 型取り、3. 転写、4. 映像記録、5. 模型などについて実施した。

### 1. 移設

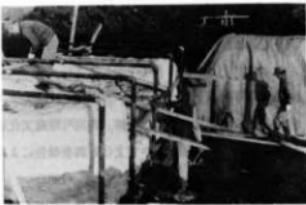


① 遺構の表面及び周辺を清掃し、周辺部の掘り下げ作業を実施する。

② 周辺部の掘り下げ後薬剤と遺構面を分離するため、腐食布及びビニールによる補護やさらに、硬質発泡ウレタン樹脂による補護作業を実施する。



③ 分離するため、床面下位にH鋼貫入のため、水平ボーリングを実施する。



④ H鋼の貫入後、H鋼及鋼管により骨組みを作る（木材も使用する）。その後、硬質発泡ウレタン樹脂の吹付により、さらに補護作業を実施する。



⑤ 硬質ウレタン樹脂の吹付け後、床面の切断のために鉄板挿入のために、堆進用ジャッキにより鉄板(12mm)を挿入し、切り離す作業を実施する。



⑥ 造構の切り離す作業後、運搬はクレーン車により釣り上げ運搬車に積載し、移設先(王子跡遺資料館予定地)へ運搬する。



⑦ 据え付けにあたっては、運搬作業前に基礎工事を実施する。据え付にあたっては、実測図をもとに、レベル等を正確に合わせて作業を進める。



⑧ 据え付け実施後生コンクリートを流し込み、基礎工事を終了する。その後、上屋構造物の基礎工事実施し、建物の建設作業を実施する。



⑨ 建物建設終了後、梱包を解き、ウレタン及び鋼管を除去し、造構壁面は崩壊をしないように、化学処理で補強作業を実施する。  
薬剤：サンコール樹脂：サンコールシンナー



⑩ 梱包を解き、化学処理後、清掃作業を実施する。造構自体が含水率が高いため、数ヶ月後、さらに化学処理をくり返す作業を実施する。



① 王子遺跡資料館で、出土遺物とともに展示し、10月1日より一般公開する。

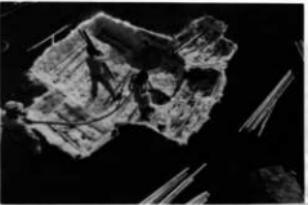
2. 型取り



① 遺構の表面を清掃する。通常は遺構表面の土壤粒子を固定するためサンブレンを散布する。硬質発泡性ウレタン樹脂を約20cm程度吹付け作業を実施する。



② 補強のため木材を入れて骨組みを作り、さらに、硬質発泡性ウレタン樹脂を吹付け作業を実施する。



③ ウレタン樹脂の吹付作業後数分割に切断作業を実施する。



④ 数分割に切断作業後取りはずし作業を実施する。剥ぎ取り面の整形を行う。ウレタンフォームに、若干の遺構面の土壤が付着する(凸型)。取りはずし作業後運搬し、重富收藏庫に保管する。

### 3. 転写



- ① 造構の表面を清掃する、造構及び土層の表面をサンブレンを散布して固定し、さらに、合成樹脂を吹付ける。薬剤：サンブレンW-Eトマック17N R-51、ハードナーHY-837

② 化学処理後補強するため布（カーゼ及び寒冷抄でもよい）を敷き骨組とし、さらに合成樹脂を吹付け作業を実施する。



- ③ 土層についても①と②の作業を実施する。  
薬剤は①と同じ。

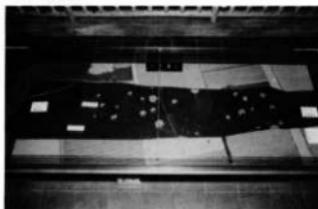
④ 合成樹脂吹付け作業後、しばらくの間、乾燥させ、剥ぎ取り作業を実施する。運搬作業後、重富収蔵庫に保管する。

### 4. 映像記録



- ① 発掘風景、検出全造構、保存事業、出土遺物などについて映像記録を実施し、今後の文化財保護思想の普及などに努めるための資料とする。

### 5. 模型



- ① 発掘調査区及び周辺地域の一部の地形を含めて1/200の縮尺の模型を製作し、王子遺跡資料館に展示公開する。

図 版



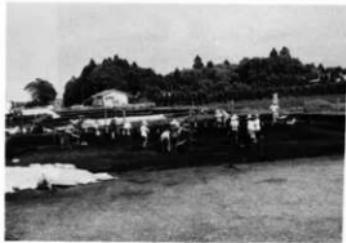
1. 発掘調査前全景



2. 9号住居跡発掘風景



3. 花粉分析土壤サンプル採取風景



4. 発掘風景



5. 遺跡見学会風景

王子遺跡発掘調査(1)



1. 中央区・東区全景(西区から)



2. 中央区風景



3. 造構管理風景

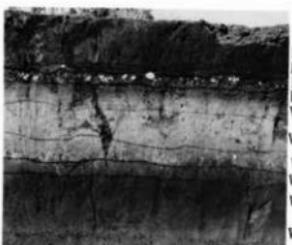


4. 西区全景(中央区から)

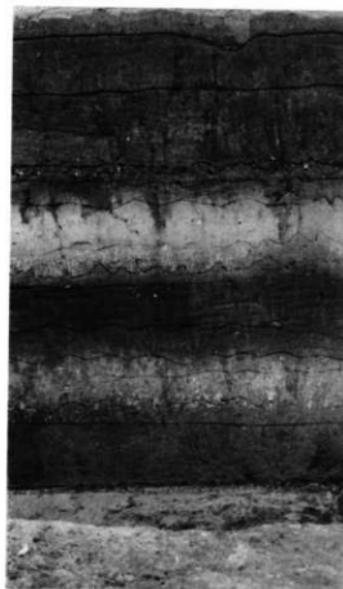
王子遺跡発掘調査 (2)



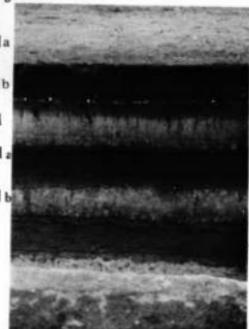
1. 土層断面 (E-25·26区)



2. 土層断面 (D-9区)



3. 土層断面 (C-29区)



4. 土層断面 (C-15区)

王子遺跡土層断面図



1. 遺物出土状態 (D・E-8区)



2. 遺物出土状態 (F-12区)



3. 濑戸内系土器出土状態 (D-25区)

4. 濑戸内系土器出土状態 (D-25区)



5. 遺物出土状態 (D-6区)

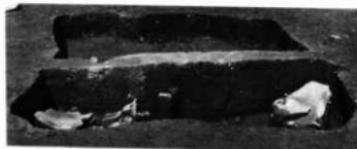


6. 遺物出土状態 (B-15区)

王子遺跡遺物出土状況



1. 3号住居跡発掘風景（南西から）



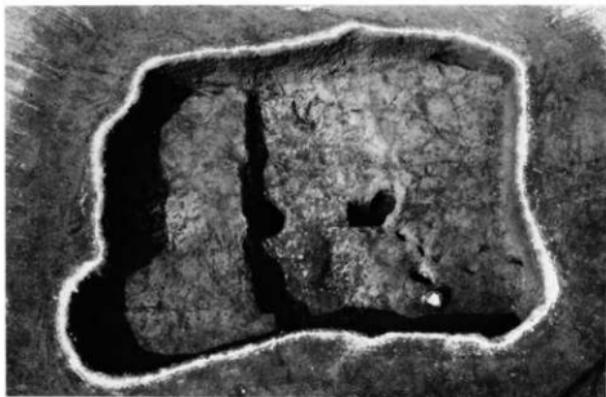
2. 3号住居跡遺物出土及び埋土状態（東から）



3. 3号住居跡遺物出土状態（南西から）



4. 3号住居跡遺物出土状態全景（南西から）



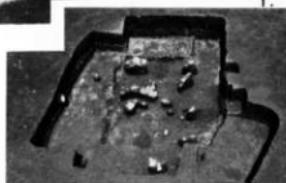
5. 3号住居跡全景（南から）

3号住居跡検出状況

1. 4号住居跡全景  
(北から)



2. 4号住居跡遺物出土状態全景  
(西から)



3. 5号住居跡全景  
(北から)



4. 5号住居跡全景  
(西から)

2.



4.

4号・5号住居跡検出状況